プラトン全集　5

饗　　宴

鈴木照雄訳

パイドロス

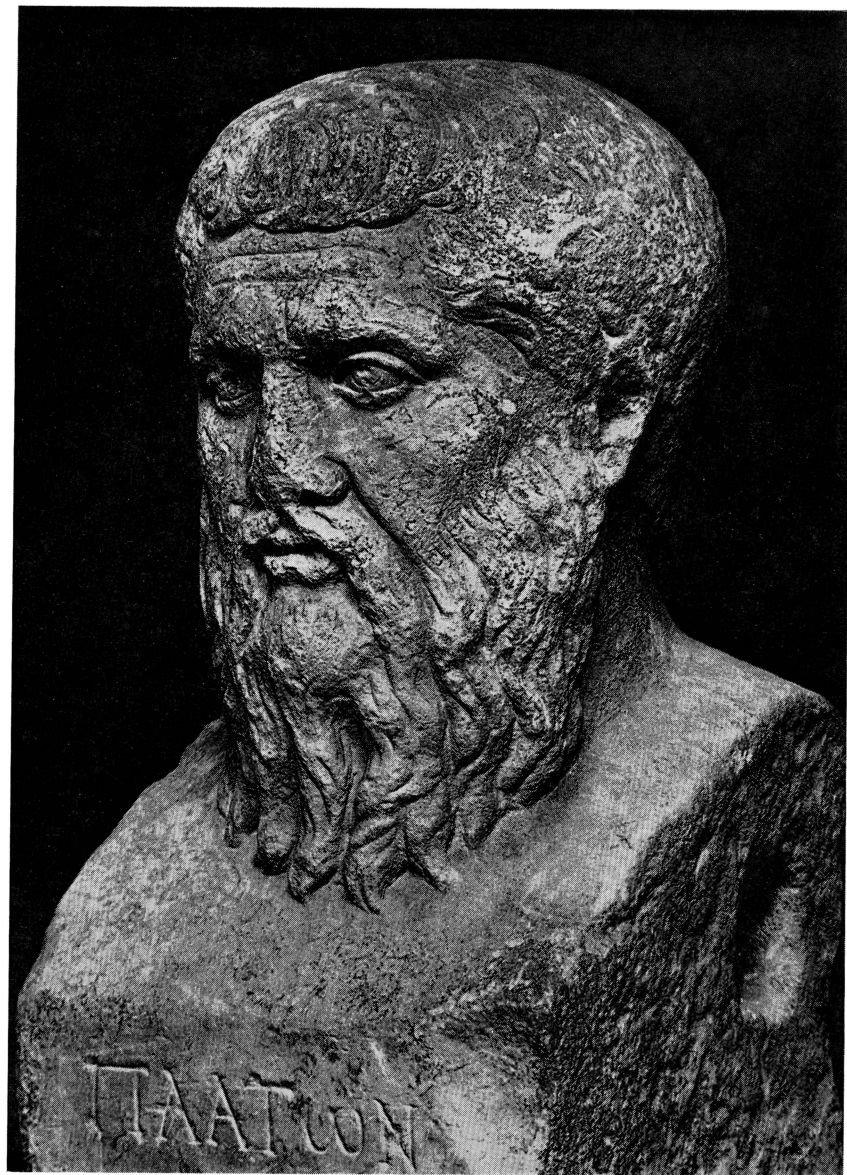
藤沢令夫訳

岩波書店

編集

田中美知太郎
藤　沢　令　夫

プラトンの胸像(2－3世紀)

目次

凡例

一、本全集は底本として、バーネット版プラトン全集(J. Burnet, *Platonis Opera*, 5 vols., Oxford Classical Texts)を用い、これと異なる読みをした箇所は注によって示す。

二、訳文上欄の数字とBCDEは、ステファヌス版全集(H. Stephanus, *Platonis opera quae extant omnia*, 1578)のページ数と各ページ内のABCDEの段落づけとの対応を示す(ただしAは省略した)。プラトンの著作からの引用は、このページ数と段落により示される(例えば『パイドロス』253C)。

三、各対話篇における章分けは、一八世紀以降フィッシャー(J. F. Fischer)の校本に由来すると見られる一般に慣用のものに従う。ただし対話篇により章別の一定していないものもあり、この場合は適宜区別を設けた。

四、対話篇名につけられている副題(ないものもある)は、ローマ時代のプラトン全集(トラシュロス)以来の、あるいはさらに古い伝承によるものである。所伝によって異同のある場合は、適切と判断されるものを選んでつけた。

五、ギリシア語の片かな表記は、ΦΧΘとΠΚΤとを同じように「プ」「ク」「ト」とし、母音の長短は普通名詞においてのみ区別し(例、ソピアー)、固有名詞においては区別しない(例、ソークラテースでなく、ソクラテス)。

六、〔 〕の括弧は訳者による文意の補足を示す。

七、略記号　DK=H. Diels u. W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*.　Diog. L.=Diogenes Laertios.　古注=*Scholia Platonica* (ed. W. C. Greene).

八、本全集における対話篇の収録順と各巻への配分は、右のトラシュロス編全集における九つの四部作集(tetralogia)の順序と括り方に従っている。

饗宴

——恋について——

鈴木照雄訳

登場人物

アポロドロス
グラウコン
アリストデモス
友人(アポロドロスの友人)
アガトン
パイドロス
パウサニアス
エリュクシマコス
アリストパネス
ソクラテス
ディオティマ
アルキビアデス
(その他)

一

アポロドロス[1]　君らの尋ねていることについて、下稽古がぼくにできていないとは思わないね。それはこういうことがあったからだ。最近のことだが、たまたまぼくはパレロン[2]のぼくのうちから都（まち）へと坂道を登っていた。すると知り合いの一人が、はるかうしろからぼくを認めて呼んだ。しかも呼びかけざまに冗談めかして、[3]

「おーい、パレロン区の住人、そこなアポロドロスよ。これ待たないのか」

と呼ぶのだ。で、ぼくは立ち止って待った。すると彼は、

「ほんとに、ついさっきも君を探していたのだよ。あの、アガトン[4]のところでの会のことを詳しく君に聞こうと思ってね。——それは、ソクラテスもアルキビアデス[5]も、またそのときの饗宴に列席したそれ以外の人々も、

B

何人か加わった会だが、その折の恋に関する言論について、それがどんなものだったか、それをぼくは詳しく聞きたかったのだ。じつは君以外に、ピリッポスの息子ポイニクス[6]からのまた聞きで、それをぼくに話してくれた人がいたのだ。——そしてその人は、君もそのことを知っていると言っていたよ。——しかし結局のところ、何一つはっきりしたことを言うことはできなかった。だから、さあ、君からその話を聞かせてもらいたいのだ。例の君の仲間がした話を伝えるには、君はいちばんふさわしい人物だからね。しかし、その前に聞かせてほしいのだが、君自身その会に出たのか、それとも出なかったのかね」

と言う。で、ぼくは言ってやった、

C 「いやまったく、その男は何一つはっきりしたことを君に話さなかったとみえる。君の尋ねるその会の開かれたのは最近のことで、だからぼくもそれに加わったのだというふうに君が考えているならばね」

「もちろんぼくはそう考えているよ」

と相手は言う。で、ぼくは、

173 「何を根拠にしてなのだ、グラウコン。(7)君は知らないのか、アガトンが当地にいなくなってからもうすでに久しいのに、他方ぼくが親しくソクラテスに接し、日々彼の言行を知ってわがものにしようとひたすら心掛けるようになってから、まだ三年にもなっていないのだよ。ところが彼を知る前のぼくはといえば、意味もなくそこらじゅうを走りまわり、しかもそれなりの然るべきことをしているのだと考えていたが、じつは、誰よりも惨めな人間だった——現在の君におとらずにね。君は、知を愛し求めるくらいならむしろ何だってすべきだと思ってい

1 アテナイのパレロン区の人(『パイドン』59B)、ソクラテスのいわゆる弟子。なお、「解説」始めを見よ。

2 アテナイの古い外港。小さな湾を隔ててペイライエウス(ピレウス)の東南東約五キロメートル、またアテナイから南々西約五キロメートルのところにある。

3 名前に居住区(デーモス)を付けるという、裁判とか儀式の際に用いられる公式の重々しい呼び方が、このように路上でふざけて使われたわけである。

4 悲劇作家(前五世紀後半)。なお、「解説」始めを見よ。

5 アテナイ名門の出で、ペロポンネソス戦争期に活躍した政治家、軍人。かつてのソクラテスの弟子。なお「解説」始めを見よ。

6 この人物については、これ以外はまったく未詳。

7 一説にはカルミデスの父(222B)と考えられているが、また一説には『国家』にも出ているプラトンの兄弟に擬せられている。しかし、このように熱心にこの饗宴のことを知りたがりながら、確かな詳しいことを何一つ知りえないのは、右の両人には考えられないことであるとして、第三の人物を想定する説もある。

る男だからな」
と言った。すると彼は、
「毒づくのはやめてくれ。それよりも、さあ、例の集りのあったのはいったいいつのことなのか、それを言ってくれないか」
と言う。で、ぼくは答えて、
「それは、ぼくらがまだ子供のときのことで、アガトンが彼の最初の悲劇作品で優勝した折のことなのだ。つまり、彼自身が合唱隊の人々とともに犠牲を捧げて優勝をお祝いしたその翌日に当るのだ」
「すると、ずいぶん昔のことらしいね」と彼は言った「それにしても、誰が君にその話をしたのだ。それとも、ソクラテス自身が話したのか」

B

「いやいや。ポイニクスに話した人と同一人だよ。アリストデモス(1)という人物だったが。キュダテナイオン区に住んでいる人で、背の低い、いつも裸足の男だ。彼がその集りに出席したのだ。ぼくのみるところ、彼は当時最も熱烈なソクラテス讃美者の一人だった。……まあこういうわけではあるが、それでも彼から聞いたことのうちいくつかの点を、さらにソクラテスに問いただしてみたが、アリストデモスの話した通りであると、同意してくれたわけだ」
「それなら、さあ、なぜぼくに話してくれないのか。もともとこの、都(まち)への道は、歩きながら話し合うには、まったくもってうってつけだからね」
と彼は言った。

C　こういうわけで、ぼくらは歩きながらそのことについて話して行った。だから初めにも言ったように、ぼくに下稽古ができていないことはないのだ。だから、いま君らにもその話をしなければならないのなら、そうしなければならないのは当然だ。それにぼくときては、話とあればほかの時でもそうだが、ことにも何か哲学の話となると、ぼく自身が話し手になろうと、または他人の聞き手にまわろうと、ともかく哲学の話であれば、もう満悦至極というわけだ。——もともとそのような話が身のためになる、と考えることはさておいてもね。——ところが、それとは何か別の話、ことにも、君らの話し合うような、金持で商売人の連中の話となると、ぼく自身は惨めな気持になるし、君ら友だちに対しては、かわいそうにと思うのだ。なにしろ、君らは無にも等しいつまらぬことをしていながら、ひとかどのことをやっているように妄想しているのだからね。……それにしても、反対に

D　君らの方では、おそらくぼくをたいへんに不幸な人間と考えていることだろうが、そう思う君らにまちがいはあるまい。だが、君らを憐れむぼくの方は、単に君らをそう思うのではなくって、憐れむ君らの本性を見抜いてよく知っているのだよ。(2)

1　ソクラテスの弟子の一人。なお、「解説」始めを見よ。

2　富や地位のような地上の善にかかずらわっている人々の目からすれば、アポロドロスのような者は不幸な人間と思われるであろう。しかし、彼が「そう思う君らにまちがいはあるまい」と言ってそれを認めるのは、理想のソクラテスと較べて余りにも至らぬ己を不幸と思ってのことであって、同じ不幸といっても、その内容が異るわけである。なお、この後で、「君らを憐れむぼくの方は」云々と言って相手の人々を攻撃しているが、もちろん後の意味での不幸を考えてそうしているのである。ちなみに、ここで「思う」と「知っている」とが対立的に使われているが、『国家』VI末にあるいわゆる線分比喩などに明確に説明されている例の思わく(思いなし)(ドクサ)と知(エピステーメー)の対立に延びて行くものである。

友人　いつも相変らずだね、アポロドロス。君は年中自分やそのほかの連中を非難しているのだから。そして、ソクラテスを除いては、君を始め、それこそ一人残らず全部の者を惨めな人間だと考えているようだからね。それにしても、「心優しい人」なんて渾名(あだな)を、君はいったいどこから頂戴したのか、ぼくにはがてんがいかないよ。なにしろ話すときには、君はいつだってその調子で、ソクラテスを除いては、君自身にも他の人々にも荒々しい態度をとるのだからね。

E

アポロドロス　すると、ねえ君、これもわかりきったことだろうが、自分も他の連中をもそんなふうに考えているのだから、ぼくは気狂いで、頭の調子が狂っているというのだろうね。

友人　そのことでいま言い争いをするのは感心しないよ。先に君にお願いしたように、さあぐずぐずしないでさっさと、あのときの話がどんなものだったか、それを話してくれよ。

174

アポロドロス　それでは、……あのときの話というのは、だいたい次のようなものだった。――いや、それよりも、初めからあの男〔アリストデモス〕の話した通りを、ぼくも君らに話してみよう。

アリストデモスからの話というのはこうだ。……

二

沐浴(ゆあみ)あがりにサンダルを履いたソクラテス――こんなことはめったにしたことのない彼だが――ぼくはそういう姿の彼にひょっこり出会った。で、ぼくは尋ねた、

「そんなにきれいになってどちらへ」

するど彼の言うには、
「アガトンのところへ御馳走になりに行くのだ。じつは、きのうあの優勝を祝う式の最中に、たいへんな人出に恐れをなして、彼のところから逃げ出したのだが、そのとき、きょう出席することを承知してきたのだ。こういうわけだからこそ、ぼくはめかしこんだのだ。――美しい人のところには、美しくなって行きたいからね。B しかしそれはともかくとして、君、どうだね、招かれないでも御馳走になりに行くという気にはならないか」と言う。

で、ぼくは（とアリストデモスは言った）「あなたの言われる通りにいたしましょう」と答えた。
「ではいっしょに来たまえ。そうすればまたぼくらには、例の諺の中の言葉を入れ換えて、『よき人々の（アガトーン）〔アガトンの〕宴席にはすすんでよき人々が出かけて行く』というふうに、その諺の意味を骨抜きにすることができるからね。(1) こういうのも、ぼくらと違ってホメロスは、この諺の意味を骨抜きにしただけでなく、さらにそれに冒瀆C 的なことをさえなしたように思われるからだ。つまり、彼はアガメムノンを卓絶した武将に、メネラオスを『柔弱な槍武者』にしておきながら、アガメムノンが犠牲を捧げて人々を饗応しているときに、その宴席に、呼ばれ

1　174B4　写本通り ἀγαθῶν と読む。この際プラトンが本（もと）の諺として心に浮べていたのは、「つまらぬ人々の宴席に、すすんでよき人々が出かけて行く」というのであろう。それを今は「つまらぬ人々の」に対し、その正反対の「よき人々の」（アガトーン）をもって置き換え、さらにアクセントの位置は異るが同音のアガトンにかけて、「アガトンの宴席に」の意味をも合せ持たせたわけである。なお、諺の意味を骨抜きにしたことではさらに次の点も関係してくる。すなわち、諺ではわれからすすんでであったが、今アリストデモスはソクラテスにすすめられてという形をとっている、ということである。

もしないでメネラオスを行かせたのだ。劣った彼をば、彼よりもすぐれた者の宴席にだよ[1]」
それを聞いてぼくは(とアリストデモスは言った)、
「しかし、ソクラテス、おそらくぼくだって、あなたの言われるようにはいきますまいよ。かえってホメロスの言うように、つまらぬ身をも顧みず、呼ばれもしないですぐれた知者の宴席に出かけて行くという危険を冒すことになるでしょう。だから、ぼくを連れて行くなら、それについてどう言いわけしたものか考えてください。

D

ぼくとしては、呼ばれもしないのにぼくの方から来たなんてことは認めるつもりはありません。じつはあなたの招待を受けてやって来たのだと、こう言いますからね」
と答えた。すると彼は、
「『二人ともどもこの先の道を歩みつつ[2]』どう言うべきかを考えることにしよう。さあともかく、出かけようではないか」
と言うのだった。
まあこういったことを話し合ってから、ぼくらは出かけたわけだ。ところがソクラテスはその途中で自分ひとり何か考えにふけって、歩くのがおくれがちで後にとり残されるようになった。そしてぼくが待っていると、彼は先へ行ってくれと頼むのだった。ところで、ぼくがアガトンの家に着くと、入口の戸が明いているのが目にとまった。そしてそこで(とアリストデモスは言った)ちょっと滑稽なことに出くわした。つまり、このぼくを、内

E

働きの召使の一人がすぐさま迎えに出て来て、皆の者が横になっているところ[3]に案内してくれたのだ。そして見れば、彼らはそのときにはもう御馳走を食べ始めようとするところだった。しかしそれでもアガトンはぼくを見

るとすぐに、
「おお、アリストデモス、ちょうどいいところに来たね。さあ、いっしょに御馳走を食べよう。そうでなくて何かほかの用事で来たのなら、それはまたのことにしてくれたまえ。じつはきのうも、招待しようと思って君を探したのだが、見つけられなかったのだ。それにしても、ソクラテスをどうして連れて来てくれなかったのかね」と言う。で、ぼくは振返って見たが、あとからやって来るソクラテスの姿がどこにも見えない。そこでぼくは、
「もともとこのぼく自身にしてからが、ソクラテスに付いてやって来たのだよ。ここに御馳走になりに行くことを彼から勧められてね」
と答えた。
「それは君、ほんとによく来てくれたね」とアガトンは言った「しかし、あの人は、どこにいるのだろう」
「たった今、ぼくのあとから入って来たがね。いや、どこにいるのか、ぼく自身にとってもまったく不思議なことに思われるよ」
「おい、おまえ。ソクラテスを探してお連れしないか」と〔召使に〕アガトンが言った「ところで、アリストデ

---

1 ホメロス『イリアス』第一七巻五八七行に「その昔柔弱な槍武者であった彼メネラオス」とあり、同じく第二巻四〇八行には「また呼ばれもせずに自分からメネラオスが〔アガメムノンのもとに〕やって来た」とある。これを少し変更して都合のよい使い方をしているわけである。『プロタゴラス』(348C)には、これのもっと正確な引用がなされている。

2 『イリアス』第一〇巻二二四行に「二人一緒に行けば、どちらか一方の者が他方に先立って、どうすれば得になるかを識るものである」とある。

3 当時は、宴会に寝椅子に横になって飲食する習慣であった。

モス、君はエリュクシマコス(1)の隣に横になってくれたまえ」

三

そこで、ぼくが横になるために(とアリストデモスは言った)係りの召使がぼくの足濯(あしすす)ぎをしてくれた。ところが、また別の召使が一人やって来て、

「あのソクラテス様は、隣家の玄関先に逸れてしまいまして、私がお呼びしても、ここに来ようとはなさいません」

と伝えた。

「おかしな話だな、まったく。……おい、さっさとあのかたをお呼びして来ないか。ほっておくなどもってのほかだぞ」

とアガトンが言った。

で、ぼくは、

B 「いや、そんなことはしないでくれ。あの人をそのままにしてやってほしいのだ。あれは、あの人の持っている癖というもので、ときどきどこでもおかまいなしに道から逸れてしまっては、そこに佇んでいるのだ。ともかく、ぼくの考えでは、すぐやって来るだろう。だから、邪魔しないで、そっとしておいてやってほしいのだ」

と言った。

するとアガトンは、

「それはもうその通りにしなければならないね、君がそう思うなら」と応じた「さあ、おまえたち、ソクラテスはともかくとして、それ以外のぼくらに御馳走しなさい。ともかくおまえたちに監督のいないときには、——監督なんてことは、ぼくはしたことがないけれどね——そんなときには、おまえたちはいつだって自分らの思いのものを食卓に載せているからな。だから、今日のところは、ぼくもここにおられるほかの方々もおまえたちから御馳走に招待されているのだと、こう考えて、ひとつぼくらに褒められるように、もてなしてごらん」と言った。

それから（とアリストデモスが続けた）ぼくらは御馳走を食べたが、ソクラテスは入って来なかった。だからアガトンは、ソクラテスを迎えに行くようにと何度も命じようとしたが、ぼくはそうさせなかった。ところがそのソクラテスが、いつもと違ってあまり長く時間をくわずにやって来たのだ。だいたいぼくらの食事が半分ほど済んだ頃だった。で、アガトンは——たまたまいちばん末席に独りで横になっていたので(2)、

「さあこちらへ、ぼくの隣に横になってください。そうすればまた、ぼくはあなたに触れることによって、あの玄関先のところであなたの頭に閃いた知恵のおこぼれにあずからさせてもらえますからね。それをあなたが見

1　医者。なお「解説」始めを見よ。

2　宴会の席はテーブルを囲んで馬蹄形に寝椅子を並べたようである。各寝椅子は通常は二人ずつ横になるが、時に三人が用いることもあった（222E）。一番左が最上席の寝椅子、以下順次右に下って行って、最右端の寝椅子が最末席である。なお、最左端の寝椅子の左席がすべての席の最上席（名誉席）であり、今はパイドロスによって占められている（177D）。逆に、最右端の寝椅子の右席は最末席で通常宴会の主によって占められる。今は、最初アガトンが独りでこの最右端の寝椅子にいたわけである。

付け出して現に持っていること、これはもうはっきりしているのだから。なぜって、さもなかったら、あなたは見付け出す前にそこから立ち退きはしなかったでしょうからね」

と言った。

そこで、ソクラテスは腰をおろして、それからこう言った。

E

「アガトン、もし知恵がそういう性質のものならば、結構なことだろうよ。つまり、ぼくらが互に触れ合えば、一杯になっている方から空の方に流れるというのであるならばね。ちょうど、あの毛糸をつたって一杯の方から空の方に流れる盃の中の水のようにね。……実際、知恵もまたこういうぐあいだったら、君の隣に席をとることをたいへん貴重なものと考えるよ。君の隣に横になれば、ぼくは豊かな、しかも立派な知恵を君から貰って一杯になるだろうと思うからだ。なにしろ、ぼくの方の知恵は、いってみれば、わずかなものだろうし、それに夢のように不確かなものでもあろうが、君のは輝かしい、そして将来への発展を大いに約束されているものだからね。実際それは、未だ青年の身の君からすでにあのように燦然と輝き出て、一昨日には三万人を越える観衆の前で明らかになったというものだから」

「ソクラテス、あなたという人はいつも、人もなげなあしらい方で相手を冷やかすのですね」とアガトンが言った「ところで、そのことについては——つまり、今の知恵の問題に関してなんだが——ぼくとあなたとでどちらの言い分が正しいか、ディオニュソスに裁判官になってもらって(1)、もすこしあとにでも黒白をつけましょう。だが今は、まず御馳走を食べる方にとりかかってください」

四

こういうことのあったあとで(とアリストデモスは語った)、ソクラテスは横になって御馳走を食べたが、彼もほかの人々も食べ終えると、皆して灌奠(かんてん)の儀(2)を行い、神への讃歌を歌い、そのほか、定めの儀式を取り行ってから、酒ということになった。するとパウサニアス(3)がおよそ次のようなことを話し始めた。

「さて、それでは諸君、どういう飲み方をすれば、いちばん楽な飲み方ができるだろうか。実際ぼくとしては、諸君にぶちまけたところ、きのう飲んだ酒でひどく気分が悪く、何か息抜きになるものが欲しいところだ。それに、大部分の諸君だって同様だろうと思う。なにぶん昨日も出席していた君らのことだからね。だから、どうすればこの上なく気持良く飲めるか、諸君考えてくれたまえ」

B

と言う。

するとアリストパネス(4)が、

1 元来ディオニュソスを祭ってのことであった悲劇の上演に、優勝したばかりのアガトンにとって、いまこの神を彼とソクラテスとの争いに呼び出すことは、極めて相応しいであろう。また、酒と真実は一体であると見做されていることでもあり(217E注1参照)、ディオニュソスは酒の神であるから、今のような宴会の席での係争に裁定を下す者として最も相応しいであろう。

2 酒盛りの前、神に神酒(みき)(ぶどう酒)が注がれる儀式。

3 アテナイのケラメス区の人。なお、「解説」始めを見よ。

4 代表的な喜劇作家(前四四五頃—三八五年頃)。アテナイのキュダテナイ区の人。彼の精神的姿勢の一面としての保守的傾向は、ソクラテスをソフィストたちと同一視し危険視する態度となり、『雲』はその現れとも考えられる。作品は、『雲』以外、『女の平和』『蛙』『女の議会』等である。

「これはまったくいいことを言うね、パウサニアス。何とでもして、飲むことが重荷になどならないように工夫をするのだとはね。というのはまた、ぼく自身がきのう酒を浴びるように飲んだ一人だからだ」

と言った。すると、この人たちのことばを聞いて、アクメノスの子のエリュクシマコスが言うには、

「君らの言うことはまったく結構なことだ。ところで、なお諸君のうちのある人から聞かせて貰いたいことがあるのだが、飲む元気はどうかということをね。これをアガトンから聞かせて貰いたいのだ」

C 「だめだめ、ぼくだってぜんぜんその元気なしだ」

「これはどうも、ぼくらにとってとんだめっけものらしいぞ」とエリュクシマコスは続けた「もし君たちいちばん酒のいける連中がいま、酒はもう結構だと言っているのならばね。ぼくでもアリストデモスでも、パイドロスでも、そのほかここにいる人々でも、ぼくらの方はいつだって酒には弱い連中なのだから。ところでソクラテスだが、彼は論外にする。あの人はどちらでも十二分にやれる人で、だからぼくらがどちらの方をやってもそれで満足、ということになるだろうからね。……すると、ぼくのみるところ、ここにいる人々のうち誰一人として痛飲するのを熱望している者はいないようだから、酩酊するということについて、それがどんなものであるか、本当のことをぼくがいま話しても、おそらくほかの場合ほどには場を白けさせることにはなるまい。実際ぼくに

D は、このことは自分のやっている医学から明らかになった事柄であると思うのだが、酩酊というのは人間の身体(からだ)によくないものなのだ。で、ぼく自身も自分からすすんで深酒しようとは思わないし、他人にもそれを勧めようとは思わない。ことに、相手が前の日からの二日酔い(1)にまだ悩まされているときはなおさらだ」

するとそれを受けて、ミュリヌゥス区のパイドロスが、

「ほんとにぼく自身は、いつだって君のことばにしたがうことにしているよ。ことに、医学について君が何か言うときにはね。しかし今の場合は、ほかの人たちだって、正しい思慮を働かせるなら、やはりそうするだろうよ」
と言った。

E　これを聞くと、一同それに同意して、現在のこの会を進めていくのに酔っぱらいながらというのでなく、まあ気の向くままに飲みたければ飲むといった調子でやろう、ということになった。

五

「するとその意見が良いということになったのだから」とエリュクシマコスが言った「つまり、飲むなら各人飲みたいだけ飲んで、無理強いすることはすべてやめ、ということになったのだから、次にぼくはこう提案する。――今しがた入って来た笛吹き女は引きとらせて、自分の楽しみに独りで吹くなり、あるいはしたいというなら、奥の女どもに吹いて聞かせるなり、いいようにさせ、われわれの方は互いに言論を発表し合って今日の集りを過すことにしよう。それで、その場合、どんな言論でするか、――お望みなら、それをぼくから提案してもよろしい」

177　すると皆の者は、そう希望するからぜひ彼に提案して貰いたいと言うのだ。それでエリュクシマコスは、

1　アテナイのミュリヌゥス区の人。なお、「解説」始めを見よ。

「この話を始めるに際して、ぼくはエウリピデスの『メラニッペ』の台詞(1)を真似ることにする。つまり、これからお聞かせしようとしている『その話は、ぼくから出たのでなくて、ここにいるパイドロスから』なのだ。さて彼はぼくに会うたびに、憤慨しながらこう言うのだ。『けしからんことではないか、エリュクシマコス。神々のうちでもほかの神々には、詩人によって讃歌や頌歌(しょうか)が作られているのに、エロースに対しては、あのように神さび、あのように偉大な神でありながら、いまだかつて唯一人の詩人さえもが讃美の歌のひとかけらさえ作って B いないのだ。あれほどたくさんの詩人が今までに輩出しておりながらだよ。またお望みなら方面を変えて、有能の士であるソフィストたちはどうかといえば、ヘラクレス(2)などに対しては、散文で讃辞を書いている。例えば一流の人物のプロディコス(3)のような人がね。――ところで、こんなことはそれほど驚くにも当らないのだが、しかし驚いたことには、ぼくはかつてある賢者の書物を手に取ったことがあるが(4)、その中で、塩が有用性のゆえに呆 C れるほどの賞讃を受けていたのだ。そしてそのほかにも、なおそのような類いのものがたくさん讃えられているのを、君はよく見掛けるだろう。実際、そのようなものには大いに力を注ぎながら、エロースに対しては、今日に至るまで未だ唯の一人として、それにふさわしい讃え方を敢てする者がなかったとはねえ。しかし事実は、あのように偉大な神が、これほどまでにないがしろにされてきたのだ』とね。このパイドロスのことばはもっともだと思う。だから、ぼくは彼に対してぼくの〔ことばの饗宴への〕割前を出して彼の意に副いたいものと思っているが、同時にまた、この神を讃美することが今の場合ここにいるぼくらにとって適切なことであると思うのだ。 D とにかく、諸君もこのことに賛同してくれるなら、ぼくらは言論でたっぷりと楽しい時を過すことができるだろう。というのは、この件に対するぼくの裁決は、われわれ一同左から右へと一人ずつ、できるかぎり美しくエロ

ースの讃美をなすこと、なお、パイドロスは最上席を占め、かつはこのような論題になるもとの生みの親でもあることゆえ、まず彼から始めること、というのだから」

「エリュクシマコス、誰も君に反対投票する者はあるまいよ」とソクラテスが言った「恋の道以外はまったく

E　の無知であることを主張しているこのぼくが断るわけはないだろうし、またアガトンとパウサニアスだってそうだろうし、さらにディオニュソスとアプロディテのことに日夜専念しているアリストパネス(5)は言うまでもないが、

1　エウリピデス(前四八四頃―四〇六年)はアイスキュロス、ソポクレスと共に三大悲劇作家の一人。彼には『知者メラニッペ』と『捕われのメラニッペ』という(現存しない)二つの作品があったが、今引用されていることばは前者からのものであるという。もとのことばは、「その話は私から出たのでなく、私の母からのもの」(Fr. 484 (Nauck^2))。

2　いわゆる岐路に立つヘラクレスについての説話で、徳と悪徳の選択を迫られた彼が、結局悪徳の誘惑を拒けて徳の道に進んだという内容のもの(クセノポン『ソクラテスの想い出』第二巻(一の二一―三四))。

3　ケオス島出の著明なソフィスト(『ソクラテスの弁明』19E)。『プロタゴラス』(315D～E)には、彼のまわりにパウサニアスとアガトンなど何人かの人が取巻いていたさまが描かれている。その温厚な思想を内容とする弁論と文法・文章面の研究は、当時のアテナイに影響するところ少なくなかったようである。いわゆるヘラクレス説話は、彼が『青年ヘラクレス』で説いたものであり、それをクセノポンが紹介しているわけである(前注参照)。

4　弁論家イソクラテス(前四三六―三三八年)は「蜂や塩やその類いのものを褒めようとする連中」を攻撃しているが(『ヘレネ論』210B)、その攻撃の的となっている者と、ここで言う「賢者」とは同一人で、その人物は前四世紀の弁論家ポリュクラテスであるとするのが普通のようである。

5　もともと劇芸術全体がディオニュシア祭祀と密接に関係していたものであり、ディオニュソスは演劇の神と目されていた。喜劇ももとレナイア等のディオニュシア祭で奉納上演されたものである。かくて、ディオニュソスと喜劇作家アリストパネスとが結び付けられるのは極めて当然である。さらに、喜劇には多分にエロチックな要素が内在しており、ディオニュソスがアプロディテの息子と見做されることもあった。現にアリストパネスの不確実な断片(490D sqq.)には、「酒はアプロディテの乳」というのがある。

それ以外でもぼくの目の前にいる人たちのうち誰一人反対する者はあるまい。それにしても、ぼくらいちばん下座の方にいる者にとっては、今の決定は公平を欠くことだが、まあいい、先立ってやる人々が美しく十二分に言い尽してくれるなら、それでぼくらには充分だろう。さあ、神々の加護のもとに、パイドロスが口火を切ってエロースを讃えたまえ」

と言った。

するとこのことばにほかの連中もみな賛成して、ソクラテスと同じことを要求するのだった(こうアリストデモスは語り続けた)。

178

〔アポロドロス〕 さて、一人一人が話したことは、アリストデモスも全部が全部憶えていたわけではなし、それにまた、ぼくの方も彼の語ってくれたことをそっくりいま憶えているわけでもない。しかし、何にもまして記憶に留めておかなければならないように思われた事柄やそのような一人一人の話は、これから諸君にお聞かせしよう。

六

さて、第一番の話し手として(とアリストデモスは続けた)今も言ったようにパイドロスが、だいたい次のようなところから話を始めてこう語っていった。

「エロースは偉大な神であり、人間のうちにあっても神々のうちにあっても驚歎すべき神である。そのことは

多くの点からしても言えることであるが、なかんずくその出生に関して然りである。なぜなら、この神が古い上にも古いということ——これは、御自身の栄誉となる事柄だからである。ところでこのエロースが極めて古いという証拠であるが、この神には生みの親というものは、実際に存在してもいないし、また散文家や詩人に語られてもいないということである。それどころか、ヘシオドスの言うところ[(1)]によれば、初めにカオスが生じ、

B

しかしてそのあとに、
よろずの常盤（とわ）に安らけき御座である胸幅広きガイア
そしてエロースが

とある。かく彼は、カオスのあとにかの二柱の神、すなわちゲとエロースが生じたと言っているのである。またパルメニデスは天地生成のことに言及し[(2)]、

〔かの女神は〕よろずの神々のうち、まず第一にエロースをば案出したまえり

1　ヘシオドス（前八世紀末）は、ホメロスと並ぶ代表的叙事詩人。アッティカの内陸側に隣接したボイオティアの農業詩人であり、その代表作は、教訓的人生論と農事及び日の吉凶を内容とする『仕事と日々』と、天地創成に始まり神神の系譜を語る『神統記』とである。
　ここに引用されているものは、『神統記』一一六—一一七行である。ちなみに、「ガイア」と「ゲ」は同一で、大地の神格化されたもの。

2　パルメニデス（前五世紀）は南伊エレアの哲学者。生滅、変化、運動と多様とを否定し、唯一不変恒常の実在のみを主張するその存在論は、ギリシア自然哲学を危機に追い込んだ。しかし他方では、プラトンのイデア論の一つの源の役割を果してもいる。
　現在の引用は、Fr. 13(DK)。括弧に入れられて補訳されているこの文章の主語「かの女神」が誰か。アプロディテとも、ゲネシスとも、ディケとも、アナンケとも言われ、定説はないようである。

C と語っている。なおアクシレオスもまたヘシオドスと同じ意見である。[1] こんなわけで、エロースが古い上にも古いということは、多方面から等しく認められているのである。

そしていちばん古い神であるからして、ぼくらにとって最大のよき事どもの源ともなっている。なぜなら、少年にとってはまだ年若いうちから、何がよいことであるかといって、有為の人物でしかも彼を恋してくれる人にまさってよいものを挙げることはぼくとしてはできないし、また少年を恋している者にとっては、相手のすばらしい少年にまさってよいものを挙げることはできないから。つまり、立派な生き方をしようとする人々にとってその一生の指導原理ともなるべきものを、われわれにしっかりと植えつけることができるという点では、門閥(もんばつ)も

D 名誉も富も、恋に較べればもののかずではないのである。それならば、ちなみに問おう。その指導原理は何であるか。醜いものに対しては恥じ、美しいものに対しては功名を競う心、これである。なぜなら、これなくしては国家も個人も、美しい偉業をなし遂げることは叶わぬからである。されば、ぼくはこう主張する。恋をしている者は、自分が何か恥ずべきことをしているとか、あるいは他人からそういう目にあいながら、勇気に欠けるために身を守ることをしないとか、こうしたことが人に知れる場合には、その目撃者が父であれ、自分の仲間であれ、

E あるいはそのほかの誰であれ、自分の恋している少年に見られるほどには苦しみ悩むことはないであろう。また恋される者の方も、それと同じ状態にあることを、ぼくらは日ごろ見ているのである。つまりそのような者は、自分が何か恥ずべきことをしているのを人に見られるときには、とりわけ自分を恋している者に対して恥じ入るものである。

だから一工夫して、互いに恋し合っている幾組かの大人と少年から成る国家や軍隊をつくるとしよう。[2] このよ

うな場合、彼らは恥ずべきものからはすべて遠ざかり、誉れを目指しては互いに競い合うだろうから、彼らが自179分たちの国家を治める上では、これ以上立派な治め方はありえないであろうし、また相たずさえて戦う場合にも、このような人々は寡兵をもって、いわば全人類を向うにまわして戦っても勝利を得ることができるであろう。なぜなら、人は恋をしているときには、自分が戦闘部署を放棄したり、武器を投げ出したりする様を恋する少年に見られることは、まったくのところ、ほかの誰に見られるよりもたまらないことであろう。そしてそんなことをするくらいなら、むしろ何回なりとも死ぬ方を選ぶだろうと思う。ことに、相手の少年を見捨てたり、危険に瀕しているのに助けてやらなかったりすることは、——およそどんな怯懦な者にしろ、エロースみずからが勇気の霊気を吹き込みながら、なおかつ天性この上ない勇者とかわりない者になりえないほどに、それほど怯懦な人間B は一人として存在しないものである。そして、これこそホメロスのうたったことだが(3)、神がある英雄たちの胸のうちに『勇気を吹き込みし』というようなことは、エロースが自分からの贈り物として恋をしている人々に与えるものなのである。

1　この文章の位置、ならびにB8のμετάの前φησὶと読むこと、ともに写本通り。ただし、全体としては、φησὶの後にδήを添えて読むロバン(ビュデ版)に従うことになる。

2　かかる軍隊の考えは、前三七一年レウクトラで始めて戦って勲功をたてたテバイの「神聖部隊(ヒエロス・ロコス)」に現実化した。

3　『イリアス』第一〇巻四八二行(アテナがデオメデスに)、第一五巻二六二行(アポロンがヘクトルに)、『オデュッセイア』第九巻三八一行(ある神がオデュッセウスたちに)。

七

さらにはまた殉死(じゅんし)であるが、ただ恋をしている者だけがこの覚悟ができるのであって、このことは男子に限らず、じつに女子もまた能くするのである。そしてこの点に関してはまたペリアスの娘アルケスティス(1)が、このぼくの主張を支える充分な証しをギリシアの人々に提供している。つまり、夫には父も母もあったけれども、ただ彼女だけが自分の夫のために死ぬことを承知したのだ。彼女は夫を恋するがゆえに、愛情の上で夫の両親を圧倒し去り、そのため彼らは自分の息子に対してじつは赤の他人であるにすぎず、縁者とは名のみのことである事実を、彼女によって暴露される結果となった。そして彼女がこの行為をなしたとき、それがすばらしいものであることが神の目にも映じたので、神々は彼女の行為を嘉(よ)みされてその魂を幽界から引き戻したのである。とはいえ、もともと〔死者の〕魂を幽界から引き戻すということは、数多くの美しい行為をなしたたくさんの人々のなかでも、まことに指折り数えられるといわれるほどの皆無に近い者にしか、神々は栄ある賞与として与えられなかったものなのである。さてこのように神々もまた、恋ゆえのひたむきと勇気とをこの上ないものとするのだ。ところがオイアグロスの子オルペウス(2)に対しては、彼が訪ねて行った目当ての妻については、その幻影だけを見せて彼女そのものは与えず、志を得ぬままに彼を幽界から追いやってしまった。これは、彼が竪琴弾きの歌い手であるため柔弱な人間で、アルケスティスのように敢然と恋のために死に赴くことができず、生きて幽界に入ることを策謀したと、こう神々にみられたからである。まことにこういうわけだからこそ、神々は彼に罰を与えて、女どもの手にかかってその命を落すというふうにしたのだ。

E

ところがテティスの子アキレウスに対してはそれとは逆に、その誉れを讃えて彼を浄福な人々の住まう島へと送ったが、それは彼が母親から、『もしヘクトルを討ち取らば汝命を落すべし。されど、そのことなくば、己が家に帰り長寿に至りてこの世を去るべし』と聞かされながら、自分を恋してくれるパトロクロスを援け、そしてその仇を討ち、彼のために死ぬというだけでなく、亡き彼の跡を追って討死するというかかる道をあえて選んだからである。それだからこそ神々もこよなく讃歎され、自分を恋する者をかくも大事にしたからといって、彼に特別の誉れを与えて讃えられたのだ。ところでアイスキュロスは、アキレウスの方がパトロクロスを恋していたと言っているが、(4)それは根も葉もないたわごとである。アキレウスはパトロクロスより美しかっただけでなく、言うまでもないことであるがさらに全英雄たちにもまさって美しく、まだ髯も生えていない若者で、したがってホメロスも言うようにはるかに年下だったのだ。しかしそれはともかくとして、恋に由来する以上のごとき勇気

180

1 夫アドメトスのために命を捧げた彼女の話は、悲劇作家プリュニコス(前六世紀末から前五世紀始め)も取上げているが、一般に流布されたのは、エウリピデスの作品『アルケスティス』である。その中では、ヘラクレスがタナトス(死の神)の手から彼女を取り戻すことになっている。

2 ここで語られているオルペウスの話は、世上識られているものとはかなり異っている。例えば、妻エウリュディケの幻影のみ示されたとか、彼の生きたままの幽界行が憶病の現れと見做されていることなど。

3 ホメロスにあっては(『オデュッセイア』第一一巻四六七行以下)、彼は他の英雄たちと共にハデスの国(黄泉(よみ)の国)にいることになっているが、ホメロス以後の伝承では、彼の死後の場所は、「浄福な人々の住まう島」(ピンダロス)に、あるいはエーリュシオン(楽土)(イビュコス)に、あるいはレウケの島(アルクティノス)に置かれた。

4 アイスキュロス『ミュルミドンたち』(Fr.135(Nauck^2))の言及。しかし、ホメロスによれば(『イリアス』第一一巻七八六行)、パトロクロスの方が年上ということになっている。ともあれ、ここに言われるような両者の恋愛関係は、ホメロス以後に考えられたことである。

の徳をたしかに神々はこの上なく貴いものとはするが、しかし、恋人が自分を恋してくれる者を愛するときには、
B 恋する者が自分の恋人を愛する場合よりもさらに神々は讃歎し、嘉賞(かしよう)し、そして優遇してくれるものである。なぜなら、恋をしている人は神がかりの状態にあるので、恋されている者よりもより神のような人だからである。(1) したがってまた神々は、アキレウスに対してアルケスティスよりもより高い栄誉を与えて、浄福な人々の住む島へと彼を送ったわけである。

まことに以上のようなわけで、ぼくとしては、エロースが神々の中でもいちばん古く、いちばん尊く、また生者死者の別なくすべての人間にとって、徳と幸福を獲得するためにはいちばん力を持つ者であることを主張するのである」

八

C 〔**アポロドロス**〕（アリストデモスの話によれば）パイドロスはだいたい以上のような話をしたということである。ところでパイドロスのあとに、幾人か別の人々の話があったが、アリストデモスはそれをあまりよく憶えてはいなかった。で、それらの話は省いて、彼はパウサニアスの話を語った。

パウサニアスの話というのは、次のようなものであったという。

「パイドロス、いまの話がこれからぼくらの果すべき課題として、ぼくらの前に提出されたわけであるが、ぼくにはどうも感心できないのだ。つまり、エロース讃美の指示がいわば無条件の形でなされているというそのこ

とだがね。なぜならエロースがかりに一種類なら、今のままで結構だろうが、しかし事実は一種類ではないのだから、それでは困るのだ。ところで一種類でないとなれば、いかなるエロースを褒めるべきか、あらかじめそれを述べるのがより正しいやり方である。そこでぼくはその点を訂正し、まず第一に、褒めるべきエロースを明らかにし、次にこの神にふさわしく褒めてみようと思う。

D

さて、われわれ誰もが知っているごとく、アプロディテはエロースと不可分の関係にある。(2) したがって、この女神が一種類なら、エロースは一種類であろうが、しかし二種類であるから、エロースもまた必然的に二種類である。──ところでこの女神が二種類であること、これは否定しようもない事実である。(3) ──さて、一方のアプロディテは、思うに、年上で、ウラノスを父とし母なくして生れた者で、この女神に対してわれわれはウラニアという称号を奉っている。他方、年下の方はゼウスとディオネの間に生れた娘で、この女神をわれわれはパンデモスと呼んでいる。(4) こういうわけだからして、エロースもまた必然的に、一方のアプロディテに協力する方はパ

E

1　恋をしているとされるパトロクロスは神憑り(がかり)の状態にあるゆえ、人間を越える神的な力をも持ちうるわけである。したがって、そのような状態の者がすぐれて勇気ある振舞をなしうるのは、極めて自然である。なお、恋と神憑りについては、『パイドロス』(244 A sqq.) 参照。

2　ヘシオドス『神統記』二〇一―二〇二行にも、「この女神(アプロディテ)が生れ、そして始めて神々の仲間入りをされるときに、エロースと美しいヒメロス(「欲望」の意)が付き従った」とある。

3　アプロディテの二重性については、クセノポン『饗宴』(八の九)において、ウラニアとパンデモスそれぞれのアプロディテに、それぞれの神殿、祭壇、犠牲式のあることが述べられている。

4　ウラニアはもともと「天上の」という意味の形容詞の女性形。その男性形は「ウラニオス」である。「パンデモス」は男・女同形の形容詞で、「民衆全体の、公の」、さらには「低俗の、卑俗の」といった意味である。

ンデモス、他方はウラニオスと呼ばれるのが然るべき呼ばれ方である。ところですべての神々を讃えることは、むろん人としてしなければならないことであるが、それはともかくとして、今はこの二柱のエロースのそれぞれに備っているものを、述べる試みをしなければならない。さて、行為というものはすべて次のようなものである。つまり、他と無関係にそれだけでそのものとしてなされるときには、それ自身美しいものでも醜いものでもない。
181
たとえば、われわれが今している飲むとか歌うとか話し合うとかいうことは、そのどれ一つをとってもそれ自身美しいものというわけではなく、むしろ実際の行動において、その行われ方のいかんによってその性格も決ってくるのである。つまり、美しく正しくなされれば、美しい行為となり、正しくなされなければ、醜い行為となる。だから、恋をするということにしてもエロースにしても、それと同じことであって、全部が全部美しいわけでも讃美されるに値するわけでもなく、美しい恋をするようにしむけるエロースのみがそれに当るのである。

九

ところで、パンデモス・アプロディテに属するエロースは真に低俗(パンデーモス)で、そのなすところは、行き当りばったりのでたらめなものである。これは、人々の中でもつまらぬ連中のする恋(エロース)である。ところでこのような連中は第一に、少年をも恋するがそれに劣らず女性を恋するものである。第二にその、ほかな
B
らぬ恋する相手の魂よりもむしろ肉体を恋する。第三には、できるだけ考えのない者を恋する。これは彼らがひたすら自分の恋の想いを遂げることだけに意を注いで、その仕方が立派であるか否かを顧慮しないからである。こういうわけだからこそ、彼らはよいことでもその反対の悪いことでもおかまいなしに、手当りしだい何でもする

ということになる。それというのもまたこのエロースの根源であるアプロディテは、他方のアプロディテよりもずっと年若く、その出生において男女両性にあずかっているからである。

C ところがウラニア・アプロディテに属するエロースであるが、こちらのアプロディテは第一に、ただ男性のみにあずかって女性とは無関係である。——ちなみに例の、少年への恋というのもこの種のエロースである。——第二に、このアプロディテの方が年上であって、およそ放縦などあずかりしらぬものである。こういうわけだからこそ、この恋(エロース)の霊気を吹き込まれた人々は、本質的に強壮で理性に恵まれたものの方を愛するから

D して、男性のもとに赴くのである。そしてその、少年への恋(パイデラスティアー)[1]そのものにおいても、純粋にただこの種の恋にのみ動かされている人々を、人はそれと知ることができるであろう。なぜなら、そういう人々が恋をするのは、年端(としは)のいかぬ少年を相手にしてではなく、その少年たちがすでに理性を持ち始める時期——それはおおよそ髯の生える年頃であるが——この時期のことだからである。思うにこの時期から恋し始める人々は、生涯相手の少年から離れず共に一つ生活をする覚悟のできている者であり、相手が年若いゆえに、思慮の熟さぬのをいいことにこれを捕えて騙(だま)したあげく、せせら笑ってはほかの者へと走り去って行くという、そんな魂胆の

E 者ではないからである。それにまた、年端もいかぬ少年を恋すべからずという掟があって然るべきだったのだ。そうすれば、見込のはっきりしないことのために、むやみに一生懸命にならずにすんだであろうから。というの

---

1 当時のギリシアでは、いわゆる恋愛の対象は美少年であることが多く、女性は子供をもうけることを主眼にして見られる傾向が強かったといえよう。この少年への恋愛感情を純化し、精神的に高めたのがソクラテスである。

は、少年たちの行く末は、身心両面において善悪のいかなるところに行き着くかははっきりしないからである。こういうわけで、よき人々は自発的にわが身にこの掟を課しているが、こういうものはまたあの低俗な恋の奴(やっこ)どもにも強制しなければならないのである。われわれは現に、彼らがれっきとした自由な身分の婦人たちを恋することのないよう、できるかぎりの抑圧手段をとっているが、ちょうどそれと同じように、いま言ったこともすべきである。それというのも、この連中はじつに恋に対する非難を生み出した張本人であって、ために人々の中には、恋人が相手の想いを受け入れるのは恥ずべきことであるというふうに、あえて言う者も出て来る始末である。182 ところで、この人々がこのように言うのも、例の連中を目にするとき、彼らの振舞いの拙なさとその性質(さが)の邪悪さとを見せつけられるからなのである。それというのも、物事は何であれ、節度を守り法にのっとってなされさえすれば、弁明の余地なき非難を招くようなことはないように思われるからである。

さらにエロースに関する習わしもアテナイ以外の国々では無条件的に規定されているからわかり易いが、当地 B のものは複雑である。エリスとかラケダイモン[1]とかボイオティアとか、つまりその地の住民が能弁でない所では、自分に恋を寄せている者の想いを受け容れることは美しいことというふうに無条件に定められていて、それが醜いというふうには、老若を問わず誰一人言うものはないであろう。思うにこれは、しゃべることに無能な彼らのことであるから、若者たちを弁舌で説得するその厄介を背負い込むまいという意図から出たことであろう。ところがイオニアとかそのほかの、総じて夷狄(いてき)の支配下に暮している人々の地域では至る所で、いま言った行為は醜いものというふうに定められている。つまり夷狄にあっては僭主制のゆえに、恋のそういうことは知識愛好〔哲 C 学〕と体育愛好とを含めて、恥ずべきこととされているのである。思うに、支配されている民の中に軒昂(けんこう)たる想

いの生じることは、強固な友情や交わりと同様、支配者側にとって得になることではなく、しかもほかならぬこうしたものは、とりわけエロースこそがいちばん人々の心に植えつける傾向をもっているからである。ところで事実によってこのことを、当地の僭主たちも学び取ったのである。現にアリストゲイトンの恋と、それに答えるハルモディオスの愛情と――そしてこの愛情が堅固なものであったがゆえに、――この二つのものは僭主たちの支配を崩壊させたのである。(2) かくして、自分に恋を寄せている者の想いを受け容れることが醜いと決められた所 D では、そのように定めた人々の不徳によって、つまり支配者側の貪婪(どんらん)と被支配者側の懦弱とによってそうなっているのであり、他方それが美しいと無条件に定められた所では、それは当事者たちの精神的怠惰に由ることとなのである。ところが当地にあっては、その定め方は上の場合よりもはるかに巧妙であって、ぼくが先に言ったように、呑み込み易いものではないというわけである。

一〇

実際次のことを考えてみれば、そのことが納得いくであろう。すなわち、当地では、恋をするにも隠れてする

---

1 ロバン(ビュデ版)に従って、καὶ ἐν Λακεδαίμονι をここに(182B1)移す。
エリスは、ペロポンネソス半島の西北部。オリュンピア競技大会の行われたオリュンピアはその南の境にある。

2 両人は、前五一四年パンアテナイア祭のとき僭主ヒッピアス(ペイシストラトスの長子、その政治的後継者)の弟ヒッパルコスを刺殺した。ハルモディオスは乱闘の中に斃れ、アリストゲイトンは死刑に処せられた。その後ヒッピアスは残忍暴虐となり、ために前五一〇年革命が起ったが、以来人々は彼ら両人を解放の英雄として崇(あが)めた。なお、トゥキュディデス『歴史』第六巻(五四―五九)参照。

よりは公然とする方が好ましいと言われ、またたとえ容姿はほかの者より醜くとも、この上なく家柄が立派で人物のすぐれた人を恋するのが最も好ましい、とも言われている。なおまた、恋をしている者に対してすべての人が送る声援は驚くべきもので、その場合人々は彼が何か醜いことをしているとは考えていないのであって、彼が

E

恋をかち取れば事は立派であるが、さもなければ恥ずべきことというふうに見ているのである。そして恋をかち取ろうとする試みに対しては、恋をしている者は呆れるようなことをしてもなおかつ褒められるということが、世の習わし上許されているのである。もし何事であれ恋以外のことを追い求めそれを成し遂げようとするときに、

183

そんな呆れるようなことをあえてしようものなら、この上なく激しい非難を哲学から招くことになるだろう。(1)
――つまり、金銭を誰か人から貰おうとか、枢要(すうよう)な官職を占めるとかそのほかの権力を何か行使しようとか、こういう魂胆から、ちょうど恋をしている連中が相手の少年に向ってするようなことをしてみたまえ。人に頼み込む場合に歎願や懇願に訴え、誓いを立て、門口に横になって夜を明かし、どんな奴隷でも承知しないような隷属にも服することを辞さないというふうにである。そうしたら、そんな振舞いに出ることは、友だちからも敵方か

B

らも阻止されてしまうであろう。敵方は阿諛(あゆ)と奴隷根性を非難するし、友だちは彼を戒め、彼の振舞いに恥ずかしい想いをするというぐあいに。――ところが恋をしている者の場合は、そうしたことをしてもすべて好意が寄せられ、まるで何かたいへん素晴らしいことを遂行しつつあるかのように、そうした行為はすべて非難の対象外におかれるということが、習わしの上から認められているのである。しかし、いちばんすさまじいことはといえば、少くとも世の人々の言うところによれば、誓いを立てしかもそれを破ったときに、神々から許されるのはただ恋をしている者だけだ、ということである。つまり人々の言うところによれば、恋の誓いというものは存在し

C ないからである。こういうわけで神々も人間も、恋をしている者には全面的な自由を許しているのであって、それは当地の習わしの示すところなのである。だから以上のように見てくるならば、この国では、恋をすることも、恋人が自分に恋を寄せている者に親愛の情を示すことも、ともにまったく美しいことにみなされているのだと、こう考える者があるかもしれない。

しかし他面、世の父親たちは、人の恋人となっているわが子に監督の下僕を付けて相手の男と話し合わないようにし、その旨をその下僕に申し付けておく。またその子と同じ年頃の者や仲間の者たちも、その禁じられた類いのことが何か行われているのを見かければ、その子を非難する。そしてさらに、年上の人々もこの非難する連

D 中に対して、間違ったことを言っていると言って差し止めることも叱ることもない。——こういう逆の面に目をやるならば、今度は、恋の上での今しがた言ったようなことは、当地ではいちばん恥ずべきことにみなされているのだと、こう考える人がまたあるかもしれない。

しかし、事実は思うに次のごときものであろう。つまり当の事柄〔自分に恋を寄せている者の想いを受け容れるということ〕は単純ではなく、初めにも言われたことだが、それ自身他と無関係にそれだけでは、美しくもないし醜くもないのであって、美しくなされれば美しく、醜くなされれば醜いというものなのである。ところで醜くとは、よくない人の恋心をよくない仕方で受け容れることであり、美しくとは有能な人に対し美しい仕方でそ

E うすることである。なお、よくない人とは、あの、低俗な恋を懐く者、つまり魂よりはむしろ肉体を恋する者の

---

1 183A1 の φιλοσοφίας は削らず、ロバン（ビュデ版）に従って写本通りに読む。

ことである。そしてじつにそのような者は、その恋の対象が永続性のないものであるから、彼自身また永続性に欠けるのである。つまりこういう者は恋の目当てだった肉体の花が凋むと同時に、数々の言葉や約束を足げにして『飛び去って行く[1]』のである。それに反して相手の人柄に——それが立派なときのことであるが——その人柄に恋をする者は、永続的なものと融合するのであるから、一生を通じて変らないのである。したがってわが国の習わしは、これら恋を寄せる人々を厳正に吟味して、そのうちのある人々の想いは受け容れても、別の人々からは逃れられるようにとの計らいによるのである。まことにこういうわけであるからして、恋をしている人々には恋人のあとを追うことを勧め、他方その恋人たちには彼らから逃げることを勧めるのであって、こうすることにより当事者を互いに競わせ、恋をしている者がいったいいま言ったどちらの種類の人間に属するか、ということを吟味するわけである。

184

そういうわけで、いま述べたことが原因となって、まず第一に、恋人がすぐさま相手の手中に陥るのは恥ずべきことであるというふうに定められている。これは時日を生み出す意図から出たことであるが、時日こそは多くのものをしっかりと吟味するものだからである。次に、金銭や政治的な権力の魅力に負けて相手の手中に陥ることも恥ずべきこととされている。それは、ひどい目にあって身をすくめてしまい毅然たる態度を持ちこたえることができなかった結果であっても、あるいは金銭や政治的効果の面で相手からよくして貰うと、それを蔑(さげす)まずに

B

重視せざるをえなかった結果であっても同じことである。思うに、こうしたものからは由来高貴な愛情は生じないということを別にしても、それらは一つとして堅固でも永続的でもないからである。だからして、もし恋を寄せられている少年が美しい仕方で相手の想いを受け容れようというのであるならば、われわれの習わしに残され

ている道は唯一つだけというわけである。現に、われわれの習わしは次のようになっている。すなわち、先程の

C 話の中で、恋を寄せる人々の場合に、相手の少年に自分からすすんでどのような自発的な隷属をしようとも、それが阿諛とも非難さるべき行為にもならなかったが、ちょうどまたそれと同じように〔恋を寄せられている少年にとっては〕それとは別の、われからしつつもなお非難の対象とならない隷属が残っている。そしてそれは徳を中心とするものなのである。

二

つまり、御承知のようにわれわれの間では、何かの知恵においてであれ、あるいはそのほか徳のいかなる部分においてであれ、ある人の力で自分がより立派な者になれるだろうと考えて、その人に仕えるつもりになる場合には、この自発的な隷属もまた恥ずべきものではなく阿諛でもないという定めになっているのである。したがってもし、恋を寄せられている少年が相手の想いを受け容れるのは美しいことだ、という結果が将来さるべきであ

D るならば、上の二つの習わしを、つまり少年への恋（パイデラスティアー）に関するものと、愛知やその他のすべての徳に関するものと、この二つを合して一つものにしなければならない。なぜなら、恋を寄せている者とその恋人である少年とがそれぞれの習わし〔掟〕となるものを持っていっしょになるとしよう。その習わし〔掟〕というのは、恋を寄せる者の方は、自分の想いを受け容れてくれる少年にどんな奉仕をしようとも、それは正当な振舞

1 『イリアス』第二巻七一行「そう言うと彼（夢）は飛び去って行った」。

いになりうるだろう、というのであり、他方恋人である少年の方は、自分を賢く立派な人間にしてくれる者のためには、どのようなことをしてやっても、やはりすべては正当なことになるであろう、という内容のものである。

E

しかも恋を寄せる者の方は、叡知やその他の徳で少年に寄与することのできる者であり、少年の方は人間形成の教養やその他のどんな知恵においても得るところありたいと望んでいる者であるとしよう。さてこういう場合にこそ、上の二つの習わしは一つものに合するからして、ただここにおいてのみ、恋を寄せられている少年が相手の想いを受け容れてもそれは美しいことであるという結果になるのであって、ほかの場合には決してそうはならないのである。この場合にあってはまた、騙(だま)されることも決して恥ずべきことにはならないのである。が、ほか

185

の場合では常に、騙される騙されないにかかわらず、当人にとって恥辱となるのである。なぜなら、自分に恋を寄せる者を金持と考え、富ゆえにその者の想いを受け容れたところが、じつはその者が貧乏であることが明らかになり、騙されて金が手に入らなくなったという場合、それは騙されない場合と同様恥ずべきことだからである。つまり、このような者は、金のためとあれば相手かまわずどんな奉仕でもする、という自分の本性を暴露しているように思われるが、かかる態度は感心できるものではない。これと同じ理窟で、自分に恋を寄せている人を立派な人物であると考えてその人の想いを容れ、そのような人への親愛の情によって自分自身もっと立派な者になれると期待していたけれども、その人がつまらぬ人間で徳の持主でないことが明らかになり、騙される結果に

B

なったとしても、この騙されたことは依然として素晴らしいことである。なぜなら今度はこの人がまた、自分の本姿をはっきりさせているように思われるからである。つまり、徳のため、より立派な人物となるためならば、相手のいかんを問わず、何でもしたがっているという本性である。そしてこれこそは先程とは逆に、何ものにも

ましてや素晴らしいことである。かくして、ほかならぬ徳のために相手の恋心を受け容れることは、すべての点からして素晴らしいことになるのである。[1]

これが、かの天上の性（さが）をもった女神〔ウラニア・アプロディテ〕に属する恋（エロース）であって、それ自身天上のもの（ウラニオス）であり、国家にとっても個人にとってもたいへん価値のあるものである。なぜなら、恋をする者も恋を寄せられる者もともに自分で自分に気をつけて、徳に向って励まなければならないようさせられるからである。ところがそれとは別の方の恋（エロース）はすべて、あのもう一つの方の女神、つまり低俗な女神〔パンデモス・アプロディテ〕に属するものなのである。

C 以上が、パイドロスよ、エロースに関していわば即興でぼくから君に協賛の印として差し出すところのものなのだ」

〔アポロドロス〕 パウサニアスが話をやめると〔パウサメノス〕――このように語呂を合せることをその道の知者たちがぼくに教えてくれたのでね[2]――アリストデモスの言うには、アリストパネスが今度は話さなければならなかったが、満腹か何かのせいで、たまたましゃっくりに取りつかれていて話をすることができなかった。で彼

---

1 ロバン（ビュデ版）に従い、B4 の πάντως の前に πᾶν を入れず、写本通りに読む。

2 ここで「語呂を合せる」というのは、同一の音の使用、ないし同数の音節から成る語句の使用（イソコーロン）を意味する。すなわち、パウサニウー・デ・パウサメヌーと同音であり、パウサニウーもパウサメヌーも四音節から成る。なお、「その道の知者」とは、文章研究の面での知者であり、だいたい当時のソフィストたちがそれに当る。

(185)
D は――自分の下座に医者のエリュクシマコスが横になっていたから――
「エリュクシマコス、君は当然ぼくのしゃっくりを止めてくれるか、それとも、それが止まるまでぼくの代りに話をするか、このどちらかをしてくれるべきだよ」
と言った。それに答えてエリュクシマコスが、
「いやそれを両方ともしてやろう。まずぼくが君の番に話をしよう。君の方はしゃっくりが止まったらぼくの番にやってくれたまえ。ところで、ぼくが話をしている間に、かなりの間息を止めてみて、それでしゃっくりが
E おさまるようなら結構。だが、もしだめなら、水でうがいをしてみたまえ。それでもなおびくともしないしろものなら、何か鼻を動かすことのできるようなものを手にとって、それを使ってくさめをすることだ。そしてそれを一、二回すれば、よほど頑固なしゃっくりでも止まるだろう」
と言った。するとアリストパネスは、
「さあ、すぐにも話をしてくれたまえ。ぼくの方は、君にいま言われたことをしよう」
と言ったそうだ。

二

そこでエリュクシマコスが話したという。
「するとぼくに、しなければならないと思われることは、……つまり、パウサニアスの今の話の、始め方は見
186 事なものだったがその締め括り方は満足のいくものではなかったから、ぼくがその話にちゃんとした結末をつけ

るように試みる必要があるということだ。

さて、エロースが二種類であるとした彼の分析は見事であると思う。だが、それは単に人々の心に座を占めて美少年を志向するというだけのものではなく、さらにそのほかの多くのものをも志向するものであり、また魂以外のいろいろなものの中にもあるのであって、あらゆる動物の肉体や、大地に生育する諸物の中に、さらには、いわば存在するかぎりのすべてのものの中にもあるのである。ところで、そのことを――言い換えるならば、この神は偉大な讃歎すべき神であり、人間界のことと神界のこととを問わず万物に遍在しているということ、このことをぼくが観取したのは、ぼくらが専門とする学術、すなわち医学のおかげであると思う。で、まず医学から話を始めようと思うが、このことはまたこの学術を崇めようという意図からでもある。

B　さて、身体はその本質において先程の二種のエロースを持っている。つまり、身体の健康な部分と病気の部分とは、誰もが認めているように、相異なり、相似ないものである。そして相似ないものがそれぞれ熱望し恋い求める対象もまた、相似ないものである。だから健康な部分に発動する恋(欲求)と、病的な部分に発動する恋(欲求)とは互いに別ものである。したがって、人々のうちでも立派な人の恋を受け容れることは美しいことであるが、放縦な人の恋を受け容れることは恥ずべきことだという先程のパウサニアスのことばと同じように、身体そのものにおいてもまた、各身体の健康で優良な部分の持つ恋(欲求)を満足させてやることは美しいことであり、またしなければならないことでもあって、これが医術的という名前のつけられている当のものである。それに反

C　して、劣悪なそして病的な部分に対していま言ったようなことをするのは恥ずべきことであり、もしその道の専門家であろうとするならば、そのようなものの持つ恋(欲求)を満足させてはならないのである。なぜか。――医

学とは、これを要するに、充足と欠乏とを求める身体的な恋愛(欲求)事象を取扱う学問である。そして、それらの事象において、美しい恋(欲求)と醜い恋(欲求)とを診断し判別する者、これぞ医学に最も秀でた者である。 D また、そこに変化をもたらして、一方の恋(欲求)の代りに他方の恋(欲求)を獲得させるとか、あるいは、現在は恋(欲求)を持っていないが当然持ってしかるべき者にその恋(欲求)を植え付けてやるとか、さらには、今あるものを排除するとか、こうした心得のある者、これは名臨床医というべきであろう。いうまでもなく臨床医とは、体内の最も拮抗(きっこう)し合う諸要素を互いに親和し恋し合うようにすることのできる者でなければならないからである。ところで最も拮抗し合うものはといえば、最も相反するもの、つまり温いものに対する冷いもの、甘いものに対する苦いもの、湿ったものに対する乾いたもの等、すべてその類いのものがそれである。(1) E そしてこれらのものに恋(欲求)と和合とを植え付ける知識を獲得することによって、われらの祖アスクレピオス(2)はわれらの専門である医学を組織されたのであるが、このことはここにおられる詩人がたの主張するところであり、ぼくもまたそれを信じるものである。したがって、医学はぼくも言っているように、その全般にわたり問題の神〔エロース〕によって司られているのであって、このことはまた、体育術にも農耕術にも等しく当てはまることである。

187 ところでまた音楽であるが、少しでもそれに留意する者には一目瞭然であるが、音楽も以上のものとまったく同じぐあいになっている。このようなことを、おそらくヘラクレイトス(3)も言おうとしているのであろう。なにしろ彼は適切な言葉で述べていないので、そう言うよりほかはない。つまり、ヘラクレイトスの言うには、一(いつ)なるものは、あたかも弓やリュラ琴の調和(ハルモニアー)のごとく、分裂抗争しつつもそれ自身それ自身と一致統合しているというわけである。しかし、調和が現に分裂抗争しているとか、あるいは今もなお分裂抗争しているも

のからでき上っているとか言うことは、まったく理窟に合わないことである。そうではなくて、彼の言おうとしB
たことはおそらく、先に分裂抗争していた高音と低音とが、その後音楽の技術によって協調するとき、これらから調和（調べ）は生じたのだ、というのであろう。なぜなら、高音と低音とがいまだ分裂抗争しているのに、それらのものから諧調ができ上っているということはありえないだろう。つまり、調べ（ハルモニアー）は協和音（シュンポーニアー）であり、協和音は一種の協調（ホモロギアー）だからである。ところで協調は、互いに分裂抗争

1　もともとギリシアの自然哲学においては、温と冷、乾と湿は物体の最も基本的な性質であり、火、気、水、土の四元もそれぞれこれらの性質を分ち持つ、とされた。例えば、火は温にして乾という具合に。またヒッポクラテスの医学においても、これら四性質は基本的なもので、それらの組合せ、あるいは欠落といった相互関係によって、健康と病気が説明された。なお、甘と苦という風味上の対立も医学にとっては重要なものであった。前五世紀始めの、ピュタゴラス学派と関係の深い医者にして自然哲学者アルクマイオンのことばに、「湿ったものと乾いたもの、冷いものと温いもの、苦いものと甘いもの等々の間のそれぞれの力の平等（イソノミアー）が健康を保持するものである。それに反し、それらに内在する独裁（モナルキアー）は病気を作り出すもとである。……」とある（Fr. 4(DK)）。

2　ギリシアの医神。ただし、もとは北方の、テッサリアのトリッカ（あるいはトリッケ）の地方的な伝説的英雄であったらしい。神話では、アポロンの子として生れ、ケンタウロスのケイロンに医術を学んだとされている。アスクレピオス崇拝は、歴史時代早くにテッサリアからペロポンネソス半島にまで南下し、その中心地は半島東岸のエピダウロスであった。彼の後裔と称する医師団が「アスクレピアダイ」で、そのうちのコス島に移住した一族の一員に、ヒッポクラテスも入っていた。

3　ヘラクレイトスは、イオニアのエペソス出身で、前六世紀末に活動した自然哲学者。その学説は世に万物流転説と性格付けられている。ここでの言及は、「どうして分裂抗争していながら自分自身と和合しているのかを、彼らは理解しない。例えば、弓やリュラ琴におけるように、相反する方向に緊張する調和というものがあるのである」（Fr. 51(DK)）に依っている。すなわち、対立緊張しているものが同時に一致統合して調和を成り立たせているということで否定されている考えが主張されている。

しているものがその状態にあるかぎり、それらから作られることは不可能である。なおまた、分裂抗争して協調しないものは、これを調和(調べ)あるものとすることは不可能である。さて、以上のことは、ちょうどリズムは

C 音の遅速からでき上っているが、それは先に分裂抗争していたがのちに協調するに至ったものからである、というのと軌を一にする。そして今まで述べてきたすべてのものに協調を導入するのは、先程の医学に対し、ここでは音楽が、相互の恋と和合とを植え付けることによってそれを果すのである。で、今度もまた、音楽とは調べとリズムとにかかわる恋愛事象を取扱う知識なりということになるのである。なお、調べとリズムとの組織そのものにおいては、恋愛事象を判別することは少しも困難ではない。それに、例の二種類の恋(エロース)もここには

D まだ存在しない。ところが、人々に向って調べとリズムとを活用しなければならないとなると、――この場合、それらのものを自分で創作するにしろ(これを人々は作曲と呼んでいる)、あるいは他人の作になる曲節と韻律とを正しく使用するにしろ(これは教育と呼ばれるものである)[1]、――ともかく、この場合になると、先程の判別は困難となり、有能な音楽の実際家を必要とする。つまり、前に言われたあの議論がまたしても戻って来たわけである。その言うところは、人々のうちでも節度ある人たちに対し、しかもその場合、自分が未だ節度に欠けるならばそれを持つ者になれるようにと、その人々の想いを受け容れ、その人たちへの恋を大事に守らなければならない、というのであった。そしてこれがあの美しい、あの天上のエロース、つまりムゥサ・ウラニア[2]に属するエ

E ロースである。ところが、ムゥサ・ポリュムニアに属する方のエロースはかの低俗なものであり、これを誰に対してであれ適用する場合には、用心して行い、その快楽の果実は摘みとっても、その放埒は絶対植え付けぬようにしなければならない。ちょうどわれわれの専門の技術において、料理術に関係するいろいろな欲望を上手に使

って、その結果、病気にならずに快楽の果実を摘みとるようにすることが重要な仕事となっているのと同じようなものである。かようなわけで、音楽においても、医学においても、そのほか人間界、神界のすべてにおいても、できる限りその二柱のエロースをそれぞれに見守らなければならないのである。なぜなら、その両方ともがそれらのうちにあるからである。

一三

188 また一年間の季節の組織も、これら二つのエロースでもって充満しているからして、そこで、先程ぼくの挙げ

1　ここで「教育(パイデイアー)」というのは、『国家』Ⅱ、Ⅲにおいて詳しく述べられている音楽(あるいは文芸)教育のことである(なお、『法律』Ⅱ、Ⅷ参照)。それは、体育と共に基本教育を構成する二本柱の一つであって、その中では、音楽の伴奏をもって吟じられる詩文の教育が音楽そのものに劣らぬ重さをもってなされたから、今日の音楽教育なるものとは内容的に異るところがある。

2　ここで音楽のことが述べられてきたので、アプロディテの代りにムゥサが挙げられたのであろうか。はっきりしない。ヘシオドスによれば九柱といわれるムゥサたちのうち、ムゥサ・ウラニアは天文を司る者であるが、ここでは、その職能には関係なく、その呼び名「ウラニア」のゆえに言われているのであろう。それに対し、ムゥサ・ポリュムニアは、もと「多くの讃歌の」の意であるが、やがて抒情詩、舞踏、無言劇等を司る者と見られるようになった。しかし、ここでなぜこのように用いられたか、不分明である。一説には、パンデモスのパンは「全」を意味し、ポリュムニアのポリュは「多」を意味し、この意味の類似が両者を関係付けさせている、という。また一説には、抒情詩は恋情を中心にしての個人の想いの表白であり、そのような、詩にうたわれる恋はまずパンデモスであろう。されば、抒情詩の取扱いは慎重を要するとエリュクシマコスも考えたであろうし、しかもその抒情詩を司るムゥサはポリュムニアである。こうしたことが両者を結びつけることになったのであろう、という。共に一つの解釈ではあるが、それで説明しつくされるものでは到底ない。

たもの、つまり温いものと冷いもの、乾いたものと湿ったものとが、その相互関係において節度ある恋(欲求)にめぐり合い調和と穏健な混合とを獲得するならば、これらのものは人類にもそのほかの動物にも植物にも、豊年と健康とをたずさえてやって来て、少しも害を加えることはない。ところが放縦の悪徳をもったエロースが一年の季節の面で優勢になると、多くのものを滅し害を加えるのである。なぜなら、こうしたものから、疫病やその B ほか多くのいろいろな病気が獣や植物に生じ易いからである。じっさい、霜、霰(あられ)、錆(さび)病、これらはすべていま言ったような恋愛事象における相互間の貪欲と無秩序から生じるのである。そして、こうした恋愛事象を星辰(せいしん)の運行と一年の季節とに関して取扱う学問が、天文学と呼ばれているのである。

さらにはまたすべての犠牲式、および卜占(ぼくせん)術が掌握して取り行う諸行事——以上は神々と人間とにおける相互 C 交流であるが——それらの関心事は、エロースの守護と治癒以外の何ものでもない。なぜなら、およそ不敬虔の生じ易いのはどういう場合かといえば、人が節度あるエロースの意を迎えず、すべての行為においてこのエロースを尊び崇めないで、かえって他方のエロースを、生前死後の両親や神々との関係において、尊び崇める場合にあるからである。じつに以上の点に関して、恋する人々を調べかつ癒すことが卜占術に課せられている仕事であ D る。で、今度もまた卜占術とは、神の掟と敬神ということとに関係する限りの人間の側の恋愛事象を認識し、それによって神々と人間との間に友愛を作り出す工作者である、ということになる。

以上のようなわけで、多くの偉大な力を、それどころかありとあらゆる力を、総じてエロースは例外なく持っているのである。が、その中でも、節制と正義とをもってわれわれと神々とのうちに善事を軸にして実現されるエロース、このエロースが最大の力の持主であり、すべての幸福をわれわれに調えてくれ、われわれ相互の間だ

けでなく、われわれより偉大なものである神々とも交わりその友となることのできるように、しむけてもくれるのである。

E

ところで、ぼくもまたエロースを讃えている今、おそらく多くの言い残しをしていることだろう。だが、それも意識的にこちらからしたことでは毛頭ない。ともあれぼくに何か言い残したことがあれば、それを埋めるのは、アリストパネス、君の仕事だ。それとも、何かぼくとは違った仕方でこの神を讃美しようというつもりなら、そのように讃美してくれたまえ。ともかく君のしゃっくりも止まってしまったことだからね」

189

そこで、アリストパネスがそれを受けてこう話した(とアリストデモスは続けていった)。

「うん、たしかに止まったよ。だが君に言われたくさめをそれに施すまではだめだった。だから、身体(からだ)の中の、エリュクシマコスの言う節度ある部分が、くさめのような騒音やくすぐりを欲求するものなのかとぼくは不思議に思うほどなのだ。なにしろこのくさめをそれに施すや、まったくたちどころに止まったのだからね」

するとエリュクシマコスが、

「アリストパネス君、君はよくできた人間だが、自分がいま何をしているか考えてみるがいい。これから話をしようという君なのにふざけた態度に出て、おかげで、ぼくは君自身の話の目付役にならねばならぬようなことになっているのだ。もともと君は穏かに話せるのに、おかしなことを何か言い出しはしないかと、ぼくはそれを見張らねばならないのだからね」

B

と言う。で、アリストパネスは笑って、

「エリュクシマコス、君の言うことはもっともだ。今のぼくのことばは言わなかったことにしてくれたまえ。どうかぼくを見張るのは止めてくれないか。ぼくがこれから話そうとしていることで恐れているのは、その『おかしな』滑稽なことを言いはしないかということではさらさらなくて、——滑稽なことなら、それは得点をかせいだことになろうし、またそれがぼくらの芸術にとってのお手のものでもあろうからね——そうではなくて、もの笑いの種になるようなことをぼくが言いはしないかということだから」

と言う。するとエリュクシマコスが、

「人に一発喰らわしておきながら、アリストパネス、君は無事逃げおおせるものと思っているのだな。……とCんでもない、よく注意して、あとで言訳の立つように話をすることだ。しかしそうは言っても、このままで放免してもよいと思えば、おそらくそうするだろうがね」

と言った。

一四

さて、アリストパネスは次のような話をした。

「ところでエリュクシマコス、ほんとに君のことばにもあったが、ぼくは君やパウサニアスの場合とはまったく違ったある仕方で話をしようと思うのだ。それはこういうわけだからだ。つまりぼくからすれば、世の人々は全然恋の力に気付いていないように思う。かりにも彼らがそれに気付いていれば、エロースに最も壮大な神殿や祭壇を備えるだろうし、犠牲式もいちばん大掛りのものを取り行うだろう。が、事実はそれと異り、現在そのう

ちのどれ一つとしてこの神のために行われているものはない。本来ならば、そうしたものは当然何よりも第一に行われねばならないわけだ。なにしろエロースは神々の中でもいちばん人間に好意を寄せている神であり、人間に対する救援者であるとともに、人類の最大幸福がその治癒いかんにかかっているようなそういう病いを治してくれる医者でもあるからである。そこでぼくは、エロースの力の秘義を諸君に授けるようひとつやってみようと思う。(1) 諸君の方は、次に、ほかの連中に教授してやってくれたまえ。ところでまず第一に、君らは人間の本性とそれの遭遇した事件とを学ばなければならない。

D

さて、その昔人間本来の姿は今日見られるようなものではなく、それと異ったものであった。すなわちまず第一に人間の種類は三種だった。今日男、女二種類であるのとは違って、第三のものがさらに加わっていたのである。この第三のものは男女両性を合せ持つもので、その名前は現在残っているが、そのもの自体はすでに消滅してしまっている。つまりその当時は男女(おとこおんな)(アンドロギュノス)というのが一種をなしていて、容姿名前とも男女両方からできていてそれらを合せ持つものであったが、今日残っているのはただ悪口の中に使われているその名前の方だけである。第二に、これら三種の人間の容姿はすべて、全体としては球形で、周(まわ)りはぐるりと背中と横腹でできていた。また手を四本、足も、手と同じ数だけ持ち、二つの顔を丸い首の上に持っていたが、この二つはすべての点で同じようにできていた。ところで頭を一つ、互いに反対方向についている二つの顔の上に戴き、ま

E

190

1　秘義の伝授といういわば荘重な口調と、原初の完全な人間の姿についてのこの後の叙述とを、エンペドクレス(ことに Fr. 61(DK))に由来すると見る者もある。

た耳は四つで、隠し所は二つ、その他すべていま述べたことから想像されるであろうようなぐあいになっていた。そして進むにも、今日と同じように直立した姿勢で、自分の行きたい方向にどちらでも進んだが、また速い勢で突っ走ろうとするときには、とんぼ返りの軽業師たちが、それこそ足をまっすぐに伸ばしてその足をぐるぐる回転させながらとんぼ返りを打って行くように、当時八本であった手足を、支えに使ってぐるぐると急速度に回転しながら進んだ。

B ところで人間の種類が三つであり、その性質もいま言ったようなものであったゆえんは、こうである。そもそも男性は太陽の子孫、女性は大地の子孫、そして両性を分有しているもの〔男女（おとこおんな）〕は月の子孫であった。というのは、この月がまた太陽と大地との二つを分有しているからである。だからまた、彼ら自身もその進み方も、先祖に彼らが似ているがゆえに、丸かったわけだ。かようなわけで、彼らは強さと腕力の点でもおそるべき者であり、その心は驕慢（きょうまん）であった。そして神々に刃向ったのだ。ホメロスがエピアルテスとオトスについて述べていること(1)、

C つまり神々を攻撃しようとして天上へ登ることを企てたというのは、じつは彼らのことを言っているのである。

一五

そこでゼウスを始めほかの神々は、彼らをどうしたものかと相談したが何の解決策も見出せなかった。なにしろ彼らを殺してしまうことも、かつて巨人族（ギガンテス）に行ったように(2)、雷光で撃って種族を殲滅（せんめつ）してしまうこともできず、――そうなれば、人間から神々に捧げる供物も祭祀もなくなるだろうからね――そうかといって、彼らに傍若無人に振舞わせておくこともできなかったからだ。ゼウスは苦慮したあげくやっとのことで言われる

には、

『わしには一工夫できたように思えるのだ。つまり、どうすれば人間どもが存続しながらしかも今より弱くなって、その我儘をやめるだろうかということのね。それはこうだ。今度のところは彼らを一人ずつ、二つに切断しようと思う。そうすれば今よりも弱くなるだろうし、同時にまた、数を増すからわれわれにとっていっそう役に立つものとなりもしよう。そして彼らは二本足で真直ぐに立って歩くことになるであろう。しかし、それでもなお彼らが傍若無人の振舞いを続け、おとなしくしている気持がないように見うけられるなら、今一度二つに切ってしまおう。そんなことになれば、彼らは一本足でぴょんぴょん跳びながら進むことになるわけだ』と。

E　こう言ってゼウスは、まるでなかなかまどの実を切って貯蔵しようとする人々や〔ゆで〕卵を髪で切る人々がするように、人間どもを二つに切っていった。そして彼が切っていった人間の顔と半分になった首とを切り口の方に向け換えるよう、アポロンに命じた。つまり、そうされた人間が自分の切り口を見てもっとおとなしくなるようにと、ゼウスは意図されたからである。しかしその他のところは治療するように指図をされた。そこでアポロン

D

1　この年少の兄弟巨人は、神々に戦いを挑み、天上に登るため、オリュンポス山の上にオッサの山を、さらにその上にペリコンの山を積み上げようとした。が、アポロンに滅され、結局失敗に帰してしまった(『オデュッセイア』第一一巻三〇五行以下)。

2　ギガンテス(ギガスたち)とは、ウラノスがその子クロノス(ゼウスの父)によってその性器を切断されたとき、そこから流れ出た血が大地神(ガイア)に滴って、そこに生れ出た武勇の巨人の一族である(ヘシオドス『神統記』一八五行)。彼らはオリュンポスの神々に挑戦したが、ゼウスを首として神々は英雄ヘラクレスの協力を得て、彼らを滅した。世に「巨人の戦い(ギガントマキア)」と呼ばれるものである(『ソピステス』246A、『国家』II.378C参照)。

は顔を向け換え、また皮膚を四方八方から今日のいわゆる腹部へと引っ張り寄せ、腹の真中で口を一つ作って、
191 それをきんちゃくのように結び上げたが、これが臍と呼ばれているものだ。またそれ以外の皺はその大部分を伸ばし、靴職人が靴型に当てて革の皺を伸ばすときに用いるようなある種の道具を使って、胸部を形作った。しかし少々の皺は――それは腹そのものと臍の周りのものだが――昔の出来事の想い出にと残しておいた。

そこで本来の姿が二つに断ち切られたので、皆それぞれ自分の半身を求めていっしょになった。そして互いに
B 相手をかい抱きまつわり合って一身同体になろうと熱望し、お互いから離れては何一つしようという気がないから、餓えのためや総じて生活に必要なことを何もしないでいるために死んでいった。そしてどれか一方の半身が死に他方が残されると、残された者はまた別の者を探してまつわりついた。その出会う相手が、かつて完全であったときの女性であろうと――これが、今日ぼくらが女性と呼んでいるものであるが、――あるいは男性の半身であろうと、そうしたことには一切おかまいなしにである。そしてこのようにして彼らは滅んでいったのだ。そ
C こでゼウスは憐れに思って、もう一つ案を考え出し、彼らの隠し所を前に移した。それまではまたそれは外側〔背後〕にあって、彼らは子を生むにも相手の体内に生みつけるというのでなく、蟬のように地中にしていたからだ。こういうわけで、ゼウスは人間どもの隠し所を今日あるように前面に移し、それによって相手の体内で、つまり男性によって女性の体内で生殖を行わせた。この場合ゼウスの狙ったものは何かといえば、彼らがまつわり合う際に、もし男性が女性に出会ったのであれば、その者たちは子を生んで人間の種族は次々と作り出されていくし、またよしんば男性同士であっても、ともかくいっしょになったことからする充足感だけは生じ、そこで彼らはそ
D れを中休みしていろいろな仕事に向い、それ以外の暮しに気を配るようになる、ということにあった。まことに

そんなわけで、このような大昔から、相互への恋（エロース）は人々のうちに植え付けられているのであって、それは人間を昔の本然の姿へと結合するものであり、二つの半身を一体にして人間本来の姿を癒し回復させようと企てるものである。

一六

192 E

したがって、ぼくらはひらめのように一つものを二つに断ち切られたのだから、一人一人が人間の割符[1]というわけだ。だから誰でも自分の割符を探し求めるのだ。そこで男性の中でも、その昔男女（おとこおんな）と呼ばれていた両性の者の片割れである男性は女好きで、姦夫の大部分はこの部類から生れたものである。また逆に女性の方でも、この男女（おとこおんな）の片割れの女は男好きで、姦婦はこの部類から生れたのだ。しかしもともとの男〔男男〕の片割れである男性は、男性的なものを追求し、その身ががんらい男性の一片であるから、少年のうちは大人の男たちを愛して、その人々といっしょに横になりまつわり付いているのを悦（よろこ）ぶ。そしてこの連中は天性最も男らしい者であるから、青少年の中でも最優秀の者どもである。それなのに、この連中を恥知らずだと言う者があるが、それは真実を語らない者の言である。なぜなら、その少年たちがそういうことをするのは恥知らずのせいではなく、かえって大

1 割符は、友誼を結んだ二人の者が板や骰子などを二分しその一片ずつをそれぞれの者によって所持されたものである。それは、本人のみでなくその子孫にも遺され、後になって双方の者が会したとき、それらを合せ（原語の「シュンボロン」はこの「合せる」（シュンバレイン）から出ている）、それによってかつての友誼とその上に立つ連帯を確認しあった。なお「ひらめ」や「かれい」は、もと一匹の魚が縦に割かれたものと考えられ、割符に連想されたのである。

胆であり男気があり男らしいからなのである。つまり、彼らが自分と同じようなものを悦ぶからそうするのである。ところで、これについては有力な証拠がある。こういう少年たちのみが成人するや、政治の世界に対し一人前の男子としての実を示すのである。しかも男盛りになった暁には、少年を恋して、結婚や子供を作ることには生れつき目もくれないのである。ただ習わしから強制されてしようことなしにそうするのだ。しかし彼らにとっては、終生結婚しないでそういう者同士互いにいっしょに暮していけば、それで充分である。だから実際どの点からしても、こういう者は少年を恋する者となり、自分に恋を寄せる男性を愛する少年となる。それは、彼らが自分と同類のものをいつでも悦び迎えるからなのだ。

B

いやまったくのところ、ほかならぬあの半身に出会う場合には、少年を恋する者であれそのほかの誰であれ、皆そのときには友愛と近親感と恋情とにその心はまったく異常ともいえるほどに深い感動を受け、僅かの間(ま)さえ互いに離れる気持になることはないといってもよいくらいだ。そして一生を通じて変らず二人いっしょに暮す人人とはこれらの人々であるが、ただ彼らはお互い相手から自分が何を得ようとしているのか、それをそうと言うことさえまったくできないのだろう。なぜなら、誰だって、それが例の色欲の交りであるというふうには思うまいからね。つまり、ある人があのように非常な熱意をもってある人と交るのを悦ぶのは、じつはいま言ったことのためなのだなどと、こう思う者は一人もいないだろう。そうではなくて、双方の心が欲しているのは明らかに別の何かなのだ。ただ心はそれを言葉に表わすことができないで、自分の欲しいものを推し測り謎めいた言い方をするのだ。だから、この二人がいっしょに横になっているそばに、ヘパイストス(1)が例の諸道具をもって佇(たたず)んでこう尋ねたとしよう、

C

D

『人間たちよ、おまえらが互いに相手から得ようとしているものは何であるか』と。

そしてもし彼らが答えに窮しているので、再びこう尋ねて言ったとしよう、

『いったいおまえたちが心から求めているのは、次のことなのか。つまり、お互いできるかぎり完全に一体となり、その結果昼夜の別なく互いに相手から離れることのないようにしたい、ということなのか。まことこれがおまえたちの熱望しているものなら、わたしはおまえたちを熔かし鍛えて合体させてやろうと思うのだ。そうすれば、おまえたちは二人でありながら一体となって、この世に生きているかぎりは二人ともまるで一人の人間のようにいっしょに生き、また死んでからは、あの黄泉の国にあっても二人別々である代りに、再び一人の者としていっしょに死後を暮すようになるからな。さあ、考えてごらん。おまえたちの恋い求めているものはそれであって、それを手に入れればおまえたちはそれで満ち足りるのかどうか』とね。

E

ぼくらにはわかっているが、このことばを聞いたら、誰一人それを否定する者はいないだろうし、それにまた、それとは何か別のものを自分が欲しがっているのではないことも明らかになるだろう。それどころか、いま聞いたことこそまさしくあの自分たちが前々から熱望していたものである、つまり、恋人といっしょになり熔融されて二人が一人になることであると、こう文句なしに思うだろう。なぜなら、われわれの太古の姿がそれであり、われわれは当時まだ二つに分けられぬ完全なものだったということが、そのことの原因をなしているからだ。したがって、完全なものへのこの欲望と追求に、恋(エロース)という名が付けられているのだ。

193

1 醜く跛のヘパイストスは、火と鍛冶の神である。

つまり、かつてはぼくの言っているように、ぼくらは割かれずに一体をなしていたが、現在はその不正のゆえに、ちょうどアルカディアの人々がラケダイモンの人々によって分住させられたようなこと(1)を、ぼくらは神々から受けて離れ離れになってしまったのだ。だから、もしぼくらが神々に対して節度を欠くならば、またしても分割されて、墓石に浮彫りされた側面像のような姿、つまり、鼻筋に沿って引き裂かれ二つに割られた骰子(さいころ)のような姿になって、あちこちを歩きまわることになるという恐れがあるのだ。こういうわけだからむしろ、一方の運命からは逃れ、他方の運命〔再統一〕をば手に入れるために、ぼくらは皆、すべてのことにおいて神々に敬虔であるように人々を戒めなければならない。なにしろエロースはぼくらにとって指導者であり司令官であるのだからね。この神に対しては、誰も逆らってはならないのだ。——ところで逆らうというのは、神々に憎まれている奴のすることだ。——さて、なぜ逆らってはならないかといえば、この神の友となって仲良くすれば、ぼくらは本来自分の分身である恋人を見出すだろうし、また巡り合うこともあろうからね。だが、こういうことがうまくいくのは、今日の人々の中ではわずかの者しかいないのだ。ところで、エリュクシマコスがぼくの話を茶化して、パウサニアスとアガトンのことを言っているのだというふうにとらなければいいが。……さぞやこの人たちも、いま言ったわずかな者の中に入っているだろうし、御両人とも根(ね)が本源的な男性だろうからね。だが実際のところこのぼくは、男女すべての者について述べているのであって、いま言ったように、つまり、ぼくらが恋を成就してそれぞれ自分の恋人を手に入れ、昔の本然の姿に戻るならば、ぼくたち人間の種類は幸福になるだろう、ということを言っているのだ。ところで、この本然の姿に戻ることが最も尊いことであるならば、現在あるものの中でそれにいちばん近いものが、必然的にまたいちばん尊いということになる。そしてそれは、自分の意に適っ

D　た素質の恋人を手に入れることである。だから、このことの原因をなす神を讃えるというならば、人は当然エロースをば讃えるべきだろう。この神は現在にあっては、ぼくらを血縁のものへと導くことによって、最大の御利益を恵んでくれる神であり、また将来に向っては、ぼくらが神々に敬虔の実を示すかぎり、人間本然の昔の姿に戻し、ぼくらを療して至浄至福なものにしてくれるだろう、という最大の希望をぼくらに与えてくれるからだ。

以上が、エリュクシマコス、エロースに関するぼくの話だ。君のとはまた違った類いのね。ところで、先程君にお願いしたように、それを茶化さないでほしいのだ。まだ残っている人々がそれぞれ何を話すか、――いや、

E　むしろ、残っているのはアガトンとソクラテスだから、二人がそれぞれ何を話すか、それを聞くためにもね」

一七

「よし君の言う通りにしよう」とエリュクシマコスが言った「いや本当に今の話は面白く聞かせてもらったよ。で、ソクラテスとアガトンとが恋の道にかけて名うての者であることをもしぼくが知っていなかったら、今までにもうありとあらゆることがたくさん述べられてしまっているのだから、あの人たちは話に困らないだろうかと、ぼくも大いに気をもむことだろう。しかし実際いまは、安心しきっているのだ」

1　通常は、前三八五年のマンティネイアの、五村への分散移住(ディオイキスモス)のことを指す、とされている。となれば、この「饗宴」の行われた時(前四一六年)の発言としては時代錯誤を犯していることになる。しかし、この事件を前四一八年の、アルカディア同盟破棄に関連してのこととすれば、時代錯誤の問題は消えるであろう。

するとソクラテスが、

「それは、エリュクシマコス、君自身がいま行われている競演を上首尾に済ましてしまったからだよ。しかし、もし君が現在ぼくのおかれている立場に立ったら、いやアガトンもまたこれから上手に話すだろうから、そのときにおそらくおかれるであろうぼくの立場に立ったら、君も今のぼくと同じようにひどく心配して、どうしたものかと途方に暮れるにちがいない」

と言った。するとアガトンが、

「ソクラテス、あなたはぼくに呪文をかけようというのですね。この座に集った聞き手はぼくがうまく話すだろうと大きな期待を寄せているのだと、こうぼくに思い込ませることによって、ぼくを混乱に落し入れるためにね」

「しかしねえ、アガトン、それこそぼくは忘れっぽい人間だということになるだろうよ」とソクラテスが言った「君が自分の作品を上演するに先立って、俳優たちといっしょに演壇に登り、あのような数の観衆を前に見ながら、しかも微塵もあがらなかった君の勇気ともの怖じしないおおらかさをこの目で見ているのに(1)、今われわれわずかな人数のために君があがってしまうなんてぼくが考えるとしたらね」

B

「え、何ですって、ソクラテス」とアガトンが言った「あなたはまさかぼくのことを、こんなふうに思っているのではないでしょうね。——ぼくが劇場のことで今も頭が一杯になっていて、そのためぼくは、心ある人にとっては少数の具眼の士の方が、見る目を欠いた数多くの連中よりもうかつにできないこわい人々だ、ということがわからないほどになっているなんていうふうにね」

C 「アガトン、もし君について何かぶしつけなことをぼくが考えているのなら」とソクラテスは受けた「それはまったくもって失礼な振舞いということになろうね。だが、君は自分の目に知者とうつる人々に出会うなら、一般の人々よりもその人たちの方を顧慮するだろうということが、ぼくにははっきりわかっているのだ。しかし、そのような人たちにぼくらが当てはまることはまずあるまい。——なにしろ、あの場に居合わせてあの見物衆の一員だったのだからね。——ところが、ぼくらとは違って知者である人々に、君が出会うとしよう。そのとき君自身何か恥ずべきことをしていると思うようなこともあろうが、そのような場合には、おそらく君はその人々に対して恥ずかしく思うだろう。それとも君の意見は」

「あなたの言われる通りです」

と答えた。

「しかし一般の人々となると、君は自分が何か恥ずべきことをしていると思っても、その連中に対して恥じ入ることはあるまい?」

D するとパイドロスが口を入れて言うには、

「ねえアガトン、君がソクラテスに答えていさえすれば、今ここでのことは何がどうなろうと、ソクラテスにはもうどうでもいいことになるだろうよ。この人にとっては、ただただ話し合う相手があれば、それも、とりわ

---

1 上演に先立ち、場所もディオニュソス劇場ならぬ「ペリクレスの音楽堂(オーディオン)」で行われる、いうなれば前夜祭的性格の「プロアゴーン」において、作者は、劇の服装を着けずにただ冠をつけただけの俳優や歌舞隊員たちと共に登壇し、おひろめをした。

け美しい相手がありさえすれば、それでいいのだ。ところでぼく自身は、ソクラテスの話し合うのを聞くのは大好きだけれど、今はエロースへの讃歌に心を配って、われわれの一人一人からその演説を受け取らなければならない身だ。だから御両人それぞれこの神に自分の分を奉納して、その上で話し合うようにしてもらいたい」

E

「いやまったく君の言う通りだよ、パイドロス」とアガトンが言った「それにまた、ぼくがこれから話すのに差し障りになるものは、何もないことだしね。というのは、ソクラテスとはこれからでもたびたび話し合えるのだから。

一八

それではぼくは、まず第一に、どのように自分が話すべきかそれを説明し、次に実際に話をしようと思う。さて、ぼくの見るところでは、今までに話をされた方々は誰一人あの神を讃えたのではなく、その神から人間に与えられる数々の恵みのゆえに、それを受けた人々の幸福を讃歎しているように思う。ところがこの神は、いかなる性質の神であるがゆえにそれらを贈り物としたのか、ということは誰一人として言わなかった。しかし、あらゆることに関するあらゆる讃美の、唯一の正しい仕方とは、はなしの対象になっている当のものがいかなる性質のものであるから、いかなるものの原因となっているか、ということを詳しく述べることである。こういうわけであるから、われわれもエロースを賞讃するに当り、まず第一に、エロース自身いかなる神であるかについて、

195

第二にその数々の贈り物について、讃えるのが正しい態度である。

そこで、ぼくはこう主張する。もともと神はみな幸福なものであるが、その神々の中でもとりわけエロースは

——こう言っても神々の嫉み（ねた）を招かず、神の掟に適っているなら——いちばん幸福な神である。なぜならいちばん美しく高貴であるからである。ところで、この神がいちばん美しいというのは、次のような性質のものだからである。第一に、パイドロス、それは神々の中でもいちばん年若いのだ。しかもこの主張に対する有力な証拠を、この神自身が提供している。つまり、老齢からは一目散に逃げるということがそれである。老齢は周知のように足速やなものであり、しかも、ともかくも必要以上に早くわれわれのところにやって来るものであるが。——この老齢をエロースは生れつき嫌って、まだ遠くにいるうちからでさえ近づこうとはしない。ところが若者たちとはいつも交り彼らと共にいるのである。つまり、互いに等しいものどうしは常に相近づくというあの古説[1]は、その言や良しというところである。ぼくはほかの多くの点ではパイドロスと同意見であるが、エロースがクロノスやイアペトス[2]よりも古いというこの一事には同意できない。かえって、ぼくから言えば、この神は神々の中でもいちばん年若いのであり、しかも永遠に若いのである。またヘシオドスやパルメニデスが語っているあの神々に関する昔の出来事も、もしこの両人の言うことが真実のことであったとするならば、それはアナンケ[3]によって生

B

C

1　その最も古い表現は、『オデュッセイア』第一七巻二一八行「神は常に等しい者を等しい者へと導かれる」である。しかし、この考えは普遍化され、互いに相等しいものが牽引し作用し合うという形でもって、ギリシア自然哲学の主要原理の一つとなった（『リュシス』214A～B参照）。

2　「クロノスやイアペトスより古い」とは、大昔ということの諺的表現。イアペトスとその末弟クロノスは、ウラノスを父にゲを母にして生れたティタン（巨人）である（ヘシオドス『神統記』一三四—一三七、五〇九—五一〇行）。なお、イアペトスはアトラスやプロメテウスの父である。

3　この世界の事象の進行を支配している、いうなれば容赦しない厳しい必然性——その「必然」を神格化したもの（パルメニデスのFr. 8. 30, 10. 6(DK)、エンペドクレスのFr. 115. 1(DK)）。

じたことであってエロースのせいではない。なぜなら、もしエロースが神々のうちにいたのであれば、相互に去勢したり捕縛したりすることや、そのほかの数多くの暴行は起らず、むしろそこには友愛と平和とが生じたことであろう。ちょうど、エロースが神々を支配して以来の今日のように。

こんなわけで、この神は年若いのである。ところが若者である上に、この神はなお華奢(きゃしゃ)な身体(からだ)の持主でもある。

D ただ、神の華奢というものを描く点でホメロスのような詩人が、この神には欠けているのである。なにしろホメロスは、アテが女神でしかも華奢であることを——少くともこの女神の足が華奢であることを、——次のような言葉で言っているのだから。

まことにこの女神は華奢な足の持主なり。なぜなれば、近づくにも
大地を踏まず、その歩む所は諸ろ人(も)の頭(こうべ)なればなり(1)

と。それにしても、この女神の歩む所は硬いものの上でなく柔かいものの上であるとは、この女神の華奢なことの証しとして、実に適切な証拠を使ったものだと思う。そこでわれわれもまた、エロースが華奢であることについて、今と同じ証拠を用いようと思う。すなわち、この神は地上を歩まず、またあまり柔かくもない頭蓋(ずがい)の上を

E 歩むこともせず、およそこの世にあるものの中でもいちばん柔かいものの中を歩み、そこに住まうのである。なぜならこの神がその住まいを建てるのは、神や人間の心根とか魂の中であり、それもどの魂の中でもおかまいなしにつぎつぎというのでなく、その出会う相手が硬い心根を持つ魂ならば離れてしまうが、柔かい心根の魂ならそこに居を構えるといった有様だからである。そこでこの神は常に、いちばん柔かいものの中でもいちばん柔か

196 いものに、自分の足のみかその身体のすべてでもって触れているからして、必然的に最も華奢なのである。かく

して、この神はいちばん年若くいちばん華奢であるが、それに加えて、容姿の上でみずみずしい。なぜなら、もしこの神のからだがこわばっていたら、どこにでも身をまつわりつかせるということはできまいし、それにどの魂の中にも人に気付かれずにまず入り込み次いで出て行くということもできないであろう。ところで均斉（きんせい）のとれたみずみずしい姿に対しては、この神の容姿の優美なことが有力な証拠となっているのである。この容姿の優美さは、誰もが認めているように、エロースがとりわけ豊かに所有しているものなのである。なにしろ、容姿の醜悪さとエロースとの相互の間には、不断の戦いが存在している有様だからである。なお、肌の美しさであるが、B これに対しては、この神が花のもとで日々生活していることがそれを証明している。つまり、花の咲いていないものや花盛りの過ぎてしまったものは、それが肉体であれ魂であれ、そうしたものの中にエロースは腰をおろすことはない。しかし花の咲き誇り芳香馥郁（ふくいく）たる所があれば、そこに腰をおろし、そして留るのである。

一九

さて、この神の美しさについては、以上で充分であるが、なお多くのことがまだ言い残されてもいる。しかし、エロースの美徳について、この次に述べなければならない。さてその最大のものはといえば、エロースは神との関係においても人間との関係においても、不正を加えることもなく、また不正を加えられることもないというこ

---

1 『イリアス』第一四巻九二―九三行。なお、九一行には、「ゼウスの一番上の娘アテ、この女神はすべての者を迷妄に誘う呪わしい方だ」とあるが、ヘシオドス（『神統記』二三〇行）では、エリス（争い）の娘となっている。

(196)

C　とである。なぜなら、この神自身他から何かされる場合に暴力ずくでそうされるのではないし――暴力は、エロースに手を触れることのないものだから、――またこの神の方から何かする場合にも、暴力ずくでするのではない。――なぜなら皆エロースに対しては、どんなことでも自分からすすんで仕えるからである。――ところが、当事者が互いに自分からすすんで同意したことは、『国家の王たる法律』[1]の宣言するところでは、正義に適った〔法律上正当性をもつ〕ことなのである。

この神はまた、正義の徳に加えて、節制の徳をもこの上なく豊かに具えている。なぜなら、一般の認めるところによれば、節制とは快楽や欲望に打ち克つことであるが、エロースに対しては、いかなる快楽もその力においてまさるものはないからである。ところが、エロースよりも弱ければ、それはエロースに支配され、逆にエロースの方は支配するだろう。で、エロースは快楽や欲望を支配するものであるから、際立って節制に富むものということになるであろう。

D　さらにはまた勇気に関してであるが、エロースに対しては『アレスといえども敵しえず』[2]である。なぜなら、アレスがエロースを捕えるのではなく、エロースが――物語によれば[3]、それはアプロディテへの恋（エロース）であるが――アレスを捕えるからである。ところで強いという点では、捕える者の方が捕えられる者よりもまさっている。そこで、エロースは、他に抜きん出た第一等の勇者に打ち勝つのであるから、万人中の最勇者ということになるであろう。

さてこの神の正義と節制と勇気の諸徳については以上述べたが、知恵の徳についてはまだ触れずに言い残している。そこでできる限り、言い落しのないようにやってみなければならない。そこで、まず第一に、エリュクシ

E　マコスが彼自身の術に対してしたように、ぼくもまた自分の術を崇めるために言うのだが、この神はほかの者をも詩人に化するほどのすぐれた詩人なのである。ともかく『よし以前には詩文に縁なき者であろうとも[4]』ひとたびエロースが触れれば、みな詩人になるのだから。これこそは、エロースが総じて文芸にかかわる創作全般にすぐれていることの証拠にわれわれが使うのにふさわしい事柄である。なぜなら、自分が持っていないものや知らないものは、これを他人に与えることはできないだろうし、また教えることもできないであろうからである。さ

197　らにはまたじつにすべての生物の創造であるが、これがエロースの知恵であり、この知恵によって生物はすべて生れ生じるのであることに、誰が反対しよう。しかし、技術活動という面ではどうかといえば、この神の教えを受ける者は、行く末指折りの輝かしい者となるが、エロースの関知しない者は、名もなきくすんだ者になっていくのを、ぼくらは知らないというのか。じつに弓術や医術や卜占術をアポロンが発見したのは、欲求や恋(エロー

B　ス)に導かれてのことであった。だからこの神もまた、エロースの弟子ということになろう。さらにはムゥサの

1　アリストテレス『弁論術』第三巻(1406^a18sqq.)によると、アルキダマスの修飾語は量・質とも度を失して仰々しく、つまらぬものである、という意味のことが述べられ、その例の一つとして、「法律」のことをわざわざ「国家の王たる法律」と言っていることが挙げられている。なお、アルキダマスは前五世紀後半に活動した弁論家、ゴルギアスの弟子である。

2　ソポクレスの『テュエステス』(Fr. 235 (Nauck^2))のことば「必然にはアレスも敵しえず」から出ている。

3　『オデュッセイア』第八巻二六六行以下によれば、アレスはアプロディテへの恋にひかれて床(とこ)を共にした。ために怒った女神の夫へパイストスの作った目に見えぬ繊細な網に捕えられ、その不義の現場を神々の目に曝す破目になったという。

4　エウリピデス『ステネボイア』(Fr. 663 (Nauck^2))による。このことばは諺のように使われた。

女神たちは文芸の、ヘパイストスは鍛冶の、アテナは機織の、そしてゼウスは『神々と人間とをしろしめす』[1]術での、エロースの弟子なのである。

まことに以上のようなわけで、エロースが――もともと醜悪さのところに恋(エロース)はないからして、明らかに美へのエロース(恋)であるが――神々の中に生れ出たとき、神々のことは万事整え秩序立てられた。それに反してそれ以前は、言い伝えによれば、初めにぼくが言ったように、アナンケの支配のゆえにたくさんの怖ろしいことが起っていたのである。ところがこの神が生れるや、美しいものを恋い求めることからして、神々にも人間にもすべてのよきことが生じたのである。

C

このようなわけで、パイドロスよ、エロースはまず彼自身最も美しく高貴なものであるからして、次いでほかの者に対しても、ほかの同じ類いのことどもの原因となっているようにぼくには思われるのだ。ところで、何か、それも詩の形のものを言ってみようかという気になったのだが、……この神は、

人々のうちには平和を、海原には静かなる凪を、風のための臥し寝を、そして憂いのうちには眠りを

D

作り出す者である。この神は、人々を互いに寄り合せ、今ここでしているような集いをすべて催させ、祭礼、歌舞、犠牲式に先達となって、われわれから互いに他人であるという気持を無くし、互いに同類であるという気持で満たす。それは温和をもたらし、粗暴を放逐する者。好意は惜しみなく与え、悪意は与えぬ者。仁慈善良なる者。賢者にとっては観想すべく、神々にとっては讃歎すべきもの。授からぬ者には羨望の的であり、充分に授けられた者には貴重な宝。奢侈、繊細、華奢、優美、憧憬、切望の父。善き者を顧慮し、悪しき者を一顧だにせぬ

E

者。労苦における、恐怖における、切望における、言葉における、最上の舵手、戦友、擁護者にして救済者。す

べての神々と人間との飾り。理想的な先達。人はすべて、この神に見事な讃歌を捧げながらそのあとに従わなければならない。この神がすべての神々と人間との心を魅了しつつ歌う歌に和して。
パイドロス、ぼくからの以上の話が、かの神に奉納されたものであるとしてくれたまえ。それは、ぼくの力の及ぶかぎり適当な度合いで、ある箇所は冗談を、またある箇所は真面目さを持たせたものなのである」

二〇

198

アガトンが話し了えると、(とアリストデモスは語りつづけるのだった)満座の者から、この若者の話し振りは、何と本人にもかの神にも似つかわしいものであることかとばかりに、讃歎の叫び声が挙った。するとソクラテスがエリュクシマコスの方を見て、

「アクメノスの御曹子よ、いったいぜんたい君には、先程のぼくの恐れはいわれのないものであり、今しがたぼくの言ったことは予言にならなかったと思われるのか。あのときぼくは、『アガトンの話は素晴らしいものになるだろうし、ぼくは途方に暮れるだろう』と言ったのだが、……」

と言った。

「君のことばのうち一方の、アガトンがうまく話すだろうという方は、予言になっていたようにぼくには思われる。が、君が途方に暮れるだろうという方は、そうは思わない」

1 おそらくどこかからの引用であろう。が、未詳。

B　「いい気なものだね、エリュクシマコス。あのように見事な、そして多彩この上ない話のなされたあとで話さなければならない場合、ぼくにしろ、ほかの誰にしろ、どうして途方に暮れずに済まされよう。それに、ほかの箇所はどこも同等に素晴らしいというわけではなかったが、しかし最後のところは、いったい誰がそれを聞いてその語句の美しさに心より驚歎しないものがあろうか。このぼくはといえば、美しいことばはあの真似事さえ言

C　えないだろうと考えたとき、それこそもう少しで、どこか逃げ道があれば、逃げ出すところだった。というのは、その話のためにぼくはまたゴルギアスを想い出してしまい、そのおかげで、言葉通りホメロスの語っているような目にあったのだ。[1]つまり、アガトンはとどのつまり話の中で、言論の雄ゴルギアスの首をぼくの話に投げつけて、ぼく自身をものも言えない石にしてしまうのではないかと、こうぼくは恐れたのだ。そして自分がじつは先

D　程笑止千万な人間だったことに気付いたのだ。あのときぼくは、いっしょになって順番にエロースを讃美しようと、諸君に同意し、自分は恋の道にかけては通の者であると言ったものだ。がじつは、恋に限らず何事であれ、それをどのように讃美すべきかという当面の事柄について、ぼくは何も知らなかったのだ。なにしろぼくは、愚かにもこう考えていたのだ。——およそ讃美の対象については例外なく真実のことを言わなければならないのであって、このことが基本事項である。その上で、それら真実の事柄から最美のものを選び出し、それを能うかぎり適切に排列しなければならないのである、と。だからまた、自分は何についてであれ賞讃することの真のあり方を知っているのであるから、うまく話せるだろうと大いに自負していたわけだ。ところが実際は、上手に褒(ほ)め

E　讃えることとは、その対象が何であれ、どうもいま述べたようなことではなく、事実がその通りであろうとあるまいと、ともかく能うかぎり偉大なことと美しいこととを賞讃の対象となるものに対して捧げることにあったよ

うだ。そしてそれが偽りであっても、だからといってべつに何ということもなかったのだ。……それはそうだろう。どうやら先に申し合せしたことは、われわれ一人一人がエロースを讃美していると思われるように、というのであって、真実讃美するように、というのではなかったようだから。思うにそういうわけだからこそ、君らはあらゆる話を総動員してそれをエロースに捧げ、エロースはこういう神であり、これほどたくさんなことの原因をなしていると主張しているのだ。つまり、この神ができるかぎり美しくよきものに見えるようにという意図からであるが、これも事実を知らぬ者に対してのはなしであることは言うまでもない。——むろんそれは事実を知っている者に対してではあるまいからね。——かくして、その賞讃は見事であり堂々としているというわけだ。

199

だが残念なことに、ぼくはそういう賞讃の仕方を知らなかったのだ。そしてその点無知であったがゆえに、ぼく自身も順番に讃美しようと諸君に同意したわけだ。そこで『舌は』約束したが、『心は』せずということになる。(2) だからこのことは取り下げにする。つまり、いま述べたような仕方では、もはやぼくは讃美しないということだ。

B

第一ぼくのできることでもあるまいからね。しかしそうは言っても、真実のことなら、お望みとあれば話しても

1　『オデュッセイア』第一一巻六三三―六三五行に、「ある恐ろしい怪物のゴルゴのような頭を、高貴なペルセポネイアがハデスの国から私に送ってきはせぬかと、蒼白い怖れが私を襲った」とある。ゴルゴ(あるいはゴルゴン)は、三人姉妹の怪物(その一人がメドゥサ)(ヘシオドス『神統記』二七四―二七六行)。その醜悪な顔は、見る者を石に化したという。ここでは、アガトンの弁論の師であり、いうなれば言論の上でゴルゴの魔力をもつゴルギアスを、ゴルゴにかけて言っているわけである。

2　エウリピデス『ヒッポリュトス』六一二行。諺のようによく用いられることばとなった。なお、『テアイテトス』(154D)参照。

よい。ただし、ぼく流に話すのであって、君たちの話と張り合おうというのではない。だから、パイドロス、考えてみてくれたまえ。いったい今ぼくの言ったような話をも必要とするのかどうかを。つまり、エロースについて、真実のことは話されるが、そのとき使う言葉とか語句の排列とかは、それこそ心に浮ぶがままにといった類いの話をも、聞く必要があるかどうかをね」

とソクラテスが言った。すると、パイドロスもほかの人々も、ソクラテスが自分でこれでなければと思うその仕方で話すように、と頼んだ。

C 「それでは、パイドロス」とソクラテスは言った「なおちょっとした質問を二、三アガトンにするのを許してくれたまえ。彼から意見の一致をえて、その上で話をしたいから」

「もちろんいいとも。さあ、尋ねたまえ」

とパイドロスは答えた。こういうことのあった後で、ソクラテスはだいたい次のようなところから始めた。

二

「いや実際今の君の話の始め方は見事なものだと思われたよ、アガトン君。エロースはいかなるものであるかをまず第一に示し、次いでその働きに至るべきだと言っていたことだがね。この話の緒（いとぐち）には、ほとほとぼくは感心した。だからさあ、エロースについて、君はほかの点でもこの神がどんなものであるかを、堂々と見事に説明

D したのだから、次のことも言ってくれたまえ。エロースはあるものへの恋というような性質のものなのか、それとも対象のないものなのか。ただし、ぼくの尋ねているのは、ある母親への恋かそれとも父親への恋なのか、と

いうことではない。——なぜなら、『エロースは母親への恋かそれとも父親に対してなのか』という問は滑稽だろうからね。——そうではなく、例えばほかならぬいま取り上げられているもの、つまり『父親』について、『そもそも父親とはある者の父親なのか、それともそうではないのか』とぼくが尋ねる場合のようなものだ。君はもし立派に答えようと思えば、間違いなく『父親とは、ほかならぬ息子か娘の父親である』とぼくに言うだろう。それとも違うかね」

「もちろんあなたの言う通りです」

とアガトンが答えた。

「それでは母親の場合もそれと同様ではないか」

これにも彼は同意した。

E

「では」とソクラテスは続けた「なおもう少し答えてくれたまえ。ぼくの言おうとするところを、もっとよく君に理解してもらうためにね。さて、こうぼくが尋ねたとしよう、『ではどうかね。兄弟は——つまり、兄弟であるゆえんのものそのもののことなのだが——それはある者の兄弟なのか。それともそうではないのか』とね」

ある者の兄弟である旨をアガトンは答えた。

「すると、兄弟か姉妹かのそれ、というのではないかね」

これにも彼は同意した。

「さあ、エロースについても答えるようにしてみてくれたまえ。エロースは何ものへの恋(エロース)でもないものなのか。それともあるものへの恋なのか」

「それはもうもちろんあるものへの恋です」

「それなら」とソクラテスは言った「そのことを、つまり、エロースは何への恋であるかを忘れずにとくと胸のうちに納めておいてくれたまえ。しかし、次のことだけはいま言ってくれたまえ。あるものへの恋であるエロースは、その、恋の対象になっているものを欲求するのか、それともしないのか」

「もちろん欲求します」

「エロースが欲求し恋い求めるのは、その対象を持っているときのことなのか、それとも持っていないときのことなのか」

「持っていないときのことですよ、おそらくはね」

「さあ考えてみてくれたまえ」とソクラテスが答えた「おそらくというのではなく、必然的にそうかどうかを。

B つまり、欲求するものは自分に欠けているものを欲求するのか、あるいは、欠けていないときには欲求しないのか。……まったくもってぼくには、アガトン、それは文句なしに必然的なことと思われるのだ。だが君にはどうだろうか」

「ぼくにもそう思われます」

と答えた。

「結構だ。それでは、大きな者が大きくありたいとか、強いのに強くありたいというふうに、いったい思うだろうか」

「それは、今まで認められたことからして不可能です」

「つまり、現に持っている性質をその人が欠くはずはあるまいからね」
「言われる通りです」
「さて、強いのに強くありたいとか」とソクラテスは言った「足速やなのに足速やでありたいとか、健康なのに健康でありたいという場合、——と言うのは、これらの性質やこうした類いの性質すべてについて、次のように考える人がおそらくいるだろうからね。つまり、そうしたものを持ちそのような性質である人々が、自分の持っているものをなおも欲求するものだ、というふうにね。だからぼくらが誤りを犯さないよう、そのために、ぼくはいま言っているのだ。——さてアガトン、君も考えてみればわかることだが、彼らが現に持っているものはすべて、彼らは欲求すると否とにかかわらず必然的にそれらを持っていなければならないのだ。それなのに、それをなおいったい誰が欲求するというのだろうか。それにもかかわらず、自分は健康だがなお健康でありたいとか、金持だがなお金持でありたいとか、現に持っているものを欲求するのだとか、こういうことを言う者があれば、その者にぼくらは言うだろう、『君よ、君が富や健康や強さを持っていながら、なおそれらを持ちたがっているのは、将来に対してのことなのだ。少くとも現在のところは、君は欲すると否とにかかわらず、それらを持っているのだからね。だから考えて欲しいのだが、君が自分は現に有るものを欲求すると言う場合には、それは、現在有るものが将来にわたっても存在してほしい、というまさにその意味ではないだろうか』と、こうぼくらは言うだろう。彼は同意するのではないだろうか」

C

D

それにアガトンは賛成した。そこでソクラテスの言うには、
「するとそれは、未だ彼の手もとにはなく彼のものともなっていないあの事態を欲求すること、つまり、あの

いろいろなものが将来にわたって無事に彼のものとして存在するのを欲求すること、ではないか」

E

「確かにそうです」

「したがって、ぼくらがいま引合いに出している者でも、そのほかの誰でも、欲求する者なら、自分の手もとにないものや、現にないものを欲求するのであり、自分が持っていないもの、自分自身そうでないもの、自分に欠けているもの、まあこういったものが欲求と恋の対象をなしているというわけだね」

「まったくその通りです」

とアガトンが答えた。

「さあ、それでは、今までに言われたことを要約してみようではないか」とソクラテスは言った「エロースはまず第一に、あるものに対してであり、しかも第二に、自分に欠けているものに対してである、というのではないかね」

201

「そうです」

「ではそれに付け加えて想い出して欲しいのだが、君は先程の話の中でエロースを何に対するものであると言ったろうか。だが、お望みとあれば、ぼくの方で君に記憶を呼び戻してあげてもよい。……君はだいたいこう言ったように思う。神々の間では、美しいものへの恋(エロース)が、――醜いものに対しては恋(エロース)は存在しないのだから――かかる恋が本(もと)になって、いろいろのことが整え秩序立てられたのであると」

「たしかにそう言いました」

とアガトンは答えた。

「ねえ君、君のそのことばはまた道理に適ってもいるのだよ」とソクラテスが言った「そして事実がその通りであるならば、エロースとは美への恋であって、醜への恋ではないのではないだろうか」

アガトンはそれに同意した。

B

「ところで、恋い求める場合には自分に欠け自分が持っていないものをである、ということがわれわれの間ですでに承認されているのではないかね」

「そうです」

「するとエロースは、美を欠き美を持っていないわけだ」

「必然的に」

とアガトンは言う。

「ではどうだろう。美を欠き全然美を所有していないものを、君はいったい美しいと言うだろうか」

「いや、決して」

「もし事実がその通りだとすると、それでもなお君はエロースの美しいことを認めるかね」

そこでアガトンはこう言った、

「ソクラテス、ぼくにはあのとき自分の話したことが何一つわかってはいなかったようです」

C

「それにしても先程は、アガトン、君は本当に言葉美しく話をしたものだよ。……しかし、なおちょっとしたことを答えてくれたまえ。よきものはまた美しくもあると君は思うかね」

「ぼくはそう思います」

「それでは、もしエロースが美しいものを欠いており、しかもよきものは美しいものであるとすると、エロースはまたよきものを欠いていることになるだろう」

「ソクラテス、ぼくはあなたを反駁することはできないでしょう。で、事実はあなたの言う通りだとしましょう」

「親愛なアガトン、まこと反駁できないのは真理に対してなのだ。ソクラテス相手なら、少しもむずかしいことではないのだから」

とソクラテスが答えた。

二三

D 「ところで、君の方は放免ということにして、エロースに関するあの話の方だが、――それは、ぼくが以前マンティネイアの婦人ディオティマ(1)から聞いたものだ。この女(ひと)は恋のことでもほかの多くの事柄でも、みなその道の知者であって、例の疫病(2)に先立ちアテナイの人々に犠牲式を挙げさせることによって、彼らのためにその病気の来襲を一〇年先に持ち越させたものだ。そしてほかならぬこの婦人がまた、ぼくに恋愛道を教えてくれたのだ。――さて、この女(ひと)のした話をひとつ諸君に逐一お聞かせするようにしてみよう。今までにぼくとアガトンとの間で同意された事柄を出発点にして、ぼく自身独力で、ぼくの力を最大限に発揮しながら。……言うまでもなく、

E アガトン、君が説明したような仕方で、まず第一に、エロースが何者であり、いかなる性質のものであるかを述べ、次に、その働きについて述べなければならない。ところで、あの外国の女(ひと)がかつてぼくに質問しながら話し

てくれたそのときの仕方で、これから話していくのが、いちばんやり易いようにぼくには思われるのだ。
さて、ぼくもそのとき彼女に向って、今アガトンがぼくに答えたとだいたい同じようなことを言ったものだ。エロースは偉大な神であり、美しいものに向うものであるとね。すると彼女は、ぼくがこの人〔アガトン〕に対して使ったと同じあの議論でもってぼくを反駁し、そして、
『あなたの説によれば、エロースは美しいものでもよいものでもない』
と言うのだ。で、ぼくは言った、
『ディオティマ、あなたの言われることは、どういうことですか。すると、エロースは醜いものであり、つまらぬものであるというのですか』
すると彼女は、
『これおやめなさい、何ということを言うのです。……それとも、美しくなければそれは必然的に醜い、と思うのですか』
『そうです、何にもましてそう思います』
『さらに、賢くない場合もまた、そもそもそれは無知だというわけですか。それともあなたは、知と無知との中間のものが何かあることに気付かないのですか』

1　プラトンの虚構になる人物であろう。なお、「解説」始め及び二九一―二九二ページを見よ。
2　前四三〇年アテナイを襲った疫病の大流行のこと。その様子は、トゥキュディデス『歴史』第二巻(四七―五四)に詳しい。

『何ですか、それは』

『正しいことを思いなしながら説明することができないというのは』と彼女は言った『――あなたは知らないのですか――それは知識を持っているということにはならないし――なぜなら、説明の欠けたものがどうして知識でありえよう、――かといってまた、それは無知でもない――事実に的中しているものが、どうして無知でありえましょう。――確かに、正しい思いなしとはいま言ったようなもの、つまり叡知と無知との中間にあると思うのです』

『おっしゃる通りです』

とぼくは答えた。

B

『それなら、美しくないものをいやおうなしに醜いというふうにしないことです。それに、よくないものを悪いというふうにも。エロースに対してもまたそのようにして、あなた自身それをよくも美しくもないと認めたからといって、それが醜くつまらないものでなければならぬとは決して考えずに、それらの何か中間的なものと考えることです』

で、ぼくは言った。

『それでもエロースが偉大な神であることは、誰からも認められていることなのですよ』

『それは、事情に通じない人たちのことを言っているのですか。それとも、事情に通じた人々をも含めてのことですか』

『もちろん全部を含めてのことです』

C

するすると彼女は笑って言った、
『ソクラテス、エロースは神でないとさえ言う人々によって、どうしてそれが偉大な神であると認められよう』
『その人々とは誰なのです』
とぼくは尋ねた。
『一人はあなた、一人は私です』
と彼女は答える。そこでぼくは言った、
『それはどういうことなのです』
すると彼女は、
『何でもないわかり易いことです』と言った、『さあ答えてごらんなさい。神はすべて幸福であり美しいものである、とあなたは主張するのではないでしょうか。それとも神々のうちには美しくも幸福でもないものがある、と言う勇気がありますか』
『とんでもない、ゼウスに誓って、私にはありません』
『ところで、よきものと美しいものを手に入れている者を、あなたは幸福であるとは言いませんか』
『もちろん言います』

D

『ところがエロースはといえば、よきもの美しいものを欠いているがゆえに、この欠いているものをこそ欲求するのだと、あなたは認めましたね』
『たしかに認めました』

『ところで、美しくよきものにすこしも恵まれないものが、どうして神でありえましょうか』
『いや金輪際ありえません。――すくなくともそう思われます』
『それならば、あなたもエロースを神と見なしていないということがわかるでしょう』

二三

『ではいったいエロースは何ですか』とぼくは尋ねた、『それは死すべきものなのでしょうか』
『とんでもない』
『それならば、何ですか、ほんとに』
『先に言われたものと同様、死すべきものと不死なるものとの中間にあるのです』
『ディオティマ、それはいったい何です』
『偉大な神霊(ダイモーン)ですよ、ソクラテス。そして神霊的なものはすべて神と死すべきものの中間にあるからです』

E

で、ぼくは言った、
『どんな働きを持つものなのです』
『神々へは人間からのものを、また人間へは神々からのものを伝達し送り届けます。つまり、人間からは祈願と犠牲とを、神々からはその命令とさらには犠牲の返しとを。そして、これら両者の真中にあって、その空隙を充たし、世界の万有が一つの結合体であるようにとしている者です。また、すべての卜占術にしても、さらには、

203 犠牲式、秘儀、呪禁、あらゆる予言と魔術――それらのものに携わる聖職者の術にしても、すべて事が運ぶのは、この、神霊を通してのことなのです。神は、人間と直接交るのではなく、神々における人間との交際と対話とは――相手の人間が目醒めているときでも、眠っている間でも――すべてこの者を通してなのです。そして、いま言ったような事柄における知者は神霊的な〔ダイモーンのような〕人間というのですが、それとは何か別のことで知者である場合には、それが何らかの技術に関するものであれ、あるいは手細工のことであれ、すべて世俗的な人間というわけなのです。じつにこれら神霊は数も多く、種類もありとあらゆるものがあります。そのなかの一員として、エロースもまたあるのです』

『ところで、その父親は誰ですか』とぼくは尋ねた『そして母親は』

B 『話せばなかなか長い話になるのですが』と彼女は答えた『しかしやはりこれからお聞かせしましょう。アプロディテが生れたとき、神々は祝宴を催したが、その中にはほかの神々とならんで、メティスの子ポロス(1)も加っておりました。ところが、神々がその祝宴を終えたころ、大御馳走のあるときの常として、ペニア(2)が物乞いにやって来て、戸口のそばにいました。さてポロスは神酒(ネクタル)に酔って、――というのは、まだ葡萄酒のなかったときのことだから――ゼウスの園に入り込み、酔いつぶれて眠ってしまいました。そこでペニアは自

1 ポロスは元来、道、逃げ道を意味したという。ここでは、事を成し遂げる方策、術策、資源、財源、豊富といった意味で用いられ、それが神格化されたもの。女はポロスと異り、困窮していて至福の者ではないから神ではありえないと言えよう。すなわち、エロースのうちにある非神的要素の源として考えられているもの、ということになる。

2 ペニアは「貧乏」を意味し、それを人格化したもの。彼

(203)
C 分が困窮しているから、ポロスの子種を得て子をもうけようと企らみ、彼のそばに臥してエロースを身籠ったのです。だからこそエロースはまたアプロディテに従い仕える者となったわけです。つまり、この女神生誕の祝宴のときに生を享け、同時にまた、生れつき美しいものを恋する者であり、しかもアプロディテそのものが美しいものだからです。さて、エロースはポロスとペニアの間の息子であるから、次のような定めとなりました。まず第一に、いつも貧しく、またたいていの人が考えるように華奢で美しい、というようなものでは決してありませ

D ん。かえって、こわばった身体で、干からびて薄汚なく、裸足で、宿無し者、いつも夜具なしで大地にごろ寝をし、大空の下、戸口や道ばたで横になるのです。それというのも、母の性を受けて、常に欠乏と同居する者だからです。しかし他面、父の血を受けて、父同様美しいものとよきものとを狙う者なのです。つまり、彼は勇気があり、勇往邁進し、懸命努力する者であって、手ごわい狩人、常に何らかの策略をあみ出す者、熱心に思慮分別を求めてこれに事欠かぬ者、生涯にわたり知を愛しつづけ、すぐれた魔術師、妖術師にしてソフィストだからで

E す。また本性、不死なる者としてあるのでも、死すべき者としてあるのでもなく、同じ日のうちに、事がうまく行くときには命の花を咲かせて生きるかとおもうと、またときには死んでいくこともある。が、父の性のゆえに、再び生き返る。しかしながら、手に入れるものはいつも手の間から漏れ落ちてしまう。だからエロースは決して困窮もしないが、また富みもしないのであって、さらには知と無知に関してもその中間にある者なのです。これはつまり、次のようなわけだからです。神々にあっては、知を愛することはなく、知者になろうと熱望することも

204 ない――なぜなら、現に知者であるから、――また神以外にも、知者であれば知を愛することはしない。しかし反面、無知蒙昧な者もまた知を愛さず、知者になろうと熱望することもない。つまり、この点こそは、無知の

始末の悪いゆえんなのです。自分が立派な人物でもなければ思慮ある者でもないのに、自分の目には申し分のない人間にうつる点がね。ともかく、自分は欠けたところのある人間だと思わない者は、欠けているとも思わないものを自分から欲求するということは決してありません』

『それなら、ディオティマ』とぼくは言った『いったい誰が知を愛する者なのです。知ある者も無知な者もそうでないとすれば』

B　『そのことなら』と彼女は答えた『もう子供にだってわかり切ったことではありませんか。いま言った両者の中間にある者がそれです。そしてその中にエロースもまた入るのです。さて、そのわけは言うまでもなくこうです。知は最も美しいものの一つであり、しかもエロースは美しいものに対する恋(エロース)です。したがって、エロースは必然的に知を愛する者であり、知を愛する者であるがゆえに、必然的に、知ある者と無知なる者との中間にある者です。そしてエロースの場合、その出生がまたしてもこのことの原因となっているのです。つまり、その父親は知恵あり方策に富む者ですが、母親は知恵なく困窮している者だからです。さて、親愛なるソクラテスよ、この神霊の本質というのは以上のごときものなのです。それに対して、あなたの考えたエロース像ですが、

C　あなたのそのうけとり方にはなにも驚くことはありません。あなたのことばから判断すると、あなたは恋される対象の方をエロースと考えて、恋するものをそれと考えなかったようです。思うにこのゆえに、あなたの目には、エロースがまったく美しいものと映じたのでしょう。なぜなら、恋される値打ちのあるものはまた、真に美しく、繊細、完全で、その至福はまさに羨望に価するというものですが、しかし恋する者の方はそれとは別の、私が説明したような性質の持主なのです』

二四

そこでぼくは言った、

『それはたしかにその通りですね、異国の方よ。あなたのお話はしごくもっともなものですからね。……では、エロースがそのようなものであるとすると、それは人間に対してどんな役に立つのですか』

D 『それですよ、ソクラテス』と彼女は答えた『それを次にあなたに教授してみましょう。さて、エロースはまことにいま言ったようなものであり、いま言ったような生れのものであるが、またあなたの言うように、美しいものに関わるものでもあるわけです。ところで誰か私たちにこう質問する者があるとしましょう。〝ソクラテスにディオティマよ、エロースが美しいものに関わるゆえんは何でしょうか。いや、こう言えば、もっとはっきりするでしょう。美しいものを恋する人は恋をしているわけだが、それは何を恋い求めてのことでしょうか〟とね』

で、ぼくは答えた、

『それ〔美しいもの〕が自分のものになることをです』

『しかしその答えは』と彼女は言った『さらに次のような問いを要求します。〝その、美しいものを手に入れる者には、何が授かるのでしょうか〟という問いをね』

『その質問に即答することは、もう私にはとてもできません』

とぼくは答えた。

E 『しかしそれは』と彼女は言った『誰かが言葉を取り換え、美しいものと言う代りに、よきものという言葉を

使い、こう尋ねる場合のようなものですよ。〃さあ、ソクラテス、よきものを恋する人は恋をしているわけですが、それは何を恋い求めてのことでしょうか〃とね』
『それが自分のものになることをです』
とぼくは答える。
『なおまた、よきものを手に入れるその人には、何が授かるのでしょうか』
『これなら、前よりも容易に答えられます』とぼくは答えた『幸福になる、ということです』
『つまり、幸福な人々は、よきものを所有することによって、幸福であるのですね』と彼女は言った『〃それにしても、幸福でありたいと思う者がそう望むのは、何のためなのか〃とその際質問を重ねる必要はもはやないのであって、あの答えは窮極に達しているように思われるのです』
『その通りです』
とぼくは答えた。
『ところで、この希望とこの恋とは万人に共通のものであって、すべての人はよきものを持ちたいと常に望むものである、と思いますか。それともあなたの意見ではどうです』
『あなたの言われる通りです。それは万人に共通のものです』
とぼくは言った。

B

『ではいったいなぜだろう、ソクラテス』と彼女は尋ねた『いやしくもすべての人がその同じものを、しかも常に、恋い求めているのなら、なぜわたしたちは、〃すべての人が恋をしている〃と言わないで、〃恋をしている

人もあるが、していない人もある〃と言うのでしょうか』
『私自身も不思議に思っているのです』
とぼくは言った。
『いや、不思議に思うことはありません。それはつまり、こうなのです』と彼女は話した『わたしたちは恋(エロース)のうちから一種類を抜き出し、それに全体の名前を当てて、恋(エロース)と名付け、そのほかのいろいろな恋には別の名前を使っているのです』
『例えばどのように』
とぼくは尋ねた。
『いってみればこんなぐあいです。あなたの知っているように、創作(ポイエーシス)というのは広い意味の言葉です。言う迄もなく、いかなるものであれ非存在から存在へ移行する場合その移行の原因はすべて、創作です。
C したがってまた、あらゆる技術に属する製作は創作であり、それに従事する工作者は創作者であるわけです』
『あなたの言われる通りです』
『しかし、それにもかかわらず』と彼女は続けた『ごぞんじのように、その人々は創作者と呼ばれないで、別の名前を持っています。そして創作全体のうちから一部分、すなわち、音楽と韻律に関する部分だけが別にされ、全体の名前で呼ばれているのです。つまり、これだけが創作と呼ばれ、本来の意味での創作全体のうち、この部分を持つ人々だけが創作家と呼ばれているのです』
『その通りです』

とぼくは答えた。

D 『ところで、恋(エロース)についてもまたそういった事情です。総じて言うならば、よきものと幸福であることへの欲望はすべて、あの〝最も力強く、まったく巧智にたけた恋[1]〟というわけです。しかし、金儲け(もう)の道、体育愛好の道、愛知の道というふうに、数多くある別の道でそれ〔恋〕に向う人々は、恋をしているとも恋をしている人とも呼ばれないのです。ところが、恋のうちのある一種類の道を進み一所懸命になる人々は、全体の名前を、つまり恋、恋している、恋している人、という名前を持つのです』

『あなたの言われるのは事実のようです』

とぼくは答えた。

E 『ところで、自分の半身を探し求める人々は恋している人々である、という一つの説がたしかに説かれています。しかし私の説によれば、恋の対象というものは、友よ、いやしくもそれが何らかの意味でよきものというのでなければ、半分でも全体でもないのです。実際、人々は自分の身体(からだ)の一部分が悪いと思えば、自分の足でも手でも切り取る気になりますからね。つまりわたしの思うのに、各人自分のものならありがたがるというものではないからです。——もっとも、よきものをば自分に所属するもの、自分のものと呼び、悪しきものをば自分と縁のないものと呼ぶならば、話は別ですが。——つまり人々の恋する対象は、よきもの以外の何物でもないからで

206 す。それとも、あなたには、それ以外のものと思われますか』

---

1 詩文からの引用であろうが、不明。

『いや、ゼウスに誓って、私にはそう思われません』
とぼくは答えた。
『では』と彼女が尋ねた『もしそうなら、人々がよきものを恋すると言うことは、そのままで単純明瞭なこと
なのでしょうか』
『そうです』
とぼくは答えた。
『でも、どうでしょうかね。それにはこう付け加えなければならないのではないでしょうか』と彼女は言った
『人々はさらに、よきものが自分のものであることを恋い求める、ということを』
『付け加えるべきですね』
『それではさらに、それが単に自分のものであるだけでなく、永遠に自分のものであることを恋い求める、と
いうことも』
『それも付け加えるべきです』
『すると総括して言えば』と彼女は続けた『恋（エロース）とは、よきものが永遠に自分のものであることを目
指すもの、というわけです』
『まったくあなたの言われる通りです』
とぼくは答えた。

二五

B

『それでは、一般に恋が常にそうしたものである場合』と彼女は言った『それをいかなる仕方で、またいかなる行為において追求すれば、その人の熱意と努力とは恋と呼ばれうるのでしょうか。その活動というのはまさに何でしょうか。あなたはそれを言うことができますか』

『しかしそれができたら』とぼくは言った、『ディオティマ、あなたを知恵の点で讃歎することはないでしょうし、またほかならぬそのことを教えていただこうとして、あなたのもとに通うこともないでしょう』

『では私からお話しましょう』と彼女は言った『つまりそれは、肉体的にも精神的にも美しいものの中において出産することです』

『あなたの言われることは、いったいどういうことなのか、それを察するには占いが必要です。わたしにはわかりません』

とぼくは答えた。

C

『では私がもっとはっきりお話しましょう』と彼女は言った『ソクラテス、すべての人は肉体的にも精神的にも妊娠(にんしん)して〔生むものを持って〕いるのです。(1) そしてある年齢に達すると、自然にわれわれの本性は産むことを熱

1 人間は、その肉体のみならず魂も受胎・妊娠・出産をするのであり、その原動力がエロースに貫かれた真理探求、真理認識である。ソクラテスは、そこでの自分の役割を、精神の子をみとる産婆の役になぞらえている(『テアイテトス』148E, 151D)。

望します。ところで産むのは、醜いものの中ではできないことで、美しいものの中でなければなりません。つまり、男女の交わりがひっきょう出産というわけだからです。そしてこの行為は神的なものであって、それは死すべきものである生物のうちに、不死なるものとして内在しているのです、この妊娠と出産とはね。ところがこれ

D らのものは、不調和なものの中で行われることは不可能なのです。そして、醜いものは神的なものすべてに不調和なものであり、美しいものはそれと調和したものです。だから、カロネ(1)が出産に対しては運命の女神(モイラ)として、また産土神(うぶすな)(エイレイテュイア)としてあるのです。このゆえに、身籠っている者が美しいものに近づくときには、その者の心はなごみ、上機嫌で、身心ともに伸び伸びし、そして分娩出産します。ところが醜いものの場合には、陰鬱になり悲しんで身を丸め、それに背を向け、縮こまって出産せず、胎児をかかえて難儀します。まさにそのことからして、妊娠しておなかがすでに大きくなった者にあっては、美しいものに恋い焦がれる想い

E は、たいへんなものなのです。それはつまり、美しいものがそれを手に入れた者を激しい痛みから解放してくれるからです。つまり恋は』と彼女は語り続けた『ソクラテス、あなたの考えるように、単に美しいものを目指すというものではないのです』

『だがそれならば、いったい何なのですか』

『美しいものの中での出産と分娩を目指すものなのです』

『なるほど、ではそういうことにしましょう』

とぼくは言った。

『いやまちがいなくその通りなのです』と彼女は答えた『では、いったいなぜ出産を目指すのでしょうか。そ

れは、死すべきものとしてこの世にあるものにとって、出産は永生不死のものだからです。しかも、よきものに加えて不死を欲求するということは、いままでに認められたことからして必然のことです。いやしくも恋の目指すものが、よきものを永遠に自分のものとして持つことであるならば。……以上の論からして、恋はまた必然的に不死を目指すものでもあるのです』

二六

さてディオティマは、恋の道について話をするたびに、以上のことを全部ぼくに教えてくれたものであるが、またあるとき尋ねて言うには、

『ソクラテス、何がこの恋と欲望との原因であると思いますか。それともあなたは気付いていないのですか。動物が出産の欲望に駆られるときには、地上を歩くものでも空を飛ぶものでも、皆どんなにすさまじい状態になるかということに。つまり、それらの動物はまず交合することに、次いで生れたものの養育にと、その心は病み恋をしている状態となるのです。そして子供のためには世にも無力の身をもって最強のものと戦うことをも厭わ

B

ず、そのために死ぬこともまた厭わないのです。しかも、子らを育て上げるために、すすんでわれとわが身を餓えに苛(さい)なみ、またそのほかどんなことでもするという有様です。こうしたことを言うのも、人間の場合ならば』と彼女は続けていった『考慮の上でそれらの行動に出る、と思う者もありましょう。しかし動物の場合に、上に

1 「美」を意味する普通名詞を神の名としたもの。

(207)
C 述べたような恋の状態になるのは、何が原因でしょうか。言うことができますか』
そこでぼくはまたしても、
『知りません』
と答えた。すると彼女は言った、
『それでは、そうしたことを知らなくていつかは恋の道の通になるだろうと、あなたは考えているのですか』
『いや、それだからこそ、ディオティマ、先程も言いましたように、あなたのところに来ているのです。自分が教師を必要とすることを知っていますから。さあ、いまのことやそのほかの、恋の道に関わるいろいろなことの原因をどうか私に言ってください』
『では』と彼女は応じた『わたしたちがたびたび認めてきたあのものを、恋はその本性上目指すのであると、
D もしあなたが信じるなら、訝(いぶか)るのはよしましょう。つまり今の〔動物の〕場合死すべきものの本性は、先と同じ理窟により、永遠に存在し不死であることをできる限りにおいて求めるものなのです。しかしそれは、この、出生という方法によってのみ可能なのです。なぜなら、それは古いものに代って新しいものを常に残していくからです。このように言うのは、じつに次のようなことがあるからです。動物の各個体が生存しそして同一のものであり続けると呼ばれる間、――たとえば、人は幼児から老人となるまで同一人と呼ばれます。まったくの話、その者は決して同じものを自分のうちに持っているのではないのに、しかも同一人と呼ばれますが、その実、髪でも
E 肉でも骨でも血でも、いや、身体(からだ)の全部において、常に若返っているとともに、他方では失うものもあるのです。しかも、それは肉体に関してだけのことではないのであって、魂に関してもまた、性向、人柄、意見、欲望、快

208

楽、苦痛、恐怖、これらはいずれも同一不変のものとして各人にあるのではなく、そのあるものは生じ、あるものは滅びるのです。しかしそれよりもはるかに奇異なのは、じつに知識といわれるものの場合です。つまり、わたしたちの内においてそのあるものは生じ、あるものは滅び、したがってわたしたちは知識に関しても決して同一不変の者ではないのですが、単にそれだけでなく、さらにそれらの知識のどれであれ一つ一つがまた同じ〔たえざる変化の〕状態にあるのです。つまり、復習するといわれる行為が知識に関わるのは、知識が逃げ出すものと考えられてのことなのです。なぜなら、忘却は知識が逃げ出すことであり、復習は、去って行く記憶の代りに新たな記憶を植え付けることによって、再びその知識を保全し、その結果それが同一の知識と思えるようにすることです。……まことにこの方法によって、死すべきものはすべて保全されるのです。つまり、神的なもののように

B

まったく同じものとして永遠にあるという仕方ではなく、古くなり去り行くものが、かつての自分と同じような別の新しいものを後に残していくという仕方です。この工夫によって、ソクラテス』と彼女は語り続けた『死すべきものは、肉体でもそのほか何でも、不死にあずかるのです。しかし不死なるものは別の仕方によってです。まあそんなわけだから、すべてのものが自分から生れ出たものを大事にしても、驚くことはないのです。なぜなら、この熱意と恋とがすべてのものに随伴しているのは、じつに不死のためだからです』

二七

ところで、ぼくはその話を聞くとびっくりして、

『なるほど。この上なき知者のディオティマよ、ほんとにそういうものなのですか』

(208)
C
と言った。するとを彼女はまるで蘊奥を極めたソフィストのように言うのだった、

『ソクラテス、ゆめ疑わぬよう、絶対それに相違なしです。それはこういうわけだからです。あなたがまた人間の名誉心に目を向けてみようとして、その際、わたしの言ったことについて考察することなく、しかもつぎの事実を顧みるならば、人間の名誉心のわけのわからなさに、あなたはびっくりすることでしょう。つまり、人間は有名な人となり、〝不滅の名声を永遠に打ち建てる〟(1)ことへの恋心のために、どんなに異常なほどの心理状態になるかということを。またそのためには、わが子のためにするよりも、なお一段と覚悟をかためてどんな危険をも冒し、金銭を費し、いかなる労苦にも服し、さらにはそのために命を捨てるということを。……その証拠には』と彼女は続けた『もし徳に関する不滅の想い出がわがものになるだろうと思わなかったら、――そして以下の人々の場合は、その想い出がわたしたちの胸の中に今も生きているのであるが――アルケスティスがアドメトスのために死んだり、アキレウスがパトロクロスのあとを追って死んだり、あるいは、あなたがたのところのコドゥロス王が子供らの王国のために、定命を待たずわれから命を投げ出したりすることができた(2)と思いますか。いやとてもできるものではありません』と彼女は語るのだった『事実は、思うに、不滅の徳と、いま言ったような輝かしい評判のために、人は皆どんなことでもするのです。しかも立派な人物であればあるほどそうなのです。なぜなら、人は不死なるものを恋い求めるからです。

D

E

ところで、肉体の上で身籠っている人々は、むしろ女性に向い、そしてその仕方で彼らは恋をしている者となっているのです。つまり、子を生むことによって、不死と想い出と幸福とを、彼らの考えるところでは、〝未来永劫にわたりて手に入れる〟といったやり方です。ところが魂の上で身籠っている人々は――というのは、肉体よ

209

りも魂のうちになおいっそう多く、魂が身籠り産むにふさわしいものを身籠っている人々がたしかにいるからです。それにしても、いったい何がそのふさわしいものでしょうか。知恵とそのほかのもろもろの徳です。——そしてこれらのものの産みの親としては、すべての詩人と、技工家のなかでも発明家と呼ばれている人々がおります。しかしその知恵の中でも、際立って最大最美のものは、あの、国と家とを治め斉えることに関する知恵です。そしてそれには節制と正義という名が付いているのです。(3)——ところで話を戻し、いま述べた知恵とかそのほかのもろもろの徳とかを、誰かが人並み以上の神的な資質の者ゆえに年若いうちから魂の面で身籠ってきて、いよいよその年齢がやって来たために、今やしきりに出産分娩したがる場合、思うにこの者もまた歩きまわって、出産の座となるべき美しいものを探し求めるのです。なぜなら、醜いものの中で生むことは決してないでしょうから。したがって、そういう者は身籠っているからして、醜い肉体よりも美しい肉体を悦ぶのであり、その上、美しく高貴で素性のよい魂に出会えば、この身心両面の美を合せ持ったものを悦ぶことはたいへんなものです。そし

B

1　もし誰かの詩からの引用とすれば、原詩のことは一切不明。あるいは、アガトン(197C)の向うを張って、ディオティマ自身が韻文調に言ったものかもしれない。直ぐ後の208Eの韻文調のものも同様であろう。

2　伝承によると、太古ドリア人がアテナイと戦ったとき、もしアテナイ王を殺さなければ勝利を得るだろうという神託を受けた。アテナイ王コドゥロスはその予言を知って、貧しい樵夫に身をやつし、鉈(なた)を持って敵陣の柵のところに向った。すると二人の敵兵が立ち向って来た。王は一人を斃したが、他の者に討たれて望み通り死んだという。

3　『国家』(IV. 427 Dsqq.)において、理想国の全構成員が持つべき徳としての節制と正義について、詳しく述べられている(なお『メノン』73A～B参照)。それはまた、「通俗的な社会的道徳」とも呼ばれているものである(『パイドン』82A)。

4　209B1　写本通り θεῖος と読む。

(209)
C てこの者に対しては、徳に関する話とか、よき人とはいかなる人間であるべきか、また平生何に励むべきか、ということについてすぐに言葉がいくらでも出て来て、彼を〔立派に〕教育しようと試みるのです。思うに、そういう者は美しい者に触れその者と交るとき、以前から身籠っていたものを出産し、そばにいても離れても彼のことを忘れず、共に相携えて生れたものを育て上げます。ですから、こういう人々は互いに対して、現身(うつしみ)の子供による繋(つな)がりよりもはるかに偉大な繋がりとしっかりした愛情とを持つことになります。それは、より美しくより不

D 死なる子供を共有しているからです。そして人は誰でも人間の子供を持つよりは、このような子供を持つ方を歓迎するでしょう。そして、ホメロスやヘシオドスや、そのほかのすぐれた詩人たちを望み見て、そのような子供を彼ら自身のあとに残していることに、この人たちを羨むことでしょう。つまりその子供というのは、それ自身不死なる名声と想い出とに価するものであるがゆえに、これらのものをかの詩人たちに付与しているのです。またお望みなら、リュクルゴス(1)に対してであるが、彼がラケダイモンの、そして言うなれば全ヘラス(ギリシア)の救い主として、そのような子供をラケダイモンの地に残したことを羨しく思うでしょう。さらにソロンもまた法

E 律を生み出したために、あなたがたのところで尊敬の的となっておりますし、その他ヘラスでもヘラス以外の土地でも至る所で、いろいろな人が多くの偉業を顕現し、ありとあらゆる徳を生み出しました。そしてこれらの人人には、そのような子供ゆえに、今までに神殿がたくさん建てられてきましたが、人間としての子供のゆえにそうなった者は、未だ一人もいないのです。

二八

さてこれまでの恋の道は、ソクラテス、おそらくあなたでもその秘儀を受けることができるでしょう。しかし、210 見神に窮まる最奥の秘儀(2)――これは、もし人が正しく跡付けて行くならば、今まで述べられてきたことのじつに窮極目的となるものなのですが――この秘儀をあなたが受ける能力があるかどうか、私には何ともわかりません。が、ともかく、私はこれからその話をしましょう。そして熱意に欠けることは絶対ないようにするつもりです。で、あなたは、できたらあとについて来るよう、ひとつやってごらんなさい』と彼女は言うのだった。

『さて』と彼女は語っていった『このことへと正しい進み方をする者は、未だ年若いうちに、まず手始めに美しい肉体に向う必要があります。そして導き手の導き方が正しい場合には、最初一つの肉体を恋い求め、ここで B 美しい言論を生み出さなければなりません。しかしそれに次いで、どの肉体における美も他の肉体における美と兄弟関係にあるということ、また容姿における美を追求しなければならないとすれば、すべての肉体における美を同じ一つのものであると考えることをしないのは、たいへん愚かしいことであるということ、これらをその者は理解しなければなりません。このことを納得した以上は、美しい肉体全部を恋する者となり、一つのものに対する恋のあの激しさを蔑すみ軽視して弛めなければなりません。しかしその次には、魂のうちにある美を、肉体 C のうちにある美よりも貴重なものと見なし、そのために、たとえ肉体の花の輝きに乏しくても、魂の点で立派な

1 スパルタの国制の礎を置いた伝説的人物。ヘロドトス『歴史』第一巻(六五)を参照。なお、彼にまつわるいろいろな伝承が、プルタルコス『英雄伝』の「リュクルゴス」の項に集められている。

2 最奥の秘儀は、前段階的な種々の浄めの儀式等を経た者が許されて神殿の内陣に入り、そこで神像に対坐し見神の状態になる最終儀式である。詳しくはそれがさらに五段階に分けられていたという(『パイドロス』250C参照)。

者がいるならば、満足してその者を恋しその者のために心配し、そして若者たちをよりよくするそのような言論を生み出し探し求めるようにならなければなりません。つまり、ここでもまた、人間の営みや掟に内在する美を眺めて、それらがすべて互いに同類であることをどうしても観取せざるをえなくなるためなのです。そして、このことは、もともと肉体に関する美を些少なものと見なすようになるためのものです。ところで人間の営みの次には、もろもろの知識へと彼を導いて行かなければなりません。その目的とするところは、このたびもまた当

D 者がもろもろの知識の美を観取し、その眺める美もいまや広大な領域にわたるものとなって、もはや下僕のように、一人の少年の美とか、一人の大人の美、あるいは一つの営みの美というように、一つのもののもとにある美をありがたがってそれに隷属して、眼界狭小な人間としてあることのないようにということなのです。それどころか、美の大海原に向い、それを観想し、惜しみなく豊かに知を愛し求めながら、美しく壮大な言論や思想を数多く生み出し、ついには、そこで力を与えられ生長して、次のような美を対象とするごとき唯一のある知識を観

E 取するようになるためなのです。ともあれ、どうかできるだけ精神を集中するようやってみてください』と彼女は言った。

二九

『さて、いろいろの美を順序を追って正しく観ながら、恋の道をここまで教え導かれて来た者は、今やその恋の道の窮極目標に面して、突如として、本性驚歎すべきある美を観得することでしょう。これこそ、ソクラテスよ、じつにそれまでの全努力の目的となっているところのかの
もののなのです。すなわち、それはまず第一に、永

遠に存在して生成も消滅もせず、増大も減少もしないものです。次に、ある面では美しいが他の面では醜いというものではなく、ある時には美しいが他の時には醜いというのでも、ある関係では美しいが他の関係では醜いというのでもなく、またある人々にとっては美しいが他の人々にとっては醜いというように、ある所では美しいが他の所では醜い、というものでもないのです。さらにまた、その美は見る者に、何か顔のような恰好をして現れるものでなく、また手や、そのほか身体(からだ)に属するいかなる部分の形をとって現れることもないでしょう。それに、何かある言論や知識の形で現れることもなく、またどこかほかの何かのうちに、例えば動物とか大地とか天空とか、その他何ものかのうちにあるものとして現れることもないでしょう。かえってそれ自身、それ自身だけでそれ自身とともに、単一な形相をもつものとして永遠にあるのです。ところがそれ以外の美しいものはすべて、いま述べたあの至上の美を次のようなある仕方で分ち持っているのです。すなわち、これらほかの美しいものが生成し消滅しても、かの美は決して大きくなったり小さくなったりせず、いかなる影響も外から受けないという仕方です。

B

したがって、ひとが、自分の正しい少年愛のおかげで、この地上のもろもろの美から上昇して行って、かの美を観じ始めるときには、その者はほとんど窮極最奥のものに達したことになるでしょう。なぜならば、じつにそれが、自分で進むなり他人に導かれるなりして、恋の道を進む正しい進み方だからです。つまり、地上のもろもろの美しいものから出発して、絶えずかの美しいものを目的として上昇して行くのですが、その場合ちょうど階段を使うように、一つの美しい肉体から二つの美しい肉体へ、二つの美しい肉体からすべての美しい肉体へ、そして美しい肉体から美しいかずかずの人間の営みへ、人間の営みからもろもろの美しい学問へと登って行き、最終的にはそのもろもろの学問から、ほかならぬかの美そのものを対象とするところのかの学問に行き着い

C

て、まさに美であるそのものを遂に知るに至るというわけなのです』とこのマンティネイアから来ている異国の(1)

D 婦人は語るのだった『親愛なソクラテス、いやしくも人生のどこかにあるとするならば、まさに此処においてこそ、その生活が人間にとって生きるに価するものとなるのです。なぜなら、その者は美そのものを観ているからです。ひとたびあなたがこの美を見るならば、それは黄金や衣裳の比ではなく、世の美少年美青年の比でもないと思われるでしょう。現在のあなたは、その青少年たちを見て有頂天となり、またあなただけでなくほかの多くの人々も、もし自分の愛する少年を見ながら絶えずその者といっしょにいるのであるならば、飲食も、何とかできるものならば、摂らずにただただ彼を眺め彼といっしょにいたいものだ、という有様ですけれどもね』

E 『それでは』と彼女は続けた『いったいどういうことになるとわたしたちは考えるでしょうか――もし誰かが美そのものを純粋清浄無雑の姿で見て、それを人間の肉や色や、そのほか数多くの死滅すべきつまらぬものにまみれた姿においてではなく、かえってその神的な美そのものを単一の形相をもった姿において観るということが、

212 誰かに起る場合には。……人がかの美の方を眺めやり、用うべき本来の器官をもってかの美を観、それと共にいるとき、そもそもその生活がつまらぬものになると思いますか。それともあなたは考えてみないのですか』と彼女は続けた『ここにおいてのみ、すなわち、かの美を見るに必要な器官をもってそれを見ているこのときにのみ、次のようなことが起るであろうということを。それは、彼の手に触れているものが徳の幻像ではなくて真の徳であるからして、その生むものも徳の幻像でなく真の徳であるということを。さらにその者は、真の徳を生みそれを育てるがゆえに、神に愛される者となり、またいやしくも人間のうち誰か不死となることができるならば、まさにその者こそ不死の者となりうるのだということを』

B じつに以上のことを、パイドロスならびにほかの諸君、ディオティマが話したのだ。そしてぼくは、それをもっともだと思った。で、もっともなことと思ったので、ほかの人々にも説いて、人間の本性にとってこの宝物を得るための助力者として、エロースにまさるものを人は手易く手に入れることはできまい、ということを説得しようとしているのだ。じつにこういうわけで、ぼくとしては、万人がエロースを崇むべきことを主張し、またぼく自身恋の道を尊び、際立ってその修業に励み、それを他の人々にも勧告し、そして現在もこれからも永久に、ぼくの力の及ぶかぎりエロースの力と勇気とを讃えるのだ。

C さて以上の話が、パイドロス、お望みなら、エロースへの讃美として話されたのだと考えてくれたまえ。といっても、異存があれば、君の好む呼び名なり呼び方なりで、それを呼んで貰ってけっこうだ」

三〇

ところで、以上のことをソクラテスが話し了えると、ほかの人々は賞讃したが、アリストパネスは何か言おうとした。それは、ソクラテスが例の説について話したときに彼に言及したからである。(2) ところが突然表玄関の戸が叩かれて、まるで乱痴気騒ぎの酔いどれどもの立てるような騒々しい大きな音をそれは響かせた。その上、笛吹き女の笛の音(3)も聞えてきた。そこでアガトンは召使たちに、

1 ロバン(ビュデ版)に従う。すなわち、C7 の μαθήματα の次は καί でなく ἔστ᾽ ἄν とし、次行の τελευτήσῃ は写本通りそのまま読む。

2 205D～Eで、恋する人は己が半身を求めるというアリストパネス説に、ソクラテスが反駁したが、それを指す。

3 「笛の音」の訳は、シュタルバウム、ベリーの解釈に由る。

(212)
D
「おい、おまえたち、見てきてくれないか。……そしてもし誰か親しい知り合いの方なら、お連れするがよい。だがそうでなかったら、ぼくらはいま飲んでいるのではなく、もう寝ようとしているところだと、こう申し上げるのだぞ」
と言った。
するとまもなく中庭で、アルキビアデスの声が聞えてきた。彼はたいへんな酩酊で、大きな声で叫び、アガトンはどこにいるかと尋ね、アガトンのところに連れて行けと命じていた。するとあの笛吹き女と、そのほか彼の従者のうちの幾人かが、彼を抱えながら一同のところへ連れて来た。彼はきづたとすみれをぎっしり編んだ花冠を戴き、非常にたくさんのリボンを頭につけた姿で、部屋の戸口のところに立ち止まり、そしてこう言った、
E
「諸君、今晩は。たいへんな酔っぱらいを一人飲み仲間に入れてくれるかね。それとも、リボンをアガトンの頭に結び、ぼくらがやって来たその目的だけを果して退散しようか。つまりぼくはだね」と彼は言った「昨日は来られなかったのだ。しかしいま、頭にこれらのリボンをつけて、やって来たわけだ。それをぼくの頭から取って、言うなれば才知容姿第一等の人物の頭に結ぼうと思ってね。いったい君らは、ぼくを酔っているからといってあざ笑おうというのだろうか。だがこのぼくには、たとえ君らが笑ってもよくわかっているのだぞ、ぼくの言うことは本当だということがね。ま、それはともかく、さあ即答してくれ。今の条件でぼくは中に入っていいのか、それともいけないのか。君らはいっしょに飲むのかね。それとも飲まないのか」
213
すると、全部の者が歓声を挙げて、彼に入って来て横になるように勧めた。で、アガトンは彼を招じ入れた。彼は例の連中に連れられてやって来たが、アガトンの頭に結ぼうとして歩きながらリボンを解き、それを目の前

B に掲げていたので、ソクラテスの姿が目に入らず、アガトンの隣でソクラテスとの間に腰をおろした。これは、アルキビアデスを坐らせようとソクラテスが身を引いたからだ。[(1)] アルキビアデスはアガトンのそばに腰をおろして彼に挨拶し、その頭にリボンを結んでやった。するとアガトンが召使たちに命じて言った、

「さあ、おまえたち、アルキビアデスの履物を脱がせてあげなさい。この寝椅子の三番目の人として横になって貰うためにね」

「そうだ、そう願いたいね」とアルキビアデスは言った「だが誰なのか、ここにいるぼくらの三人目の飲み仲間とは」

そう言いながら振返ると、ソクラテスの姿が目にとまった。その姿を見たので、彼は躍り上って言った、

「おお、ヘラクレスよ、[(2)] これはどうしたことだ。そこにいるのはソクラテスなのか。またしてもぼくを待ち伏

C せしてそこにいたのだね。今までも、ぼくからすればおよそいそうもないと思われる所に、あなたはいつも突然現れたが、今度もその流儀でね。……ところで今は、なぜここに来ているのです。その上、なぜこの席に横になっているのです。というのも、あなたは、アリストパネスやそのほかの滑稽な人とか滑稽でありたいと思う者のそばにはいないで、逆にこの家の中で一番容姿の美しい人のそばに横になるように、策略をめぐらしたのだからね」

1 B2 καθίζειν と写本通り読む。
2 困惑したため、強者ヘラクレスに助けを求めたわけである。

するとソクラテスが言った、

「アガトン、君はぼくを庇(かば)ってくれるのかどうか、考えてくれないか。ぼくにとっては、この男への恋は容易ならんことになってしまったのだから。それというのも、ぼくが彼を恋するようになったあの時以来、ぼくはもう誰一人美しい者には目をやることも話し合うこともできないのだ。そんなことをしようものなら、この男はぼくをそねみねたんで呆れかえるような振舞いに出、悪態をつき、手を出さずにいるのもやっとという有様だ。だから、今もまた何かしでかさないよう見張ってほしいのだ。いや、それよりもぼくたちを仲直りさせてくれたまえ。でなかったら、もしこの男が乱暴しようとしたら、ぼくを庇ってくれないか。恋する者に対してこの男の懐く愛情と狂気には、ぼくはまったく身震いしているのだからね」

D

「いや、ぼくとあなたに和解はないですぞ」とアルキビアデスが言った「しかしそのことについては、また後であなたに仇を討つことにしよう。だが今は、アガトン、リボンを少しくれないか。この人のこの驚歎すべき頭にもリボンを結ぼうと思うから。そして、君の頭にはリボンを結んでおきながら、君のように一昨日だけでなく、いつでもことばの世界で皆に打勝っているこの人の、その頭にはリボンを結び付けなかったといって、この人から文句を言われないためにね」

E

こう言いながら、彼はリボンを幾本か取ってソクラテスの頭に結び、それから横になった。

三一

で、横になると彼はこう言った。

「さあ始めよう、諸君。見かけるところ、君らは素面(しらふ)のようだからね。絶対諸君をこのままに許しておくことはできぬ。飲むべしだ。このことはすでにぼくらによって同意されたことだからね。ところで、君らが充分に飲むまで、このぼくを酒盛りの座長に選ぶこととする。さあ、アガトン、何か大盃があれば、それを持って来させてくれ。……いやいや、そんなことはしなくてもよい。それよりも、おいおまえ、あそこの冷し鉢を持って来い」

214
と彼は、それが八コテュレー[1]以上入るのをみて、この家の召使に命じた。彼はこの鉢になみなみと注がせると、まず自分が飲み干し、それからソクラテスに注ぐように命じ、そして同時にこう言った、

「ソクラテスに対しては、諸君、小細工をぼくが弄しても、何の足しにもならないのだ。この人は、人から飲めと言われるだけ飲み干しながら、しかも酔うようなおそれはさらさらないのだからね」

そこで召使の少年が酒を注ぐと、ソクラテスはそれを飲んだ。するとエリュクシマコスが、「アルキビアデス、

B
ぼくらの今のやり方は、いったいどういうものなのだろうね。このように酒盃を手にして、何一つ話もせず歌もうたわずという有様で、それこそ喉の乾いた連中よろしくただ飲もうというのかね」

と言った。そこでアルキビアデスが言うには、

「おお、エリュクシマコス、この上なく思慮深く立派な人を父に持つ世にも立派な御仁よ、さあ、御挨拶申し上げるよ」

1　一コテュレーは〇・二七リットル。なお、冷し鉢とは、混合葡萄酒を早く冷やすために用いられた鉢といわれる。

「うん、ぼくからもね……」とエリュクシマコスが答えた「それにしても、ぼくたちはどうしたものだろうか」

「君の命じることなら何でもだよ。君の言うことには人は従わなければならないからね。なぜなら、医者一人にて多くの者に匹敵すればなり(1)だ。だから君の望む処方を示すがいい」

「では聞きたまえ」とエリュクシマコスが言った「ぼくらは、君がここに入って来る前に、次のような取決め

C

をしたのだ。一人一人左から右へと順番に、エロースについてできる限り美しい話をしてエロースを讃美しなければならぬ、とね。ところでぼくら、君以外の者はもう全部話をしてしまったのだ。ところが君は、まだ話をしていないし、それにもう酒も飲み干してしまったのだから、今度は話をして然るべきだ。で、話をしたら、君の望むことを何なりとソクラテスに課し、ソクラテスはまた右にいる者に課するというふうにし、以下ほかの者もそのようにしていきたまえ」

「確かに、エリュクシマコス」とアルキビアデスが言った「君の言うことは結構なことだ。だが酔っている者を素面(しらふ)の連中の話と較べるのは、公平を欠くのではなかろうか。それにまた、君はおめでたいよ。ソクラテスが

D

今しがた言ったことを君は何か信じているのだろうか。それとも、事実はすべて彼の言ったこととは正反対なのをごぞんじか。実際の話、もしぼくがこの人のいるところで誰かを——それが神であろうと、あるいはこの人とは別の人間であろうと——褒めようものなら、この人はぼくに手をかけずにはいないだろうよ」

「こら、黙らないか」

とソクラテスが言った。
「いや、ポセイドンに誓って、(2) いま言ったことに反対しないで欲しい」とアルキビアデスは応じた「ぼくはあなたのいるところで、ほかの者を一人だって褒めはしないだろうからね」
「よしよし、そうしたければするがよい。ソクラテスを褒めなさい」
とエリュクシマコスが言う。
E 「え、何だって？」とアルキビアデスは尋ねた「エリュクシマコス、そうしなければならないと思われるって？　君らの目の前で、この人に刃向って仇を取らねばならぬというのか」
「やれやれこの男は！」とソクラテスが言った「どうするつもりなのか。もの笑いの種にするためぼくを褒めようというのか。それとも何をしようというのか」
「本当のことを言おうというのだ。それをあなたは許すかどうか、さあ考えてくれ」
「いやもちろん本当のことなら」とソクラテスは答えた「話すのをぼくは許すし、それどころか求めもするよ」
「では早速これから話そう」とアルキビアデスは言った「ところで、なおこうして貰いたい。もしぼくが何か本当でないことを言ったら、話の途中、その気があれば、ぼくを引止めてほしい。そしてぼくの言うそれが嘘で

1 『イリアス』第一一巻五一四行。
2 この、プラトンには珍らしい誓いがここで用いられた理由として、次のことを挙げる解釈がある。まず、ポセイドンはアテナイの古い貴族社会の守護神であったこと。第二に、ポセイドンという名前を、酒盛り(ポシス)を与える者というふうに分解し、酔っている今のアルキビアデスが呼びかけるのに相応しい、と考えたであろうこと。

あることを言ってくれ。ぼくにはわざと嘘をつくつもりは毛頭ないのだから。だがそうは言っても、ぼくが想い出すままにあれこれ順序もなく言ったとしても、決してびっくりしないでほしい。あなたの風変りな性質を順序を追ってよどみなく算えあげることは、こんな状態になっている者には、決して手易いことではないからね。

三二

ところでソクラテスを賞讃するのに、諸君、次のような仕方でぼくはやってみようと思うのだ。つまり、比喩による方法だ。すると、この人はおそらくそれを、ますます滑稽なものにするためだと思うだろう。しかし、そ B の比喩は真実のためのものであって、笑うためのものではないのだ。さて、ぼくに言わせれば、この人は彫像屋の店頭に置かれているあのシレノス(1)の像にこの上なく似ている。その像というのは、竪笛とか横笛を持った姿に工芸家が細工したものであって、それを両方に開くと、内部に神々の像を蔵しているさまが現れるというものなのだ。さらにまたぼくは主張する、この人はサテュロスのマルシュアス(2)に似ていると。ところで少くとも容姿の点で、あなたがそうしたものに似ていることは、ソクラテス、あなた自身でもおそらく反対することはできないだろう。が、それ以外の点でも似ていることを、次にお聞かせしよう。……あなたは人を愚弄する人間だ。それとも違いますか。というのも、もしあなたが認めなければ、証人を出そうと思うからだ。だが、笛吹きではないぞ——ですって？ いやいや、あのマルシュアスよりもずっと素晴らしい笛吹きだ。マルシュアスの方はといえ C ば、彼は楽器を使いながら口から出る力によって人々を魅惑したのであり、今日でもなお、彼の曲を吹く者はそうなのだ。——つまり、オリュンポス(3)の吹いた曲は、ぼくに言わせれば、マルシュアスの作であって、マルシュ

アスが教えたのだから。――だから、彼の曲だけは、吹奏する者が上手な笛吹きだろうと下手な笛吹き女だろうと、つねに聞く者を恍惚の想いに誘い、また曲自身が神的なものであるから、神と秘儀を求めている人々が誰であるかをそれは明らかにするのだ。ところで、あなたが彼と違うのは、このことをするのに、楽器を使わずにただのはだかの言葉でするというこの点だけなのだ。ともかくぼくたちにとって、誰かほかの者が――それが非常にすぐれた雄弁家であっても――ほかの話をするのを聞く場合には、いわば気に留める者は誰もいないといっていいくらいだ。ところが、あなたが話すのをじかに聞くときとか、あるいはあなたの話をほかの人が伝えるのを聞くときには、この場合その話し手がひどく下手でも、ぼくらは、女、男、少年の区別なく、みな驚歎し、それに魅入られてしまうのだからね。

D

諸君、まったくのところぼくは、もしひどく酔っているとみられることにならなければ、この人の話によってぼく自身がどんな目にあってきたか、そして今もなおあっているか、誓いを立ててそれを諸君に語るのだがね。

1　次出のサテュロス同様山野の精で、馬の耳を持ち低い鼻、毛むくじゃらの醜い老人とされた。じつはたいへんな知恵者であったが、それをなかなか外に現わさなかったという。早くから、サテュロスと共に、ディオニュソスの従者と見なされるようになり、酒に酔い暴れ廻る者とされた。

2　サテュロス(複数)も前注にあるごとく山野の精で、しばしば両者は混同された。しかし、一応シレノスが老人として画かれたのに対し、サテュロスは山羊の特徴を持つ若者としてのイメジを与えられた。ディオニュソスの従者であり、酔って陽気に騒ぐとされた。このサテュロスの中で(一説には、シレノスの中という)最も有名なのがマルシュアス(本来は、小アジアのプリュギアで河神として崇拝された)であり、笛の名手ということになっている。アポロンと琴で技を競って敗れ、生皮を剝がれたという。

3　通常マルシュアスの愛弟子と考えられているが、また別伝では彼の父と見なされている。小アジアのミュシアを故里とする笛の名手で、ギリシアにおける笛の曲の父とされていた。

(215) E

……実際、この人の話を聞くごとに、それによって、狂躁的なコリュバスたち(1)よりもはるかに激しくぼくの心臓は動悸(どうき)を打ち涙は流れ出るのだ。そしてこれと同じ経験をする人間を、ぼくはほかにもたくさん見ているのだ。ところが、ペリクレスやほかのすぐれた雄弁家たちの話すのを聞くときには、上手に話すとは思うが、いま言ったような目には少しもあわなかったし、ぼくの心が掻き乱されてしまうということもなく、また、まるで奴隷の 216 状態になったとばかりにそれに苛立つこともなかった。ところが、ここにいるこのマルシュアスからはといえば、今のぼくのような有様では生きる価値もないと思われるような、そういう気持にさせられることがじつにたびたびだった。……それにしても、これらのことを、ソクラテス、あなたは本当のことではないなどと言いはしないでしょうな。……ところで、ぼくにはよくわかっているが、今でも、もしぼくがこの人に耳を藉(か)すつもりになれば、それに打勝つことはできず、前と同じ目にあうことになるだろう。なぜなら、この人は、いやおうなくぼくにこう認めさせるからな。つまり、ぼく自身まだ欠けるところの多い身でありながら、自分をないがしろにしてアテナイの国事をなしている、とね。だからぼくは、まるでセイレンたち(2)から離れるように、耳をふさいで強引 B に逃げて行くのだ。そのままそこで、この人のそばに坐って年寄りになってはたいへんだからね。それにまたぼくは、人々の中でもこの人にだけは、おそらく誰もぼくのうちにあるとは思うまいことを、つまり、誰に対してであれともかく恥じるということを、経験したのだ。ぼくはこの人にだけは恥ずかしいという気持になるのだよ。つまりぼくには、この人の命じることを、する必要はないと言って反駁することはできないが、かといって、この人から離れると、大衆から与えられる名誉に負けてしまうということを、ぼくは自覚しているからだ。だからこの人から逃げ出し退散するのだが、しかもその姿を見ると、先にこの人に強いられて認めたことが甦(よみがえ)り、その

C てまえ恥かしく思うのだ。それでぼくは、この人がこの世にいるのを見ないことになったらどんなにか嬉しいだろうと思うことがしばしばなのだ。とは言え、逆に、もしそんなことが事実となったら、ぼくはそれよりはるかに大きな苦しみを感じるだろうということを、よく知っている。だから、この男をどう取扱ったらいいものか、ぼくにはわからないのだ。

三三

ところで笛の曲によっては、ぼくもほかの多くの連中もここにいるこのサテュロスのために、以上のような目にあったのだ。しかしほかにもなお、ぼくが譬えたものにこの人がどんなに似ているか、またこの人の持っている力がどんなに驚くべきものか、それを諸君に聞いてもらいたいのだ。ほんとにいいかね、君らは誰一人この人D を知ってはいないのだからな。だが、このぼくがそれをはっきりさせてやろう。何といっても、いったん始めたからにはね。さて諸君も知っているように、ソクラテスは美しい人たちと恋に陥り易く、いつも彼らのことで一所懸命になり夢中になっている。その上また、彼の外見(そとみ)からしてはすべてに無知で何一つ知ってはいない。……

1 小アジアのプリュギアに由来する女神キュベレに仕える神官たち。彼らは笛や太鼓を鳴らしての狂躁的な音楽と猥雑狂乱の舞踏によって、一種神憑りの陶酔的状態になったという。

2 上半身は女子、下半身は鳥という姿の怪物たち。二人とも三人とも四人ともいわれる。その素晴らしい歌声でもって聞く者を魅惑し、ほかのことをすべて忘れさせてしまうほどであったと伝えられる。『オデュッセイア』第一二巻三九行以下では、キルケの忠告に従ってオデュッセウスは部下の耳に蠟を詰め、彼らを船の帆柱に縛りつけた上で彼女らのいる島を通り過ぎたことになっている。

E これは、シレノス的ではないか。(1) 然り、断然そうだ。なぜなら、それをこの人は、彫まれたシレノスのように外側にまとっているからだ。ところが内部においては、それが開かれたときに、どれほどの思慮に満ち満ちていると君らは思うかね、飲み仲間諸君よ。いいか、この人にとっては、誰かが美しいかどうかなどぜんぜん問題にならず、誰一人思ってもみないであろうほどにそんなことは軽蔑しているのだ。このことは、また誰かが金持かとか、あるいはそうした世間からもてはやされる名誉なものをほかに何か持っているかとか、そういうことについても同様である。そして、それらの持ち物をすべて何の価値もないものと思い、さらにわれわれをも無に等しいつまらぬものと考えているのだ。——こうぼくはあえて君らに言う。——そして、一生を通じ人々に対して空とぼけ巫山戯(ふざけ)通しているのだ。しかしこの人が真面目になり、そしてその扉が開かれるとき、その内部の神像を誰か見たものがあるかどうか、ぼくは知らない。だがぼくは、すでに以前見たことがあるのだ。そしてそれらの像が非常に神々しく、金色燦然として、世にも美しく、讃歎すべきものに見えたので、これを要するに、ソクラテスの命じることは何でもしなければならない、というふうに思われたほどだ。

217 ところでぼくは、この人がぼくの青春の美しさに本気で熱中していると考えたとき、これはとんだめっけものであり、ぼくの素晴らしい幸運だと考えた。なぜなら、ソクラテスの意を迎えたら、彼の知っていることは何でも聞けると思ったからだ。何といっても、ぼくは自分の青春の美しさにびっくりするほどうぬぼれていたからね。そこで、それらのことを頭に入れた上で、それまでは、ぼくは従者を連れずに独りでこの人といっしょになることはついぞなかったが、そのときは従者を帰らせ、ぼく独りでこの人といっしょになった。——というのは、君

B らには本当のことを残るところなく話さなければならないからね。さあ諸君、よく注意して聞いてくれたまえ。

そして、もしぼくが嘘を言ったら、ソクラテス、あなたから文句をつけてほしいのだ。——さて諸君、ぼくは一対一で会ったのだ。そして、ぼくは思った。恋をしている者がその恋人と二人だけで差し向いになると話し合うようなことを、この人も直ぐと話し合うだろうとね。そう思ってぼくは悦んだ。ところがそうしたことは全然起らなかった。かえっていつもと同じ調子でぼくと話し合い、共に一日をすごした上で、去って行くのがつねだった。

C　その後、いっしょにからだを鍛えようと誘っていっしょにやったものだ。何らかそこでかたをつけようと思ってね。そういうわけで、誰もいないところでよくこの人はぼくといっしょにからだを鍛えて組み打ちをしたものだ。そして、……このあと何を言う必要があるというのか。つまり、何一つ得るところはなかったのだから。ところで、このような仕方ではぜんぜん成果が挙らなかったので、ぼくは思った。——この人にはしゃにむに突進しなければならないのだ。それにまた、何といってもすでに手掛けてしまったことだから、それから手を引いてはならないし、むしろ今となっては、事の何たるかを見届けなければならないぞと。そこで、ぼくはいっしょに食事しようとこの人を誘った。まさに、恋をしている者がその恋人に策を弄するあの手口そのままである。そして、

D　このことも直ぐには聞き入れてくれなかったが、それでもしばらくしてぼくの言うことに従った。しかし最初来たときは、食事を終えるとこの人は帰りたいと言った。で、そのときは、ぼくも恥ずかしかったので、帰ってもらったのだ。ところがぼくは再び策を弄して、食事を済ましたあと、夜中までずっと話し合い、そしてこの人が

1　句読点の打ち方バーネットと異り、ベッカー、シュタルバウム、ベリー、ロバン等の諸家に従い、D4 の οἶδε ὡς の間にコンマを、αὐτοῦ の後にピリオドを付す。

帰ろうとしたとき、時間の遅いことを口実にして、むりやり留まらせた。そこで、この人はぼくと隣合せの、この人が食事のとき使った寝椅子でやすんだ。しかもその部屋には、ぼくらのほかには誰も寝なかったのだ。……

E ところでまったくのところ、この話もここまでは誰に聞かせても差支えあるまい。ところがこれから先のことは、もしつぎのような事情がなかったら、君らはぼくの口からそれを聞くことはできなかったろう。第一に、諺にもあるように、[1]酒というものが、――子供もそうだとするかどうかはしばらくおき――いつも本当のことを言うものだ、というのでなければ。第二に、ソクラテス讃美にとりかかっておきながら、この人の気位の高い振舞いを口にせぬまま闇に葬るのは正しくないことだと、こうぼくに思われたのでなければね。そこへもってきてさらに、蝮（まむし）に嚙まれた者の状態にぼくもとりつかれているのだ。つまり人々の話によると、そういう目にあった者は、それがどんなものであったか、それを嚙まれた者以外には話そうとはしないそうだ。それというのも、自分が痛さのあまり外聞もなくありとあらゆることをしたり言ったりしても、この人たちだけは、それをわかってくれ許し

218 てくれるだろうと考えるからだ。ところがぼくは、それよりももっと激しいやつに、それも、人間の嚙まれる場所でいちばん痛い所を嚙まれたのだ。――というのは、心というか、魂というか、あるいはどんな名前で呼ぶにしろ、ともかくそこを、あの、知を愛し求めてなされる話によって殴られ嚙み付かれたからだ。しかもその話というのは、ひとたび素質の凡庸でない若い魂を摑えたら、毒蛇よりも激しくとりついて、その魂にどんなことでもさせたり言わせたりするものなのだ。――それに、こう見たところ、パイドロス、アガトン、エリュクシマコス、

B パウサニアス、アリストデモス、アリストパネス、この諸君と同じ類いの連中もまたここにその姿をみせている。――この際ソクラテスその人の名を挙げる必要がどうしてあろう。また、ここにいるそれ以外の人々の名前をも

ね。――つまり君らは皆、哲学的〔愛知の〕狂気と狂躁とを共にしているのだ。――だから、君ら全部には聞いて貰いたいのだ。ぼくがあのときしたことも、これから言うことも、君らなら許してくれるだろうからね。しかし召使どもや、そのほかまだ浄めを受けぬ野卑な連中は、その耳に巨大な扉を当ててふたをすることだ。(2)

三四

C さて諸君、灯も消されてしまい、召使たちも部屋の外に退いたので、ぼくは、この人には遠まわしに言わないで、はっきりした態度で思ったことを臆せず言うべきだと考えた。で、この人を揺さぶって言った、

『ソクラテス、寝ているのですか』

『いや、ぜんぜん』

と彼は答えた。

『では、ぼくの決心していることを、あなたはごぞんじですか』

『いったい何だね』

と彼は尋ねた。

---

1 「酒と子供は真実(正直)者」という諺と、「酒と真実(正直)」という諺とを、両方頭に浮べて言っているのであろう。

2 秘儀における宣告に、「未入信の者どもは扉を(耳に)当てよ」というのがあった。例えば、オルペウス教徒はその秘義を述べるに先立ってそう言ったと伝えられる(Fr. 7 (DK))。秘儀に由来するこの言葉使いは、ディオティマに共通するものである。なお、『テアイテトス』(155E)参照。

『ぼくのみるところ、あなたは』とぼくは答えた『ぼくを恋する資格のあるゆいつの人です。しかもぼくに向ってそれを口にするのをためらっているように思われるのです。ところがぼくはといえば、こういう気持なのです。このことでも、さらにはまたほかのことでも――それがぼく自身の財産であっても、ぼくの友だちのもので D あっても――そのことであなたの意を迎えないのはたいへん愚かしいことだ、と考えているのです。つまりぼくにとっては、何が大事かといって、自分が立派な者になるほどに大事なことはないのです。ところがぼくの場合このことでの後援者として、あなたにまさる有能な人は一人としていないと思うのです。だからぼくとしては、そういう人の意を迎えなかったら、思慮ある人々に対して非常に恥ずかしい想いをすることでしょう。それは、そういう人の意を迎えた場合に多くの愚かな連中に恥ずかしい想いをするのとは較べようもないほどに激しいものだと思うのです』

それを聞くと、この人はひどく皮肉たっぷりに、まったくこの人独特のいつもの調子で言うのだった、

『親愛なアルキビアデス、もしもぼくについて言う君のことばがまさしく事実であって、ぼくのうちに、君を E もっと立派にするような力が何かあるというのなら、君はなかなかすみにおけない人物のようだね。実際、そうなったら、君がぼくのうちにみる美は、途方もない、そして君のもつ容姿の美とは較べようもないほどの素晴らしいものだということになるだろう。だからそれを見つけ出し、ぼくと交って互いの美を交換しようとしているのなら、君はぼくよりもはるかにたくさんの儲けを手に入れようともくろんでいるわけだ。いや、美の単なる仮 219 象の代りに、正真正銘の本物を獲得しようとしているのであり、まったくもって〝青銅のものを黄金のものに〟交換しようと考えているのだ。[1] だが、ねえ君、もっとよく検(しら)べてみることだ。ぼくは何のとりえもない者なのに、

君がそれに気付かないでいるようなことがあってはならないからね。まことに精神の視力が鋭利に見始めるのは、肉眼の視力がその鋭さを失おうとするときである。ところが君はそれからはまだほど遠いのだ』

ところでぼくはそれを聞くと言った、

『ぼくからの話というのは、今しがた言った通りです。そのどれ一つをとっても、心で思っていることと裏腹に言ったものはありません。で、今度はあなた自身がそのように、あなたにもぼくにも最善と思うことをよく考えてほしいのです』

B

『なるほど、それは君、いいことを言うね。ほんとに、お互いこれからは熟慮して、このことに限らず、ほかのことでも、ぼくら二人に最善と思われることをしなければならないね』

と言った。

さて、以上のやりとりをぼくはこの人とかわし、いわばこちらが何本かの矢を放ったので、この人はもう傷ついたものと思った。そこで立ち上り、この人にはもはや一言(ひとこと)も言わせず、ぼくのあの外套を——というのは、そのときは冬でもあったので——それを掛けてやり、この人の例の擦り切れた外套の下にもぐり込んで横になり、

C

この真に神のごとき驚歎すべき人に両腕をまいてその夜を寝て明かしたのだ。ところでこのこともまた、ソクラテス、あなたはぼくが嘘をついているとは言いますまいね。さて、こうしたことをぼくはしたが、この人はぼく

1 『イリアス』第六巻二三五—二三六行。トロイア方のグラウコスは、ギリシア方のディオメデスと戦場で会い、その昔互の先祖が誼(よし)みをかわしたことを想って、己の黄金の武器を相手の青銅のと取換え、九頭の牛の値うちのものに、百頭の牛の値うちのものを返礼し、損をしてしまった、と語られている。

に対しあのどうにもならぬほどの優位に立って、ぼくの青春の美をさげすみ嘲笑し、人もなげな振舞いに出た。しかもこの青春の美については、それを相当なものとぼくは思っていたのだよ、裁判官諸君。——こう呼ぶのも、君らはソクラテスの傲慢さに対する裁判官だからね。——さてよく肝(きも)に銘じてくれ、かずかずの男神に誓い、女

D 神たちに誓って言うが、ぼくはソクラテスといっしょに一夜を寝て明かしたが、父や兄といっしょに寝た場合と同様、別に何の変ったこともなく翌朝起きたのだ。

三五

このことがあって後、どんな想いをぼくがしたと君らは思うか。一方では恥をかかされたと思いながらも、他方ではこの人の資質と節制と勇気とに感心し、そして叡知と堅忍不抜の点で決して出くわすことはあるまいと思うような人物に出会ったこのぼくが。……だからぼくには、まったくの話、憤慨してこの人との交際を断つすべもなく、そうかといって、この人を自分の方に連れてくるてだてもまた見つからなかった。なぜなら金銭に対し

E ては、この人の場合、刀剣に対するアイアス(1)よりもはるかに全身不死身であることをぼくはよく知っていたし、それに、これなら摑まるだろうと思っていたその唯一のものにおいても、この人はぼくの手から逃げてしまったからだ。だから、ぼくは途方に暮れた。そしてほかの誰からも誰一人受けたこともないほどの隷属を、ぼくはこの男から受けてうろつき廻った。

じつは、これらのことはすべて以前に起ったことであるが、その後さらにぼくらにはともどもポテイダイア出征のこと(2)が起り、かの地で親しい戦友として食事を共にすることになった。……そこでまず第一に、困苦に対し

220
てであるが、この人はぼくだけでなく、ほかのすべての者にたちまさっていた。——出陣のさなかよくあるように、われわれがどこかで孤立させられ、糧食を欠くことを余儀なくされたときには、ほかの連中は辛抱強さの点でからきしだめであった。——またそれとは反対に、大御馳走のあるときにも、この人だけはそれを堪能(たんのう)することができた。どんなものでもそうだが、ことに飲むことにおいて著しく、ほしくなくても強いられれば、いつも皆より強かった。そしてこれは何よりも驚くべきことだが、ソクラテスの酔っぱらっているのを、未だかつて誰一人見た者はないのだ。ところでこのことについては、直ぐとまた証拠が現れるだろうと思う。

B さらには、冬の寒さに耐える強さという点であるが、——というのは、その地の冬はたいへんなものだからだが——この人は、ほかにもいろいろと驚歎に価する振舞いをしたが、ことにあるとき、世にもすさまじい寒気が襲来して、誰も屋内から外に出ないか、出る者があれば、皆ほんとにびっくりするほどたくさんのものを身にまとい、フエルトや羊の毛皮を靴にしてその中に足をくるみ込む始末だったが、この人はこういう状態の中で、あの以前いつも着ていたような外套を着て外に出、しかも氷の中を裸足で、靴を履いたほかの連中よりも易々(やすやす)と歩

C いたのだ。しかし兵士たちは、この人が自分たちを馬鹿にしているのだと思って、白い眼で見るのだった。

---

1 ソポクレス『アイアス』五七六行に「七重の牡牛の皮もて作られし不壊の楯」と言われている彼の楯に関してのことである、と考えるべきであろう。

2 ポテイダイアは、エーゲ海北端、三叉状の三半島のうち、一番西の半島の根元にあるコリントス系の植民市。前四三二年春それまで入っていたデロス同盟から離脱してコリントス方についたため、アテナイ軍は包囲攻撃した。双方にとっての極めて苦しい戦三年の後、陥落した(トゥキュディデス『歴史』第一巻(五六—六五)、『ソクラテスの弁明』28E、『カルミデス』153A〜C参照)。

三六

ところでそれについてはこれだけにするが、

　されどなお毅然たる男のこ、これをいかになし、いかに耐えしや(1)

かつて出征中その地において——ということも、聞くだけの値打ちのあるものだ。さて話というのはこうだ。彼は思索に思いを集中して、朝早くから同じ所に立ち続けていた。そしてその考えごとがはかどらないので、投げ出さずに探求し続けて立っていた。そして時間はもう午になってしまった。兵士らは彼がそうしているのを知って、みな訝りながら、ソクラテスが朝早くから何か想いをめぐらして立ち続けている、と互いに語り合った。

D　ついに、イオニアの兵隊の中のある連中が、夕方になっていたので食事を済ましてから——そのときは夏のことでもあったので——藁蒲団を持ち出して涼しさの中で寝ながら、同時にまたこの人を、はたして一晩中立ち続けるのかどうかと見張っていた。ところが、暁がやって来て太陽が登るまでこの人は立っていたのだ。それから、太陽に向って祈りを捧げ、そして去って行った。

　またお望みなら、戦闘中のことを話そう。それというのも、この人にこのことの借りを返すのは当然だからね。さて、わが将軍連がぼくに褒賞をくれる契機となったあの戦闘のあったとき、味方の中でこの人を除いては誰一

E　人ぼくを助けてはくれなかった。彼は傷ついたぼくを見捨てようとはせず、ぼくの武器とぼくの身とを、手をかして無事救ってくれた。そしてぼくはまた、ソクラテス、あのとき褒賞をあなたに授与するよう将軍たちに薦めたのだ。そしてこのことについて、あなたはぼくに文句をつくことはないだろうし、ぼくが嘘をついていると、

221

言いもしないだろう。……ところがです、将軍たちがぼくの家柄などを顧慮してぼくに褒賞を与えようとしたとき、あなた自身将軍たちよりも熱心に、それを手に入れる者はあなたよりもむしろぼくであることを、望んだのだ。なおまた、諸君、わが軍がデリオン[(2)]より退却した折のことだが、そのときのソクラテスも立派な見ものだった。こう言うのも、ぼくはたまたまめぐり合ってすぐ脇にいたからだ。しかもぼくは騎馬で、この人は徒歩の重武装で従軍していたのだ。さて味方の兵たちがすでに四分五裂してしまった中を、この人はラケス[(3)]といっしょに退却していた。そしてたまたまそこにぼくは行き合せたわけだ。で、その姿を見ると、ぼくは直ぐこの人たちに頑張れと力づけ、『あなたがたを見捨てはしませんぞ』と言った。実際ここでは、ポテイダイアよりももっとよくソクラテスを観察できたのだ。——というのは、ぼく自身馬上にいたので、恐れることがより少くて済んだからだ。——さて、まず第一に、自若としている点でこの人がどれほどラケスにたちまさっていたかということを。

B

次に、すくなくともぼくのみたところでは、アリストパネス、まったくあの君のことばそのままに、ここアテナイでと同様あそこでも、〝大威張りの水禽（みずどり）よろしく濶歩（かっぽ）して、横目をやりながら[(4)]〟あたりの敵味方を落ちついて見

1　『オデュッセイア』第四巻二四二行。

2　デリオンは、ボイオティアの東海岸、アッティカとの境に近い地点。前四二四年進攻したアテナイ軍はここでテバイの軍に敗られ、激しく追撃され、多大の損害を受けた（トゥキュディデス『歴史』第四巻（七六以下）、『ソクラテスの弁明』28E、『ラケス』181B）。

3　ペロポンネソス戦役時、ニキアスの同志として和平派の代表であった。前四二一年ニキアスの和約締結に活躍した。前四一八年マンティネイアの戦で戦死した。勇武の将として有名。プラトンによって、勇気を取扱う『ラケス』の主要人物にされたゆえん。

4　アリストパネス『雲』三六二行。ソクラテスについて語るコロスの長のことばの一節。

まわし見まわし、兵士らの間を進んで行ったのだ。もしこの人に誰か手を出そうものなら、この人から手ひどい抵抗を受けるだろうということは、誰の目にも、それも非常に遠くからでさえ、一目瞭然という姿だった。だからしてまた無事この人もその戦友も危地を脱出したのだ。なぜなら人は戦争中そのような態度を失わない者には、C手出しすることさえまずないのであって、かえって顎(あご)を出して一目散に逃げる者の方を追跡するものであるからだ。

さて、ソクラテスについて、ほかにもたくさんの、それも驚歎すべき事柄を、褒め讃えることができるだろう。しかしながら、ほかのいろいろな活動においては、おそらく彼以外の人についても彼の場合と同じようなことを言うことができようが、しかし、昔の人にもいま生きている人にも、誰にも似ないということ、この一事はまったく驚歎に価することだ。つまり、アキレウスがどういう人物かについては、ブラシダス(1)なりほかの人々なりをそれになぞらえて考えることができようし、さらにはまたペリクレスがどういう人物かについては、ネストルなD りアンテノル(2)なりを——ほかにも数々の者がいるが——それになぞらえて考えられよう。そしてそれ以外の人々に対しても同じようになぞらえることができるだろう。ところがこの人物が——彼自身とならんでその言論もが——風変りな点でどんなものであるかについては、古今の人たちの中から探しても、それに近い者すら見つけ出すことはできないだろう。結局ぼくの言っているものに、あの人をなぞらえるのでなければね。つまり、人間などにではなく、あのシレノスやサテュロスどもに、あの人と、それからあの人の語るところをなぞらえるのでない限りは。

三七

というのは、じつはまたこのことを最初にぼくは言い忘れたのだが、この人の語ることもまた、扉が両方に開かれるあのシレノスどもにこの上なく似ているのだ。それはつまり、こういうわけだからだ。誰かがソクラテスのする話を聞いてみようという気になったら、その者にそれは最初笑止千万なものと思われるだろう。そういう語句を外側からまとっているのだ。人を愚弄するサテュロスの毛皮といったものをね。なぜならこの人の話すことは、荷驢馬や、どこかの鍛冶屋、靴屋、鞣皮屋(なめしがわや)であり、そしていつも同じ言葉で同じことを言っているように思われる。だから、勝手を知らぬ愚かな者は例外なく彼の話をあざ笑うことになるだろう。ところが、たまたまその扉が両方に開かれるところを誰かがみかけて、その中に入り込むならば、まず第一に、世にある言論のうちでただ彼のだけが、内に知性をもっていることに[3]、その人は気づくだろう。ついで、それがこの上なく神々しい

E

222

1 スパルタのすぐれた、そして人格高潔な将軍にして政治家。前四二四年トラキア、カルキディケ方面で活潑な軍事行動を成功裡に進めた。前四二二年アテナイから新手の軍勢を率いて来たクレオンをも打ち破った(トゥキュディデス『歴史』第四巻(一〇二以下)、第五巻(三以下)参照)。

2 ネストルはギリシア方の雄弁の士。『イリアス』第一巻二四七—二四九行には、蜜よりも甘美なことばを吐く者というふうに形容されている。アンテノルは、トロイア方の思慮に富む弁論の士(『イリアス』第三巻一四八行、第七巻三四七行以下等)。

3 『オデュッセイア』第一〇巻四九四—四九五行で、盲目の予言者テイレシアスについて、彼には知がペルセポネイアより授けられているが、ほかの魂は影のようなものだ、という意味のことが言われている。この対立が、今の場合ソクラテスの言論とそれ以外の人々の言論との対立に使われている。なお、『メノン』(100A)参照。

言論であり、徳の神像を最も多くその体内に持ち、理想的な人間になろうとする者が探求するにふさわしい対象の大部分に向っている、いやむしろ、その全体にわたっていることに、気づくだろう。

B 以上が諸君、ぼくがソクラテスを賞讃する点なのだ。そしてさらに、ぼくの非難する点をもそれに混ぜ合せて、この人が傲慢な態度でぼくに振舞った数々のことを諸君にお聞かせしたわけだ。しかもこの人がそのような振舞いに出たのはじつにぼくだけではないのであって、グラウコンの息子カルミデス(1)にも、ディオクレスの息子エウテュデモス(2)にも、そしてそのほかにも、非常に多くの者に対してそうしたのだ。そしてこの人たちをソクラテスは騙して、自分が恋する側の者である振りをしているが、じつは彼自身、恋する方でなく、むしろ恋される者の方になりすましているのだ。だからそのことを、アガトン、ぼくはまた君に注意するのだが、この人に騙されないようにしてくれたまえ。むしろぼくらの苦がい経験から学び取って用心をし、諺に言われている通り(3)、愚か者のように痛い目にあった上ではじめて学び取る、ということにならないようにしてくれたまえ」

三八

C 以上のことをアルキビアデスが言うと、彼のあけすけな話し振りに、笑いがおこった。彼がまだソクラテスに恋々としているように思われたからだ。そこでソクラテスが、

「君は素面のようだね、アルキビアデス。でなかったら、今まで君がしてきた話全体の目的となっているものを、あのように手のこんだ巧みさで、すっぽり包んで人の目から隠そうと企て、しかも、まるで事のついでででもあるかのような口吻で、それを話の最後におくことは決してしなかったろうからね。君の態度からすると、ぼく

Dとアガトンの仲を裂くというあの目的——君の考えによれば、ぼくは君を恋して他の誰をも恋してはならず、アガトンの方は君に恋されてほかの誰からも恋されてはならない、というのだから、——君は、すべてはその目的のために言ったのではなかったというように見せかけているが。……しかし、君は気づかれずにはすまなかったのだ。そしてそのサテュロス的な、そしてシレノス的でもある君の劇は、正体を暴露した。さあ、愛するアガトン、この男に事をうまく運ばせてはならないぞ。そして誰からもぼくと君との仲を裂かれないように心の備えをしてくれたまえ」

と言った。

するとアガトンが、

E「ソクラテス、ほんとにあなたの言われる通りのようですね。——こうぼくが推察するのは、彼があなたとぼくとを別々に分け距てる魂胆から二人の間に横になった、という事実もあるからです。だから、決して彼に事をうまく運ばせないで、むしろぼくがあなたのそばに行って横になりましょう」

1　プラトンの母方の叔父。その美貌、才幹、家柄は抜群で、プラトンやクセノポンの作品のいくつかの箇所で言及されている。なお、前四〇四年の反民主的過激派の三〇人寡頭政府に主導的役割を演じたクリティアスは、彼の従兄弟であり、その精神的先達であった。

2　同名のソフィストではなく、クセノポン『ソクラテスの想い出』第四巻(二)ならびに(六)において、優秀な素質をもちソクラテスの熱心な弟子となった若者が語られているが、この者のことであろう。

3　この諺については、ヘシオドス『仕事と日々』二一八行「愚か者はひどい目に会って始めて覚る」、『イリアス』第一七巻三三行「悪しきことをしでかされて、愚か者ははじめて覚る」、ヘロドトス『歴史』第一巻(二〇七)「私の受けた災難はひどいものだが、教訓となった」等を参照。

と言った。
「そうだ、そうだ。さあ、ここに、ぼくの下座に坐りたまえ」とアルキビアデスが言った
とソクラテスが答えた。
「ああ、ゼウス。この男のためにまたしてもぼくは何という目にあうことだろう」とアルキビアデスが言った
「この人はいつでもぼくに打勝たねばならないと考えているのだ。しかし、呆れた人よ、ほかのことはいけない
にしても、せめてぼくらの間にアガトンを坐らせてくださいよ」
「いや、それはできないことだ」とソクラテスが答えた「なぜなら、先程は君がぼくを褒め讃えたが、今度は
ぼくが右にいる者を褒め讃えなければならないからだ。だから、もし君の下座にアガトンが横になれば、言うま
でもなく、彼がぼくに褒め讃えられる前に、むしろ彼が再びぼくをそうすることになるのではないかね。さあ、
すぐれたアルキビアデスよ、許してやってくれたまえ。そしてこの若者がぼくに褒め讃えられるのを嫉妬しない
でほしいのだ。ぼくはこの人を褒めたくてしようがないのだからね」
「しめしめ」とアガトンが言った「アルキビアデス、もうぼくはここにじっとしておれないよ。何はさておい
てもぼくは席を換えるよ。ソクラテスに褒めてもらうためにね」
「これがあのいつもの手なのだ。ソクラテスがいると、誰も美しい者のお相伴(しょうばん)にあずかることはできないのだ。
今も彼は、この人が自分のそばに坐るように、何と易々(やすやす)と、しかも人を納得させるような、理窟を見出したこと
か」

三九

B 〔アポロドロス〕 そこでアガトンはソクラテスのそばに坐ろうと立ち上った。ところが突然、たいへんな数の酔いどれが戸口にやって来た。そして誰かが外に出て行くのでちょうど扉が開かれているのに出くわすと、真直ぐに、内で飲んでいる連中のそばまで進んで来て横になった。そして家中は騒ぎに満ち、もはやまったく秩序もなくなってしまったなかで、法外な量の酒を飲むことが強要された。そこで、アリストデモスの言うには、エリ

C ュクシマコスとパイドロスとほかの幾人かが、去って行った。ところでアリストデモス自身は眠気に襲われ、その頃は夜の長い時だったので、ほんとにたっぷりと眠ってしまった。そして夜明け近く、すでに鶏が鳴いているときに、目を覚ました。そして目を覚ましてみると、ほかの連中は眠っていたり、帰ってしまったりしていたが、アガトンとアリストパネスとソクラテスだけはおきていて、大盃を右に順々に廻しながら、それで飲んでいた。

D そしてソクラテスは、彼らと何か話し合っていたのだ。ところでアリストデモスは初めから立ち合っていなかったし、居睡りもしていたから、ほかのいろいろな点ではその話を憶えてはいないが、これを要するに、喜劇と悲劇を作る技術の心得は同一人に属し、技術をもって悲劇を作る者はまた喜劇作家でもある、ということを認めよう、彼らに強いていたのだ。ところで、彼らはそれを強いられながらも、あまりはかばかしくついて行けず、居睡りをしだした。まずアリストパネスが眠り、もう陽が昇ったときにアガトンが眠った。そこでソクラテスは彼らを寝つかせ、それから、立ち上がって去って行った。そして彼、アリストデモスがいつものようにソクラテスに付いて行った。ソクラテスはつねのごとくリュケイオンに入って行き、沐浴して、その日の残りをいつもど

こでもするようにしてすごした。[1] そして、そのように時をすごしてから、夕方に家に帰って休んだということである。

1　リュケイオンはアテナイ東郊の、アポロン・リュケイオスの神殿や体育場をもつ地域。この体育場には、ソフィストたちや若者たちが集り、ソクラテスもつねに出入りした所である。『リュシス』『エウテュプロン』の冒頭参照。

パイドロス

——美について——

藤沢令夫訳

登場人物

ソクラテス
パイドロス

一

ソクラテス　やあ、パイドロス、どこへ？　そしてどこから来たのかね？

パイドロス　ケパロスの息子のリュシアスのところから来ました、ソクラテス。これから城壁の外へ散歩に行くところです。なにしろ、リュシアスのところで朝はやくから腰をおちつけて、ずいぶん長く時をすごしてしまったものですから。私は散歩といえば、あのあなたにも私にも仲間の、アクメノスの言にしたがって、大道を濶歩することにしています。つまり彼の説によると、疲れをいやすにはそのほうが、ドロモスを歩くよりも効果があるそうですからね。

B

ソクラテス　たしかに、君、彼の言うことはもっともだ。それはそうと、どうやらリュシアスが都〔アテナイ〕に出てきていたとみえるね。

パイドロス　ええ、エピクラテスの家――ほら、あの、オリュンポスの社のそばの例のモリュコス邸ですが――あそこに来ていたのです。

ソクラテス　それで、いったい何をして時をすごしていたのかね。いやそれとも、むろんリュシアスは、いろいろな言論によって君たちをもてなしていたに違いないというところかね。

パイドロス　おしえてあげましょう――もし向うへ歩いて行きながら聞いてくださるお暇が、あなたにあるならば。

ソクラテス　なんだって？　君はぼくのことを、ピンダロスの文句(6)を借りて言うなら、君とリュシアスが何をしていたかを聞くことを「生業(なりわい)よりも一大事」と考える男だとは、思ってくれないのかね？

c

パイドロス　そういうわけでしたら、さあ、お供いたしましょう。

ソクラテス　どうか話してくれたまえ。

パイドロス　ええ、それがまた、ソクラテス、あなたに聞かせてあげるのにもってこいのことなのです(7)。なぜかと言いますと、私たちのとり上げていた話というのは——一種独得の仕方でなのですが——恋(エロース)に関

1　当時の高名な弁論作家で、この対話篇のかくれたる登場人物。くわしくは「解説」(二九九—三〇〇ページ)参照。

2　当時の有名な医者。やはり医者で『饗宴』の登場人物の一人であるエリュクシマコスの父に当る。

3　体操場(ギュムナシオン)や相撲場(パライストラー)にはドロモスと呼ばれる走り場、ないしは競走用のコースが附属していて、ふつうは屋根でおおわれ、雨天や冬期にも屋内運動場として使用されるようになっていた。

4　リュシアスは、父ケパロスの家がアテナイから七キロほど離れた港町ペイライエウスにあった(『国家』の冒頭参照)ので、ふだんはそこに住んでいたのであろう。

5　「モリュコス邸」というのは、前にモリュコスが住んでいた邸宅の意味。モリュコスは大金持で贅沢な暮しをしたので有名な男。その邸宅も豪壮なものであったと想像されるから、それが「モリュコス邸」というふうに固有名詞化され、彼の死後エピクラテスが住むようになってからも、そのまま同じ名で呼ばれたのであろう。エピクラテスは、民主派の政治弁論家として知られている人である。「オリュンポスの社」というのは、正確に言うと「オリュンポスのゼウスの社」であって、アテナイ市の東南、城壁のすぐ近く、イリソス川から一〇〇—一五〇メートルくらいのところにあった由緒の古い社である。

6　ピンダロスの『イストミア』(Isthmia)の冒頭、「わが母よ、黄金の楯のテーベよ、私はあなたのことを私の仕事よりも大切にするつもりです」という意味の言葉からとったもの。

7　ソクラテスは常に、「自分の知っていることといえば恋のことだけだ」とか、「ぼくが誰かを恋していないような時はない」とかいう意味のことを語っていた。例えば『饗宴』(177D, 212B)や本篇257Aを見よ。

係のあるものだからです。というのは、リュシアスはひとりの美少年が口説かれる次第を話に書きましたが、口説かれるといっても、口説くほうの男はその少年を恋しているわけではないのでして、そこがまさに、工夫をこらした月並でない点なのです。つまり、自分を恋している者よりも恋していない者にこそむしろ身をまかせるべきである、というのが、彼の論旨なのですから。

D

ソクラテス　おお、心けだかき男よ！　ねがわくば彼に、「金持ちよりもむしろ貧乏人に」とか、「若者よりも老人に」とか、またそのほか、ぼくやぼくたちの大多数の者にそなわる性質を全部あげて、話に書いてもらいたいものだ。さぞかし気のきいた、みんなにありがたがられる話になることだろうに！　とにかくぼくは、すっかり聞きたくなってしまった。もうこうなったら、たとえ君がメガラまで散歩の足をのばし、ヘロディコスの流儀(1)にならって城壁に着いてはまた引き返すとしても、ぜったいに君からはなれはしないよ。

228

パイドロス　何をおっしゃいますか、すぐれたソクラテス。いったいあなたは、リュシアスという、ものを書くことにかけては当代きっての達人が、長い期間をかけてじっくりと作り上げた仕事を、私のようなしろうとが、作者の価値を傷つけないような仕方で、暗誦できるとでも思っていらっしゃるのですか？　とてもとても、及びもつかないことです。――もっとも、できることならそうしたいのは山々で、金がたくさん手にはいることなんかよりは、そのほうが私には、ずっと望ましいのですけれども。

二

ソクラテス　パイドロスよ、このぼくにパイドロスのことがわからないくらいなら、さしづめぼくは、われと

わが身をも忘れてしまったというところだろうよ。だがそうはいかない、ぼくには、自分のことと同じくらいに、君のこともよくわかっているのだ。だからぼくは、これから話すような一部始終は、ちゃんと見ぬいている——彼パイドロスがリュシアスの話を聞いたのは、たった一回だけではない。なんどもなんどもくり返し話してくれと彼にたのみ、リュシアスはまたリュシアスで、よろこんでそれに応じたのだ。しかし彼パイドロスには、それでもまだもの足りなくて、しまいにはとうとうその書きものを自分のほうに取り上げてしまって、いちばん見たいと思う箇所を熟読しはじめた。そして、朝はやくから坐りつづけて、そうしているうちに疲れたので、散歩に出かけることにしたわけだが、さて、誓って言うけれども、そのときにはもう、それが何かひじょうに長いものでないかぎり、彼はその話をすっかり覚えてしまったものと、ぼくはにらんだね。

B

さて彼は、それを暗誦して稽古するために、城壁の外へ歩いて行った。そして、そこでばったりと出あったのが、話を聞くことに病みつきになっているという男であった。見つけた！とばかり、その姿を目にした彼は、自分の熱狂を分ち合う相手を得たことに大よろこび、お供させてくださいとたのんだ。ところが、話に恋いこがれているこの男に、いざ話してくれとたのまれる段になってみると、なんと、まるで話したくはないとでもいった

C

1　ヘロディコスは、トラキア地方のセリュンブリアという町の市民(生地はメガラ)の医者で、種々の鍛錬法や養生法(『国家』III. 406A〜Cの中ではそれが皮肉な口調で語られている)を発明して、自分でも厳格に守り、人にもすすめた。ここで「ヘロディコスの流儀」と言われるのもおそらくその一つで、城壁の外の適当の距離のところから、城壁まで歩いてはまた引返し、それを何度もくり返して鍛錬したといわれる。なお、アテナイからメガラまでは四〇キロメートルぐらいある。

ように、はにかんでみせたものだ。結局のところは、たといひとが聞くのは嫌だと言ったところで、むりやりにでも話すつもりでいたくせにねえ。——とにかくそういうしだいだから、君、パイドロスよ、どっちみち程なくすることなら、いますぐにそれをしたらどうだと、君から彼パイドロスにたのみたまえ。

パイドロス まったくのところこれでは、ほかならぬ私のためには、できるだけの力で話すのが何よりの最善の策ですね。なにしろあなたの様子では、私がとにかくなんとか話をするまでは、けっして私を放免してくださらないらしいのですから。

ソクラテス そう、大いにお察しのとおりだとも。

三

D

パイドロス では、そのようにやってみましょう。というのは、ソクラテス、ほんとうに私は、その話の一語一語をのこらず暗記したわけではけっしてないのです。しかし、話の趣旨でしたら、恋している人の場合と恋していない人の場合とをくらべて、どの点とどの点に差異があるとリュシアスが主張したかを、ほとんどその全部にわたって、要約的に最初から順を追って一つ一つ話してみましょう。

ソクラテス だがまず最初に、君、親友ではないか、その左手で上着の下にかくし持っているのは何か、見せてくれてからのことだね。ぼくは、君が持っているのはおそらくその話の原物にちがいないとにらんだのだから。

E

もしそれが図星なら、断わっておくけれど、ぼくは君をひじょうに愛してはいるが、当のリュシアスがここにい

229

るのに、わざわざぼくが君のけいこ台になってあげようとは毛頭思わないから、どうかそのつもりでいてくれたまえ。——とにかく、さあ、見せてごらん。

パイドロス　わかりました！　あなたのおかげで、ソクラテス、私の期待はすっかりくじかれてしまいました。せっかくあなたを相手に練習するつもりで、胸をおどらせていましたのに。……さてそれなら、これを読むことにするとして、どこに腰をおろしたらよいでしょうか。

ソクラテス　ここから横にまがって、イリソス川にそって行こうではないか。それから、どこかいい場所があったら、腰をおろして静かにやすむことにしよう。

パイドロス　私は履きものをはいてこなくて、どうやら、ちょうどよかったようです。あなたのほうはむろん、いつものことですからね。[1]これだと、私たちがこのせせらぎにそって足を濡らしながら行くのはいともたやすいことですし、それに、まんざら悪くはありませんよ。とりわけ、この季節のこんな時刻には——。

ソクラテス　それでは、さあ案内してくれたまえ。そして歩きながら、腰をおろす場所をさがしてくれたまえ。

パイドロス　ほらあそこに、ひときわ背の高いプラタナスの樹が見えますね。

ソクラテス　うむ、見えるとも。

1　ソクラテスの裸足の習慣は有名。真冬でも履物をはかなかった。『饗宴』(174A)や、アリストパネスの『雲』(一〇三、三六二行)参照。

(229)
B

パイドロス　あそこには日陰もあり、風もほどよく吹いています。それに、草が生えていて坐ることもできるし、あるいはなんでしたら、寝ころぶこともできます。

ソクラテス　では、そこへ連れて行ってもらおうか。

パイドロス　……ちょっとおたずねしますけれど、ソクラテス、ボレアス[1]がオレイテュイアをさらって行ったという言い伝えがありますが、あれは、イリソス川のどこかこのあたりで起こったことではないでしょうか？

ソクラテス　そう、たしかにそういう言い伝えがあるね。

パイドロス　とすると、さらわれたのはここからではありませんか？　とにかくこの水の流れたるや、ものやさしく、きよらかで、澄み透っていて、このほとりで乙女たちがたわむれるのにふさわしいようにみえるではありませんか。

C

ソクラテス　いや、それはここではなくて、二スタディオンか三スタディオンばかり下流のほうだろう。アグラの社[2]のほうに渡るところだ。そこにはたしか、ボレアスをまつる祭壇があるはずだが。

パイドロス　それはぜんぜん気がつきませんでした。ところで、ゼウスに誓って、ほんとうのところを打明けてください、ソクラテス、あなたはこの物語を、ほんとうにあった事実だと信じていらっしゃいますか？

四

ソクラテス　いやたしかに、もしぼくが賢い人たちがしているように、そんな伝説は信じないと言えば、当節の風潮に合うことになるだろうね[3]。そして学のあるところをみせながら、「彼女オレイテュイアがパルマケイア[4]

といっしょに遊んでいるとき、ボレアスという名の風が吹いて、彼女を近くの岩からつき落したのである。彼女はこのようにして死んだのであるが、このことから、彼女がボレアスにさらわれて行ったという伝説が生まれたのである」とでも言えばよいわけだ。あるいは、アレスの丘(5)からつき落した、と言ってもいい。なぜなら、もうひとつそういう伝説もあって、このイリソス川からではなく、アレスの丘からさらわれたとも言われているのだから。

D

しかし、パイドロス、ぼくの考えを言うと、こういった説明の仕方は、たしかに面白いにはちがいないだろうけれど、ただ、よほど才知にたけて労をいとわぬ人でなければやれないことだし、それに、こんなことをする人は、あまり仕合せでもないと思うよ。なぜかというと、ほかでもないが、その人はつぎにヒポケンタウロス(6)の姿

1 北風の神。エレクテウス(伝説上のアテナイの王)の娘オレイテュイアをトラキアの地へさらって行ってめとり、二人の間にゼテスとカライス(息子)、クレオパトラとキオネ(娘)らの子が生まれた。

2 アグラまたはアグライはアッティカ州の区名で、イリソス川を渡った向う側の土地。パウサニアスの『ギリシア記』第一巻(一九の五)によると、女神アルテミスがデロス島からやって来て最初に狩をしたゆかりの土地で、アグライア(またはアグロテラ=「野山にかかわる」「狩の女神」の意)・アルテミスをまつる社があったと言われている。なお、一スタディオンは一七七・六メートル。

3 このころ、一般の風潮として、ソクラテスが次にやってみせているような、神話の合理的解釈、伝説をそのまま信ぜずに、その寓意をさぐるということがはやっていた。アナクサゴラス、メトロドロス、デモクリトスといった人々は、いずれもホメロスの物語をそのようなやり方で再解釈したと言われる。

4 もともとは泉の名(その水を飲む者はいのちを失った)。のち、泉のニュンペ(ニュンフ)の名前となる。

5 アテナイのアクロポリスの西側に相対し、アレイオス・パゴス、またはアレオパゴスの名で呼ばれた(アレスは戦いの神)。古くから最高刑事裁判の法廷や政務審議会がここで行なわれたので有名である。

6 胸から上は人間、下半身は馬の姿をした怪物。

E を納得の行く形に修正しなければならないことになるし、さらにおつぎはキマイラ[1]の姿を、ということになる。さらにはまた、これと似たようなゴルゴ[2]やペガソス[3]たちの群、そしてまだほかにも不可思議な、妖怪めいたやからどもが大挙して押しよせてくるのだ。もし誰かがこれらの怪物たちのことをそのまま信じないで、その一つ一つをもっともらしい理くつに合うように、こじつけようとしてみたまえ！　さぞかしその人は、なにか強引な知恵をふりしぼらなければならないために、たくさんの暇を必要とすることだろう。

だがこのぼくには、とてもそんなことに使う暇はないのだよ。なぜかというと、君、それはこういうわけなのだ。ぼくは、あのデルポイの社の銘が命じている、われみずからを知るということがいまだにできないでいる。

230 それならば、この肝心の事柄についてまだ無知でありながら、自分に関係のないさまざまのことについて考えをめぐらすのは笑止千万ではないかと、こうぼくには思われるのだ。だからこそぼくは、そうしたことにかかずらうことをきっぱりと止め、それについては一般に認められているところをそのまま信じることにして、いま言ったように、そういう事柄にではなく、ぼく自身に対して考察を向けるのだ、――はたして自分は、テュポン[4]よりもさらに複雑怪奇でさらに傲慢狂暴な一匹のけだものなのか、それとも、もっと穏和で単純な生きものであって、いくらかでも神に似たところのある、テュポンとは反対の性質を生まれつき分け与えられているのか、とね。

おや、それはそうと、君、話の途中だが、君がぼくたちを連れてこようとしていたのは、この樹ではなかったかしら？

B **パイドロス**　そうです、まさしくこれに違いありません。

五

ソクラテス　おおこれは、ヘラの女神の名にかけて、このいこいの場所のなんと美しいことよ！　プラタナスはこんなにも鬱蒼（うっそう）と枝をひろげて亭々（ていてい）とそびえ、またこの丈（たけ）たかいアグノス(5)の木の、濃い蔭のすばらしさ。しかも今を盛りのその花が、なんとこよなく心地よい香りをこの土地にみたしていることだろう。こちらでは泉が、世にもやさしい様子でプラタナスの下を水となって流れ、身にしみ透るその冷たさが、ひたした足に感じられるではないか。小さい神像や彫像が捧げられているところから察するに、ここはニュンフたちやアケロオス(6)のいます神聖な土地とみえる。それにまた、ここを吹いているよい風はどうだ。なんとうれしい、気持のよいそよぎで

c

1　頭は獅子、胴は山羊、尾は蛇、火を吐く怪獣。先に出てくるテュポンとエキドナの子と言われる。

2　メドゥサとも呼ばれる。海神ポルコスとケトの間に生まれた三人姉妹の一人（この三人姉妹を一緒にして「ゴルゴたち」とも呼ばれる）。醜怪な顔、髪の毛は蛇、青銅の手、猪の歯、巨大な黄金の翼を持ち、その目を見る者を石と化する。

3　翼を持った天馬。ゼウスの雷を運ぶ。ゴルゴ（メドゥサ）がペルセウスに殺されたとき、その血の中から生まれた。ベレロポンテスの愛馬として、彼がキマイラやアマゾンと戦ったとき、彼を乗せて力となった。

4　大地（ゲ）とタルタロスから生まれた巨大な怪物。百の蛇の頭を持ち、腿までは人、腿から下は巨大な毒蛇。

5　南ヨーロッパの原産、地中海沿岸地方に豊富な灌木。湿地に生え、白や紫色の花が房をなして咲く。灌木といっても、プリニウスの『自然誌』（二四の三八）によると、大小二通りの種類があって、大きいのは柳の木に似ていて背が高いとあるから、ここのアグノスもおそらくそれであろう。学名、Vitex Agnus-Castus.

6　本来、テッサリア地方の山中に源を発し、アカルナニアとアイトリアの境界を劃しつつ南下してコリントス湾の入口にそそぐギリシア最大の河の名前であるが、河（または水）の神の名として一般に用いられるようになり、各地にアケロオスを祀る社があった。

はないか。それが蟬たちのうた声にこだまして、夏らしく、するどく、ひびきわたっている。だが、なかでもいちばんうまくできているのは、この草の具合だ。ゆるやかな坂にゆたかに生えていて、横になってみると、じつに気持よく頭をささえてくれるようになっているのだから。……これなら君は、よそ者を案内する役目を、申し分なく立派に果したことになるよ、親愛なるパイドロス。

D

パイドロス　そして──驚いたお方よ！　──あなたのほうは、これはまた申し分なく風変りな人だということがわかりますよ。なぜって、ほんとうにいまのお言葉のとおり、あなたは、案内人に連れられて歩いているよそ者にそっくりで、この土地の人間にはみえないのですから。つまりそれほど、あなたはアテナイの町から出ない──国境の外へ旅をすることもなさらないし、それにこの様子では、どうやら城壁から外へ出ることさえ、ぜんぜんなさらないようですね。(1)

ソクラテス　いや、よき友よ、どうかぼくの気持をわかってくれたまえ。ぼくは、ものを学びたくてたまらぬ男なのだ。ところが、土地や樹木は、ぼくに何も教えてくれようとはしないが、町の人たちは何かを教えてくれる、というわけなのだ。とはいうものの、どうやら君は、ぼくを外へ連れ出す秘訣を発見したようだね。なぜなら、ちょうど飢えた家畜を引き立てる人たちが、葉のついた枝とか何かの果実とかを鼻先で振ってみせながら連れて行く、あれと同じやりかたで、書物の中の話をぼくの目の前に差し出していれば、君は、アッティカ中はおろか、どこでも君の思いのままのところへ、ぼくを引きまわすことができそうではないか。さてそれはともかく、今はこうしてここに着いたのだから、ぼくは横になろうと思う。君は君で、どんな姿勢でも、いちばんらくに読めると思う姿勢をえらんで、読んでくれたまえ。

E

パイドロス　では聞いて下さい。

六

231

「ぼくに関する事柄については、君は承知しているし、また、このことが実現したならば、それはぼくたちの身のためになることだという、ぼくの考えも君に話した。さて、ぼくは君を恋している者ではないが、しかし、ぼくの願いがそのためにしりぞけられるということは、あってはならぬとぼくは思う。その理由はこうだ。恋をしている人たちというものは、ひとたび欲望がさめたのちには、相手にいろいろとよくしてやったその親切を、後悔するものだが、これに反して、恋していない人々には、後悔しなければならないような時など、けっしてありえないのだ。なぜなら、そういう人々が相手によくしてやるのは、恋の力に強制されるのではなく、みずからの自由な意志によって行なうのであり、わが身の事柄についてできるだけ最善をはかりうるような仕方で、自分の能力に応じてつくす親切なのだから。

それにまた、恋する人たちは、自分の一身上の事柄の中で、恋のためにその処理を誤まったことや、相手によくしてやった数々のことを考え、また、自分が背負ってきた苦労もそれにつけ加えて計算に入れ、結局、相応の

B

恩恵はとっくのむかしに恋人に支払い返してしまったと信ずるものだ。これに対して、ひとがもし恋していない

1　『クリトン』(52B)や『メノン』(80B)などによると、ソクラテスは七〇年の生涯を通じて、出征の場合をのぞいては、一度イストモスへ行っただけで、そのほかは、アテナイをはなれて他の土地へ行ったことはほとんどなかった。それは跛や盲の人以上であったと形容されている。

としたならば、恋のために自分のことがなおざりになったと主張することも、すぎ去った苦労を勘定に入れるということも、身内の者との仲たがいの責任を相手に着せるということも、ともにありえないことである。したがって、これだけのよからぬ事柄が取り除かれるとすれば、残るのは、こうしたら相手によろこんでもらえるだろうと思うことを、心をこめてするということ以外、何もないのである。

C

つぎに、恋する人たちは、その恋の相手に最も強い愛情をよせると主張し、そして、言葉によっても行為によっても、他の人々の憎しみを買ってまでも恋人たちをよろこばせようとする熱意を示すものだが、もしこのことのゆえに、人は自分を恋する人々を大切にすべきだとするならば、――よろしい、それなら、彼らの言うことがもし真実であるならば、後になって彼らに新しい恋人ができた場合、その新しい恋人のほうを今の恋人よりも大事にするだろうということは、容易にわかることではないか。のみならず、もし後になってできたその恋人の気に入るなら、今の恋人に対してひどい仕打ちをさえするだろうことは、明々白々である。

D

だがもともと、心にこのような災いを持った男に、かくも貴重なものをささげなければならない理由が、どこにあろうか。この災いたるや、その何たるかを知っている者なら誰ひとりとして、これを払いのけてやろうと試みることさえしないであろう。じっさい、恋している人たち自身でも、自分が正気であるというよりはむしろ病気の状態にあることを認め、また、自分の精神の乱脈ぶりを知りながらも、ただ自己を支配することができないのだということを、認めているのだから。とすれば、ひとたび彼らの心が正気に返った後で、自分がそのような状態にあるときに考えて決めた事柄を、どうして善しとすることができようか。

その上また、君が最もすぐれた人物を選ぶのに、もし君を恋している人たちの中から選ぶとすれば、君の選択

E の範囲は、少数の者に限られることになるだろう。これに対して、その他の一般の人々の中から、いちばん君のためになる人を選ぶとすれば、君は多数の者の中から選ぶことになるだろう。したがって、その多数の者の中にこそ、君の愛情に値する人物が見出される公算は、はるかに大きいのである。

七

232 ではつぎに、君が世間に認められている掟をおそれ、相手との関係を世人に知られて、指をさされる身となるのが心配だとしよう。ここで当然、次のようなことが予想される。すなわち、恋している人たちは、みずからわが身をかえりみて仕合せと感じるにつけても、他の人々からもまた同じようにうらやまれるだろうと考えて、自分の恋の苦労が実を結ばぬものではなかったということを、あらゆる人々に向かってしゃべりまわり、虚栄心にかられてあらゆる人々に見せびらかしながら、それによって心をたかぶらせることだろう。これに反して、恋していない人たちならば、自分自身にうちかつことができるから、世人の評判ではなく、最善のことを選ぶだろう。

それにまた、恋する者たちが恋人について歩き、それを仕事のようにしていると、どうしてもそれは、たくさんの人々の耳にし目にするところとならざるをえないのだ。その結果として、おたがいに話し合っているところB を見られたとき、人々は、彼らがいっしょにいるのは、これはきっと、恋の欲望をとげたか、あるいはとげようとしているからに違いないと、こう思うだろう。これに対して、恋していない人たちの場合は、相手といっしょにいるからといって、人々は、彼らをとがめようとは思いもかけぬだろう。ひとが友情のゆえに、あるいは何かほかのたのしみのゆえに、誰かと語り合うのはやむをえないことだと、知っているからである。

C　そしてつぎに、君が、友愛の心が永続することの困難を思い、これがほかの場合ならば、二人の間に不和が生じたとしても、そこから起こる不幸は双方に共通のものであるけれども、しかし君が最も大切にしている数々のものを相手にささげたからには、重大な被害をうけるのは君のほうだろうと考えて、心配になったとしよう。その場合、君は当然、君を恋している者たちのほうを、いっそう恐れてしかるべきだろう。なぜならば、恋する者たちは数多くの事柄に苛立ち、何かあれば、それはすべて自分の損害になるとみなすからである。彼らが、自分の恋人が他の人々と交わるのをはばもうとするのも、そのためにほかならない。彼らは、財産を持っている人たちが金の力で、恋がたきとして自分をしのぐのではないかとおそれ、教養ある人々に対しては、知性によって自分を負かすのではないかと、戦々兢々(せんせんきょうきょう)とするのだ。また一般に、何かほかのすぐれたものを持っている人たちがあれば、

D　そのひとりひとりの及ぼす力に、警戒の目を光らせる。そういうわけで、もし彼らが君を説き伏せることに成功して、君がそういったほかの人々を敵にまわすということになれば、そのために君は、友なき孤独の身となるわけだし、他方また、もし君がわが身のためをおもんぱかって、君を恋している者よりもすぐれた分別をはたらかせるとすれば、君はこの相手と仲たがいすることになるだろう。——これに反して、君を恋しているのではなく、みずからの徳の力によって君に対するのぞみをとげた人たち、そういう人たちだったら、君と交わる人々を嫉妬するようなことはなく、かえって、君と交わろうとしない人々のほうを憎むだろう。彼らは、君との交わりをのぞまない人々から自分が軽蔑されているものとみなし、君と交わる人々からは利益をうけると、こう

E　考えるからだ。したがって、二人のこの結びつきが原因となって、彼らに敵意が生じるよりは、友愛が生まれるのぞみのほうが、はるかに大きいのである。

八

233 そしてつぎに、恋する者の多くは、恋人の性格を識ったり、またその他一般に恋人の身の上の事柄に通じたりするより前に、まずその肉体をほしがるものだ。だから、ひとたびその欲望がさめたとき、彼らがなおも恋人たちと親しくすることを望むかどうかは疑問である。これに反して、恋していない人たちの場合、彼らはすでにその前からも互いに親しい間柄にありながら、そういった想いを遂げるのであって、相手から歓楽をあたえられたとしても、それらのたのしみが彼らの愛情を減退させる道理はなく、むしろそれは、将来を約束する記念として心に残るであろう。

そしてつぎに、君は、君を恋する者の言うことに従うよりも、ぼくの言うことに従うほうが、すぐれた人間になるはずである。なぜならば、恋している人たちは、一つには相手の機嫌をそこねるのをおそれ、一つには自分 B 自身も欲望のために心の眼が曇らされているので、恋人の言うこと為すことを、それがたとえ最善の事柄に反したものであっても、ほめそやすからだ。じっさいつぎのようなことはみな、恋の力のなせる業にほかならない。すなわち恋とは、恋する人々をして、事がうまく運ばぬときには、ほかの人には苦しみならぬものごとをも、心の傷手と感じさせるが、事がうまく運んでいるときには、よろこぶ値打のないことまでをも、よしと思わせるようにするものなのだ。したがって恋される側の者たちとしては、このような連中をすばらしい人と思うよりは、気の毒な人間と思うほうが、はるかにふさわしいのである。——これに反して、もし君がぼくに従うならば、ま C ず第一にぼくは、現在の快楽のみにかしずくことなく、将来のためをもはかりながら、君と交わるだろう。ぼく

は恋の奴隷ではなく、自分自身の支配者なのだ。つまらぬことに腹を立てて、強い憎しみをかき立てることもなく、重大な事柄のために、徐々に軽く怒るだけだ。心ならずも犯したあやまちはこれをゆるし、故意にする過誤はこれを払いのけてやるようにつとめながら。じじつこういった態度こそは、長つづきするはずの愛情のしるしにほかならないのだから。

D

けれども、もしかして君の心に、人が恋をするのでなければ、強い愛情というものは生まれえないのではないか、といった考えが浮んだとするならば、君はこういうことに留意すべきである――もしそれがほんとうなら、われわれは、息子を大事にするということも、父や母を大切に思うということもなかったであろうし、信ずべき友を持つということもありえなかったであろう、と。われわれはこれらの人たちと、けっして恋愛的な欲望からではなく、別のいとなみによって結びついているではないか。

九

E

つぎに、もし最も切に求める者たちにこそ身をまかせなければならないとするならば、それならば、一般にほかの場合においても、よくしてやらねばならぬのは、最もすぐれた人々にではなく、最も貧困な人々に対してだということになる。なぜならば、そのような人々こそは、最も大きな悪から救われるわけだし、したがって、よくしてくれた人たちに対して、誰よりも深い感謝の気持をいだくだろうから。とくにまた、自分の家で散財するようなときも、招待すべき客は、当然、親しい人々ではなく、腹一ぱい食うことを乞い求めている者たちでなければならぬ。まったくのところ、そういう連中こそは、敬愛の情を示してもくれるだろう。はべり従ってもくれ

234 るであろう。御機嫌をうかがいに門口(かどぐち)へやってくることだろう。誰よりもよろこんで、なみなみならぬ感謝の気持をいだくだろうし、多くのよきことあれかしと、祈ってもくれることだろう。——しかしながら、おそらくは、身をまかせてしかるべき相手は、そのことを切に求める人たちではなく、恩がえしをする能力がいちばんある人たちなのだ。ただ乞い求めるだけの人たちではなく、そのことに値する人たちなのだ。君の若盛りを享楽しようとする人たちではなく、君が年をとったとき、自分が持っている数々のよきものを、君に分け与えてくれるような人たちなのだ。想いをとげた上で、他の人々に向かっていばるような人たちでなく、恥じらいぶかく、みなに対して沈黙をまもる人たちなのだ。わずかの間だけ熱を上げるような人たちではなく、生涯を通じて変わることなく親しい間柄にあるような人々なのだ。欲望が去れば仲たがいをするための口実をさがすような人たちではな

B く、君が若さの盛りをすぎたとき、そのときにこそ、自分の徳性を示すであろうような人たちなのだ。

そういうわけだから、君としては、これまで話したことをしっかりと記憶し、そして次の事実を心に留めておくがよい——恋する人たちは友人たちから、その行ないがよくないものとみなされて、諫(いさ)められるけれども、恋していない人たちは、身内の者の誰ひとりからも、この交わりのために自分の身の上の事柄に関する配慮を誤まっているというのでとがめられるようなことは、けっしてないものだということを。

さて、おそらく君は、ぼくが、恋していない人なら誰にでも身をまかせるようにと、君に勧告しているのかど

C うかを、たずねるかもしれない。しかし、おそらく恋している人とても、君を恋する人のすべてに対してそんな気になれとは、君にすすめはしないだろうとぼくは思う。なぜならば、すべての者に身をまかせるというようなことは、その厚情を受け取るほうの者にとっても、等しい感謝に値するものではないし、また君のほうにとって

も、君がそのことをほかの人たちに気づかれないようにしようと願うなら、やはり不可能なことなのだから。しかるにこのことからは、何ひとつ害になるようなことが結果してはならないのであって、どちらの側にとっても為になることが生じなければならないのである。

さて、これでぼくは、じゅうぶん話したつもりだ。しかし、もし君のほうで、ぼくが言い落した点があると思って、まだ何か聞きたいことがあるなら、たずねてくれたまえ」。

一〇

どうですか、ソクラテス、この話は？　すばらしい話しぶりだと思いませんか。ほかの点もさることながら、とくに言葉の使い方において。

D

ソクラテス　いや、神業と言ってもいいだろう、友よ、ぼくは、茫然自失してしまったほどだ。そして、ぼくのこの感動は君のせいなのだ、パイドロス。君を見つめていてそうなったのだよ。なにしろ、このぼくには、朗読している間の君の顔が、この話のために、歓喜に輝いているように思われたのでね。つまりぼくは、君がああいった事柄にかけてはぼくよりも精通しているものと信じて、君の調子について行ったのだが、そうしているうちに、君といっしょに——そう、神が乗りうつったような君といっしょに！　——熱狂の中にまきこまれてしまったというわけなのだ。

パイドロス　わかりました。では、そんな調子で茶化すのがいいと思っていらっしゃるのですね。

ソクラテス　おや、ぼくが茶化しているのだって？　大まじめに言っているのがわからないのだね？

E

パイドロス　ソクラテス、そういう言い方はやめて、友情の神ゼウスに誓って、ほんとうのお気持を教えてください――ギリシア人で誰か彼以外の人が、同じ主題について、これよりももっと豊富でもっとたくさんのことを、別に話すことができると思われますか？

ソクラテス　なんだって？　そういう点でもまた、ぼくと君はあの話をほめなければならないのか――つまり、言うべき事柄を作者がすっかり言いつくしていると、見なさなければならぬのかね？　君がさっき言ったような、語句の一つ一つが明確で引き緊っていて、かつ綿密にみがきがかけられているといった点だけを、ほめてはいけないというのかね？　もしそうなら、ぼくはただ君のためにだけ、譲歩しなければならないことになるからね。なぜって、少なくともぼくは、この身のいたらなさのためか、そういう点には気がつかなかったのだから。あの

235

話でぼくの注意をひいたのは、ただその修辞的な面だけで、君がいま言ったようなもう一つの点については、リュシアス自身でさえ、じゅうぶんだとは思っていないだろうという気がしたのだ。またじじつ、パイドロス、失礼ながらぼくの受けた感じを言わせてもらうなら、どうもリュシアスは、同じことを二度も三度もくりかえして話したようだった。まるで、同一の主題についてあまり話の種の持ち合せがないかのように、あるいはおそらく、この種の主題にはぜんぜん関心がないかのようにね。で、彼の話しぶりは結局、同じ事柄をああも言いこうも言いしながら、どちらからでも誰よりもうまく話せるのだぞということを得意になって見せている、といった印象をぼくにあたえたのだ。

B

パイドロス　何をおっしゃるのです、ソクラテス、まさにその点こそが、そもそもこの話のいちばんのとりえではありませんか。つまり、この主題の中に含まれていて、話すだけの価値のあるもののうち、抜けているものの

C

は何ひとつありませんし、それだからこそ、彼によって語られた内容以上に、もっとたくさんの、またもっと価値のある内容をもった事柄をほかに話すということは、けっして誰にもできないだろうということになるのです。

ソクラテス　その点になると、ぼくとしては、もう君の言うことに従うわけにはいかないだろうね。だいいち、あの主題については、昔の賢者たち——その中には男の人も女の人もいるが——が語ったり書いたりしているから、もしここで君に迎合して賛成すれば、ぼくはそういう人たちから徹底的に反駁されることだろう。

パイドロス　誰ですか、その賢者たちというのは？　またどこであなたは、これより立派な話を聞かれたのですか？

一一

ソクラテス　そう今すぐには、口に出てこないよ。しかし、もっと立派な話を誰かから聞いたことは、たしかなのだ。それは佳人サッポオ(1)だったかもしれないし、賢者アナクレオン(2)だったかもしれないし、それともまた、誰か散文作家たちだったかもしれない。ではいったい、何を証拠にこんなことを言うのかといえば、じつはね、君、不思議なことに、ぼくは何かしら胸の中が充実して、リュシアスの話した内容とは別に、あれより見劣りのしないようなことを話せるような感じがするのだ。しかしぼくは、自分の無学を承知しているから、それはどれひとつとして、自分で自分の中から考え出した事柄ではないということは、よくわかっている。だから、思うに結局、これはどこかよその泉から耳を通してはいって来たものであって、ぼくはちょうど一箇の容器よろしく、それによって満たされたとしか考えられない。(3) ところがこれも例の愚鈍がわざわいして、誰からどのようにして

D

聞いたかという肝心のことさえも、すっかり忘れてしまったと、こういうわけなのだ。

パイドロス　いや、これはありがたい、ようこそおっしゃってくださいました。誰からどのようにして聞かれたかということなら、たとい私がお願いしたとしても、話してくださらなくて結構なのです。ただ、あなたがいま言われたこと、これをひとつ、ぜひ実行してください。あなたはたしかにうけ合われました、――この書き物の中の話よりももっと立派で、長さもひけを取らないような別の話を、あの内容からは独立に話してあげようとね。それなら私のほうでも、九人の執政官(アルコーン)にならって、(4)等身大の金の像をデルポイの神殿に奉納することを、あ

1　レスボス島のエレソス(またはミュティレネ)に生まれ、前七世紀末から六世紀にかけて生きた女性の抒情詩人。『ギリシア詞華集』の中に、プラトンの名を冠したサッポオへの頌歌が収められていて、彼女は一〇番目のムゥサと呼ばれている。そのつくるところは恋愛詩が多かった。

2　前五七〇年頃、イオニアの小市テオスに生まれた抒情詩人。当時殷盛をきわめたサモス島の王ポリュクラテスの宮廷にまねかれ、多年をそこですごした。恋と酒をうたった詩が多い。

3　プラトンの作品の中にあらわれるソクラテスは、自分が積極的に何か長い話をしたり、知識を披瀝したりするときには、いつでもこのように、誰か自分よりえらい者から聞いた話だとか、神に乗りうつられたとか、夢にみたとかいった一種の言訳をするのが常である。自分は何も知識をもっていない、ただ他人の思想が生まれるのをたすける役目(産婆術)をするだけだというのが、ソクラテスの立場だからである。

4　九人のアルコーンとは、前五世紀の初期ごろまで実質的な権力をもっていたアテナイ国制の官職であって、一人のバシレウス(王、父祖伝来の祭事その他を司る)、一人のアルコーン(政務長官、父祖伝来のもの以外――エピテタ――を取扱う)、一人のポレマルコス(軍事長官)、六人のテスモテタイ(司法長官、決定された法の記録と保存)からなる。アリストテレスの『アテナイ人の国制』(七の一)によると、ソロンの立法(前五九四年)のとき、制定された法律が廻転板に記録されて、バシレウスの役所のある館に立てられ、「時のアルコーン九人は、中央広場の石の祭壇に誓いを立て、もしこの法の何なりとも犯した場合には、黄金の人像を献納することを宣誓した。これが今日もなお行なわれる誓いのそもそものはじめである」と言われている。

(235)
E
なたにお約束しておきましょう。それも私自身の像だけでなく、あなたのものですよ。

ソクラテス 君という男は世にも愛すべき、それこそほんとうに金無垢(きんむく)のような人間だね、パイドロス。もしぼくの言葉を、リュシアスの話が一から一〇まで失敗作で、ひいては、その内容と何ひとつ共通するところのないほかの話をすることもできるなんて、そんな意味にとっているならばだよ。思うにそんなことは、最も凡庸な作家を相手にしてさえ、できない相談だろう。はやいはなしが、彼の話の主題のことを考えてみても、恋している者よりもむしろ恋していない者に身をまかせるべきだということを論じようというのに、恋していない者の思
236
慮ぶかさを讃え、恋している者の愚かさを非難するという、このどうしても必要不可欠なことをもし言わなかったら、その上で何かほかの事柄を言うことが、誰にできると思うかね？　いや、そういうどうしても必要な議論は、この主題について論じる者に対して、そのまま認めてやり、許してやるべきだとぼくは思う。そして、この種の事柄に関するかぎり、ほめるとすればその着想ではなくて、その構成でなければならぬ。必要不可欠なこと以外の、考え出すのに困難な内容の事柄になってはじめて、議論の構成のほかに、さらにその着想もまたほめるべきなのだ。

一二

パイドロス そのお言葉には賛成です。適切な注意だと思いますから。それでは私のほうもこういたしましょう。——恋していない者とくらべると、恋している者は病気の状態にあるということは、あなたが議論の前提に
B
なさってもよいということにします。そのほかのことについて、ここに持っているリュシアスの話の内容よりも、

もっとたくさんの、もっと価値のある別の内容のことを、もし話してくださったならば、それこそ、キュプセロス家の人たちのささげた像[1]とならんで、オリュンピアに、金を鍛えて造ったあなたの像が建てられますように！

ソクラテス おや、パイドロス、ぼくが君をからかって、君が愛してやまぬ人に文句をつけたのを、本気にとったのだね？ そしてほんとうにぼくが、彼の才知と張り合って、別のもっと多彩な話を試みようとしているとでも思っているのだね？

パイドロス そのことなら、親愛なるお方よ、あなたはさっきの私と同じような羽目に立ち至っているのですよ。何がどうあってもあなたは、できるだけの力をつくして、話さなければならないのですからね。そうでないと、私たちは喜劇役者がやる俗な仕草そのままに、お互いに言葉の返し合いをしなければならないことになりますから、くれぐれも用心してください[2]。そしてさっきのあなたの言いぐさそのままに、「ソクラテスよ、この私にソクラテスのことがわからないくらいなら、さしづめ私は、われとわが身をも忘れてしまったというところでしょう」とか、「話したくてたまらぬくせに、はにかんでみせていた」とか、私に言わせようなどという気にならないでください。それよりも、胸の中にもっているとおっしゃったものをあなたが話さないうちは、私たちはここから立ち去らないのだというふうに、ちゃんとあなたの心を決めることです。ごらんなさい、私たちは人気

C

1 キュプセロス家は、前六五五年頃にキュプセロスがコリントスの僭主となってから、約七十余年間、三代にわたってコリントスの主権を握っていた氏族である。オリュンピアに巨大な黄金のゼウス像を奉納した。

2 この前後のテクストはバーネットによらない。ヘルマンやロバン(ハインドルフ、アスト、シュタルバウムも同じ)のテクストのように読む。

(236)
D

のない場所に、二人きりでいるのですよ。そしてこの私のほうが、若くて腕っぷしも強いのですよ。万事こういった事情を思い合せて、「わが言の葉の底意をさとれ」(1)——。進んで話すよりも、力ずくに訴えられるほうがいいなどという、そんな料簡はおよしなさい。

ソクラテス さりとてそれは殺生な！ パイドロス、ぼくがしろうとのくせに有能な作家の向うを張って、同じ題目で即席の話なんかすれば、笑い者になるのがおちではないか。

パイドロス 今がどんな場合か、御存知なのですか？ 私に向かって体裁を取りつくろうのはおよしなさい。私がひとこと言えば、どうしてもあなたが話をしないわけにはいかなくなるようなことを、ここにちゃんと用意しているのですから。

ソクラテス それはたいへん、ぜったいにそれを言ってはいけないよ。

パイドロス いいえ、だんぜん言いますとも。私のこの言葉は、誓いの言葉となるでしょう。いいですか、

E

「われ汝に誓う」——さてしかし、誰の名に、どの神様の名にかけて？ それとも、このプラタナスの名にかけて誓いましょうか？ ——「まことに、汝もし、このプラタナスの面前において、その話をわれに語らぬとあれば、今後はいっさい、何びとのいかなる他の話をも、汝に示すまじく、伝えまじきことを誓う」。

一三

ソクラテス まいった！ ひどい男だ、話ずきの男を命令どおりに動かす秘訣を、まんまと発見しおったな。

パイドロス それなら何を四の五のと、言いのがればかりしていらっしゃるのですか？

237

ソクラテス　いや、もうあきらめたよ。こともあろうに、君があんなことを誓ってしまったからにはね。まったくのところ、どうしてこのぼくが、話を聞くという楽しみなしにいられようか?

パイドロス　それなら、さあ、話してください。

ソクラテス　ぼくがどんなふうにするつもりか、知っているかね?

パイドロス　何のことですか?

ソクラテス　顔をかくしてから話すのだよ、ぼくは。——一気かせいに話をすませるために、そして君を見ているうちに恥ずかしくなって言葉に詰る、というようなことにならないためにね。

パイドロス　とにかく話だけしてくだされぱいいのです。ほかのことはどうなりと御随意に!

ソクラテス

「では、ムゥサの神たちよ、どうかお導きください。おんみらが調べ高き(リゲイアイ)ムゥサと呼ばれているのは、その歌の性(さが)のゆえであろうとも、あるいは音楽好きのリギュス族の名のゆかりでこの名を得たのであろうとも。(2)——

1　ピンダロスFr. 94 (Bowra)からの引用。

2　リギュスまたはリギュエス人(むかしイタリア半島の北西海岸から今日のフランスの地方に住んでいた民族)の音楽好きは伝説化されていて、戦争のときにもこの民族の大部分の人々は武器をとらず、唱いつづけていたという。そのリギュエスという名前が、ムゥサイ(ミューズの神々)の呼び名リゲイアイ(「調べ高き」)と似ているところから、ここで、「ムゥサイがリゲイアイという呼び名をえたのは、ムゥサイのうたう歌そのものが調べ高い(リゲイアイ)からなのか、それとも、リギュエス人たちの名前からつけられたのか、それはともかくとして……」と言われたわけである。

B　『いざや来りて、わが物語るをたすけたまえ』。これなる世にもすぐれたるおのこは、彼がすでに前から賢しと思うその友〔リュシアス〕の才知を、いま、ますます際立たせようとして、むりやり私にこの物語をかたらせるのです。

＊＊

むかしむかしあるところに、たいへん美しいひとりの子供——というよりも若者がいました。この若者には、たくさんのたくさんの求愛者がありましたが、その中にひとり、口の上手なのがいて、ほんとうは誰にも負けないくらい、その子を恋しているくせに、自分は恋してはいないのだと、その子に信じこませておいたのでした。そして、ある日のこと、彼に言い寄るのに、ひとは自分を恋している者よりも、恋していない者に身をまかせなければいけないのだという、まさにこのことを彼に説得しようとして、次のように語ったのでした。

一四

いとしき子よ、ひとがどんなことを論議するにしても、そこからよき成果をあげようとするなら、はじめにしC　ておかなければならないことが一つある。それは、論議にとりあげている当の事柄の本質が何であるかを、知っておかなければいけないということだ。それをしないと、完全に失敗することになるのは必定である。ところが、大多数の人々は、それぞれの場合に問題にしている事柄の本質を、自分たちが知っていないという事実に、全然気がつかないでいる。それゆえ彼らは、考察をはじめるときに、それを知っているものと決めこんで、お互いにちゃんと同意を得ておかないものだから、さて先へ進んでから、その当然のむくいを受けることになる。すなわ

ち、彼らは、自分自身とも、またお互いに相手の者とも、言うことが一致しないのである。

そういうわけだから、少なくともぼくと君とは、こうしてぼくたちがほかの人々に対して非難しているような事態に、おちいらないようにしようではないか。いまぼくと君とに課せられている問題は、ひとは恋している者と恋していない者との、どちらとより親密な間柄になるべきか、ということだ。だから、ぼくたちはまず、〈恋〉D というものについて、それがどのようなものであり、またどのような力をもつものであるかを、お互いの同意にもとづいて定義しておき、そしてその上で、この定義の内容に目を向け、それとの関連を失わないようにしながら、恋とは有益なことをもたらすものであるか、それとも、有害なことをもたらすものであるかを、考察することにしようではないか。

さて、そもそも〈恋〉とは、一つの欲望であるということは、誰にも明らかな事実である。しかし他方、われわれはまた、恋をしていない者でも、美しいものに対して、やはり欲望をもつことを知っている。そうすると、いったいわれわれは何によって、恋している者と恋していない者とを区別したらよいのであろうか。

ここでひるがえって、次のことに注意する必要がある。それは、われわれひとりひとりの中には、何かわれわれを支配しみちびく二つの種類のちからがあって、われわれはこの二つのものがみちびくままに、そのほうに向かってついて行くものだ、ということである。その一つは、生まれながらにして具わっている快楽への欲望、もう一つは、最善のものを目ざす後天的な分別の心である。われわれの心の中では、この二つが、互いに相和すときもあるが、互に相争うときもある。そして、あるときには一方が、あるときには他方が勝利を得る。で、その E 場合、分別の心がわれわれを理性の声によって最善のもののほうへとみちびいて、勝利を得るときには、この勝

利に〈節制〉という名があたえられ、これに対して、欲望がわれわれを盲目的に快楽のほうへと惹きよせて、われわれの中において支配権をにぎるときは、この支配に〈放縦〉という名があたえられている。むろん、放縦といっても、その触手の向かうところは多岐にわたり、いろいろと多くのかたちをとるから、[1]放縦の名前にもたくさんのものがある。そして、こういったいろいろのかたちの放縦のうちのある一つを、たまたま誰かがとくに目立ってもっている場合、この人は、その目立ってもっている放縦の呼び名を、そのまま冠せられることになるのである。ただし、あまり立派な呼び名でもないし、もつだけの値打のある呼び名でもない。たとえば、欲望が食物を求めて、最善のものを目ざす理性にうち勝ち、さらにはそのほかのいろいろの欲望にうち勝つならば、これすなわち〈食いしんぼう〉であり、そしてこの欲望の持ち主は、同じこの名で呼ばれることになるだろう。また他方、

B 欲望が酒を飲むことを求めて専制君主のような猛威をふるい、そのとりこになっている者をいざなって、酒のほうにみちびいて行く場合、その欲望が何という称号をたまわるかは明白である。またそのほか、いま挙げたのと似たりよったりの名前、似たりよったりの欲望がもっている名前についても、それらの欲望のうちでそのときそのときに支配権をにぎるものの名が、どのように呼ばれるのがふさわしいかということは、言わなくてもわかっているだろう。

さて、どのような欲望を目標において以上すべての事柄を述べてきたかということは、もうほとんど明らかだといってもよいが、しかし言葉に表現されたほうが表現されないままでいるよりも、何といっても明確になるだ

C ろう。つまり、こういうことなのだ。——盲目的な欲望が、正しいものへ向かって進む分別の心にうち勝って美の快楽へとみちびかれ、それがさらに、自分と同族のさまざまの欲望にたすけられて、肉体の美しさを目指し、

指導権をにぎりつつ勝利を得ることによって勢いさかんに(エローメノース)強められる(ロースティサ)とき、この欲望は、まさにこの力(ローメー)という言葉から名前をとって、〈恋〉(エロース)と呼ばれるにいたった、と」。

一五

それはそうと、親愛なるパイドロス、どうも自分ではそんな気がするのだが、君には、ぼくがなにか、すっかり神がかりの状態におちいっているように思えないかね?

パイドロス まったくおっしゃるとおりに、ソクラテス、あなたはいつもに似合わず、何か流暢な調子にとりつかれておられます。

ソクラテス では黙って静かに、ぼくの話を聞いているんだよ。ほんとうにここは、神のすみたまう土地のように見うけられるもの。こういう場所がらだから、もしひょっとして話が先に進むにつれて、ぼくがニュンフに乗りうつられたとしても、驚いてはいけないよ。なにしろ、現にいまでも、ぼくの語り方は、もはやディテュランボス調[2]からほど遠からずというところなのだから。

D

パイドロス ほんとうに、おっしゃるとおりです。

ソクラテス だがそう言う君にこそ、こんなことになった責任があるのだよ。しかしとにかく、話の続きを聞

1 バーネットを除いて一般に採用されているテクスト(B写本のまま)に従う。

2 ディテュランボスは、ディオニュソス(バッコス)を讃える歌の形式。

(238)

きなさい。ひょっとしたら、ぼくを襲おうとしているものが、払いのけられるということもあるかもしれないから。——まあ、そういったことは神様におまかせすることにして、ぼくたちはふたたび、さっきの子に向かって話をはじめなければならない。

「さあ、わがよき子よ、論議しなければならない当の対象が、そもそもいかなるものであるかということは、述べられて定義された。そこでこんどは、いまの定義の内容にしっかりと注目しながら、残されたいろいろの事柄について論じ、恋している者と恋していない者とが、それぞれどのような有益なこと、あるいは有害なことを、彼らに身をまかせる人にもたらすものと予想されるかを、考えることにしようではないか。

E

さて、欲望に支配され、快楽の奴隷となっている者が、その恋の相手を、できるだけ自分にとって快いものに仕立てあげるのは、けだし必定のことであろう。しかるに、ひとが病んでいるときには、すべて自分にさからわないものが快く、逆に自分より力づよいもの、等しい力をもったものはいとわしい。だから、恋する者は、愛人が自分より力づよい者であるのも、自分と等しい力をもった者であるのも、がまんする気にならないで、つねに、相手を自分より劣った、力の弱い人間に仕上げることになる。ところで、劣っているといえば、無知な人間は賢い人よりも、臆病な者は勇気のある者よりも、弁論に無能力な者は雄弁な者よりも、愚鈍な者は聡明な者よりも劣っている。恋する者は、自分の恋する相手が精神的な面において、こういった数々の欠点、さらにはもっと多くの欠点を、それが生まれつきのものにせよ後天的なものにせよ、そなえているならば、必ずやそれによってよろこびを感じ、あるいはそういう欠点の或るものをこしらえあげるのは必定である。そうしないと、当面の快楽

239

をうばわれることになるから。

B だから、恋する者は必然的に嫉妬ぶかくならざるをえない。そして一般に、立派な人間となるのにとくに役だつ数多くの有益な交わりから愛人を遠ざけることによって、重大な害悪をもたらす因となるのは、さけられないことである。とりわけ、叡知を最も高めうるような交わりをさまたげるとき、この害悪は最大となる。叡知を最も高めるものといえば、神聖な哲学のいとなみこそがそれであって、恋する者は、自分が軽蔑されるようになるのをおそれるのあまり、愛人をこのいとなみから遠ざけずにはいられない。またその他一般に、彼は、自分の愛人が何ごとにつけても無知のままでいて、何ごとにつけても、恋している自分のほかには目をくれないようにと策をめぐらすのは、必然のなり行きである。そういった彼ののぞむ通りの人間に愛人がなるならば、愛人はたしかに、自分を恋している彼にとってはこの上なく快い人間となるわけであるが、しかしそれは、われとわが身を最も毒することにほかならないであろう。

C このようにして、精神的な面の事柄に関しては、心に恋をいだく人間は、保護者として、交際の相手として、どうみてもけっして有益な人間ではないのである。

一六

では他方、善をさしおいて快楽を追いかけずにはいられないような人間の言いなりになるとき、身体の状態はどうなるか、またどのように育成されるか、これをつぎに見なければならない。

さて、恋する人間とは、次のような体質の者を追いかけるものだということがわかるだろう。すなわち、それ

(239)

は剛健な者でなく、何か柔弱な者であり、明るい太陽の中ではぐくまれた者ではなく、うすぐらい蔭の下で養わ D れた者であり、男らしい労苦と鍛練に流す汗を知らずに、女々しい軟弱な生活になじんだ者であり、身にそなわる自然の美しさがないために、色をつけ飾りをこらして人工的に身を粧う者であり、そのほかすべてこれに準ずるような生活をしている者なのである。こういった事柄はわかりきったことばかりだから、これ以上言ってみても仕方があるまい。要点を一言でまとめてから次へ進めば、それでたくさんだ。要するに、そういう性質のからだは、戦争その他の重大な危機に際して、敵の人たちを安心させ、逆に味方の者たちを――恋する者自身をも――はらはらさせるものなのである。

かくしてこの点については、明白であるからこれで考察を打ち切って、次にすすまなければならない。――恋 E する者と交わり、その保護を受けるとき、自分が所有しているものをめぐって、われわれにどのような為になることが起こり、あるいはどのような有害なことが起こるであろうか？

さて、少なくともこういうことは、すべての人に――とりわけ当の恋をしている者には――はっきりとわかっている。それは、恋する人というものは、自分の恋の相手が、最も親しいもの、最も好意をいだいているもの、最も神聖なものから見すてられて孤独の身であるようにと、何よりも切に祈るだろうということである。すなわ 240 ち彼は、自分の恋人が、父もなく、母もなく、身内の者もなく、友だちもないことをのぞむだろう。彼はそういう人たちを、恋人とのまたとなく楽しい交わりを非難する邪魔者であると見なすからだ。さらにまた彼は、自分の相手が、金にせよ、あるいは何かほかの所有物にせよ、とにかく財産をもっているならば、そういう相手は、これをとらえることも困難であるし、また、たといとらえたとしても、取りあつかいにくいと考えるだろう。こ

のゆえに、恋する者が愛人に財産があるのをこころよく思わず、逆に財産がなくなればよろこぶのは、まったく必然の道理なのだ。なおまた、恋する者は、みずからの甘い恋の果実をできるだけ久しい間たのしむことをのぞんで、愛人ができるだけ長い間、結婚せず、子供がなく、家を持たずにいるようにと祈るだろう。

一七

さて、世にはたしかに、ほかにもさまざまの悪しきものが存在する。だが、それらのほとんどのものには、ある神様が、しばしの快楽を混入したのである。たとえば、へつらい人はおそるべき獣であり、大害を流す存在であるが、しかしそれでも、自然は、ある種の気のきいた楽しさをこれに混ぜあたえたのだ。また、ひとは娼婦を有害であるとして非難するであろうし、その他世に温存され、いとなまれている多くの同じような性格のものどもについても同様であろう。しかしこういった連中とても、少なくともその日その日かぎりのことだけなら、こよなき悦楽をあたえてくれる人種なのである。

ところがこれにひきかえ、恋する者ときたら、その寵愛をうける者にとっては、ただ有害であるばかりか、ともに日をすごす相手として、およそこれくらい不愉快なものはない。なぜならば、すでに古いことわざにも、『齢同じからざれば、たのしみも同じからず』とあるではないか。これは思うに、年ごろが同じであれば、互いに似かよっているために同じ楽しみへとさそわれて、親しみがわくからであろう。しかしそれにもかかわらず、こういう人たちの交わりでさえも、飽きがくるくらいなのだ。さらにまた、『万事強制的なことは誰にとっても重くるしい』ということも、ひとの言うところであるが、いま言った互いに似たところがないということと共に、この

言葉に言われていることも、恋する者がその愛人と交わる場合に、とりわけ見られる性格なのだ。——年上の身であり ながら、若い者といっしょにいて、昼も夜もそばをはなれようとはせず、有無をいわせぬ欲望の針によって駆りたてられる。この欲望の針は、愛人の姿を見るにつけ、声を聞くにつけ、その肌に触れるにつけ、さらにあらゆる感覚によって感じるにつけて、彼にたえまなく快楽をあたえつつそそのかし、そのために彼は、たのしみを味わいながら、しつこく愛人にかしずくのである。だが、恋されるほうの身になってみれば、同じ時間をいっしょにすごしながら、厭(いと)わしさのきわみにまで至らないための救いとなるようなどんな慰み、どんなたのしみが、そこからあたえられるというのだろう。寄る年波に色あせた顔を見せつけられるのをはじめとして、そのほか、これからおして知られるしろものばかり。その老醜(ろうしゅう)は、話に聞くのさえ、あまり愉快でもないのに、いわんや実際に、その手にもてあそばれることを、たえまなく強いられるにおいてをや。それだけではない。明けても暮れても、あらゆる人との交わりに対して、猜疑(さいぎ)ぶかい眼によって見張りをされる。場ちがいのぎょうぎょうしいお世辞を聞かされるかと思えば、こんどは同じようにして罵りの言葉を聞かされる。ああ、その罵りの言葉たるや、しらふで口にされるときでも堪えられないものなのに、酔った口から出るときは、つつしみのないむき出しの言葉が手あたりしだいに吐き散らされて、堪えられないばかりか、顔も赤らむほどの卑わいなものなのだ!

一八

しかも、恋のつづいている間は有害な人間であり、不愉快な男である彼は、やがて後になってその恋がさめてからは、不実な人間となる。かつて彼は、この将来の時を約して、なんどもなんども誓ったり懇願したりしなが

241

ら、たくさんのことをしてやろうとうけ合い、それによってかろうじて愛人をひきとめて、やがてはよいこともあるだろうという期待ゆえに、その当時のわずらわしい交わりを愛人に堪えさせていたのであった。だが、ついにその約束を果すべきときが来たいま、彼は自分のうちで支配者と指導者をとりかえ、それまでの恋と狂気にかわって、理性と節度とが新しくその地位につき、愛人の知らぬまに、彼はすでにむかしの彼ではなくなっているのだ。かくて愛されていた少年は、むかしと同じ人間と話しているつもりで、ああもなさったではありませんか、こうも言われたではありませんかと、彼に思い出させながら、自分が以前につくしてやったことへの恩がえしをもとめる。けれども、恋していたほうの男は、自分が別人になってしまったとは、体裁が悪くて言う勇気もないし、そうかといって、いまはすでに理性を取りもどして、すっかり正気にかえっているのだから、以前の愚かな

B

支配者の時代に誓ったり約束したりした事柄を、いまさら認めることもできない。前と同じことを行なって、前と似たりよったりの人間になり、ふたたびかつての自分に逆もどりすると困るからである。そこで彼は、こういった過去の負担からの逃亡者となる。陶片は反対側を上に向けて落ちたので[1]、かつて相手を慕っていた者は、必然の結果として契約不履行者となり、いまや身をひるがえして一目散に逃げる。一方はしかたなしに、いきどおりながら、のろいながら、彼の後を追いかけなければならない。それというのも、そもそもの最初から、ぜんぜん心得ておかなかったからなのだ——もともと、恋にとらえられ、その力に強いられて理性を見失っている人間

1　オストラキンダと呼ばれるギリシアの少年の遊びを比喩に使ったもの。東西二組に分れて向かい合い、両面を黒と白にぬった陶片（あるいは貝殻）を間に投げて、白い方の面が上に出たら、東の組が西の組を追いかけ、黒い面が上に出れば、西の組が追いかけて東の組が逃げる。

(241)
C

には、けっして身をまかせるべきではなく、恋をせずに理性を保っている人を選ぶのが、はるかによいのだということを。——さもなければ、自分を、不実な、怒りっぽい、嫉妬ぶかい、厭わしい人間の手にゆだねることになり、財産を害され、からだの状態を毒され、さらに魂の教養の点にいたっては、この上なく重大な害毒をうけるのは必定だということを。そしてこの魂の教養こそは、人間にとっても、神々にとっても、まことにこれにまさる尊いものはなく、今後も永久にありえないものなのである。

されば、いとしき子よ、君はこういったことを、心に留めておかなければならない。そして、恋する者の愛情とは、けっしてまごころからのものではなく、ただ飽くなき欲望を満足させるために、相手をその餌食とみなして愛するのだということを、知らなければならない。

D

うまし子を恋うる者のおもいは
狼の仔羊を愛づるに似たり 」。

一九

……ほら、言わぬことではない、パイドロス。これ以上、ぼくが話すのを聞いてくれるな。ここでもう、この話はおしまいということにしてくれたまえ。

パイドロス おや、話は半分まで来たところではなかったのですか？ これからあなたの話は、恋していない者について、そういう人間にこそむしろ身をまかせなければならないということを、いままでと同じくらいの分量だけお話になるのだろうとばかり思っていました——彼は逆にこれこれのよい点をもっていると、数えあげな

がらですね。ところがあにはからんや、あなたはいま話をやめようとなさる。いったいどうしたというのですか、ソクラテス？

E

ソクラテス　君も迂闊千万な男だ。ぼくがもはやディテュランボス調どころか、すでに叙事詩の調子で話していることに気がつかなかったのか？(1)　それも、話しているのは非難の言葉だというのにだよ。もしこんどは、もう一方の人の讃美などはじめようものなら、ぼくはいったい、どんな調子でやるだろうと思うのかね。だいたい君は、たくらんでぼくをニュンフたちの前にさし出した張本人のくせに、ぼくがまぎれもなく、そのニュンフたちにとりつかれようとしているのを、知らないでいるのか？　――ぼくはだから一言ですまそう。要するに、われわれは恋している者をあれこれと非難したけれども、恋していない者のほうは、ちょうどそれだけの欠点と正反対の、さまざまの善い点をもっているのだ、とね。またじっさい、長々と話す必要がどこにあろうか。これでどちらについても、じゅうぶん話されたことになるではないか。かくていまや、わが物語をして、それにふさわしき運命をうけしめよだ。このぼくは、君に何かもっと難題を強いられないうちに、この川をわたって向うへ行くことにしよう。

242

パイドロス　おや、まだいけません、ソクラテス、この焼けつくような暑さが過ぎさるまでは。ごらんなさい、もうかれこれ、日が中天にかかって動かずといわれる、正午の日盛りではありませんか。それより、ここで待つ

1　ソクラテスの話の最後の言葉、「うまし子を恋うる者のおもいは……」は、原文では、ホメロスの叙事詩と同じダクテュロス・ヘクサメトロス（長短短六脚韻）で語られている。

ことにして、そして待ちがてら、語られた事柄について話し合った上で、涼しくなりしだい、出かけることにしましょう。

B

ソクラテス パイドロス、君という人は、話のことになると神通力(じんつうりき)を発揮するね。まったく大したものだ。なぜって、君の時代に世に出た話が数あるなかで、君が自分で話すにせよ、ほかの人々に何らかの仕方で話すようにさせるにせよ、およそ君ぐらい、たくさんの話が生まれるのに貢献(こうけん)した人物は、ほかにひとりもいない――ただしテバイのシミアス(1)は例外だがね、そのほかの連中よりははるかに上だろう――と、こうぼくは思っているのだが、それがまたもやいま、君が原因となって、ぼくがある話をすることになったらしいのだからね。

パイドロス しめた、それは少なくとも戦いを宣する言葉ではありませんね。しかし、あなたの言われるのはどういう意味ですか。それに何のことですか、その「ある話」とは?

二〇

C

ソクラテス ぼくがまさに川をわたって向うへ行こうとしていたときにね、よき友よ、ダイモーンの合図(2)、いつもよくぼくをおとずれるあの合図が、あらわれたのだ。それはいつでも、何かしようとするときにぼくをひきとめるのだが。――そして、そこからある声が聞えて、ぼくがなんと、神聖なものに対して何か罪を犯しているから、自らその罪を浄めるまでは、ここをたちさることはならぬと、こうぼくに命じたように思えた。ところで、ぼくは占いができるのだ。あまりうまくはないがね。しかしちょうど字の下手な人たちと同じで、ただ自分だけのためなら、けっこう間に合うのだ。だから、ぼくはもう、どんな罪を犯したのかはっきりわかっている。じっ

D

さい、友よ、それほどまた魂というものは、一種の予感の力をもっているのだねえ。げんにぼくは、あの話を語りながらも、ずっと前から、なんとなく胸さわぎがしていた。イビュコス(3)の言葉をかりて言うと、

われ神々の前に罪びととなりて
人の世の誉れを購(あがな)いたるにあらずや

と、なにかしら気が気ではなかった。いまではそれがどんな罪か、すっかり気がついているけれども。

パイドロス で、いったいその罪とおっしゃるのは、何のことですか?

ソクラテス パイドロスよ、君が持ってきた話、それから、君がぼくに命じて語らせた話、あれはおそろしい、おそろしい話だったのだ。

1 ソクラテスに親しいサークルに属する一人。『クリトン』(45B)の中で、ソクラテスを牢獄から逃がすために金を惜しまない人たちの一人として名が挙げられている。『パイドン』の主要登場人物。

2 『ソクラテスの弁明』の中で、ソクラテスはこう言っている。「……諸君も私からたびたびその話を聞かれたでしょうが、私には、何か神からの報せとか、ダイモーンからの合図とかいったようなものが、よく起こるのです。……これは私には、子供のときからはじまったもので、ひとつの声となってあらわれ、それがあらわれるときは、いつでも、私が何かをしようとしているときに、それを私にさし止めるのでして、何かを為せとすすめることは、いかなる場合にもけっしてないのです」(31C〜D)。同様の言葉はプラトンの他の対話篇(『国家』VI. 496C、『エウテュデモス』272E、『テアイテトス』151A、『テアゲス』128Dsqq. など)にも見られる。

3 前六世紀の抒情詩人。イタリア半島の南端レギオンの市に生まれ、後、サモス島のポリュクラテス王の宮廷の一員となった。つぎに出てくるステシコロスを祖とする合唱詩に習熟した。ここに引用されている詩句は、現存の Fr. 51 (Bergk)にみられる。

パイドロス どうしてなのですか?

ソクラテス 愚かで、しかも少しばかり不敬だからだ。おそろしいといえば、これ以上おそろしいどんな話がありうるだろうか。

パイドロス ありえないでしょう。もしほんとうにあなたの言われるとおりでしたらね。

ソクラテス では聞くけれど、君はエロースがアプロディテの子で、神であるとは思わないのか?

パイドロス たしかに、そのように言われていますね。

E

ソクラテス ところが、リュシアスは、けっしてそうは言わなかったし、また、君がぼくの口に魔術をかけて語らせた、君の話にしても同じだ。だが、もしエロースが——事実そうなのだが——神ならば、あるいは何か神にゆかりのあるものならば、少しも悪いものでありうるはずがない。それなのに、いましがたのあの二つの話は、エロースについて、それが悪いものであるかのような口ぶりで語っていた。ここにまず、エロースに対して罪を犯していた点がある。その上、あの二つの話の愚かさかげんたるや、まことに念の入ったものだった。何ひとつたしかなことも、真実のことも言っていないくせに、ある種のつまらない連中をあざむいて、彼らの間で喝采を博しようものなら、まるでひとかどの存在であるかのように、もったいぶってみせるとはね。——だからぼくとしては、友よ、どうしても自分を浄める必要があるのだ。ところで、物語をするにあたって罪を犯した人たちのためには、古くから伝わる浄めの法がある。ホメロスはそれを知らなかったが、ステシコロス(1)は知っていた。すなわちステシコロスは、ヘレネのことを悪く言ったために両眼の視力をうばわれたとき、ホメロスのようにそのことを不可解のままにしておかずに、そこはさすがにムゥサの徒だけあって、その原因を見きわめ、すぐさま次

243

のような詩を作った。

これなるはまことの物語にあらず
おんみ　漕席うるわしき船にも乗りたまわず
トロイアなるペルガマの砦にいたりたまいしこともなし

B

そして、この「パリノーディアー」と呼ばれる詩をすっかり作り終えるや、たちどころに視力を回復したのであった。さて、ぼくは、まさにこの点にかけては、彼らよりもっと賢明にやろうと思う。つまり、エロースのことを悪く言ったかどで何か罰をうけるより一足さきに、エロースに取り消しの詩(パリノーディアー)をささげて償いをするようにつとめるのだ。さっきのように恥ずかしがって顔をかくしたりしないで、堂々と頭を出してね。

パイドロス　そうこなくてはいけません、ソクラテス。何よりもうれしいことを私に言ってくださいました。

二一

C

ソクラテス　それでは、よき友パイドロスよ、君はあの二つの話、さっきのぼくの話も、君が書き物から読ん

1　前七世紀後半から六世紀前半に生きた抒情詩人。シケリアのマタウロスに生まれ、その北岸の町ヒメラに住んだと言われる。合唱隊歌の形式の創始者。ステシコロスの名(「コーラスを設立する人」の意)は、おそらく、ここからつけられた別名であろう。『イリウー・ペルシス(トロイアの略奪)』という作品の中で、女神ヘレネを「二度も三度も結婚し夫を裏切る女」と書いてその怒りにふれ、失明したが、『パリノーディアー』の中で「トロイアに行ったのはヘレネ自身でなくヘレネの幻像である」と取り消すことによって罪を償い、視力を回復したという言い伝えがある。

で語ったのも、どんなに恥しらずなことを言っていたか、わかってくれるのだね。じっさい、ここにもし一人のけだかくおだやかな品性の人がいて、もう一人の同じような品性の人を恋しているか、あるいはかつて以前に恋したことがあるとする。この人がたまたま、ぼくたちの話を聞いていたと想像してみたまえ。恋する者はつまらぬことで腹を立てて強い憎しみをいだくものだとか、愛される少年に対して嫉妬ぶかく、害毒をあたえるとか言っているのを聞いたら、なんと思うだろう。その人はきっと、何か船乗り仲間の間にでも育って、高貴な恋というものを一度も見たことのない連中の話を聞いているのだと、考えずにはいられないだろう。そして、エロース

D

を非難するぼくたちの話に、とても賛成なんかしないだろう。君はそう思わないか？

パイドロス それはもう、ソクラテス、ゼウスに誓って、きっとその人はそう考えることでしょう。

ソクラテス だから、このぼくとしては、そういう人の前に恥を知り、さらにはエロース自身をおそれる気持から、ここでどうしても、聞いた話のいわば塩からい後味を、快い話で洗いきよめたい想いでいっぱいなのだ。またぼくは、リュシアスにも忠告する、ほかの条件が同じなら自分を恋していない者よりも恋している者にこそ、身をまかせなければならぬという話を、できるだけすぐに書くようにと。

パイドロス いや、御安心ください。きっと彼はそうするでしょう。あなたが恋する者をたたえる話をしてく

E

ださるなら、私はどんなことがあっても、こんどはリュシアスに、かならず同じ主題の話を書かせるようにいたしますから。

ソクラテス そのことなら、いやしくも君がいまのままのパイドロスであるかぎり、君を信用しよう。

パイドロス では御心配なくお話ください。

ソクラテス　ぼくが話しかけていた子はどこにいる？　この話もあの子に聞かせてやらなければ。そして聞かない前に早まって、恋していない者に身をまかすようなことのないようにしてやらなければ。

パイドロス　あの子ならここに、お望みのときにはいつでも、あなたのすぐ傍にひかえています。

二二

244

ソクラテス　「それでは、美しき子よ、前の話はミュリヌゥスの人、ピュトクレスの子パイドロスの物語ったものであるが、ぼくがこれから話そうとするのは、ヒメラの人、エウペモスの子ステシコロスの話であるというように、心にとめておきなさい(1)。

話は次のように語られなければならない——

『自分を恋してくれる人がそばにいても、むしろ自分を恋していない者のほうに身をまかせるべきである、それは一方の人が狂気であるのに対して、他方は正気だからだ』と主張する物語は、これは真実の物語ではない。

1　このように固有名詞をたくさん挙げて、それを「心にとめておきなさい」というのは、これらの名前がいずれも具体的な意味に——パイドロスに関わる名は「派手ずきな」（パイドロス）とか「評判を気にする」（ピュトクレス）とかいったあまりよくない意味、ステシコロスの方は「コーラスを設ける人」とか「敬虔な」（エウペモス）とかいったよい意味に——かけて使われているのであろう。

その理由はこうだ。――もし、狂気が悪いものだということが、無条件に言えることだとしたら、この物語はりっぱな根拠をもっていたかもしれない。しかしながら、実際には、われわれの身に起こる数々の善きものの中でも、その最も偉大なるものは、狂気を通じて生まれてくるのである。むろんその狂気とは、神から授かって与えられる狂気でなければならないけれども。

B

まことに、デルポイの巫女も、ドドネの聖女たちも[1]、その心の狂ったときにこそ、ギリシアの国々のためにも、ギリシア人のひとりひとりのためにも、実に数多くの立派なことをなしとげたのであった。だが、正気のときには、彼女たちは、ほんのわずかのことしかなさなかったし、あるいは、ぜんぜん何もしなかったと言ってよいのである。またさらに、シビュラ[2]をはじめとして、そのほか、神に憑かれたときの予言の力を用いて、多くの人々に多くの事柄を予言し、まさに来たらんとする運命のために、正しい道を教えてやった人たちのことは、誰もが知るところであって、もしわれわれがここでそのことを語るならば、いたずらに話を長びかせる結果となるだろう。

けれども、これから言うことは、われわれの主張を裏づける証拠として、たしかに挙げるだけの価値がある。それは、ものの名前を制定した古人たちもまた、狂気(マニアー)というものを、恥ずべきものとも、非難すべきものとも、考えてはいなかったということである。じじつ、もしそうでなかったら、彼ら古人たちは、技術の中

C

でも最も立派な技術、未来の事柄を判断する技術に、ちょうどこのマニアーという名前を織り込んで、この技術を『マニケー』(予言術=狂気の術)と呼ぶようなことはしなかったであろう。いな、彼らは、狂気が神から授けられて生じるとき、これを立派なものとみとめたからこそ、このような名前をきめたのである。もっとも、いま

の人々は、この『マニケー』という名前にτ(t)の字を挿入して、『マンティケー』と呼ぶようになり、この味のある名前をぶちこわしてしまったけれども。

このことはまた、ひとが正気のままで、鳥の様子や、そのほかのしるしを手がかりにして、未来の事柄を探求する技術の場合とくらべてみるとはっきりする。つまり、彼ら古人たちは、そういう正気の人々の技術に対しては、それにたずさわる人々が、思考のたすけをかり、人間の臆測(オイエーシス)をはたらかせて、未来への洞察(ヌゥス)と識見(ヒストリアー)を得るという事実にもとづき、これを『オイオノイスティケー』(占い術)と名づけたのである。[3] いまでは若い人々は、ο(o)をω(ō)と長くして重々しいひびきをもたせ、『オイオーニスティケー』と呼んでいる。

D

1　デルポイにはピュティアと呼ばれる巫女たちがいて、神がかりとなることによってアポロン神の神意をとりついだ。ペルシア戦役のときのアテナイ、ソポクレスの悲劇にえがかれるオイディプス王など、歴史や文学の中に、デルポイでのアポロンの神託がギリシアの個人とポリスの運命に指針を与えた幾多の例をみることができる。
ドドネ(本来はゼウスに連れ添った女神の名)は、バルカン半島の西北方の地を南北に走るエピロス山系の傍にある有名なゼウスの神託の座。ここでも、ゼウスに仕える巫女たちは、何らかの形で神がかりの状態に入って神託を得たのであろう。

2　これも有名な神巫であるが、その名はあちこちの土地と結びつけられていて、正体がはっきりしない。たぶん古くから有名な、イオニア地方のエリュトライにいたシビュラをさすものであろう。後には、シビュライというふうに複数化されて、神巫を意味する一般名詞として用いられるようになった。

3　つまり、「オイオノイスティケー」(oionoistike)という名前は、「オイエーシス」と「ヌゥス」と「ヒストリアー」という三つの語の組み合わせ(*oiesis*+*nous*+*historia*)に由来する、ということ。

このようにして、予言術が占い術よりも、その名前においても、その実際の仕事においても、いっそう完全なものであり、いっそう尊ぶべきものであるのと同じ程度に、ちょうどそれだけ、神から授けられた狂気は、人間から生まれる正気の分別よりも立派なものであるということを、古人はまさしく証言しているのである。

さらにまた、次のような事実を挙げることができる。——そのむかし先祖の犯した何かの罪のたたりによって、世にもおそろしい疾病と災厄とが、その氏族に属するある人々を襲ったことがあった。そのとき、彼らの心に狂気がやどって、神の意をつたえ、この疾病と災厄からのがれる道を、救いの必要な人たちのために見出してやった。すなわち、この狂気は、神々への祈願と奉仕にすがって、それにより、罪を浄めるための儀式をさぐりあて、そのときの災悪から解放される手段を、神に憑かれ正しい仕方で狂った者のために発見し、かくして自分がその心に乗りうつった人を、現在のみならず未来においても、完全に破滅から救ってやったのである。

さらに第三番目に、ムゥサの神々から授けられる神がかりと狂気とがある。この狂気は、柔かく汚れなき魂をとらえては、これをよびさまし熱狂せしめ、抒情のうたをはじめ、その他の詩の中にその激情を詠ましめる。そしてそれによって、数えきれぬ古人のいさおを言葉でかざり、後の世の人々の心の糧たらしめるのである。けれども、もしひとが、技巧だけで立派な詩人になれるものと信じて、ムゥサの神々の授ける狂気にあずかることなしに、詩作の門に至るならば、その人は、自分が不完全な詩人に終わるばかりでなく、正気のなせる彼の詩も、狂気の人々の詩の前には、光をうしなって消え去ってしまうのだ。

B 神々から与えられる狂気がつくり出す、かがやかしい功績としては、このように数々の事柄を、いや、もっと多くの事柄を、ぼくは君に語ることができる。だから、少なくともこの狂気の問題そのものについては、何も恐れないことにしようではないか。そして、ある種の議論が、心の激動している者よりも正気を保っている人を友として選ぶべきだと主張して、われわれをおどかしたとしても、われわれはそれにわずらわされることのないようにしようではないか。そしてそういう説が、いま言った主張につけ加えてさらに、神々は恋というものを、恋する者と恋される者とを益するために彼らにつかわすのではないということを、もし証明できたならば、そのときこそはじめて、勝利の栄冠をになうのをゆるしてやることにしよう。われわれのほうが証明しなければならな C いのは、ちょうどこれと正反対のことだ。すなわち、この恋という狂気こそは、まさにこよなき幸いのために神から授けられるということだ。その証明は、単なる才人には信じられないが、しかし真の知者には信じられるであろう。

そこで、まず最初に、神や人間の魂が、どのような状態を経験したり、どのような活動をしたりするかを見て、魂というものの本性について、その真実をつきとめなければならぬ。証明は、次のようにしてはじまる。

二四

魂はすべて不死なるものである。なぜならば、つねに動いてやまぬものは、不死なるものであるから。しかるに、他のものを動かしながらも、また他のものによって動かされるところのものは、動くのをやめることがあり、ひいてはそのとき、生きることをやめる。したがって、ただ自己自身を動かすもののみが、自己自身を見すてる

ことがないから、いかなるときにもけっして動くのをやめない。それはまた、他のおよそ動かされるものにとって、動の源泉となり、始原となるものである。

D　ところで始原とは、生じるということのないものである。なぜならば、すべて生じるものは、必然的に始原から生じなければならないが、しかし始原そのものは、他の何ものからも生じはしないからである。じじつ、もし始原があるものから生じるとするならば、始原から生じることにはならないであろう。(1)

そして、始原とは生じることのないものであるとすると、他方それはまた、必然的に、滅びるということのないものである。なぜならば、始原が滅びるようなことがもしあったとしたら、いやしくもすべてのものは始原から生じなければならない以上、始原そのものもあるものから生じないであろうし、また他のものが始原から生じるということもなくなるであろう。

このようにして、自分で自分を動かすものは、動の始原であり、それは滅びることもありえないし、生じることもありえないものなのである。もしそうでないとしたら、宇宙の全体、すべての生成(2)は、かならずや崩壊して動きを停止し、そして二度とふたたび、生じてくるために最初の動きを与えてくれるものを、持たないであろう。

E　さて、自己自身によって動かされるものは不死なるものであるということが、すっかり明らかになったいま、ひとは、この〈自己自身によって動かされる〉ということこそまさに、魂のもつ本来のあり方であり、その本質を喝破(かっぱ)したものだと言うことに、なんのためらいも感じないであろう。なぜならば、すべて外から動かされる物体は、魂のない無生物であり、内から自己自身の力で動くものは、魂を持っている生物なのであって、この事実は、魂の本性がちょうどこのようなものであることを意味するからである。しかるに、もしこれがこのとおりのもの

246 であって、〈自分で自分を動かすもの〉というのが、すなわち魂にほかならないとすれば、魂は必然的に、不生不死のものということになるであろう。

二五

さて、魂の不死については、これでじゅうぶんに語られた。こんどは、魂の本来の相(すがた)について、つぎのように語らなければならない。その実際の性格がどのようなものであるかをまともに説明するのは、あらゆる点からみて、神のみができる仕事であり、長い叙述を必要とするが、しかし、何に似ているかを譬(たと)えて話すことなら、人間の力でもできるし、また比較的短い話ですむ。だから、われわれは、この後のほうのやり方で話すことにしよう。

そこで、魂の似すがたを、翼を持った一組の馬と、その手綱をとる翼を持った馭者とが、一体になってはたらく力であるというふうに、思いうかべよう。(3)——神々の場合は、その馬と馭者とは、それ自身の性質も、またそ B の血すじからいっても、すべて善きものばかりであるが、神以外のものにおいては、善いものと悪いものとがまじり合っている。そして、われわれ人間の場合、まず第一に、馭者が手綱をとるのは二頭の馬であること、しか

1 しかるに仮設により、「すべて生じるものは始原から生じなければならぬ」のであるから、この「もし始原があるものから生じるとするならば」という想定は不可能である、という意味。テクストはバーネットによらず、写本(B、T)、シンプリキオス、そしてオクシュリンコス・パピュロスなどが一致して伝える読み方に従う。

2 テクストはバーネットによらず、写本(B、T)、オクシュリンコス・パピュロスなどの読み方に従う。

3 『国家』のⅣ、Ⅸで述べられる魂の「三部分説」によれば、魂は、ものを学ぶことを司る「理知的部分」、怒りや覇気のような激情にかかわる「気概の部分」、食欲や性欲のような「欲望的部分」の三機能からなる。

もつぎに、彼の一頭の馬のほうは、資質も血すじも、美しく善い馬であるけれども、もう一頭のほうは、資質も血すじも、これと反対の性格であること、これらの理由によって、われわれ人間にあっては、馭者の仕事はどうしても困難となり、厄介なものとならざるをえないのである。

それなら、いったいどのようなわけで、生けるものが『死すべき』とか『不死なる』とか呼ばれるようになったのであろうか。これの説明を試みなければならない。

魂は全体として、[1]魂なきものの全体を配慮し、時によりところによって姿を変えながら、宇宙をくまなくめぐ C り歩く。その場合、翼のそろった完全な魂は、天空たかく翔け上って、あまねく宇宙の秩序を支配するけれども、しかし、翼を失うときは、何らかの固体にぶつかるまで下に落ち、土の要素から成る肉体をつかまえて、その固体に住みつく。つかまえられた肉体は、そこに宿った魂の力のために、自分で自分を動かすようにみえるので、この魂と肉体とが結合された全体は『生けるもの』と呼ばれ、そしてそれに『死すべき』という名が冠せられることになったのである。けれども、これを『不死なる』と呼ぶいわれは、じゅうぶんな推理をへた根拠にもとづくかぎり、少しもない。ただしかし、われわれは、神というものを——それを見たこともじゅうぶんに考えたこ D ともないままに——何か不死なる生きもの、というかたちで、すなわち、魂をもち、肉体をもち、しかも両者は永遠に結合したままでいるものというかたちで、その姿を作り上げるのである。

しかしながら、こういった事柄がいかにあるか、またどのように物語られるべきかは、神のみこころのままにゆだねるがよい。われわれは、こんどは、なぜ魂から翼がはなれ落ち、失われるかという理由を理解することにしよう。それは、つぎのような原因によるのである。

二六

そもそも、翼というものが本来もっている機能は、重きものを、はるかなる高み、神々の種族の棲まうかたへと、翔け上らせ、連れて行くことにあり、肉体にまつわる数々のものの中でも、翼こそは最も、神にゆかりある性質を分けもっている。神にゆかりある性質——それは、美しきもの、知なるもの、善なるもの、そしてすべてこれに類するものである。したがって、魂の翼は、特にこれらのものによって、はぐくまれ、成長し、逆に、醜きもの、悪しきもの、そしていま言ったのと反対の性質をもったもろもろのものは、魂の翼を衰退させ、滅亡させる。

E

——さて、天界においては、まずここに、偉大なる指揮者ゼウス、翼ある馬車を駆り、万物を秩序づけ、万物を配慮しながら、さきがけて進み行く。これにしたがうのは、一一の部隊に整列された神々とダイモーンの軍勢。これはつまり、炉をまもる女神ヘスティア[2]のみはひとり、神々のすみかにとどまるからである。そのほかの神々のうちで、一二神の中に数えられ、隊長の地位に任ぜられている神々は、それぞれ自分が配置された隊列にあっ

247

---

1 テクストはバーネットによらず、B写本に従う。

2 オリュンポスの一二神、すなわち、ゼウス(Zeus)、ヘラ(Hera)、ポセイドン(Poseidon)、デメテル(Demeter)、アポロン(Apollon)、アルテミス(Artemis)、アレス(Ares)、アプロディテ(Aphrodite)、ヘルメス(Hermes)、アテナ(Athena)、ヘパイストス(Hephaistos)、ヘスティア(Hestia)を指す。「一一の部隊に整列された神々とダイモーンの軍勢」というのは、一二神からヘスティアを除いた残りの神々が指揮する軍勢であり、ゼウス直属の部隊も含む。「ダイモーン」というのは、地上に墜ちて人間の肉体に宿るべき運命にある、神以外の魂を指すのであろう。——こういった神々の行進のイメージの背後には、宇宙を規則正しく運行する天体の動きが考えられている。「ひとり神々のすみかにとどまる」と言われるヘスティアとは、宇宙の中心として考えられた地球にほかならない。地球は一般にもしばしばヘスティアと呼ばれた。

て指揮をとる。まことに、この天球の内側には、あまたの祝福された光景、あまたの祝福された行路があり、幸福な神々の種族は、それぞれ自らの任務をはたしつつ、この幸多き旅路をめぐり歩くのである。この行進について行くことをのぞみ、しかもついて行くことのできる者は、誰でも行進に参加する。神々の合唱隊には、妬み(ねた)というものがないのだから。

B

けれども、饗宴におもむき、聖餐(せいさん)にのぞむときがくると、彼らは、天球のはてを支える穹窿(きゅうりゅう)のきわまるところまで、けわしい路をおかしてのぼりつめる。神々の馬車は、馬たちの力がつり合い、手綱のさばきも容易であるから、この道程を足どり軽く進んで行く。だが、神以外のものの馬車にとっては、それは苦難多き道のりではある。ほかでもない、悪い性質をもつほうの馬が、馭者によって立派に訓練されているのでないかぎり、地のほうに傾き、彼を下へと引くことによって、重荷となるからである。かくしてこのとき、魂には、世にもはげしい労苦と抗争とが課せられることになる。

C

不死と呼ばれるものの魂は、穹窿のきわまるところまでのぼりつめるや、天球の外側に進み出て、その背面上に立つ。回転する天球の運動は、そうして立った魂たちを乗せてめぐりはこび、魂たちはその間に、天の外の世界を観照する。

二七

天のかなたのこの領域のことを、地上の詩人の誰ひとり、それにふさわしく讃えうたった者はなく、これから先もけっしてないであろう。だが、それはつぎに話すようなものである。ひとは、とくにほかならぬ真理につい

て話そうとするとき、真実ありのままを語る勇気をもたなければならないのだから。

まことに、この天のかなたの領域に位置を占めるもの、それは、真の意味においてあるところの存在――色なく、形なく、触れることもできず、ただ、魂のみちびき手である知性のみが観ることのできる、かの〈実有〉である。真実なる知識とはみな、この〈実有〉についての知識なのだ。されば、もともと神の精神は――そして、自己に本来適したものを摂取しようと心がけるかぎりのすべての魂においてもこのことは同じであるが――けがれなき知性とけがれなき知識とによってはぐくまれるものであるから、いま久方ぶりに真実在を目にしてよろこびに満ち、天球の運動が一まわりして、もとのところまで運ばれるその間、もろもろの真なるものを観照し、それによってはぐくまれ、幸福を感じる。一めぐりする道すがら、魂が観得するものは、〈正義〉そのものであり、〈節制〉であり、〈知識〉である。この〈知識〉とは、生成流転するような性格をもつ知識ではなく、また、いまわれわれがふつうあると呼んでいる事物の中にあって、その事物があれこれと異なるにつれて異なった知識となるごとき知識でもない。まさにこれこそほんとうの意味であるものだという、そういう真実在の中にある知識なのである。

魂はこのほかにも、さまざまの真実在を同じようにして観照し終え、その饗宴を楽しんでしまうと、ふたたび天の内側にはいって、すみかへと帰って行く。そして帰りつくや、馭者は馬たちをかいば桶のところへつれて行って立たせ、彼らの前に神食を投げ与え、それに添えて、神酒を飲ませてやる。

二八

以上が神々の生である。ではこれに対して、ほかの魂たちはどうかというと、まずそのなかで、最もよく神に

つき従い、最もよく神に倣う魂は、馭者の頭をあげて天外の世界に超出させ、回転する天球の運動に神々とともに運ばれながら、馬たちにわずらわされつつも、かろうじてもろもろの真実在を観得する。また、ある魂は、ときには頭を天外にもたげ、ときには天球の中に沈み、馬たちが暴れるものだから、そのために、真実在のあるものを目にするけれども、あるものを見そこなう。しかし、そのほかの魂たちはといえば、いずれも上の世界を切なく求めないものとてはなく、神々の行進について行こうとはするものの、力およばず、天の表面の下側から出られないままいっしょにめぐり運ばれ、互いに他の前に出ようともがきながら、踏み合い、つき合いする。かくしてそこに起こるのは、言語に絶した擾乱と抗争と辛苦の汗とであって、馭者の不手際のために、多くの魂がかたわものとなり、また多くの魂が多くの翼を傷つき折られるのは、じつにこのときなのである。これらの魂たちはみな、はなはだしい労苦に疲れはて、真実在の観照によって浄められないままに、そこを立ち去って行く。立ち去ってからのち、彼らは、思わくをもって身を養う糧とする。

B

しかし何のために、『真理の野』のある領域を見ようとして、このような懸命の努力が費されるのであろうか。それは、ほかでもない、その牧場からは、魂の最もすぐれた部分が本来糧とすべき牧草がとれるからであり、そして、魂を軽快にする翼の原質は、この牧草によって養われるからである。

C

そして、アドラステイア(1)の掟は、つぎのように定められている。

いかなる魂も、神の行進に随行することができて、真実なる存在のうちの何かを観得したならば、つぎの回遊のときまで禍いを免がれてあること。そしてもし、その回遊の機会ごとに、つねにそうすることができるならば、いつまでも損なわれずにいること。

しかし、ひとたび魂が、神に随行することができなくなって、真実在を観そこなったならば、そして、何らかの不幸のため、忘却と悪徳とにみたされて重圧を負い、この重さによって翼を損失し、地上に墜ちた場合、法は次のように定める。すなわち、この魂は、この世に生まれる最初の代においては、いかなる動物の中にも植えつけられることなく——

D

真実在をこれまでに最も多く見た魂は、知を求める人、あるいは美を愛する者、あるいは楽を好むムゥサのしもべ、そして恋に生きるエロースの徒となるべき人間の種の中へ——

第二番目の魂は、法をまもり、あるいは戦いと統治に秀でる王者となるべき人の種の中へ——

第三番目の魂は、政治にたずさわり、あるいは家を斉え、あるいは財をなす人の種の中へ——

1　一般にはアナンケ(必然)の名で呼ばれる女神。司法にたずさわる女神ディケに対して、アドラステイア(アナンケ)は立法を司る女神である。パネス(光)の神が内奥に鎮座するところの、女神ニュクス(夜)の社の扉の前にあって、神の掟をすべてのもののために制定することをつとめとした。アドラステイアとは、「逃れることのできない」「不可避の」という意味をもつ。

ギリシアには、祖先・死者崇拝を中心とする宗教や、オリュンポスの神々の崇拝のほかに、来世論的な教義を中心にした、オルペウス教の名で呼ばれる宗教があって、ピンダロス、エンペドクレス、ピュタゴラス派の哲学、そしてプラトンなどに影響をあたえたと推定されている。以上にみられたような、魂の受肉や、人間の死後の応報賞罰や、輪廻転生などの考え方も、その大体の輪郭はいずれもオルペウス教のものと認められている。先に見た立法の女神のアドラステイアという名前もその一つである。こういった死後および生前における魂の運命という主題については、この箇所のほかに、『ゴルギアス』(522 E sqq.)、『パイドン』(107 D～115 A)、『国家』X. 614 A sqq. などのミュートスがある。とくに、このなかの前二者が互いに内容的に親近しているのに対して、『国家』Xのいわゆるエルのミュートスは、『パイドロス』のこの箇所(とくに248 E～249 B)と密接な関連をもつ。↓補注A(二六九—二七〇ページ)。

E

第四番目の魂は、労苦を愛する体育家、あるいは肉体の治療にたずさわるべき人の種の中へ植えつけられること。

第五番目の魂は、占い師の生活、あるいは何らかの宗教的儀式にたずさわる生を送るであろう。

第六番目の魂には、創作家、あるいは誰かほかの、真似を仕事とする人たちに属する者の生が——

第七番目の魂には、職人あるいは農夫の生が——

第八番目の魂には、ソフィストあるいは民衆煽動家の生が——

第九番目の魂には、僭主(せんしゅ)の生が適合するであろう。

二九

さて、すべてこれらの生において、正しい生活を送った者は、よりよい運命にあずかり、不正な生活を送った者は、より悪い運命にあずかることになる。その次第は次のとおりである。

249

それぞれの魂は、自分たちがそこからやって来たもとの同じところへ、一万年の間は帰り着かない。それだけの時がたたないと、翼が生じないからである。

ただし、誠心誠意、知を愛し求めた人の魂、あるいは、知を愛するこころと美しい人を恋する想いとを一つにした熱情の中に、生を送った者の魂だけは例外である。これらの魂たちは、一千年の週期が三回目にやって来たとき、もし三回続けてそのような生を選んだならば、それによって翼を生ぜしめられ、三千年目にして立ち去って行く。

それ以外の魂たちは、最初の生涯を終えると、裁きにかけられ、裁かれてのち、あるものは地下の世界にある仕置きの場におもむいて、正当な罰をうけ、またあるものは、司直の女神ディケにより天上のある場所にはこび上げられて、人間の姿において送った生活の功により、それにふさわしい生をそこで送る。そして、千年目の年に、このどちらの魂も、第二回目の生をくじ引きで選ぶためにやってきて、それぞれが欲するような生を選ぶ。B 人間の魂が動物の生の中に入るのも、また、かつて人間だった者が、動物からふたたび人間に帰るということも、この場合に起こるのである。

じっさい、もしいやしくも、魂がかつて一度も真実在を見なかったならば、そのような魂は、われわれ人間のこの姿の中にはけっしてやって来ないであろう。なぜかというと、人間がものを知る働きは、人呼んで〈実相〉（エイドス）というものに則して行なわれなければならない、すなわち、雑多な感覚から出発して、思考の働きによって総括された単一なるものへと進み行くことによって、行なわれなければならないのであるが、しかるにこのことこそ、かつてわれわれの魂が、神の行進について行き、いまわれわれがあると呼んでいる事物を低く見て、C 真の意味においてあるところのもののほうへと頭をもたげたときに目にしたもの、そのものを想起することにほかならないのであるから。

まさしくこのゆえに、正当にも、ひとり知を愛し求める哲人の精神のみが翼をもつ。なぜならば、彼の精神は、力のかぎりをつくして記憶をよび起こしつつ、つねにかのもののところに——神がそこに身をおくことによって神としての性格をもちうるところの、そのかのもののところに——自分をおくのであるから。人間はじつにこのように、想起のよすがとなる数々のものを正しく用いてこそ、つねに完全なる秘儀にあずかることになり、かく

(249) D

てただそういう人のみが、言葉のほんとうの意味において完全な人間となる。[1] しかしそのような人は、人の世のあくせくとしたいとなみをはなれ、その心は神の世界の事物とともにあるから、多くの人たちから狂える者と思われて非難される。だが神から霊感を受けているという事実のほうは、多くの人々にはわからないのである。

三〇

かくしていまや、第四の狂気に関するすべての話は、ここまでやって来た。――狂気という。しかり、人がこの世の美を見て、真実の〈美〉を想起し、翼を生じ、翔け上ろうと欲して羽ばたきするけれども、それができずに、鳥のように上の方を眺めやって、下界のことをなおざりにするとき、狂気であるとの非難を受けるのだから。この話全体が言おうとする結論はこうだ。――この狂気こそは、すべての神がかりの状態のなかで、みずから狂う者にとっても、この狂気にともにあずかる者にとっても、もっとも善きものであり、またもっとも善きものから由来するものである、そして、美しき人たちを恋い慕う者がこの狂気にあずかるとき、その人は『恋する人』と呼ばれるのだ、と。

E

すなわち、われわれが話したように、人間の魂は、どの魂でも、生まれながらにして、真実在を観てきている。もし観たことがなければ、この人間という生物の中には、やって来なかったであろう。しかしながら、この世のものを手がかりとして、かの世界なる真実在を想起するということは、かならずしも、すべての魂にとって容易なわけではない。ある魂たちは、かの世界の存在を見たときに、それをわずかの間しか目にしなかったし、またある魂たちは、この世に墜ちてから、悪しき運命にめぐり合せたために、ある種の交わりによって、道をふみ外

250

して正しからざることへむかい、むかし見たもろもろの聖なるものを忘れてしまうからである。そういうわけで、結局、その記憶をじゅうぶんにもっている魂はといえば、ほんの少数しか残らない。これらの魂たちは、何かかの世界にあったものと似ているものを目にするとき、おどろきに我を忘れ、もはや冷静に自分を保っていられなくなる。だが彼らは、それをじゅうぶんに認知することができないために、何がわが身に起こったのかわからない。

B

たしかに、〈正義〉といい、〈節制〉といい、またそのほか、魂にとって貴重なものは数々あるけれども、この地上にあるこれらのものの似像の中には、なんらの光彩もない。ただ、ぼんやりとした器官により、かろうじて、それもほんの少数の人たちが、それらのものを示す似像にまで到達し、この似像がそこからかたどられた原像となるものを、観得するにすぎないのである。けれども〈美〉は、あのとき、それを見たわれわれの眼に燦然とかがやいていた。——それはわれわれが、幸福な合唱隊とともに、われわれはゼウスに従いつつ、他の人々は他の神に従いつつ、祝福された観ものと光景を目にしたときのことであり、そして、数ある秘儀のなかでも、たぐいなく祝福されたものと言うことが許される秘儀に、参与したときのことであった。その秘儀を祝うわれわれ自身、全きすがたのままで、後にわれわれを待ちうけていた数々の悪をまだ身に受けぬままで、全きすがたの、純一な、荘重な、祝福にみちた聖像を、明るくきよらかな光の中に啓示され、それによって奥義を伝授されながら、

C

1 ここで使われている、秘儀に参加することを意味する名詞「テレテー」と、同じ意味の動詞の分詞「テルーメノス」と、「完全なる」という形容詞「テレオス」とは、いずれも「テロス」(τέλος)という語から来た同根の言葉であって、互いに意味を通じ合い、二義的に用いられている。秘儀については↓補注B(二七〇—二七一ページ)。

この秘儀を祝ったときのことであった。そのとき、きよらかな光を見たわれわれもまたきよらかであり、肉体（ソーマ）と呼ぶこの魂の墓（セーマ）、いま牡蠣のようにその中にしっかりと縛りつけられたまま、身につけて持ちまわっているこの汚れた墓に、まだ葬られずにいた日々のことであった……

三一

思い出よ、これらの言葉にたたえられてあれ。この思い出ゆえに、われわれは、すぎし日々への憧れにうながされて、いま、あまりにも多くの言葉を費してしまった。

D　〈美〉の話にかえろう。さきに言ったように、〈美〉は、もろもろの真実在とともにかの世界にあるとき、燦然とかがやいていたし、また、われわれがこの世界にやって来てからも、われわれは、美を、われわれの持っている最も鮮明な知覚を通じて、最も鮮明にかがやいている姿のままに、とらえることになった。というのは、われわれにとって視覚こそは、肉体を介してうけとる知覚の中で、いちばんするどいものであるから。〈思慮〉は、この視覚によって目にはとらえられない。もしも〈思慮〉が、何か〈美〉の場合と同じような、視覚にうったえる自己自身の鮮明な映像をわれわれに提供したとしたら、おそろしいほどの恋ごころをかり立てたことであろう。そのほか、魂の愛をよぶべきさまざまの徳性についても、同様である。しかしながら、実際には、〈美〉のみが、ただひとり〈美〉のみが、最もあきらかにその姿を顕わし、最もつよく恋ごころをひくという、このさだめを分けあたえられたのである。

E　さて、秘儀に参与したのが遠いむかしになった者、あるいは堕落してしまった者は、この地上において美の名

251

で呼ばれるものをみても、この世界からかの世界なる〈美〉の本体へとむかって、すみやかに運ばれることはない。したがって、そういう者は、美しい人に目を向けても、畏敬の念をいだくこともなく、かえって、快楽に身をゆだね、四つ足の動物のようなやり方で、交尾して子を生もうとし、放縦になじみながら、不自然な快楽を追いかけることを、おそれもしなければ、恥じもしないのである。

だが、これに対して、秘儀を受けたその経験がまだ新たなる者、数多くの真実在をかつてじゅうぶんに観得した者が、〈美〉をさながらにうつした神々しいばかりの顔だちや、肉体の姿などを目にするときは、まず、おののきが彼を貫き、あのときの畏怖の情の幾分かがよみがえって彼を襲う。ついで、その姿に目をそそぎながら、身は神の前に在るかのように、怖れ慎しむ。もし、いたく狂える者よと思われるのを恐れていなかったとしたら、聖像や神に対するごとくに、彼はその愛人にいけにえを捧げることであろう。ところで、その姿を見つめている

B

うちに、あたかも悪寒(おかん)の後に起こるような一つの反作用がやってきて、異常な汗と熱とが彼をとらえる。それは、彼が美の流れを——翼にうるおいをあたえる美の流れを——眼を通して受け入れたために、熱くなったからにほかならない。そしてこの熱によって、翼が生え出てくるべきところがとかされる。この部分は、すでに久しい前から、硬くひからびて、すっかりふさがってしまい、翼の芽ばえをさまたげていたのであった。いまや養分がつぎこまれると、翼の軸は膨(ふく)れ、その根から、魂の姿の全体を蔽うまでに成長しようとする躍動をはじめる。魂はもと、その全体にわたって、翼を持っていたのだから。

三二

C　かくして、このような状態のとき、魂の全体は、熱っぽく沸きたち、はげしく鼓動する。それはちょうど、歯が生えはじめたばかりのとき、人々が歯のまわりに感じるあの状態——歯ぐきのところに感じるむずかゆさといら立ち——あれと同じ感覚なのだ。翼が生えかけている人の魂は、まさにそれと同じ経験を味わい、翼が生じるにあたって、熱っぽく沸きたち、いらいらし、うずくものを感じる。

そこで、この魂が、少年にそなわる美をまのあたりに見つめながら、そこから流れてやってくる粒子を——このように粒子(メレー)の流れ(ロエー)の放射(ヒーエナイ)であるがゆえに、それは『愛の情念』(ヒーメロス)と呼ばれるのであるが[1]——この愛の情念を受け入れて、うるおいをあたえられ、熱くなるときは、魂はそのもだえから救われて、よろこびにみたされることになる。

D　けれども、魂が相手からひきはなされ、うるおいが涸渇(こかつ)するときには、翼の生え出る口も、すべてからからに乾いてふさがり、翼の芽ばえを閉じこめてしまう。すると、この翼の芽は、情念といっしょに完全に内部に閉じこめられてしまうので、あたかも高鳴る脈搏のように跳びはね、それぞれ自分の出口を刺戟する。そのために、魂は、くまなくつつきまわられて、荒れ狂い、もだえ苦しむが、しかし一方、記憶にまざまざと残る美しい人の面影は、この魂によろこびをあたえる。こうしてよろこびと苦しみとがまじり合うために、魂は、味わったこともない不

E　思議な感情にいたく惑乱(わくらん)し、なすすべを知らずに狂いまわり、そして、狂気にさいなまれて、夜は眠ることができず、昼は昼で、一ところにじっとしていることができず、ただせつない憧れにかられて、美しさをもっている

その人を見ることができると思うほうへ、走って行く。で、ついにその姿を目にとらえ、愛の情念に身をうるおすや、魂は、それまですっかりふさがっていた部分を解きひらき、生気をとりもどして刺戟と苦悶から救われ、他方さらに、このくらべるものとてもない甘い快楽を、その瞬間に味わうのである。だからこそ、できることなら離ればなれになろうとはしないし、また、この世の何びとをも、この美しい人よりも大切に思うようなことはない。彼は、母を忘れ、兄弟を忘れ、友を忘れ、あらゆる人を忘れる。財産をかえりみずにこれを失っても、少しも意に介さない。それまで自分が誇りにしていた、規則にはまったことも、体裁のよいことも、すべてこれをないがしろにして、甘んじて奴隷の身となり、人が許してくれさえすればどのようなところにでも横になって、恋いこがれているその人のできるだけ近くで、夜を過そうとする。宜なるかな、その身に美をそなえた人こそは、この魂の畏敬のまとであるのみならず、最大の苦悶をいやしてくれる人としてこの世に見出すことのできた、たったひとりの医者なのである。

252 B

美しき子よ、ぼくの話を聞いてくれる人よ、この心情を、人間たちは恋(エロース)と名づけているのだが、神々のもとではそれが何と呼ばれているかを聞いたなら、当然のことながら君は、その名の新奇さのために笑うことだろう。しかし、ぼくの間違いでなければ、あるホメロス語り(2)の人たちが、非公開の詩の中から、エロースにさ

1　これも語源論のひとつ。「ヒーメロス」(ἵμερος)＝「ヒーエナイ」(ἰέναι)＋「メレー」(μέρη)＋「ロエー」(ῥοή)

2　「ホメロス語り」(Homeridai)というのは、ホメロスの血筋を引き、その世襲の権利によってホメロスの詩を吟唱することを許されていた者たちの呼び名(後にはこの血縁関係による制限はなくなった)であるが、彼らはホメロスに関する特別な専門的知識をもっていて、一般に流布されたテクストにはのっていない秘教的な詩句を知っていた。

C

さげられた二行の詩句を引いているのだ。その一つの行は、はなはだ奔放なもので、あまり厳格に韻をふんでいないけれども、とにかくこううたっている——

翼もてるエロース　そはまこと　死すべきものどもの呼べる名なり
されど不死なる神々は　これをプテロースとこそ呼べれ　翼(プテロン)生いしむるその力ゆえに

もとより、これらの詩の文句を信じてもよいし、信じなくてもよい。しかし、それにもかかわらず、恋する人々がなぜ恋するか、またその心情はどのようなものかといえば、それはまさに、ぼくが話したようなものなのだ。

三三

さて、恋にとらえられた者が、かつてゼウスの従者であった一人ならば、翼にゆかりある名をもつこの神(エロース)の加える重荷に、ほかの人たちよりもしっかりと堪えることができる。これに対して、アレスのしもべとして、その隊列に加わって回遊した者たちの場合は、彼らがエロースにとらえられ、その恋する相手から何か悪い仕打ちをうけたと思い込むようなとき、殺気だって、恋人をわが身もろともに、犠牲の血まつりにささげることをあえて辞さない。そしてこのように、各〻の人は、堕落しないでいる間、また、この地上における最初の

D

代の生を送る間、自分がその隊員の一人だったそれぞれの神に応じて、その神を敬まい、できるだけその神をみならって生を送り、かつはまた、恋人たちやそのほかの人たちと交わり身を処する仕方も、この自分の神の流儀にしたがう。だから、各人は、美しい人たちを恋するにあたっても、それぞれ自分の性格にしたがって恋の相手を選択し、そして選んだ相手その人を神とみなしつつ、崇敬し礼拝するために、いわば自分の聖像として仕立て

上げ、飾るのである。

E かくして、まず、ゼウスの従者であった人々は、自分たちによって恋される者の魂が、何かゼウスに似た性格をもっていることを求める。そこで彼らは、相手が生まれつき知を愛し、人の長たるにふさわしい天性をもっているかどうかをしらべ、求めるとおりの相手を見出してその人を恋するようになると、あらゆる手段をつくしてその天性が実現するようにつとめる。その際、もし彼らがそれまでに、この愛知のいとなみにたずさわったことがなければ、いまやそれを手がけはじめて、少しでも学びうるものがあれば誰からでも教えをうけるし、また自分でも探求を進めるのである。自分の主であった神の本性を自分自身の中から発見しようとしてたずねて行く、

253 この探求の道を、らくに彼らは進むことができる。それはほかでもない、彼らは自分の神に対して、熱烈なまなざしを向けずにはいられないからだ。そして、記憶のうちにその神に到達して霊感にみたされるや、彼らは、人間の身で神に参与することが可能なかぎり、その神の習性と生き方とをわがものにする。しかも彼らは、じつにこういったこともみな恋人のおかげだと考えて、なおもますますその愛情をたかめ、もしバッコスに憑かれた女たち(3)が行なう奇蹟のように、ゼウスから汲みとりえたならば、恋人の魂にこれを注いで、恋人を自分の主なる神

1 プラトンにおいては、至高神ゼウスはとくに「知」の象徴であり、愛知者(ピロソポス)のまもり神である。

2 戦の神。

3 ディオニュソス(バッコス)の祭りにあたって、女の信徒たちは、神がかりの状態で、夜間たいまつをかざし、山野を走りながら踊り狂う。興奮の極、一種の失神状態になると、地面から乳や蜜が流れ出し、彼女たちはこれを汲みとるといわれる。この女の信徒たちが、「バッカイ」とか、「狂乱の女」(マイナス、または複数でマイナデス)とか呼ばれる。

にできるだけ似た者にするのである。

B　他方、ヘラ(1)に従っていた人たちはいずれも、相手が王の性格をもった者であることを求め、そういう相手を見出したならば、すべてにつけて同じことを、この恋人に対して行なう。さらに、アポロンをはじめそれぞれの神の従者だった人たちも、その神にならって道をあゆみ、自分たちの愛人が同様の性格をもっていることを求め、そして求める相手を得たときは、自分自身も神をみならうとともに、愛人にも同じようにすることを説得したり、そのための訓練をほどこしたりしながら、それぞれの力でできるかぎり、その神の生き方に従い、その神の姿に近づくようにと、愛人を導いて行くのである。こうした愛人への態度には、嫉妬もなければ、いやしい人間がもつような、けちくさい悪意とてもない。いな、彼らのこのような行為には、ただひたすら、力のかぎりをつくし

C　て、愛人を自分に、ひいては自分の尊崇する神に、できるだけ完全に似た人間にしようとする努力あるのみである。

されば、真に恋する者たちがいだく熱意と、そのさずける秘儀とは、いやしくももし彼らがその熱烈なのぞみをぼくの言うような仕方で達成するならば、恋のなせる狂気に憑かれたこの友の手によって、かくも美しく、かくも祝福されたものとして、愛される者の身に与えられるのである。——しかしそのためには、恋する者は愛人をわがものとしなければならぬ。では、恋する者の手にとらえられる愛人は、どのようにしてとらえられるのであろうか。その次第をこれから話してあげよう。

三四

この物語のはじめに、われわれは、それぞれの魂を三つの部分に分けた。その二つは、馬の姿をしたものであり、第三のものは、馭者の姿をもったものであった。いまも引きつづいて、これらの姿をそのまま思い浮べることにしよう。ところで、われわれの説くところによると、これらの馬のうち、一方はすぐれた馬であり、他方はそうでないということであった。しかし、われわれは、そのよい馬がどのようなよいところをもち、悪い馬がもっている悪い点とはどのようなものかということについては、くわしく話さなかった。それをいま、話さなくてはいけない。 D

そこで、この二頭の馬のうち、よいほうの位置(2)にある馬をみると、その姿は端正、四肢の作りも美しく、うなじ高く、威厳ある鉤鼻、毛なみは白く、目は黒く、節度と慎しみをあわせ持った名誉の愛好者、まことの名声を友とし、鞭うたずとも、言葉で命じるだけで馭者に従う。 E

これに対して、もう一方の馬はとみれば、その形はゆがみ、贅肉に重くるしく、軀(からだ)の組み立てはでたらめで、太いうなじ、短い頸、平たい鼻、色はどすぐろく、目は灰色に濁って血ばしり、放縦と高慢の徒、耳が毛におおわれて感がにぶく、鞭をふるい突き棒でつついて、やっとのことで言うことをきく。

——さて、馭者が恋ごころをそそる容姿を目にして、熱い感覚を魂の全体におしひろげ、うずくような欲望の針を満身に感じたとしよう。馭者のいうことをよくきくほうの馬は、このときもいつもと同じように、慎しみの 254

---

1 ゼウスの妃。「知」の神ではないが、天界の王妃であるから、その従者は「王の性格をもった者」と言われるのであろう。

2 右側のこと。

念におさえられて、自分が恋人にとびかかって行くのを制御する。けれども、もう一方の馬は、もはや馭者の突き棒も鞭もかえりみればこそ、跳びはねてはしゃにむにつき進み、仲間の馬と馭者とにありとあらゆる苦労をかけながら、愛人のところに行って、愛欲の歓びの話をもちかけるようにと彼らに強要する。馭者とよい馬とは、B はじめのうちこそ、道にはずれたひどいことを強いられたのに憤然として、これに抵抗するけれども、しかし最後には、苦しい状態が際限なくつづくと、譲歩して要求されたことをするのに同意し、引かれるがままに前へ進む。そしてそのまぢかまで来たとき、いまや彼らは、愛する人の光りかがやく容姿を目にする。

三五

だが、馭者がその姿を目にしたそのとき、彼の記憶は〈美〉の本体へとたちかえり、それが〈節制〉とともにきよらかな台座の上に立っているのを、ふたたびまのあたりに見る。よびおこされたこの光景に、彼は怖れにふるえ、C 畏敬に打たれて、仰向けに倒れ、倒れざまにやむをえず、握った手綱をはげしくうしろに引くため、その勢いに二頭の馬は、両方とも尻もちをついてしまう。一方はさからわないから引かれるがままに、暴れ馬のほうは、ひじょうにもがきながら。

遠くへひきさがってから、一方の馬は、はじらいと驚きのために、魂を汗でくまなく濡らす。しかしもう一頭のほうは、くつばみを引かれて転倒したために受けた痛さがやんで、やっとどうやら元気を回復すると、怒りを破裂させて罵りはじめ、馭者と仲間の馬とに向かって、卑怯にも、臆病にも、持ち場を捨て約束を裏切ったと言D っては、数々の罵言をあびせかける。そしてまたもや、気の進まぬ彼らを強いて、むりやりに近くへ行かせよう

とし、先まで延ばしてくれるようにと彼らが頼むと、やっと不承ぶしょうにそれを承諾する。約束されたその時が来ると、この馬は、忘れたふりをしている彼らにそれを思い出させ、暴れ、いななき、ひっぱりながら、またしても、同じことを言い寄るために愛人のそばに行くことを強要し、そして近くへ来るや、頭をかがめ、尾を張り、くつばみをくわえこんで、恥じる気色もなく前へひっぱる。しかしながら、馭者は、前のときと同じ感情にさらにいっそう強く動かされて、あたかも競馬場の騎手が、出発点の綱のところから、はやり立つ馬を引きもどすときのような勢いで、うしろに倒れ、この暴れ馬の歯の間にくわえこまれたくつばみを、前にもましてはげしく、力まかせに引っぱって、口ぎたなく罵るその舌とあごとを血に染め、その脚と腰とを地にたたきつけて『苦痛の手に引き渡す[1]』。E

こうして幾度となく同じ目にあったあげく、さしものたちの悪い馬も、わがままに暴れるのをやめたとき、ようやくにしてこの馬は、へりくだった心になって、馭者の思慮ぶかいはからいに従うようになり、美しい人を見ると、おそろしさのあまり、たえ入らんばかりになる。かくして、いまやついに、恋する者の魂は、愛人の後をしたうとき、慎しみと怖れにみたされることになるのである。

三六

255 かくして愛人のほうは、恋を装おう者によってではなく、ほんとうに心の底から恋している者によって、身は

1 ホメロス(『イリアス』第五巻三九七行ほか)的な表現。

神のごとく、ありとあらゆる奉仕を受けるわけであるし、それにもともと彼自身の天性が、自分に仕えてくれるこの人と親しくなるように生まれついているわけであるから、もしひょっとしてそれ以前に学び友だちとか、あるいはほかの誰かから、恋する者に近づくのは恥ずべきことだと説きつけられて、偏見を植えつけられていたとしても、そしてそのために恋する者をしりぞけることがあったとしても、しかし、やがて時のたつにつれて、彼の年齢が熟するのと、ものごとの必然のなり行きの結果として、彼は自分を恋している者を、交際の相手として受け入れるようになるのである。

B

まことに、運命のさだめは、悪しき者が悪しき者と真の友となることも、さらに、善き人が善き人と友にならずにいることも、けっしてゆるさないのだから。――そして、ひとたび相手を迎え入れ、その語りかける言葉や交わりを受け入れてみると、恋する者がもつ優しい心情が身近かに感じられて、恋される者の心は感動に打たれる。彼は、はっきりと識る――神に憑かれたこの一人の親しい人にくらべれば、他のすべての友人たち、すべての身内の者たちを、よしいっしょに合せたとしても、彼らの与える友愛などは、ものの数にも入らないということを。

C

ところで、そのまま変らずにこの状態をつづけ、体育その他の交わりの機会に、からだを触れ合ったりしながら、相手に近づいて行くとしよう。そのとき、いまや、かのこんこんと湧き出づる流れ、ガニュメデス(1)を恋したゼウスが、愛の情念と名づけたあの流れが、恋する者に向かっておびただしく流れて来て、彼の中に吸い込まれ、いっぱいに満たされると、その一部は外に流れ出る。そして、あたかも風やこだまが、なめらかで固いものにあたってはねかえり、そこからふたたび、もと来たところへと帰って行くように、この美の流れも、ふたたびもと来た美しい愛人のもとへと帰り、眼を通って中へはいる。中へはいったこの流れが、本来通るべき路をへて魂に

D まで行き着き、彼の心をかきたてるとき、それは翼の出口をうるおし、翼が生えんとする衝動をあたえ、そして、こんどは恋されている者の魂を、恋でみたすことになるのである。

かくして、この愛人は恋する――しかし、何を恋しているのであろうか。彼はそれがわからずに、とほうにくれる。彼は、自分の心を動かしているものが何であるかを知りもしなければ、説明することもできない。たとえてみれば、ひとから眼の病いをうつされたときのようなもの、何が原因でこうなったのか、言うことができぬ。あたかも、鏡の中に自分の姿を見るように、自分を恋している人の中に、自分自身をみとめているのだということが、彼には気がつかないのだ。そして、彼を恋している人がそばにいれば、その人と同じように彼のもだえは

E やみ、はなれていれば、またも同じように、互いにせつなく求め合う。ほかでもない、自分ではそれを恋ではなく、友情だと思って、そう呼んではいるものの、彼の心にやどるものは、映(うつ)ってできた恋の影、こたえの恋なのだから。彼は、自分を恋している人の欲望と影の形に添うがごとき、しかしそれよりやや力の弱い欲望を――その人の姿を見、そのからだに触れ、くちづけをし、ともに寝ようという欲望を感じる。またじじつ、そのつぎには、当然のなり行きとして、ほどなくそういったことをするのである。

こうして、彼らが同じ床を分ち合うとき、彼を恋している者の放縦な馬は、馭者に向かって言うべきことを心得ていて、これまでさんざん苦しい目にあったかわりに、少しばかりの楽しみをいま味わうのが当然だと主張す

1 トロイアの伝説上の祖トロスの子、美少年。その美しさがゼウスの目にとまり、類いまれな駿馬(あるいは黄金の酒)を身の代(しろ)に、鷲(わし)によって(あるいはゼウス自身が鷲に姿を変えて)天界に連れ去られ、ゼウスの侍童となった。

る。けれども、愛人のほうの放縦な馬は、何を言ったらよいのかわからない。ただ、欲望に胸はふくれて思いは惑い、この、世にも心のやさしい人を、愛情をもって迎え入れようと、自分を恋している人のまわりに腕を投げかけ、くちづけをする。そして、相並んで横になるとき、もしのぞまれたなら、身をまかせて、自分としてできるかぎり、この人をよろこばせることを拒まないだろうという気持にまでなる。しかし、また一方では、仲間のよいほうの馬が、つつしみと理性をもちながら、馭者と力を合せて、そういったことに対して抵抗するのである。

三七

さて、そこでもし、精神のよりすぐれた部分が、二人を秩序ある生き方へ、知を愛し求める生活へとみちびくことによって、勝利を得たとしよう。その場合まず、この世において彼らが送る生は、幸福な、調和にみちたものとなる。それは彼らが、魂の中の悪徳の温床であった部分を服従せしめ、善き力が生ずる部分はこれを自由に伸ばしてやることによって、自己自身の支配者となり、端正な人間となっているからだ。そして他方、この世の生を終えてからは、翼を生じて軽快になり、かくして、それこそほんとうの意味でオリュンピアの競技ともいえる三番勝負において、その一つを勝ちとったことになる。(1) これにまさる善きものは、人間的な正気も、神のさずける狂気も、けっして人間に対して与えることはできないのだ。

B

では これに対して、恋人たちの生き方がもっと俗なものであって、その生き方において愛し求められるものは知ではなく、名誉であったとしよう。この場合には、おそらくは、酒に酔っているときとか、あるいは他の何らかの機会に注意が散漫になっているときに、二人の中にすむ放縦な馬たちが、魂が隙だらけになっているのをみ

C

すましてこれをとらえ、力を合せて同じ目的に向かって導いた上で、多くの人々から『幸福』だと思われている特定の行為をかち得て、[2]愛欲を達成する。そして、ひとたびそうしたからには、もはや彼らはそれから先も、その行為をつづけて行なうことになるが、しかし、精神の全体がよしと決めて行なうわけではないから、それは数少ない機会にしかすぎない。たしかに、こういった二人の者もまた、先の二人ほどではないにしても、互いに愛情によって結ばれた友なのであって、恋のつづく間も、恋がさめてのちも、その親しいあいだがらのままで生を送るのである。D 彼らは、自分たち二人が、最も大きな愛情の保証を互いに取りかわしたのだと思い、いつの日かそれをやぶって、憎み合う間柄となるのは、許されないことだと信じているのであるから。そして、その生涯を終えるにあたっては、翼なしに、しかし翼を生じようとする衝動をもちながら、肉体をはなれて行く。したがって、彼らがかちとる恋の狂気の褒賞(ほうしょう)は、けっして小さなものではないことになる。なぜならば、すでに天界の道行きの一歩を踏み出した者たちに対してさだめられた掟は、もはや暗い世界におもむいて、地の下の旅路を行くことではなく、E 明るい生を送り、手に手をとって道を行きつつ幸多き時をすごすこと、そして時きたれば、恋の力によって、相ともに翼を生ずることなのだから。

---

1 オリュンピアの相撲競技は、三回相手を投げ倒すことによって勝とされた。同様に、知を愛する恋人たちは、彼らのそのような生を三回選ぶならば、特別にもと来た天上の神々のもとへと帰ることが許される(249 A)。そして、いままさにそのような生の一つを終えたのであるから、ちょうど、オリュンピア競技の三番勝負の一つを勝ちとった者と、同じ立場にあると言われたわけである。

2 テクストは、シュタルバウムやトンプソンとともに、写本(B、T)のままを読む。

三八

おお、いとしき子よ、かくも偉大なる、かくもこの世ならぬこれら数々の幸いを、恋する者の愛情は君に贈ることであろう。しかしながら、これに対して、恋していない者によってはじめられた親しい関係は、この世だけの正気とまじり合って、この世だけのけちくさい施しをするだけのものであり、それは愛人の魂の中に、世の多 257 くの人々が徳としてたたえるところの、けちくさい奴隷根性を産みつけるだけなのだ。そしてそのあげく、この魂を、知性なきままに、九千年の間(1)、地のまわりと地の下とを、さまよいつづけさせるであろう。

***

おお、親愛なるエロースよ、以上が、私たちの力のゆるすかぎり、できるだけ美しく、できるだけりっぱに作りました取り消しの詩(うた)、私たちはこれをあなたにささげて、私たちの罪をつぐなうことにいたします。『ほかの点もさることながら、とくに言葉の使い方において(2)』、このパイドロスのために、一種詩的な話し方をしなければなりませんでした。——ともあれ、先の話のことはおゆるしくださり、このたびの物語を嘉(よみ)したまいて、やさしいみこころと深いお情とにより、けっしてあなたからたまわった恋の技術を、お怒りのために取り上げてしまわれたり、不具にしてしまわれたりすることのありませんように。そして私が、美しい人たちのもとで今よりも B もっと大切にされることを、おゆるしくださりますように。もし、先ほどの話の中で、パイドロスと私とが、何かお耳にさわるようなこと(3)を口にいたしましたとすれば、なにとぞ、そのとがは、あの話の父親であるリュシア

スにあるものとおぼし召されて、彼があのような種類の話をすることを一切やめるように、おとりはからいください。そして、彼の兄ポレマルコス(4)が、すでに哲学のほうに心を向けておりますのと同じように、彼をこの愛知のいとなみのほうに向かわせてくださいませ。そういたしますれば、リュシアスを慕っているこのパイドロスもまた、もはや今のように、二つの道の間に立ってためらうことなく、ただ一途にエロースをめざし、哲学的な談論に親しむことに、その生をささげることでございましょうから」。

三九

パイドロス そうなったほうが私たちのためによいのでしたら、ソクラテス、あなたがいま言われたとおりになることを、私もあなたといっしょにお祈りさせていただきます。――ところで、あなたの物語ですけれども、C 前のお話とくらべてその格段のできばえに、私はさっきから、ほとほと舌をまいているのです。おかげで私は、リュシアスが私の目に貧弱にみえるようなことになるのではないかと、それが心配になってきました――ただしそれは、彼がもう一つ別の話を作って、この物語と張り合おうというような気に、もし万一なったとしてものはなしですが。じっさい、つい最近の話なのですが、ちょうどそのことで彼をあしざまに非難した人が政治家たち

1 なぜ「九千年」かについては、補注Aの(3)(二六九ページ)を見よ。
2 234Cにおいて、パイドロスがリュシアスの話について言った言葉である。
3 テクストは、写本(B、T)のままを読む。
4 ポレマルコスはソクラテスの仲間の一人。プラトンの『国家』は彼の家が舞台になっている。前四〇四年にできた三〇人寡頭政府の犠牲になって最期をとげた。

のなかにいて、その人は罵りながら、しじゅう彼のことを「弁論代作人」(ロゴグラポス＝話を書く人)[1]と呼んでいたといういきさつもあったことですからね。まあそんなわけで、おそらく彼は名誉を保持しようと思って、私たちのためにに話を書くことをひかえるでしょう。

D

ソクラテス 君も若いねえ、ちょっとそれはおかしな見方だし、また君は、自分の友だちについてだいぶ見当ちがいをしている――そんなふうにリュシアスを、一々ものに動ずる男だと考えているとすればね。それに、おそらくまた君は、そのリュシアスを罵ったとかいう人がそういう言葉を口にしたのを、非難の意味にとっているのだろうね。

パイドロス ええ、どうもそういう様子でしたからね、ソクラテス。それに、あなた御自身だって御存じのはずでしょう――国家において最も有力で最も威厳をもった人たちが、自分がソフィストと呼ばれはしないかと後世の思わくを気にして、文を書いたり自分の書きものを後に残したりするのを恥じるという事実を。

E

ソクラテス パイドロスよ、「心地よきうねり」[2]という言い方のいわれがナイル河のあの長いうねりから来ているのを、君はすっかり忘れているな。そしてこのうねりのことに加えて、もう一つ君の見のがしていることは、政治家のなかで最も気位の高い連中というものは、文を書いたり、書きものをのこしたりすることが最も好きな人たちであるということだ。少なくとも彼らは、何か一つの文を書くや、それを賞めてくれる人々を歓迎するあまり、それぞれの場合に彼らを賞讃する者たちの名を、まず冒頭につけ加えて書きしるすではないか。

パイドロス それはどういう意味ですか？ わかりかねるのですけれど。

ソクラテス 政治家の書いたものには[3]、そのいちばんはじめのところに、賞讃者の名がまっさきにしるされて

いるのが、君にはわからないのだね。

パイドロス どういうふうにですか？

ソクラテス 「政務審議会により議決されたり」とか「民会により議決されたり」とか、あるいはその両方によって議決されたとか、たしかそんなようなことがうたわれているし、また、「誰それが提案するところなり」[4]——こんなふうに文書の作者は、自分のことを大いにもったいをつけて語り、かつ讃えるわけだが——とにかくこういう文句をかかげておいてから、しかるのちに先へ進んで、その賞讃者たちに自分の知恵を披露するという段どりになるのだ。ときにはたいへんな長い文案を作成することによってね。それとも、君には、こういった種類の仕事が、ひとつの書きものにされた文とは別のものであるようにみえるのかね？

1 原語のロゴグラポスは、文字通りには「話を書く人」という意味であるが、ふつうは、裁判の法廷弁論の代作を請負うことを職業とする人を指す。リュシアスは、ちょうどそのようなロゴグラポスであった。↓補注C（二七一ページ）。

2 負け惜しみのために、心とは裏腹のことを言うのに用いる、ことわざ的な表現。エジプトのナイル河の大きな屈曲は、航路を甚しく長くして旅行く人々を悩ますものであるが、人々はそれを「心地よきうねり」と逆の表現で呼ぶ。政治家が、ものを書くことを非難するのも、この種の逆表現なのだ、という意味。

3 テクストはバーネットによらず、写本（すべての）のままを読む。

4 いずれも法令（プセーピスマ）の最初に記される言葉の形式。新しく法令が制定されるときには、任命された委員（シュングラペウス）が法案を起草し、それが政務審議会（ブーレー）と国民議会（エクレーシアー）に付託されて可決されたり否決されたりする。また現行法は司法長官たち（テスモテタイ）によって毎年検閲されるが、不備な法律があればそれを指摘して代案を起草することができ、それが討議に付せられて前の法案との間に採択がきめられた。この前後で言われていることは、このような事柄に関連している。

B

パイドロス　いいえ、けっして。

ソクラテス　さてそこで、もしこの文案が裁可されて記録にのこされるならば、「作者はよろこび勇んで劇場からひきさがる」ということになるし、逆に、もしそれが抹殺されて、彼が文を書く仕事に参与することに失敗し、文を作る(法案を起草する)資格がないということになれば、彼自身もその仲間たちも、歎き悲しむのだ。

パイドロス　大いにそのとおりです。

ソクラテス　これはつまり、明らかに、彼らがそういった仕事を軽蔑しているのではなく、心から讃美しているからにほかならない。

パイドロス　たしかにそうです。

C

ソクラテス　ところでどんなものだろう、一人の弁論家なり王なりが、リュクルゴス(1)とかソロンとかダレイオス(2)とかいった人たちのもっていた権威をかちえて、文を書く人として一国に不滅の名をのこすほどになったとき、彼は、まだ生きている間から、自分で自分を神にも等しい人物と思い、また、後世の人々も、彼の作成した文書をみて、やはりそういった同じ意見を彼についてもつのではなかろうか？

パイドロス　大いにそのとおりでしょう。

ソクラテス　それで君は、いま言ったような人々の誰かが、それがどんな人であれ、またたとえリュシアスに対してどのような悪意をいだいているにせよ、ただものを書くという、まさにこのことだけで、リュシアスを非難すると思うかね？

パイドロス　あなたのおっしゃることから考えていくと、たしかにそんなことはなさそうですね。じっさい、

もしそれを非難するとすれば、どうやら彼らは、自分自身がやりたいと思っている事柄を非難することにもなるようですから。

四〇

D ソクラテス　してみると、少なくとも文を書く(話を作る)ということそれ自体は、何も恥ずべきことではないのは、これはもう、何びとにも明らかだ。

パイドロス　そうとしか考えられません。

ソクラテス　むしろぼくの思うのには、その話し方や書き方が上手ではなく、恥ずべき拙劣な仕方で話したり書いたりすること、このことにしてはじめて、恥ずべきこととなるのだ。

パイドロス　明らかにそうですね。

ソクラテス　それならば、ものを書く場合の上手下手というのは、どのようなやり方をさして言うのだろうか。——パイドロスよ、この問題について、ぼくたちは、リュシアスなり、さらにほかの誰でもいい、いやしくもかつて何か書いたことのある人、あるいは何か書こうとする人を、吟味してみる必要があるかね？　それは政治的な文書であれ、個人的な書きものであれ、また、詩人として韻文を書くのでもいいし、しろうとの資格で散文を

1　スパルタの法律制度を創設したと言われる人物。

2　カンビュソスの後をついで前五二一—四八六年にわたりペルシアの王位にあり、ペルシアの盛大の基礎を固めた。

書くのでもよいのだが。

E **パイドロス**　必要があるかですって？　いや、それならいったい、こういった問題を研究するたのしみに生きがいを求めるのでなかったら、極言すれば人はそもそも何を目的に生きて行くことができるというのでしょう。じっさい、よもや、苦しみが先立つのでなければたのしみを感じることすらできないような、あの快楽のためではありますまい。肉体的な快楽のほとんどすべては、そういう性質をもっていて、この特徴のゆえにまた、正当にも奴隷的な快楽と呼ばれているのですけれども。(1)

259 **ソクラテス**　とにかく、こうして見たところ、暇はたしかにあるようだし、同時にまた、ぼくにはどうもこんな気がする――暑い日盛りのならいとて、ぼくたちの頭の上では、蟬たちが、うたったり、お互いに話し合ったりしているけれども、彼らはそうしながら、上からぼくたちのほうをも見まもっているのだ、とね。だから、もしあの蟬たちが、ぼくたち二人も多くの人々と同じように、このおひるどき、談論をとりかわさないで居ねむりをし、心が懶(ものう)いままに、彼らのうた声にうっとりと魅せられているのを見るならば、当然のことながら、彼らはぼくたちを嘲笑することだろう。これはきっと、奴隷たちか何かが、自分たちのところへひと休みしにやってきて、泉のそばで羊たちのように惰眠をむさぼりながら、おひるどきを過しているのだろうと、こう彼らは考えることだろうから。けれども、彼らがもし反対に、ぼくたちが談論をとりかわしながら、ちょうどセイレンたち(2)のそばを無事に船で通り抜けるように、彼らのそばにいながらそのうた声に魅惑されないでいるのを見るならば、きっ

B と彼らは感心して、人間どもに与えるようにと神々から授かっている贈りものを、ぼくたちに与えてくれることだろう。

四一

パイドロス　なんですかいったい、彼らがもっているその贈りものというのは？　どうも私は初耳のような気がするのですが。

ソクラテス　それはどうも、ムゥサの徒ともあろう者が、こんなことに初耳だとは困ったものだね。こういう話があるのだ。

――むかし、あの蟬たちは人間だった。ムゥサの女神たちがまだ生まれない前の時代に生きていた人間どもの仲間だったのだ。ところが、ムゥサたちが生まれて、この世に歌というものがあらわれるや、当時の人間たちの中のある人々は、たのしさに我を忘れるあまり、食べることも飲むことも忘れてただうたいつづけ、そして、自分でそれと気がつく間もなく死んで行ってしまった。その後、蟬たちの種族が生まれたのは、この人々からであって、彼らはムゥサたちから、つぎのような贈りものを受け取って来たのだ。すなわち、彼ら蟬たちの種族は、

C

1　『国家』(IX. 583 Bsqq.)や『ピレボス』(31B～52B)において、このような快楽は、実際には大して快楽でもないようなことが、ただ苦痛とのコントラストによって非常に大きな快と感じられたり、ときにはたんなる苦痛の欠如が一種の快と感じられたりするその性格のゆえに、「偽りの快楽」と規定されている。

2　南イタリア海上の島に住む三人の歌の女神たち(絵画では下半身が鳥の姿をした女神として描かれる)。一人は竪琴を弾じ、一人は唱い、一人は笛を吹き、傍を船で過ぎる人々を魅惑し、生命をうばった。オデュッセウスは、彼女たちの島を通過するとき、仲間の者の耳を蠟で塞ぎ、自分のからだをマストにしばりつけてその歌を聞いた(『オデュッセイア』第一二巻三九行以下)。

この世に生をうけると、何ひとつ身を養う糧を必要とせずに、生まれたすぐその時から死んで行くその日まで、食わず、飲まず、ただひたすらうたいつづけ、そして、死んでからのちは、ムゥサたちのもとへ行って、この世に住む人間どもの中の誰が、どのムゥサの女神を敬まっているかを、報告するということになったのである。かくして彼らは、まずテルプシコラ(1)には、合唱と舞踏の中にあってこの女神に尊敬をささげた人々のことを報告して、そういう人々を、いっそうこの女神に愛されるようにしてやり、エラトには、恋に生きながらこの女神を崇 D 敬した人々のことを告げ、またそのほかのムゥサたちにもこのように、それぞれの女神にささげられる尊敬の種類にしたがって報告をもたらす。ところで、もっとも年長の女神であるカリオペと、それにつづくウラニアとには、知を愛し求める哲学のいとなみのうちに生を送り、この二人の女神の音楽に尊敬をささげる人々のことを報告するのだが、まことにこの二人の女神こそは、ムゥサたちの中でもとりわけ、天界のことと、神と人間の物語とをつかさどる女神たちであって、その送る歌声は、最も美妙なのである。——

こういうわけで、いろいろとたくさんの事情があるのだから、ぼくたちは、このおひるどきを過すにあたって、何ごとかを話していなければならない。惰眠をむさぼっているわけにはいかないのだ。

パイドロス　わかりました。ぜひともそれなら、話をしなければなりません。

四二

E **ソクラテス**　さあそれでは、いまぼくたちが提出していた考察の課題、すなわち、どのようにすれば上手に話をしたり、上手に文を作ったりすることができるのであるか、また、どのようにすればその反対になるのか、こ

れを考察しなければならない。

パイドロス ええ、むろん。

ソクラテス では、いやしくもものごとが上手に立派に語られるためには、それを語る人の精神は、自分が話そうとしている事柄に関する真実を、よく知っていなければならないのではなかろうか?

パイドロス その点については、親愛なるソクラテス、私は次のように聞いています。つまり、将来弁論家となるべき者が学ばなければならないものは、ほんとうの意味での正しい事柄ではなく、群衆に――彼らこそ裁き手となるべき人々なのですが――その群衆の心に正しいと思われる可能性のある事柄なのだ。さらには、ほんとうに善いことや、ほんとうに美しいことではなく、ただそう思われるであろうような事柄を学ばなければならぬ。なぜならば、説得するということは、この、人々になるほどと思われるような事柄を用いてこそ、できることなのであって、真実が説得を可能にするわけではないのだから、とこういうのです。

260

ソクラテス 「ゆめ聞き流しにせぬがよかろう」(2) パイドロス、賢者たちが口にする言葉というものをね。彼ら

---

1 文芸音楽の女神ムゥサ(ミューズ)は九人いて、総括的に複数形でムゥサイと呼ばれる。その名前は、カリオペ(Kalliope――叙事詩をつかさどる)、クレイオ(Cleio――歴史)、エウテルペ(Euterpe――笛)、テルプシコラまたはテルプシコレ(Terpsichore――合唱と舞踏、コロス)、エラト(Erato――抒情詩、恋愛詩)、メルポメネ(Melpomene――悲劇)、タリア(Thalia――喜劇)、ポリュヒムニア(Polyhymnia――讃歌、後にマイム)、ウラニア(Urania――天文学)である。ただし、各々の女神の職能はいろいろに言われ、必ずしも固定していない。ここでは、テルプシコラ、エラト、カリオペ、ウラニアの名だけが挙げられている。

2 『イリアス』第二巻三六一行において、ネストルがアガメムノンにむかって言う言葉。

の言うところには一理あるのかもしれないから、必ずしらべてみなければならない。だから君がいま言ったことも、やはり、見のがしにしてはならないのだ。

パイドロス　おっしゃるとおりです。

ソクラテス　それなら、こういうふうにしてそれをしらべてみよう。

パイドロス　どのようにしてですか？

B

ソクラテス　かりにぼくが、敵軍を防ぐために馬を手に入れなさい、と君に説得しようとするとしよう。しかしその場合、二人とも馬というものを知らないのだ。ただし、ぼくは君について、パイドロスは馬とは最も大きな耳を持った家畜であると思っているという、これだけのことを知っているとしたら……

パイドロス　たしかにそれは、おかしなことになるでしょう、ソクラテス。

ソクラテス　いや、まだまだ。その先を聞きたまえ。ぼくは大まじめで君を説得しようとする——驢馬(ろば)を対象として念頭におき、それを馬と呼んで、こんなふうのことを言いながら推奨の辞を作ってね。「この動物を所有しているということは、家で飼うにしても、戦いに出たときも、何ものにもかえがたいほど大切なことである。

C

その背中に乗って戦うのに便利だし、おまけに荷物を運ぶこともできる、またそのほか多くのことに役に立つ動物である」。

パイドロス　そこまでいけばもう、完全なお笑いぐさでしょうね。

ソクラテス　でも、恐ろしくかつ憎むべき存在であるよりは、お笑いぐさであることのほうが、(1)まだましなのではないだろうか？

パイドロス それはそうかもしれません。

ソクラテス それならば、弁論家が、何が善であり悪であるかを知らないでいながら、同じように善悪をわきまえぬ国民をつかまえて、説得しようとする場合を考えてみよう。この場合彼は、「驢馬の影」(2)といった些細な事柄について、馬とかんちがいしながら、賞讃の言葉を作るというのではなく、悪について、それを善と信じながらそうするのである。もしこの弁論家が、群衆の思わくというものを研究しつくすことによって、善い事柄のかわりに悪い事柄を行なうように説得するとしたら、君はどう思う？　彼の弁論術は、こうして蒔いた種からあとでどのような収穫をおさめるだろうか？

D

パイドロス たしかに、あまり感心した収穫ではないでしょう。

四三

ソクラテス ところで、よき友よ、ぼくたちは必要以上に、言論の技術というものを責めるのに酷でありすぎたのではないだろうか。おそらくこの技術はこう言うだろう。「あきれた人たちですね、何をいったい、くだら

---

1 テクストはバーネットによらず、ベッカー、シャンツ、ファウラーとともに写本(B、T)のままを読む。ただし φίλον を削除。

2 ごく些細なことについて言うことわざ的な表現。由来は、一人のアテナイ人が驢馬をやとって、その持主といっしょにメガラまで行く途中、炎天の暑さに疲れて驢馬の影の下で休もうとしたところ、持主が、驢馬は貸したが影まで貸した覚えはないと主張して口論となり、裁判沙汰になったという話。

ぬおしゃべりをしているのですか。真実を知らずに話し方を学べなどと、私は誰にも命じてはいません。そうではなくて、もし私の忠告することになんらかの価値があるとすれば、まず真実をわがものとし、その上でこの私を把握しなければならぬと言っているのです。しかし、これだけは自慢してもいいけれども、もし私のたすけがなければ、ものごとが真実どうあるかを知っている者といえども、技術にかなった仕方で説得するということは、けっしてできないでしょう」。

E

パイドロス そう言うのは、もっともな言い分ではないでしょうか？

ソクラテス そう、たしかに。――ただし、彼女を攻撃しようとする議論が、彼女が一つの技術であることを、もし証言するならばだよ。というのは、なんだかぼくには、あたかもある種の議論が進みでて、「彼女は嘘を言っているのであって、ほんとうは技術などではなく、技術としての資格をもたない一つの熟練にしかすぎないのだ」と言って反対証言を申し立てるのが、聞えるような気がするのだ。それに、スパルタ人が言っているように[1]、「話すということについては、真実の把握を抜きにして一つの正真正銘の技術が成立することは不可能だし、また今後もけっしてありえないであろう」。

261

パイドロス そういった議論こそ、ソクラテス、私たちの必要とするものです。とにかくさあ、それらの議論をここに喚び出して、何をどう言っているのか吟味してください。

ソクラテス それでは、りっぱな諸君たち、ここへ出て来たまえ。そして、美しい子供たち〔話〕の生みの親であるパイドロスを説いて、知をじゅうぶんに愛し求めるのでなければ、また何ごとについても、話す力をじゅうぶんにもった者にはけっしてなれないだろうということを、納得させなさい。――さあ、パイドロスに答をさせ

たまえ。

パイドロス　質問してください。

ソクラテス　それでは、そもそも弁論術とは、これを全体としてみるならば、言論による一種の魂の誘導であるといえるのではないだろうか。それは、ただ法廷その他の公けの集会においてのみならず、また個人的な集りにおいてもしかりであり、取りあつかう事柄が些細なものでも重大なものでも、同じ技術であることに変りはなく、また、いやしくもそれが正しく用いられるかぎり、重要な事柄にかかわる場合も、つまらぬ事柄にかかわる場合も、同じ程度に尊重されるべきものではないだろうか。――それとも、これらのことについて君が聞いて知っているのは、どのようなことなのかね？

B

パイドロス　ゼウスに誓って、私が知っているのはぜんぜんそれと違います。技術によって話したり書いたりされているのは、おそらく主として裁判についてでしょうね。(2)それに議会の演説についても語られていますが、しかし、それ以上の範囲に適用されるということは、聞いたことがありません。

ソクラテス　おや、それでは君は、ネストルとオデュッセウス(3)の言論の技術について聞いただけなのか。彼ら

1　一般にスパルタ人は、シケリアやアテナイでは人気のあった弁論術を、人をあざむく手段とみなして忌み嫌った。なお、この前後で法廷弁論の形式をまねて話が進められている。

2　弁論術はもともと法廷弁論の技術として起こり、のち一般に「法廷用」「議会用」「儀式用」に分類されたりしたが、最も重要視されていたのは、法廷用のそれであった。

3　いずれもホメロスに出てくる英雄。オデュッセウスは、イタケ島の領主で、智謀に富み、『オデュッセイア』の主人公。ネストルは、弁舌にすぐれ、ギリシア軍中の大長老。例えば『イリアス』第一巻二四七—二五〇行を参照。

C

はそれをトロイアで、暇なときに本に書いたのだがね。だがパラメデス[1]の技術のほうは、君は知らないのだね？

パイドロス ええ、ゼウスに誓って、私はネストルのそれさえも存じません。もっとも、あなたがゴルギアス[2]のような人をネストルに、あるいは、トラシュマコス[3]やテオドロス[4]といったような人をオデュッセウスになぞらえていらっしゃるのなら、べつですがね。

四四

ソクラテス おそらくそんなところだろう。しかしいずれにしても、そういった人たちのことは放っておくことにして、君はぼくに言ってくれたまえ、——法廷においてだね、原告側と被告側の互いに反対の立場に立つ人たちのすることは何だろうか。彼らはまさに、互いに反対のことを主張し合うのではないか。それとも、なんと言うべきだろうか？

パイドロス まさにそのことを彼らはする、と言うべきです。

ソクラテス それは、正しいことと不正なことについてだね？

パイドロス ええ。

ソクラテス それで、そういう反対のことを主張するのに一つの技術を用いる人というのは、同じ事柄を同じ

D

人々に対して、あるときには正しいことであるとみえるように、また場合によっては、そのつもりになれば不正なことであるとみえるようにするのではなかろうか？

パイドロス そうです。

ソクラテス　さらに、議会演説においてもまた、国家を相手に、同じ事柄が、あるときには善いことであると思われるように、あるときにはこんどは反対の性質のものであると思われるようにするのだね？

パイドロス　そのとおりです。

ソクラテス　それなら、われわれは、エレアのパラメデス(5)について、こういうことを知らないだろうか。彼が議論をするとき、そこに使われる技術のために、聞いている人々には、同じものが、似ていてしかも似ていない

1　これもトロイア戦争の英雄。オデュッセウスと競うほどの知恵の持ち主で、文字や数や賽などの発明者とされている。少し先(261D)をみると、パラメデスというのはエレアのゼノンのことであるから、ここの言葉は、「君は法廷や議会で使う弁論術のことを知っているだけで、問答競技に使う言論の技術については知らないのか」といった意味になる。

2　前五世紀初頭から四世紀初めにかけて生きたレオンティノイ(シケリア島東岸の植民都市)出身の弁論家ないしはソフィストの代表的人物。その長命と雄弁の性格とが、ネストルを想わせたのであろう。

3　黒海の入口にあるカルケドンの出身、その生涯はリュシアスの年代(前四五八—三七八年)と大体同じ。弁論術の歴史の上で、その最初の時代を飾った重要な人物。『国家』Iに登場し、その性格が生々と描かれている。

4　ビュザンティオン(今日のイスタンブール)の出身。弁論術史上「トラシュマコスにつづくものはテオドロス」とはアリストテレス(『詭弁論駁論』(183^b32))の証言である。

5　エレアのゼノン(前四五〇年頃)のこと。ゼノンは、師パルメニデスを擁護するために独自の論法をあみ出した。ここに挙げられている「似ていて似ていない」という帰結については、『パルメニデス』(127E)の中に、ゼノンが「存在が多であるならば、それは似ているとともに似ていないものでなければならない、だがそれは不可能である」という要旨の論文を読む場面がある。「とどまっているものでもあり動いているものでもある」というのは、例の「飛矢静止論」などがそれであろう。こういった論法は、とくに、互いに言葉をやりとりする問答法のうちに発達し、「問答競技」(エリスティケー)のような形に発展していった。ここでプラトンは、それが法廷弁論や議会演説と本質においては何ら異なるものでないという立場から、弁論術の中に包含させる。

ようにみえたり、一つのものであってしかも多くのものであるようにみえたり、さらにはまた、とどまっているものでもあり動いているものでもあるようにみえるということ——。

パイドロス　知っていますとも。

ソクラテス　してみると、反対の事柄を主張する技術というものは、たんに法廷や議会演説の場合だけにかぎられるものではなく、どうやらそれは、ひとが言葉を使うすべての場合に適用されるような何か一つの技術——いやしくももしそれが技術であるとすれば——であるといえよう。この技術を用いることによって、ひとは、およそ互いに類似点を見出すことが可能なものであるならば、なんでもその性格を互いにまぎらわせることができるし、さらには、ほかの人がひそかにそうしているとき、これをあばくことができるのである。

E

パイドロス　そのようなことをとくに論じられるのは、どういうおつもりなのですか？

ソクラテス　次のようにして探求して行けば、ぼくの言う意味がはっきりするだろう。——人をごまかすということができやすいのは、互いに異なるところの多いものにおいてだろうか、それとも、少ししか違わないものにおいてだろうか？

パイドロス　少ししか違わないものにおいてです。

262

ソクラテス　しかるに、君がある一つのものから、その反対のものへ話を移して行く場合、少しずつ移って行くほうが、一足とびに移るよりも、気づかれる度合が少ないだろうということ、これはたしかである。

パイドロス　それはそうですとも。

ソクラテス　したがって、ほかの人をごまかして、自分のほうはごまかされないようにしようとするなら、そ

の人は、あるものとあるものとの間の、似ている点と似ていない点とを正確に知っていなければならない、ということになる。

パイドロス たしかに、そうでなければなりません。

ソクラテス そこでだね、もしひとが、ひとつひとつのものの真実を知らないとすれば、ほかのいろいろなものが、その当の知らないものと少し似ているとか、ひじょうによく似ているとかいうようなことを、はたしてよく識別できるものだろうか？

B

パイドロス できないでしょう。

ソクラテス ところで、ごまかされて事実に反することを考える人たちは、なぜそのような目にあうかというと、これは明らかに、事柄が互いにどこか似ているからこそ、ついごまかされるのだ。

パイドロス たしかにそういう次第です。

ソクラテス それならば、ものとものとが似ている点を利用して、それぞれの場合に、相手の心を事物の真相からそらし、実際と反対のことを思うように少しずつ導いて行くこと、あるいは、自分がそういう目にあわないように避けること、そのどちらでもよいが、もし人がひとつひとつのものの本質が何であるかをちゃんと知っていないとしたら、その人は、そういったことに巧みな技術家となることができるであろうか？

パイドロス けっしてなれないでしょう。

C

ソクラテス してみると、君、言論の技術というけれども、もしひとが真実を知らずに、相手がどう考えるかということのほうばかり追求したとするならば、どうやらその技術なるものは、何か笑止千万なもの、そして技

術としての資格がないものとなるようだね。

パイドロス　おそらく、そういうことになるでしょう。

四五

ソクラテス　それでは、君が持っているそのリュシアスの話と、ぼくたちが物語った話との中に、ぼくたちが技術としての資格がないとか技術にかなっているとか主張しているところのものの例を、何かさがしてみることにしようか？

パイドロス　それはもう、ぜひそうしていただきたいものです。いまのところ私たちは、じゅうぶんな具体例をもたずに、何か抽象的な議論の仕方をしていますからね。

ソクラテス　よろしい。ちょうどまたあの二つの話は——どうやらこれは何かの偶然のしからしめるところとみえるが——真実を知っている者が言葉の中でたわむれながら、どのようにして聞く者たちを欺くことができるかということの、一種の範例を示しながら語られたのだものね。ぼくはね、パイドロス、これはこの土地にすむ神々のなせるわざだと思うよ。それにおそらくは、あの、頭の上でうたっているムゥサの神々のお使いたちも、ぼくたちに霊感をふきこんで、この贈りものをさずけてくれたのでもあろう。なぜって、少なくともこのぼくは、話すことの技術なんか、何ひとつ身につけてはいないのだから。 D

パイドロス　まあ、おっしゃるとおりだとしておきましょう。とにかくただ、あなたの主張されることを、私にわかるようにしてください。

ソクラテス　それなら、さあ、リュシアスの話のはじめのところを、ぼくに読んでくれたまえ。

E

パイドロス　「ぼくに関する事柄については、君は承知しているし、また、このことが実現したならば、それはぼくたちの身のためになることだという、ぼくの考えも君に話した。さて、ぼくは君を恋している者ではないが、しかし、ぼくの願いがそのためにしりぞけられるということは、あってはならぬとぼくは思う。その理由はこうだ。恋をしている人たちというものは……」

ソクラテス　そこまで。——さて、論じなければならないのは、この話し手がいったいどの点で過ちをおかし、技術にそぐわないことをしているか、ということだ。そうではないか？

263

パイドロス　そうです。

四六

ソクラテス　では、少なくともこういうことは、何びとにも明らかなことではないだろうか。つまり、このような事物のなかには、ぼくたちが同じ考えをもつものと、違ったことを考えるようなものとがあるということ——。

パイドロス　おっしゃることは一応わかるような気もしますが、しかし、もう少しはっきり説明してください。

ソクラテス　誰かが「鉄」とか「銀」とかいった語を口にするときは、すべての人が同じものを心に思い浮べるのではないだろうか。

パイドロス　たしかにそうです。

ソクラテス　しかし、それが「正しい」とか「善い」とかいった語だとしたらどうだろう？　めいめいが人によって考えを異にし、そしてぼくたちは、お互いにその意味を論議し合い、さらに自分自身でも、なかなか一定の見解をもつことができないのではなかろうか。

パイドロス　まったくそのとおりです。

B **ソクラテス**　そうしてみると、ぼくたちは、ものによって、同じ意見をもったりもたなかったりするということになる。

パイドロス　そうです。

ソクラテス　では、ぼくたちがごまかされやすいのは、そのどちらの場合であり、また、弁論術の力がより多く発揮されるのは、どちらの種類のものを論題にしたときだろうか？

パイドロス　それはむろん、私たちの考えが定まっていないようなものの場合でしょう。

ソクラテス　それならば、弁論の技術を追求しようとする者がまず第一にしなければならないことは、こういったいろいろの場合を一定の方法によって区別し、そして、多くの人々の考えが不定にならざるをえないような種類のものと、そうでない種類のものとの、それぞれの何らかの特徴をつかまえてしまうことである。

C **パイドロス**　それをつかまえることができたら、ソクラテス、その人は何はともあれ、すばらしい事柄を理解したことになるでしょうからね。

ソクラテス　その次には、思うに、一つ一つの事物にぶつかったとき、自分が話そうとする事柄が、そもそも

らない。

パイドロス　むろん、そうでなければなりません。

ソクラテス　それならどうだろう、「恋」は？　異論の多いほうのものに属するだろうか、それともそうでないほうだろうか？　どちらを主張したものだろう。

パイドロス　それはまちがいなく、異論の多いほうのものに属するでしょう。そうでなかったら、いましがたあなたが恋について話されたように、それが恋される者にとっても恋する者にとっても害悪だと言っておきながら、もう一度こんどは、もろもろの善きもののなかでも最たるものであるなどと、言うことができると思いますか？

D

ソクラテス　まことに名言だ。しかし、もう一つ教えてもらいたいのは——まったくのところ、ぼくのほうは神がかりの状態にあったものだから、よく憶えていないのだ——ぼくは話のはじめに、恋というものを定義したかしら？

パイドロス　ええ、しましたとも。ゼウスに誓って、それはもう、またとない立派な定義でした[1]。

ソクラテス　これはこれは、君の言うところによると、アケロオスの娘のニュンフたちと、ヘルメスの子なる

1　ソクラテスの二番目の話においても、「恋」は神的狂気の第四の形態として定義されたわけであるが、パイドロスが主として考えているのは、はじめのほうの話の、「エローメノース」とか「ロースティサ」とか「ローメー」とか、「エロース」と似た言葉を、語源論的な含みから使った定義（238B～C）のことであろう。

パン[1]とは、ケパロスの息子リュシアスよりも、言論にかけては、いかばかりすぐれた技術の持ち主なのだろう！——それとも、こんなことを言うのはまちがいだろうか。そうではなくて、彼リュシアスもまた、恋の話をはじめるにあたって、エロースというものを、彼が自分でのぞむような意味をもったある一定の存在として受けとるように、ぼくたちに命じたのだろうか？　そして、その定義を念頭におきながらあとにつづく話の全部を組み立てた上で、結論までもって行ったのだろうか？　なんだったら、もういちど、そのはじめのところを読んでみることにしよう。

E

パイドロス　もしよければ、そうしましょう。でも、あなたが求めていらっしゃるものは、そこにはありませんよ。

ソクラテス　読んでくれたまえ。ぼくは彼の実際の言葉を聞きたいから。

四七

パイドロス　「ぼくに関する事柄については、君は承知しているし、また、このことが実現したならば、それはぼくたちの身のためになることだという、ぼくの考えも君に話した。さて、ぼくは君を恋している者ではないが、しかし、ぼくの願いがそのためにしりぞけられるということは、あってはならぬとぼくは思う。その理由はこうだ。恋をしている人たちというものは、ひとたび欲望がさめたのちには、相手にいろいろとよくしてやったその親切を、後悔するものだが……」

264

ソクラテス　これではどうみても、この人がぼくたちの求めていることをしてくれているとは、思いもよらな

いようだね。彼ときたら、出発点からはじめることさえしないで、いちばん最後のところから話を逆にさかのぼって、うしろ向きの姿勢で泳ぎ渡ろうと試みている。そして、恋している人がその恋人に向かって、すでに口説きおわってしまったときに言うようなことから、話をはじめている。――それとも、親愛なるパイドロスよ、ぼくの言うことはまちがっているだろうか？

B **パイドロス** とにかく、ソクラテス、ここで彼が論じている事柄が、話の終りに来るべきものであることは、たしかですね。

ソクラテス では、そのほかの箇所についてはどうだろう。あの話にでてくる事柄はみな、まるっきりでために投げ散らされているという気がしないかね。それとも、二番目に語られた事柄が、どうしても第二番目に置かれなければならないような、何か必然的な理由があったようにみえるかね？　あるいは、話された中のどこかほかの部分をとってみてもいいけれども。とにかくこのぼくには――こういったことについてぼくに何も知識がないものだから――筆者はなんにもこせこせと気を使わずに、自分の思いついたことをかたっぱしから話して行ったとしか、思えなかったのだ。しかし君のほうはどうだね？　彼が、あれらの内容を相互にああいう順序に置いたのは、そうするだけの何か作文上の必然性があったのだと認めることができるかね？

C **パイドロス** この私が、彼のことをそんなに正確に見分けることができると考えてくださるとは、あなたも親

1 本来はアルカディア地方の山野の精で、牧神。本対話篇の最後のところでは、土地にすむ神々の代表として呼びかけられている。ここでもソクラテスは例によって、先に語った話を、自分が話したのではなく、自分にのり移ったこれらの土地の神々が話したものとしている。

切なかたですね。

ソクラテス　しかし、少なくともこのことだけは、君は肯定してくれるだろうと思うのだが、話というものは、すべてどのような話でも、ちょうど一つの生きもののように、それ自身で独立に自分の一つの身体を持ったものとして組みたてられていなければならない。したがって、頭が欠けていてもいけないし、足が欠けていてもいけない。ちゃんと真ん中も端もあって、それらがお互いどうし、また全体との関係において、ぴったりと適合して書かれていなければならないのだ。

パイドロス　誰もそのことを否定できないでしょう。

ソクラテス　それなら、君の親友の作った話が、この原理にかなっているかいないかを、しらべてみたまえ。そうすれば君は、あの話が、プリュギアの人ミダス(1)のために書かれていたと言われる碑銘と、少しも違わないのを発見するだろう。

D

パイドロス　どんな碑銘なのですか、それは？　そしてその碑銘がどうしたというのですか？

ソクラテス　その碑銘の文句はこうだ——

われは青銅の乙女　ミダスの墓の上によこたわる
水ながれ　大いなる樹の繁るかぎり
ここ　ひとみなのなげく塚の上にとどまりて
道ゆく人らにわれは告ぐ　ミダスこの地の下に眠ると

E

そして、この中の一つの行が、最初に語られようと最後に語られようと、ちっとも変りはないことに君も気が

つくことと思うのだがね。

パイドロス あなたは私たちの話を、からかっていらっしゃる！ ソクラテス。

四八

ソクラテス それでは、君の機嫌をそこねるといけないから、このリュシアスの作った話については、もう何も言わないことにしよう。——だけど、この話の中には、例になるようなことがじつにたくさんあって、ひとがあまり真似しようとはせずにそれらに注目すれば、教えられる点が多いだろうと、ぼくには思えるのだがね。——こんどは、ぼくの語ったもう一方の話に移ることにしよう。ぼくの考えでは、あの中には、話すことについて研究しようと思う人々が注目してしかるべきある事柄が、含まれていたようだから。

パイドロス どのようなことを指して、そう言われるのですか？

ソクラテス ぼくが語ったあの二つの話は、ある意味で互いに反対のものだった。一方は、自分を恋している人に身をまかせなければならぬと言い、もう一つの話は、恋していない人にそうせよと言っていたのだから。

パイドロス ええ、それもたいへん勇ましい話しぶりで。

ソクラテス ぼくは、君がありのままのことを打ちあけて、「狂気じみた話しぶりで」とでも言うのかと思っ

---

1 プリュギア王朝の第二代目、大金持の王で、伝説上の人物。ここに引用されている碑銘は、七賢人の一人クレオブロスの作と伝えられる。

ていたよ。そういえばしかし、ぼくがたずねようとしていたものはまさにそのことだ。つまり、恋とは一種の狂気である、とぼくたちは主張したのだった。そうだろう？

パイドロス そうです。

ソクラテス しかるに、狂気には二つの種類があって、その一つは、人間的な病いによって生じるもの、もう一方は、神に憑かれて、規則にはまった慣習的な事柄をすっかり変えてしまうことによって生じるものであった。

B **パイドロス** たしかに。

ソクラテス そしてぼくたちは、この神がかりによる狂気を、四人の神々がつかさどる四通りのものに区分した。すなわち、予言の霊感はアポロンが、秘儀の霊感はディオニュソスが、他方また詩的霊感はムゥサの神々が、第四番目のそれはアプロディテとエロースとがつかさどるものとしたうえで、[1] そのなかでも恋の狂気こそ最もよきものであると主張した。そして、まがりなりにも恋という心情を描写しつつ――その際おそらくは、何らかの真実にふれることもあったろうし、またおそらくはあらぬかたへと、迷いもしたであろうが――とにかく、そういう両方の性格のまじり合った、あながちぜんぜん信じがたいとも言えないような一つの話を作り出し、その上

C でぼくたちは、この一種物語ふうの讃歌を、パイドロスよ、ぼくと君のあるじ、美しい少年たちのまもり神エロースにささげて、つつましくもまた敬虔な調子でうたったのであった。

パイドロス 私はそれを、たいへん心たのしく聞かせていただきました。

四九

ソクラテス　それでは、この讃歌から問題をとり上げて、この話がどのようにして、非難から讃美へ移ることができたかを、学びとることにしようではないか。

パイドロス　いったい、どのようなことを考えてそうおっしゃるのですか？

ソクラテス　ぼくには、あの中でほかのことはみな、文字どおりたわむれにうたわれたという気がする。ただしかし、ああして偶然になにげなく語られた話ではあるが、そこでは二つの種類の手続きがふまれているのであって、もし誰かが、その二つの手続きがもっている機能をちゃんとした技術のかたちで把握することができたら、D おもしろいだろうと思うのだ。

パイドロス　それはいったいどのようなものですか？

ソクラテス　そのひとつは、多様にちらばっているものを総観して、これをただ一つの本質的な相へとまとめること。これは、ひとがそれぞれの場合に教えようと思うものを、ひとつひとつ定義して、そのものを明白にするのに役立つ。たとえば、さっきぼくたちは、エロースについて語るのに、まずエロースとはなんであるかを定義したのであるが、あのエロースについての話がうまかったかまずかったかは別として、少なくとも、この手続きのおかげで、あの話は明確で首尾一貫したことを語ることができたのだ。

パイドロス　では、もうひとつの種類の手続きとは、どのようなものを言われるのですか、ソクラテス。

1　実際（244A～E）には、アポロンやディオニュソスの名はあげられていなかったし、また、アプロディテやエロースも、ここで言われているような仕方で言及されたわけではない。

(265) E

ソクラテス　いまの行き方とは逆に、自然本来の分節に従って切り分けながらさまざまの種類に分割することができるということ。そしていかなる部分をも、下手な肉屋のようなやり方でこわしてしまおうと試みることなく、ちょうどさっきのぼくの二つの話がやったようにするのだ。つまり、あの二つの話は、まず精神の無分別というものを、ある一つの共通な種類のものとして把握した。つぎに、あたかも一つの身体から、一方は「左の

266

……」、一方は「右の……」と呼ばれる一対の同名の部分が自然にわかれているように、心の錯乱というものをもまたわれわれの中にある本来一つの種類のものと考えた上で、一方の話は、狂気の左側の部分を切り分け、さらにもう一度それを分割するというふうに続けて行き、最後にそれらの部分の中に、何か「左の(禍いの)恋」とでも名づけられるものを見出して、これにはなはだ正当な非難をあたえた。他方、もう一つの話のほうは、狂気の右側の部分へわれわれを導いて、前のと同じく恋と呼ばれるけれども、しかしこんどは何か神にゆかりある恋を

B

見出し、それをわれわれに差出したのち、われわれにとって最も善きものをもたらすものとして、この恋を讃美したのであった。

パイドロス　まさにそのとおりでした。

五〇

ソクラテス　このぼくはね、パイドロス、話したり考えたりする力を得るために、この分割と総合という方法を、ぼく自身が恋人のように大切にしているばかりでなく、また誰かほかの人が、ものごとをその自然本来の性格に従って、これを一つになる方向へ眺めるとともに、また多に分れるところまで見るだけの能力をもっている

と思ったならば、ぼくはその人のあとを追うのだ、「神のみあとを慕うごとく、その足跡をたどりつつ」[1]ね。さらにはまた、ぼくは、このことを実行できる人たちのことを、正しい呼び方かどうかは神のみが知りたもうところとして、とにかくこれまでのところ、哲学的問答法(ディアレクティケー)[2]を身につけた者と呼んでいるのだ。

C

――しかしさしあたっていま、君とリュシアスの教えを受けるとすれば、そういう人たちのことを何という名前で呼ぶべきなのか、言ってくれたまえ。それとも、ぼくが言ったこの方法こそ、あの「言論の技術」にほかならないのだろうか。トラシュマコスやそのほかの人たちが、それを用いることによって自分も弁論の達人となっているとともに、また他の人々でも、ちょうど王に捧げるように、彼らに贈りものを持ってくるつもりの者があれば、その人たちを同じような才能ある者にしてやるという、あの技術なのだろうか?

パイドロス たしかに王様のようにふるまっていますね、あの人たちは。でも、おたずねのような事柄について、彼らは知識をもってはいませんよ。いや私としては、いま言われたような種類の方法を哲学的問答法と呼ばれるのは、たしかに正しい呼び方であると思いますが、しかし弁論術のほうのことは、まだ私たちは把握していないように思われます。

D

ソクラテス なんだって? ぼくの言ったような方法をぬきにして、しかも一つの技術のかたちでとらえられるようなものがあるなら、それはさぞ立派なものにちがいないだろうねえ![3] いずれにせよ君とぼくとは、けっ

---

1 『オデュッセイア』(第五巻一九三行、第七巻三八行)の文句を少し変えたもの。

2 「解説」(三〇七―三〇九ページ)を参照。

3 バーネットのように疑問符とせずに、ハインドルフ、アスト、シュタルバウムと共に文末にピリオドを読む。

してそれをないがしろにしてはならぬ。哲学的問答法を取り去った弁論術の残りの部分とは、そもそもまたどのようなものであるかを論じなければならぬ。

パイドロス　それはもう、ソクラテス、言論の技術について書かれた書物[1]をみても、じつにたくさんの事柄がその中には記されているように思いますよ。

五一

ソクラテス　これはほんとうによく思い出させてくれた。そこにはたしか、まず最初に「序論」が話のはじめに語られなければならぬ、と記されていると思う。——君の言うのはこういった、この技術の気のきいた細目のことなのだろう？

パイドロス　ええ。

ソクラテス　——つぎに、第二番目には、「陳述」とかいうものと、それに加えて「証拠」、第三番目に「証明」、第四番目には「蓋然性（がいぜん）」。それから、たしか「保証」と「続・保証」というものを、あの言論つくりの巨匠、ビュザンティオンの男があげていたと思う。

E

パイドロス　それは才人テオドロスのことですか？

267

ソクラテス　そうとも。それから「反駁」と「続・反駁」を、告発のときも弁明のときも行なわねばならぬと彼は言っている。ところであの、世にもすぐれた人物、パロスのエウエノス[2]にぼくたちは御登場ねがわないのか。「ほのめかし法」と「婉曲賞讃法」を発見した最初の人なのだが。ある人々の説によると、彼は「あてこすり法」

についてもまた、記憶の便をはかってその覚え歌を作ったそうだ。何しろこの男は知恵があるからね！——しかし、テイシアス(3)とゴルギアスをわずらわさないでおいてよいものだろうか。彼らは、真実らしきものが真実そのものよりも尊重されるべきであることを見ぬいた人たちだが、一方ではまた、言葉の力によって、小さい事柄が大きく、大きな事柄が小さくみえるようにするし、さらには目新しい事柄をむかしふうに、古くさい事柄を目新しく語るし、またあらゆる主題について、言葉を簡単に切ったり、いくらでも長くしたりすることを発明したのだ。プロディコス(4)は、いつか彼らのこうした発明のことをぼくが言うと、わらってこう言ったよ、技術がどのような話し方を要求するかを発見したのは自分ひとりだけだ、それは長くても短くてもいけない、ちょうどよくなければならない、とね！

B

1　当時、弁論術の流行とともに、これから名前が挙げられる弁論術の教師たちは、『テクネー』(技術)の名で呼ばれた教科書をつくり、それが一般の青年たちの間に普及していた。

2　アッティカの東南海上にあるパロス島出身。『ソクラテスの弁明』の中では、五ムナの報酬で子弟を教育することを約束するソフィストとして引合いに出されている。

3　前四八〇年頃生まれの、シケリア島のシュラクサイの人。師のコラクスとともに弁論術の創始者。トゥリオイにおいてリュシアスに教え、アテナイに来てイソクラテスにも教えた。

4　アッティカの東南海上にあるケオス島のイウリスの出身。ゴルギアス(前五〇〇／四八四—三九一／三七五年)などと同じ年代にわたって活躍したソフィスト。ソクラテスも彼のところ(『クラテュロス』384B)で語っている。ふつうは、名辞の正しい使用や、類似語の区別に極端なまでにやかましい人として、『プロタゴラス』(337A〜C)、『メノン』(75E)、『エウテュデモス』(277E)、『ラケス』(197D)、『カルミデス』(163D)などにしばしば引合いに出されている。の講義を——一番安い講義を——聞いたことがあると、別

パイドロス　なんと知恵のふかい言葉でしょう、わがプロディコスよ。

ソクラテス　それから、ヒッピアス(1)のことには触れないのか？　このエリスから来た客人も、プロディコスと同じ意見だろうと思うのだが。

パイドロス　どうして賛成しないはずがありましょう。

C

ソクラテス　それから、こんどはポロス(2)だが、彼の言葉の殿堂について——「重言法」とか「格言的話法」とか「比喩的話法」とかのね——われわれはどのように言うべきだろうか。また、リキュムニオス(3)が美文の創作のためにと彼ポロスに贈った単語の殿堂については？

パイドロス　しかし、ソクラテス、プロタゴラス(4)には、何かこういった仕事がなかったですか？

ソクラテス　「正語法」とかいうのがあるではないか、君。それに、まだほかにも立派なのがたくさんあるよ。ところで、老年や貧困に言及して憐れみの涙をよぶ話術にかけては、ぼくのみるところでは、あのカルケドン人(5)の力量には誰もかなわないだろうね。他方同時に、この男は、大ぜいの人の怒りをかきたてること、そして怒らせておいてもう一度、呪文でもかけるようにして魅惑することの達人でもある——自称するところによればね。

D

さらに、どこからでも理由を見つけてきて、人を攻撃したり、攻撃された中傷を反駁したりすることにかけても、彼の右に出る者はない。——さて、話の結び方のことだが、これについてはどうやら、みんなの意見が一致しているようだ。それを「概括」と呼ぶ人たちもいるし、また別の名をつけている人々もいるけれども。

パイドロス　あなたの言われるのは、話の最後にあたって、話された事柄について、聴衆にそのひとつひとつを要約して思い出させることですね？

ソクラテス　そう、そういったことだ。なお、君のほうで何かほかに言論の技術について言うべきことがあれば——。

パイドロス　ほんのちょっとした、言うにたらぬことです。

ソクラテス　ちょっとしたことなら、どうでもいい、放っておこう。そして、いま名前をあげたいろいろの話し方の工夫を、光にかざして、それが技術としてのどのような力を、どのような場合にもつものであるか、もっとよく見ることにしよう。

パイドロス　それはもう、ソクラテス、じつに大きな力をもっていますよ。少なくとも、たくさんの人が集まっているような場合には。

ソクラテス　たしかにそのとおりだ。しかしだね、人のよい君よ、君もよく見てくれたまえ、もしやひょっとして君にも、ぼくと同じように、その織り目にきず穴があいていることがわかりはしないかどうかを。

1　前四六〇／四四〇年頃生まれの、ペロポンネソス半島北西部に位するエリス(有名なオリュンピアの聖地のあるところ)の出身、多方面の才能をそなえたソフィスト。

2　シケリア島のアクラガスの出身、ゴルギアスの弟子。『ゴルギアス』に登場し、ゴルギアスの弁論術を弁護してソクラテスと渡り合う。ゴルギアスの文章上の技巧を継承して、美文調の文章を得意とした。

3　小アジア沿海のキオス島の出身。弁論家であるとともに、ディテュランボス詩をつくる詩人であった。

4　前五〇〇—四三〇年頃、トラキアの南海岸の都市アブデラの出身。ソフィストとして最も有名であるが、レトリックの面では、ゴルギアスなどのシケリア派の流れをくむ技巧的、装飾的名文に対して、言葉の使い方に厳格で正確を旨とした率直な文体を特色とする。

5　トラシュマコス(261Cに前出)を指す。

パイドロス　とにかく、それを私に示してください。

五二

ソクラテス　さあ、それでは、ぼくに答えてくれたまえ。もし誰かが、君の仲間の〔医者の〕エリュクシマコスなり、あるいは彼の父アクメノスなりのところに行って、次のように言ったとしたらどうだろう。「ぼくは、これこれのものを身体に処方して、欲するがままに、からだを温めたり冷したり、また、もしその気になれば、嘔吐させたり、場合によっては下痢をさせたりすることを心得ているし、そのほかにも同じようなことをたくさん知っている。それでぼくは、これだけの心得があるのだから、当然自分は医者としての資格があると思っているし、また、こういった事柄に関する知識をほかの人に授けるならば、その人を医者にすることができると思っている」とね。エリュクシマコスやアクメノスがこれを聞いたら、どのように言うと思うかね？

B

パイドロス　それはむろん、それらの処方のひとつひとつを、どういう人たちに、またどのようなときに、そしてどの程度まで、適用しなければならないかということを、さらに知っているかどうかを、その男にたずねるだろうと思います。

ソクラテス　それで、もしその男が、「そんなことはぜんぜん知らない。しかし、先にぼくが言ったようなことをぼくから教わった者なら、あなたがたずねているようなことは、おのずからなしうると思う」と言ったとしたら？

C

パイドロス　きっとこう言うでしょう。「この男は頭がどうかしているのではないか。どこか書物の中からで

もそういったことを聞きかじるか、たまたまちょっとした薬が手にはいるかしたら、技術については何ひとつ知りもしないくせに、もうすっかり医者になったつもりでいる」と。

ソクラテス では、もし誰かが、こんどは、ソポクレスとエウリピデスのところへ行って、次のように言ったとしたらどうだろう。「自分は、小さな事柄についてひじょうに長いせりふを作ったり、大きな事柄についてきわめて短いせりふを作ったりすることを知っている。また、その気になれば、哀れっぽいせりふを作ったり、また反対に恐ろしいせりふ、威嚇的なせりふ、その他これに類したものを作ることを知っている。そして、そういったことを人に教えれば、悲劇の創作を授けることになるのだと思う」――。

D

パイドロス 彼らもまた、ソクラテス、きっとわらうことだろうと思います、――もしひとが、悲劇とは、そういったせりふを、相互の関係においても全体との関係においても、ぴったりと適合するように構成し組み立てたもの以外の何かであると考えているとすれば。

ソクラテス でも、思うに、ぶしつけに罵倒するというようなことはないだろう。いや、それはちょうど音楽家が、ひとかどの音階学者のつもりでいる男――それも、どうすればいちばん高い音と低い音を弦で出すことができるかを、たまたま知っているというだけの理由でね――そういう男に出あったときと同じだと思う。音楽家はその男に向かって、「あわれなやつめ、気でも狂ったか」などと、粗野な言い方はしないだろう。そこはやはり、音楽の教養のあるほどの人だから、もっとおだやかに、こう言うにちがいない。

E

「君はよい人だ。それはね、たしかに、音階の知識を身につけようとする人は、君の言うようなことを知っていなければならないには違いないのだ。しかしだよ、君にできるようなことを心得ている人が、音階の調和のこ

とを、これっぱかりも知らないということだって、じゅうぶんありうるのだ。なぜかというと、君の知っているのは、音階の調和のことを研究する前に、予備的に習っておかなければならぬ事柄なのであって、音階の調和そのものに関することではないのだから」。

パイドロス それはまったく正しい言葉です。

ソクラテス 同じようにソポクレスもまた、さっき言ったようなことを自分たちに自慢して見せる者にむかって、それは悲劇を作るための予備学習であって、悲劇そのものに関することではない、と言うだろう。アクメノスもまたしかり。いわく、それは医術以前の事柄であって、医術に属する事柄ではない、と。

パイドロス たしかにそのとおりです。

五三

ソクラテス では、「蜜のごとく甘き弁舌のアドラストス」(1)とか、あるいはまたペリクレス(2)とかいった人たちの場合、ぼくたちはどう考える? さっきぼくたちは、いろいろの結構な工夫を一わたり見てきた。――「簡潔話法」とか、「比喩的話法」とか、まだそのほかにも、一覧したあとで、光にかざしてしらべてみなければならないと言っていたものが数々あったね。――そこで、もし彼らアドラストスやペリクレスが、ああいった技術上のB工夫のことを聞いたとしたら、どうだろうか。はたして彼らは、ぼくや君と同じように、腹を立てて、そういった事柄を弁論の技術と称して書いたり教えたりしている人たちに向かって、教養のない言葉をぶしつけに吐きかけるだろうか。それとも、こう考えるべきだろうか。つまり、そこはぼくたちよりも賢い人たちのことだから、

ぼくたちのほうをもまたたしなめて、次のように言いきかせてくれるのではないかとね。

「パイドロスにソクラテスよ、君たちは、次のような人々がいても、けっして腹を立てたりせずに、ゆるしてやらなければならない。つまり、ある人々は哲学的問答法の心得がないために、弁論術とはそもそも何であるかを定義することができず、そして、そのように弁論術の何たるかを知らないことの結果として、技術にはいる前に予備的に学んでおかなければならない事柄を心得ているだけで、弁論術そのものを発見したと思いこむものだ。C そして、この予備的な事柄を他の人々に教えれば、それで自分たちは弁論術をすっかり完全に教えてしまったことになると信じていて、それらのひとつひとつを応用して説得力をもった話をすることや、全体を構成することはといえば、それはとるにたらぬ仕事で、彼らの弟子たち自身が、話をするときに自分の力で身につけるべきだと思っているのだがね」。

パイドロス　いやたしかに、ソクラテス、あの人たちが弁論術と称して教えたり書いたりしている技術なるものは、おそらくは何かそのような性格のものかもしれません。私には、あなたの言われたことが真実をついているように思われます。しかしそれはそれとして、説得力をそなえた真の弁論家の技術というものは、どのようなD 仕方で、どこから身につけることができるのですか？

ソクラテス　討論家として完全な人間になる可能性のいかんということなら、パイドロスよ、ほかの分野の場合と条件はたぶん同じだろう。いや、必ず同じでなければならぬと言い切ってもよいかもしれない。つまり、弁

1　伝説上のアルゴスの国の王、その弁舌でも有名。

2　前四九五—四二九年。アテナイ有数の政治家。

論家になるための素質が君にあって、その上に知識と練習をつめば、君は有数の弁論家になるだろうし、これらの条件のどれかに欠けるところがあれば、ちょうどその点において不完全な弁論家になるというわけだ。しかし、そのなかで技術に関することだけを取り上げて問題にするとなると、ぼくには、それを追求する方法が、リュシアスやトラシュマコスが歩いている道を行けば見出されるとは思えないね。

パイドロス　それなら、どういう行き方をすればよいのですか？

E

ソクラテス　おそらくは、よき友よ、かのペリクレスが、弁論術にかけて何びともおよばぬ完成の域に達したのは、少しも不思議なことではないのだ。

パイドロス　なぜですか？

五四

270

ソクラテス　およそ技術のなかでも重要であるほどのものは、ものの本性についての、空論にちかいまでの詳細な論議と、現実遊離と言われるくらいの高遠な思索とを、とくに必要とする。そういう技術の特色をなすあの高邁(こうまい)な精神と、あらゆる面において目的をなしとげずにはおかぬ力との源泉は、何かそういったところにあるように思われるからだ。ペリクレスもまた、そのすぐれた天分に加えて、それをわがものとしたのであった。思うにそれは、彼が、同じこの精神と力量の所有者であるアナクサゴラスに出あったおかげであろう。(1) すなわち、彼はこの人から高遠な思索をじゅうぶんに吹きこまれ、アナクサゴラスが論じるところ多かった知性(ヌゥス)と無知(2)との本体をつきとめた上で、そこから言論の技術にあてはまるものを引出して、この技術に役立てたのだ。

パイドロス どういう意味でそうおっしゃるのですか？

B

ソクラテス 技術のあり方としては、医術と弁論術とは、なにか同じ事情にあるようだ。

パイドロス どのように同じなのですか？

ソクラテス どちらの場合においても、取りあつかう対象の本性を——医者の場合には身体の本性を、弁論術の場合には魂の本性を——分析しなければならない。つまり、医術とは、身体に薬と栄養とをあたえて健康と体力をつくる仕事であり、弁論術とは、魂に言論と、法にかなった訓育とをあたえて、相手の中にこちらがのぞむような確信と徳性とを授ける仕事であるが、もし君が、こういった仕事にあたって、たんに熟練や経験だけに頼らずに、一つの技術によって事を行なおうとするならばね。

パイドロス たしかにそうかもしれませんね、ソクラテス。

C

ソクラテス ところで、魂の本性を理解するのに、それの全体の本性をはなれて満足に理解することができると思うかね？

パイドロス いやしくもアスクレピオス派の医学者、ヒポクラテス(3)の言葉を多少とも信じなければならないと

1 イオニアの都市クラゾメナイ出身の哲学者（前五〇〇—四二八年）。ペリクレスの客として三〇年間アテナイに滞在したと伝えられる。彼ははじめて知性（ヌゥス）というものを、宇宙生成の説明原理として導入した。

2 テクストはバーネット（διανοίας）によらず、他の一般の校訂者とともに古写本（B、T）の通り ἀνοίας を読む。

3 アスクレピオスはアポロンの子、医術の神とされる。その流れをくむといわれる学派がアスクレピオス派（アスクレピアダイ）と呼ばれ、最も著名な医学の分派であった。コス島のヒポクラテスもその一人で、医術の祖と言われ、彼の名が冠せられて『ヒポクラテス文書』と呼ばれる論文著作集が今日に伝わっている。

すれば、身体についても、あなたが言われた方法をとらないと、その本性を理解するのは不可能だとのことです。

ソクラテス そうだとも、君、ヒポクラテスの言うことは正しい。けれどもぼくたちは、ヒポクラテスだけに頼っていないで、さらにものの道理そのものにたずね、道理の示すところがヒポクラテスの言葉と一致するかどうかを、しらべてみなければならぬ。

パイドロス 賛成です。

五五

ソクラテス それでは、この本性の問題について、ヒポクラテスと正しい道理とがどのようなことを述べるか、しらべてみたまえ。——そもそも、どのようなものにせよ、あるものの本性について考察するには、次のようなやり方によるべきではなかろうか。まず第一、ぼくたちがあるものに関して、自分でも技術を身につけ、また他人を技術家にしたてるだけの能力をもちたいとのぞむなら、技術を向けるべきその対象が、単一なものか、それとも多種類のものかをしらべること、つぎに、もしその対象が単一のものなら、そのものがもっている機能をしらべてみること。すなわち、それは本来、能動的には何に対してどのような作用をあたえ、受動的には何からどのような作用を受けとるような性質のものであるかを、しらべるのである。またもし、その対象が多種類のものならば、その種類を数え上げ、しかるのち、そのひとつひとつの種類について、単一な種類の場合にやったのと同じことを、つまり、それが本来何によってどのような作用をあたえ、あるいは何からどのような作用を受けるような性質のものかを、見なければならない。

パイドロス　おそらく、ソクラテス、そうかもしれません。

ソクラテス　いや少なくとも、こういった手順をふまない方法などというものは、盲人の歩みのごとし、といってよいだろう。だが、何ものかを、いやしくも技術によって追求しようとする者が、めくらにたとえられたり、つんぼにたとえられたりするようなことは、むろん、あってはならない。明らかに、もしひとが技術にしたがって誰かに弁論を授けようとするならば、その弁論が適用されるべき対象の本性がいかなるものであるかを、正確に教え示すべきである。ところで、その対象とは何かといえば、魂にほかならないであろう。

E

パイドロス　たしかに。

ソクラテス　だから、彼の努力のすべては、この魂の研究に向けられるのではないか。なぜなら、彼が一つの確信をうえつけようと試みるのは、ほかならぬこの魂の中なのであるから。そうだろう？

271

パイドロス　そうです。

ソクラテス　そうすると、あのトラシュマコスをはじめ、またそのほか誰でも、もし本気で弁論の技術を授けようとするならば、むろんその人は、まず第一に魂というものについて、それが本来、一つの相似た性格のものしかないものなのか、それとも、からだの恰好と同じように、多くの種類があるものなのかを、できるだけ正確に叙述し、教え示すであろう。なぜなら、われわれの主張では、そうすることがつまり、ものの本性を示すということにほかならないのだから。

パイドロス　まさしくそのとおりです。

ソクラテス　そして第二に、魂とは本来、何によってどのような作用をあたえ、あるいは何からどのような作

用を受けるものかということを、書いたり教えたりするだろう。

パイドロス　たしかに。

B **ソクラテス**　第三には、さまざまの話し方の種類と魂の種類、ならびに、それらのさまざまの反応の仕方を分類整理した上で、その原因(1)をくわしく論じるだろう。すなわち、そのやり方は、ひとつひとつの話し方をひとつひとつの魂の型にあてはめ、魂がどのような性質のものである場合には、どのような話し方により、いかなる原因によって、かならず説得されたり、説得されなかったりするか、ということを教えるのである。

パイドロス　まあそうするのが、とにかく、いちばんよいようですね。

ソクラテス　いやいや、君、演説の手本を示す場合にせよ、実地の話をする場合にせよ、また話の主題となる事柄が何であるかにかかわらず、いま話した以外のやり方をもってしては、技術にかなった仕方で語られたり書かれたりすることは、ぜったいにないだろう。しかし、近ごろの『言論の技術』の著者たち——君は彼らの話すのを聞いたことがあったね——あの人たちはなかなかずるくて、魂についてたいへんりっぱな知識をもっているくせに、それをかくしているのだ。だから、彼らがこういう仕方で話したり書いたりするまでは、彼らが技術によって書いているのだとは、信じないことにしようではないか。

C **パイドロス**　「こういう仕方」と言いますと、実際にはどのような仕方なのでしょうか？

ソクラテス　どういう言葉でそれを書くかを、いちいちそのまま言うのは容易なことではないが、しかし、できるかぎり技術的であろうとするならばどんなふうに書くべきかという原則だったら、話してもよい。(2)

パイドロス　ぜひお願いします。

五六

ソクラテス　そもそも言論というものがもっている機能は、魂を説得によって導くことにあるのだから、弁論術を身につけようとする者は、魂にどれだけの種類の型があるかを、かならず知らなければならない。さて、魂にはこれこれだけの種類の型があり、こういう性質とこういう性質があって、そのことから、ある人々はこのような性質の人間となり、他の人々はこのような性質の人間となっている。このようにしてこれらの区別が完成したならば、こんどは話し方のほうに移って、言論にはこれこれだけの種類のものがあって、その各〻はこのような性質のものである。かくして、このような性質の人々は、このような事柄に対して、この理由により、こういう性質の言論によって説得されやすく、これに対して、こういう性質の人々は、これこれの理由により説得されにくい。

D

さて、こういったことをじゅうぶんに理解したならば、そのつぎには、実際の生活の中でそういうことが行なわれるのを見て、その際、すみやかにそれと感づいてついて行くことができなければならない。そうでないかぎり、かつて先生のところで聴いた話は、彼にとって、まだ少しも役に立たないことになる。

E

ところで、どのような性質の者がどのような性質の言論によって説得されるかということを、じゅうぶんに言えるようになり、さらに実地においても、身近かに現われる人の性質を見分けて、「この人がそうなのだ、あの

272

1　テクストは、バーネットを除く一般の校訂者とともにB写本の読み方をとる。

2　もし自分で弁論術の教科書のようなものを書くとしたら、どういうふうに書くか、そのプランだけなら話してあげよう、ということで、つぎに始まるソクラテスの言葉は、そのような弁論術の教科書の書き方のモデルである。

ときに話のあったような性質とはこれなのだ、いまその性質が実際に自分の前にあるのだから、この性質に対しては、これこれのことを説得するためには、これこれの言論をこういうふうに話しかけるべきだ」ということを、自分に指示することができるようになったとしよう。すでにしてこれらの能力をすべて身につけ、なおその上、どういうときに語るべきであり、どういうときに語るのを控えるべきかという、その適切な時期を学びとり、さらには、「簡潔話法」とか、「感傷的話法」とか、「誇張法」とか、そのほか習ったかぎりの話し方の種類のひとつひとつについて、それらを使うべき好機と使ってはいけない時とを識別したならば、そのときに至ってはじめて、その人の技術は立派にかつ完全に仕上げられたことになるのであって、それまでは否である。――もし誰かが、

B 話したり教えたり書いたりするにあたって、以上の条件のどれかに欠けるところがありながら、しかも、自分の言うことが技術にかなっていると主張するならば、その言葉を信用しないに越したことはない。

「さあどうだ、パイドロスとソクラテス」と、この本の著者はおそらく言うだろう、「君たちもこれと同じ意見かね。それとも、(1)言論の技術について、何かこれとちがった説を受け入れるべきだろうか」。

パイドロス　ちがった説を受け入れることとは、ソクラテス、不可能でしょう。とはいうものの、あなたが言われたのは、なんともなみなみならぬ仕事のようですね。

ソクラテス　まことにそのとおり。それだからこそ、あらゆる説をいろいろな角度からくわしく検討して、こ

C の技術に到達するための、もっとらくな近道がどこかに見出されるかどうかを、しらべてみなければならないのだ。短く平坦な道がちゃんとあるのに、遠くけわしいまわり道をして無駄骨を折るということのないようにね。さあ、君がもし、何かぼくたちの助けになるようなことを、リュシアスなり、あるいは誰かほかの人からなり、

聞いて知っているなら、思い出して話すように努めてくれたまえ。

パイドロス　やってみるだけのことなら、できるかもしれませんけれど、そういますぐにと言われても、何も話せません。

ソクラテス　それならこのぼくが、こういったことにたずさわっているある人たちから聞いた説をひとつ、話してあげようか。

パイドロス　ぜひお願いします。

ソクラテス　とにかく、パイドロス、「狼の言い分でさえ聞いてやるべきだ」(2)という言葉があるくらいだからね。

D

パイドロス　あなたもまたぜひそれを実行してください。

五七

ソクラテス　それでは、彼らの主張するところはこうだ。――弁論に関するこれらの事柄を、そんなふうに、もったいをつけて取りあつかったり、まわりくどい話をして高いところへ持って行く必要はさらにない。なぜならば――これはぼくたちの議論がこの問題に移ったはじめの頃にも話に出たことだが(3)――まったくのところ、弁

1　テクストはバーネット(εἰ)によらず、他の一般の校訂者とともに写本(B、T)のᾗを読む。

2　悪い者でも自分の立場を弁明する権利があるという意味のことわざ。その由来は、羊飼いが食事に羊の肉を食っているのを狼が見て、「自分があれと同じことをしたらどんな騒ぎになるだろう」と言ったという話。

3　259 E～260 A.

論の力をじゅうぶんに身につけようとする者は、何が正しい事柄であり善い事柄であるかということに関して、あるいは、どういう人間が――生まれつきにせよ教育の結果にせよ――正しくまた善い人間であるかということに関して、その真実にあずかる必要は、少しもないのだから。じじつ、裁判の法廷において、こういった事柄の真実を気にかける人なんか、ひとりだっておりはしない。そこでは、人を信じさせる力をもったものこそが、問題なのだ。E 人を信じさせる力をもったもの、それは、真実らしくみえるもののことであって、それにこそ、技術によって語ろうとするものは専心しなければならぬ。すなわち、よしんば実際に行なわれたことであっても、もしそれが真実とは思えないような仕方で行なわれたとしたならば、それをありのままに述べてはいけない場合さえ、しばしばあるのであって、真実らしくみえるような事柄におきかえなければならないのだ。これは、告発するときでも、弁明するときでもそうである。そして、真実にかかずらうのをきっぱりとやめ、言論を用いるにあたってはあらゆる仕方で、この真実らしくみえるものをこそ、追求すべきである。話すときにいつでも、このことを心がけていれば、それで技術のすべてを獲得できるのだから。――

273

パイドロス あなたの言われたことは、そのこまかい点まで、言論の技術の専門家たることを自称する人たちの言葉そのままです。私は、このような問題にさっき私たちが少し触れたのを思い出しました。彼ら専門家たちには、それは非常に重大なことに思えるのですね。

ソクラテス ところで君は、テイシアス自身の書いたものを直接くわしく研究したのだったね。それなら、テイシアスがなんと答えるか、もうひとつ聞かせてもらいたいのだが、いったい、彼の言う〈真実らしくみえるもの〉とは、B 多数の者にそうだと思われるものと、まさか別のものではないだろうね？

パイドロス　どうしてそれが別のものでありえましょう。

ソクラテス　それでわかった。彼が次のようなことを書いたのは、そういう、技術の秘訣ともなるような賢明な発見をしたからなのだろう。――いま、力は弱いけれども勇気のあるひとりの男が、力は強いが臆病な男をなぐりつけて、上衣あるいは何かほかのものを奪い、法廷に連れ出されたとする。その場合、どちらの男も、ほんとうにあったことを語ってはならない。臆病な男は、自分をなぐったのは、その勇敢な男ひとりではなかったと主張すべきであり、他方の男は、これを反駁して、その場には二人のほか誰もいなかったと主張し、そしてかの

c 文句、「どうしてまた、ごらんのようなこの私が、このような男に手出しをすることができましょうか」というのを、応用すべきである。これに対して、臆病な男は、自分の臆病さを白状しないで、何かまたほかの嘘を考え出そうとして、おそらくそれによって相手側の男に、何らかの反駁の機会を与えるであろう。技術による陳述というものは、ほかの場合においても、まあだいたいこれと似たようなものだ。――そうだろう、パイドロス？

パイドロス　たしかに。

ソクラテス　いやはや、このテイシアスという男は、じつに大した手腕を発揮して、かくされていた技術を発見したものとみえるね。いや、その男が、テイシアスでなくて、たまたま誰かほかの者であっても、またどういう名前で呼ばれるのをよろこぶ男であってもいいわけだが。(1) ところで、君、ぼくたちとしては、この男に言って

1　テイシアスの師コラクスを暗に指していると思われる。この二人の師弟については、「悪いコラクス（カラス）の生んだ悪い卵」という言葉もある。コラクスという名前はカラスという意味。

やったものだろうか、それとも言わないでおこうか？

D

パイドロス　どんなことをですか？

五八

ソクラテス　こういうことだ。——

「テイシアス、私たちは、あなたがここへ来られる以前にも、ずっと前から、問題の〈真実らしくみえるもの〉とは、それが真実のものに似ているからこそ、多数の者に真実らしくみえるのだということを、たまたま話していたのです。そして、そのような真実への類似を最もよく発見することのできるのは、いつの場合でも、真実そのものを知っている者なのだということを、ついさっきくわしく論じたところなのです。そういう次第ですから、もしあなたが、言論の技術について、何かもっとほかのことを論じられるというのでしたら、それを拝聴させていただきましょう。しかし、もしそうでないのでしたら、私たちは、いましがた私たちの間で論議したところに従うことにします。それはどういうことかといいますと、ひとは、自分の聴衆となるべき人々のさまざまの性質を数え上げて分類すること、それから、事物を種類ごとに分割するとともに、箇々のひとつひとつのものについて、これをただ一つの本質的な相によって包括する能力をやしなうこと、これだけのことをしないかぎりは、言論に関して人間に可能なかぎりの技術を身につけるということは、けっしてできないだろう、ということでした。

E

しかし、これらの能力を獲得するということは、なみなみならぬ労苦をはらうのでなければ、とてもできるものではありません。分別ある人はそれだけの労苦をはらう目的を、人間相手の話や行為におくべきではなく、す

274

べてにつけてできるかぎり、神々のみこころにかなうことを語り、神々のみこころにかなう仕方で振舞いうるようになることに、おかなければなりません。なぜなら、テイシアスよ、私たちよりも知恵のふかい人々がこう言っているではありませんか——理をわきまえる者ならば、片手間にする場合をのぞいて、同じ召使い仲間をよろこばすことを心がけるべきではなく、善き生まれの善き主をこそよろこばすことにつとめなければならない、と。ですから、まわり道が長いものであっても、驚いてはいけません。大きな目的を目ざせばこそ、遠まわりもしなければならないのであって、あなたがお考えになっているようなわけのものではないのですから。とはいえ、議論の示すところによれば、そういう小さな目的とても、もし人がそれをのぞむなら、いま言ったような大きな目的を目ざすことによって、おのずから最も見事に達成されることでしょう」。

パイドロス　私には、あなたの言われることはたいへんりっぱだと思われます、ソクラテス。ただし、もしそれが実際に可能ならばですよ。

ソクラテス　しかし、ひとがりっぱな事柄をやってみようと試みるならば、結果としてどのようなことを経験することになろうとも、その経験を身に受けることもまた、その人にとって立派なことなのだ。

B

パイドロス　たしかにそうです。

ソクラテス　それでは、話すということについて、それが技術にかなっているとか、かなっていないとかいうのはどのようなことか、という問題は、これでじゅうぶんに論議がつくされたとしようか。

パイドロス　ええ、そういたしましょう。

ソクラテス　だが、ものを書くということについて、それが妥当なことであるとか、妥当なことではないとか

いった問題、すなわち、ものを書くということはどのような条件のもとにおいて立派なことだといえるのか、またどのような条件のもとでは立派でないということになるのか、という問題が残っている。――そうだね？

パイドロス そうです。

五九

ソクラテス さてそれでは、言葉というものについてどのような態度をとったり、あるいは語ったりすれば、最も神の意にかなうことになるか、君は知っているかね。

パイドロス いいえ、少しも。あなたは？

C

ソクラテス むかしの人たちから伝わる物語だったら、話すことができる。ただしその真意は、彼ら古人だけが知るところだけれども――。もしぼくたちが自分の力で、この真実を見出すとしたならば、人間どもにどう思われるかというようなことが、ぼくたちにとって、なお少しでも関心事となるだろうか？

パイドロス わかり切った御質問ですね。それより、あなたが聞いたと言われるその話をしてください。

ソクラテス よろしい。ぼくの聞いた話とは、次のようなものだ。――エジプトのナウクラティス地方に、この国の古い神々のなかのひとりの神が住んでいた。この神には、イビスと呼ばれる鳥が聖鳥として仕えていたが、

D

神自身の名はテウト(1)といった。この神様は、はじめて算術と計算、幾何学と天文学、さらに将棋(しょうぎ)と双六(すごろく)などを発明した神であるが、とくに注目すべきは文字の発明である。ところで、一方、当時エジプトの全体に君臨していた王様の神はタモス(2)であって、この国の上部地方の大都市に住んでいた。ギリシア人は、この都市をエジプトの

テバイと呼び、この王様の神をアンモンと呼んでいる。テウトはこのタモスのところに行って、いろいろの技術を披露し、ほかのエジプト人たちにもこれらの技術を広くつたえなければいけません、と言った。タモスはその技術のひとつひとつが、どのような役に立つものかをたずね、テウトがそれをくわしく説明すると、そのよいと思った点を賞め、悪いと思った点をとがめた。このようにしてタモスは、ひとつひとつの技術について、そういった両様の意見をテウトにむかって数多く述べたと言われている。それらの内容をくわしく話すと長くなるだろう。だが、話が文字のことに及んだとき、テウトはこう言った。

E

「王様、この文字というものを学べば、エジプト人たちの知恵はたかまり、もの覚えはよくなるでしょう。私の発見したのは、記憶と知恵の秘訣なのですから」。——しかし、タモスは答えて言った。

「たぐいなき技術の主テウトよ、技術上の事柄を生み出す力をもった人と、生み出された技術がそれを使う人にどのような害をあたえ、どのような益をもたらすかを判別する力をもった人とは、別の者なのだ。いまもあなたは、文字の生みの親として、愛情にほだされ、文字が実際にもっている効能と正反対のことを言われた。なぜなら、人々がこの文字というものを学ぶと、記憶力の訓練がなおざりにされるため、その人たちの魂の中には、忘れっぽい性質が植えつけられることだろうから。それはほかでもない、彼らは、書いたものを信頼して、ものを思い出すのに、自分以外のものに彫りつけられたしるしによって外から思い出すようになり、自分で自分の力

275

1　ギリシアのヘルメスにあたる発明の神。
2　エジプトの至高神。予言の神。ギリシアでは一般にはゼウスと同一視された。

によって内から思い出すことをしないようになるからである。じじつ、あなたが発明したのは、記憶の秘訣ではなくて、想起の秘訣なのだ。また他方、あなたがこれを学ぶ人たちに与える知恵というのは、知恵の外見であって、真実の知恵ではない。すなわち、彼らはあなたのおかげで、親しく教えを受けなくても物知りになるため、

B

多くの場合ほんとうは何も知らないでいながら、見かけだけはひじょうな博識家であると思われるようになるだろうし、また知者となる代りに知者であるといううぬぼれだけが発達するため、つき合いにくい人間となるだろう」。

パイドロス ソクラテス、あなたは、エジプトの話でも、また気の向くままにどこの国の話でも、らくらくと創作されますね。

ソクラテス だがね、君、ドドネなるゼウスの社(1)に仕える人々の言ったところによると、最初の予言は一本の槲(かしわ)の木が告げたのだそうだ。じっさい、その当時の人々は、君たち若い者のように利口ではなかったから、槲の木の言葉でも、岩の言うことでも、ただそれが真実を伝えるものでありさえすれば、それを聞いて素朴に満足し

C

たものだ。それにひきかえ、おそらく君には、語り手が誰であるかとか、どこの国の人であるかといったようなことが、重大な問題となるのだね。なぜなら君は、もっぱらそれがほんとうにそのとおりかどうかという、ただそのことだけを考えるのではないのだから。(2)

パイドロス おしかり恐れ入りました。文字については、そのテバイの人の言うとおりだと私は思います。

ソクラテス　それならば、ひとつの技術を文字の中に書きのこしたと思いこんでいる人、また他方では、書かれたものの中から何か明瞭で確実なものをつかみ出すことができると信じて、その技術を受けとろうとする人、こういう人はいずれも、たいへんなお人よしであり、まさにアンモンの予言を知らざる者であるといえよう。なぜなら、そういう人は、書かれた言葉というものが、書物に取りあつかわれる事柄について知識をもっている人にそれを思い出させるという役割以上に、もっと何か多くのことをなしうると思っているからだ。

D

パイドロス　まさにそのとおりです。

ソクラテス　じっさい、パイドロス、ものを書くということには、思うに、次のような困った点があって、その事情は、絵画の場合とほんとうによく似ているようだ。すなわち、絵画が創り出したものをみても、それは、あたかも生きているかのようにきちんと立っているけれども、君が何かをたずねてみると、いとも尊大に、沈黙して答えない。書かれた言葉もこれと同じだ。それがものを語っている様子は、あたかも実際に何ごとかを考えているかのように思えるかもしれない。だが、もし君がそこで言われている事柄について、何か教えてもらおうと思って質問すると、いつでもただひとつの同じ合図をするだけである。それに、言葉というものは、ひとたび書きものにされると、どんな言葉でも、それを理解する人々のところであろうと、ぜんぜん不適当な人々のところであろうとおかまいなしに、転々とめぐり歩く。そして、ぜひ話しかけなければならない人々にだけ話しかけ、そうでない人々には黙っているということができない。あやまって取りあつかわれたり、不当に罵られたりした

E

1　244B「ドドネの聖女」の注参照。

2　テクストは疑問文（バーネット）としない。

ときには、いつでも、父親のたすけを必要とする。自分だけの力では、身をまもることも自分をたすけることもできないのだから。

パイドロス　そういった点も、まったくお言葉のとおりです。

276

ソクラテス　では、どんなものだろう。この書かれた言葉と兄弟の関係にあるが、しかし父親の正嫡の子であるもうひとつの種類の言葉について、それがどのようにして生まれるか、またこの書かれた言葉とくらべて、生まれつきどれだけすぐれ、どれだけ力づよいものであるかを、見ることにしようか。

パイドロス　とおっしゃると、それはどんな言葉のことでしょうか？　またどのようにして生まれる言葉なのでしょうか？

ソクラテス　それを学ぶ人の魂の中に知識とともに書きこまれる言葉、自分をまもるだけの力をもち、他方、語るべき人々には語り、黙すべき人々には口をつぐむすべを知っているような言葉だ。

パイドロス　あなたの言われるのは、ものを知っている人が語る、生命をもち、魂をもった言葉のことですね。書かれた言葉は、これの影であると言ってしかるべきなのでしょうが。

六一

B

ソクラテス　まさしくそのとおりだ。では、次のことに答えてくれたまえ。——分別をわきまえている農夫は、もし自分が何かの作物の種を大切にして、それが実りをもたらすことを願っているとしたら、その種を、夏、アドニスの園(1)にまいて、八日の間に美しく生長するのを見てよろこぶといったようなことを、はたしてまじめな目

的のためにするだろうか。それとも、そもそもそういったことをもし彼がするとしたら、それは慰みや娯しみのためにこそするのであって、ちゃんとしたまじめな目的のある種の場合には、農業の技術を用い、その種に適した土地にまき、八カ月たって、自分のまいたかぎりのものが実を結べば満足する、といったやり方をするだろうか？

C

パイドロス　それは、ソクラテス、後のほうの行き方をすると思います。——その農夫は、まじめな目的で種をまく場合と、そうでない場合とを、あなたの言われたような仕方で、区別するでしょう。

ソクラテス　ところで、正しいこと、美しいこと、善いことについて知識をもっている人が、この自分自身のもっている種をいかに取りあつかうかという点で、いま言った農夫よりも分別が足りないと主張すべきだろうか？

パイドロス　とんでもありません。

ソクラテス　してみれば、その人は、そういった知識の内容を「むなしく水の中に書きこむ」——黒い水をつけて書くというようなことを、まじめな目的のためにはしないだろう。葦の茎を用い、自分を弁護することも、納得の行くまで真実を教えることもできないような言葉を用いて、大切なそれらの種をまきはしないだろう。

パイドロス　たしかに、それは考えられないことです。

1　アドニスは女神アプロディテに恋されながら野猪の牙に倒れた、狩好きの美少年の神。アドニスの園というのは、このアドニスの祭に供える植物を早生させるのに使った、一種の植木鉢のことである。

(276)
D
ソクラテス　実際そうなのだ。そういう人が、文字という園に種をまいて、ものを書くのは――もし書くとした場合のはなしだが――、慰みのためにこそそうするのだろうと思われる。それは、「もの忘るる齢(よわい)の至りしとき」にそなえて、自分自身のために、また、同じ足跡を追って探求の道を進むすべての人のために、覚え書きをたくわえるということなのだ。そして彼は、園にまいた種が柔らかく生長するのを眺めてよろこぶだろう。そして、ほかの人々がほかの事柄を慰みの手段に用い、酒盛(さかも)りや、他のそれに類したことによって自分自身をうるおしているときに、けだし彼は、そんなことの代りに、ぼくが言うようなことを慰みの手段として、生を送ることだろう。

E
パイドロス　くだらない慰みのことを思えば、ソクラテス、あなたの言われるような慰みは、なんとこよなく美しいものでしょう、――正義をはじめ、あなたが挙げられたもろもろの問題について話を作りながら、言葉の中にたのしみを見出すことのできる人の慰みというものは。

ソクラテス　たしかにそのとおりだ、親愛なるパイドロス。しかし、ぼくは思う、そういった正義その他に関する事柄が、真剣な熱意のもとにあつかわれるとしたら、もっともっと美しいことであろうと。それはほかでもない、ひとがふさわしい魂を相手に得て、哲学的問答法の技術を用いながら、その魂の中に言葉を知識とともにまいて植えつけるときのことだ。その言葉というのは、自分自身のみならず、これを植えつけた人をもたすける

277
だけの力をもった言葉であり、また、実を結ばぬままに枯れてしまうことなく、一つの種子を含んでいて、その種子からは、また新なる言葉が新なる心の中に生まれ、かくてつねにそのいのちを不滅のままに保つことができるのだ。そして、このような言葉を身につけている人は、人間の身に可能なかぎりの最大の幸福を、この言葉の

力によってかちうるのである。

パイドロス　ほんとうに、あなたの言われるそのことは、先の場合よりも、さらにずっと美しいですね。

六二

ソクラテス　さあそれでは、パイドロス、こういったさまざまの事柄について互いに同意を得たのだから、もうぼくたちは、さっきの問題に対して判断をくだすことができるのだ。

パイドロス　さっきの問題といいますと？

ソクラテス　ぼくたちが話をここまで進めてくるに先立って、見きわめたいと思っていたそもそもの課題のことだ。つまり、ぼくたちの目的は、まず、話を書くということに関してリュシアスに向けられた非難を吟味すること、そしてそれとともに、言論というもののそれ自体を吟味して、どのような言論が技術によって書かれたものであり、どのような言論が非技術的に書かれたものであるかを見ることであった。そこで、この技術性の有無という問題のほうには、すでに適切な解明があたえられたと思われるのだが。

B

パイドロス　ええ、たしかにそう思われました。でも、どのような解明の仕方だったか、もういちど私に思い出させてくださいませんか。

ソクラテス　語ったり書いたりするひとつひとつの事柄について、その真実を知ること。あらゆるものを本質それ自体に即して定義しうるようになること。定義によってまとめた上で、こんどは逆に、それ以上分割できないところまで、種類ごとにこれを分割する方法を知ること。さらには魂の本性について同じやり方で洞察して、

(277)
C
どういうものがそれぞれの性質に適しているかを見出し、その成果にもとづいて、複雑な性質の魂にはあらゆる調子を含むような複雑な言論をあたえ、単純な魂には単純な言論を適用するというように、話し方を排列し整理すること。——以上挙げただけのことをしないうちは、言論というものを、その技術的な取りあつかいが本来可能な範囲で、技術にかなった仕方で取りあつかうということは、けっしてできないであろう。これは、その目的とするところが教えることであれ、人を説得することであれ、同様である。——先の議論全体がぼくたちに告げたのはこういうことであった。

パイドロス この問題について明らかにされた点は、たしかにそのような事柄でした。

六三

D
ソクラテス これに対して、こんどは、言論を語ったり書いたりするのが立派なことであるか、恥ずべきことであるか、そして、どのような場合に、それが非難に値する行為と言われてしかるべきであり、あるいはそうでないのか、という問題についてはどうだろう。ついさっきの議論の結果が、この問題について明らかにしたことは……

パイドロス ついさっきの議論といいますと？

ソクラテス とにかく、こういうことが明らかにされた。——リュシアスでもほかの誰でもいいが、一個人としてものを書く場合にせよ、あるいは、法律の制定者として政治的な文章を書くというやり方で、公の立場でものを書くにせよ、いやしくもかつてものを書いたり、ないしはこれから書こうとするに際して、もし書かれた文

字の中に何か高度の確実性と明瞭性が存すると考えてそうするのであれば、その場合にこそ、人が実際に非難を口にするとしないとにかかわらず、書く本人にとって恥ずべきことなのである。なぜならば、正と不正について、善と悪について、覚めて見るその真実のすがたと夢の中の影像との区別を知らないということは、たとい群衆こぞってこれをほめ讃えようとも、真理の名において非難されることをけっしてまぬかれるわけには行かないのであるから。

パイドロス そのとおりですとも。

ソクラテス これに対して、書かれた言葉の中には、その主題が何であるにせよ、かならずや多分に慰みの要素が含まれていて、韻文にせよ、散文にせよ、たいした真剣な熱意に値するものとして話が書かれたということは、いついかなるときにもけっしてないし、さらには、口で話す言葉とても、吟誦される話のように、吟味も説明もなく、ただ説得を目的に語られる場合には同断であると考える人、――書かれた言葉のなかで最もすぐれたものでさえ、実際のところは、ものを知っている人々に想起の便をはかるという役目を果すだけのものであると考える人、――そして他方、正しきもの、美しきもの、善きものについての教えの言葉、学びのために語られる言葉、魂の中にほんとうの意味で書きこまれる言葉、ただそういう言葉の中にのみ、明瞭で、完全で、真剣な熱意に値するものがあると考える人、――そしてそのような言葉が、まず第一に、自分自身の中に見出され内在する場合、つぎに、何かそれの子供とも兄弟ともいえるような言葉が、その血筋にそむかぬ仕方でほかの人々の魂の中に生まれた場合、こういう言葉をこそ、いわば自分の生み出した正嫡（せいちゃく）の子とも呼ぶべきであると考えて、それ以外の言葉にかかずらうのを止める人、――このような人こそは、おそらく、パイドロスよ、ぼくも君も、とも

E 278 B

にそうなりたいと祈るであろうような人なのだ。

パイドロス　ほんとうにおっしゃるとおりです。この私は、そうなりたいと思いますし、祈りもいたします。

六四

ソクラテス　それでは、これでもうぼくたちは、言論に関する問題を論じるという慰みを、ほどよくたのしみ終えたことにしよう。そこで君は、リュシアスのところへ行って、こう告げたまえ。――ぼくたち二人は、ニュンフたちのすみかである神聖な泉のあるところまで道を下って行って、そこでお告げを聞いた。そのお告げの言C葉は、ぼくたちに何を語ったかというと、まず、リュシアスをはじめとして、そのほかに文を作る人がいればその人に、それから、ホメロスをはじめとして、そのほかにまた、音曲の伴わない言葉だけの詩にせよ音曲が伴った歌われるための詩にせよ、とにかく詩を作った人がいればその人に、第三には、ソロンをはじめ、政治的な言論の領域で、法律という名の書きものを書いた人に、次のように伝えよと命じていた。すなわち、いわく、もしそういったものを書くに際して、真実がいかにあるかを知り、自分の書いた事柄について訊問されたときに、書いたものをたすけてやることができ、そして、書かれたものは価値の少ないものだということを、みずからが実際に語る言葉そのものによって証明するだけの力をもっているならば、そういう人は、それらの書き物からつけDられる肩書で呼ばれてはならない。彼の呼び名は、真剣な目的をもって当る仕事からこそつけられるべきである、と――。

パイドロス　では、あなただったら、そういう人に何という呼び名をあたえますか？

ソクラテス　これを「知者」と呼ぶのは、パイドロス、どうもぼくには、大それたことのように思われるし、それにこの呼び名は、ただ神のみにふさわしいものであるように思える。むしろ、「愛知者」(哲学者)とか、あるいは何かこれに類した名で呼ぶほうが、そういう人にはもっとふさわしく、ぴったりするし、適切な調子を伝えるだろう。

パイドロス　ええそれにまた、少しも穏当を欠くところはありません。

ソクラテス　では、他方、長い時間かかって、ここを削ってあそこにつけ加え、あそこを削ってここにつけ加えるといったふうに、あれこれと文句をひねくり返しながら組み立てたり書いたりした、その当の作品以上に価値のあるものを自己の中にもっていないような人、そういう人だったら、君はおそらく当然、「詩人」とか、「作文家」とか、「法律起草家」とかの名で呼んでよいことになるのではなかろうか？

E

パイドロス　むろん、そう呼ぶべきでしょう。

ソクラテス　それでは以上言ったことを、君の親友に告げてくれたまえ。

パイドロス　それであなたは？　どうなさるおつもりなのですか。あなたの親しい人にだって、知らぬ顔をしているという法はないではありませんか。

ソクラテス　誰のことかね、それは？

パイドロス　あの優秀な人物、イソクラテス(1)です。あの男には、どんなことを伝えるおつもりですか、ソクラ

1　前四三六―三三八年、プラトンより七、八年ばかり年長のアテナイの弁論家。↓補注D(二七一ページ)。

テス。私たちは彼を、どういう人間であると言うべきでしょうか？

ソクラテス イソクラテスはまだ若年の身ではないか、パイドロス。でも、ぼくが彼についてその将来を占うところを、話してあげてもよいよ。

パイドロス どのように占われますか？

ソクラテス ぼくの思うところでは、彼イソクラテスは、そのもって生まれた素質において、リュシアス流の弁論の水準をはるかに抜いてすぐれているし、その上、人がらも一段と高貴なところがあるようだ。だから、いまに年齢が進むにつれて、もし、彼が現在手がけている専門の言論そのものの領域で頭角をあらわし、かつて言論にたずさわった人たちとくらべて、大人と子供以上の差をつけたとしても、べつに驚くにはあたらないだろう。のみならず、さらに、彼がそれだけの業績に満足できずに、より崇高なある種の衝動にみちびかれて、もっと偉大なものに到達したとしても、それはじゅうぶんうなずけることだ。なぜかというと、あの男の心には、友よ、B 知を求める哲学的精神が、生まれつき宿っているのだから。——さあそれでは、ぼくはこれだけのことを、この土地にすむ神々からおくられた言葉として、わが愛する若者イソクラテスに伝えよう。君のほうは君の愛するリュシアスに、さっきのことを伝えたまえ。

パイドロス そういうことにいたしましょう。それはそうと、暑さもやわらぎましたから、行こうではありませんか。

ソクラテス この土地の神々にお祈りをささげてから行くべきではないだろうか。

パイドロス ええ、それがよいでしょう。

ソクラテス　親愛なるパンよ、ならびに、この土地にすみたもうかぎりのほかの神々よ、この私を、内なるこころにおいて美しい者にしてくださいますように。そして、私が持っているすべての外面的なものが、この内なるものと調和いたしますように。私が、知恵ある人をこそ富める者と考える人間になりますように。また、私の持つお金の高は、ただ正気の人だけが、にない運びうるほどのものでありますように。――まだ何かほかに、ぼくたちがお願いすることがあるかね、パイドロス？　ぼくのほうは、これだけのことをお祈りしてしまえば気がすむのだが。

c

パイドロス　いまのことを、この私のためにも祈ってください。友のものはすなわち、わがものですからね。

ソクラテス　では、行こうではないか。

『パイドロス』補注

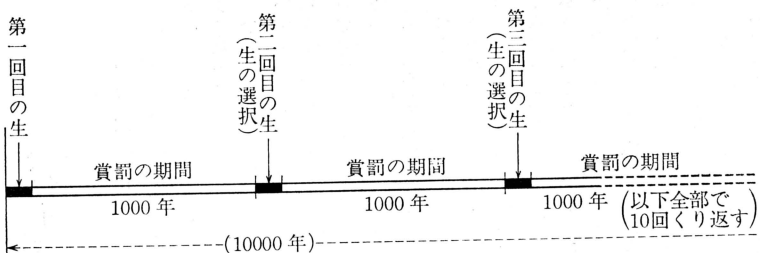
A　魂の転生(248C)

『パイドロス』における転生のミュートスの体系を、『国家』Xのミュートスから説明を補いながら整理すると、次のようになる。

(1)　神々が天外の世界を観照する何度目かの機会に、悪い方の馬にわずらわされて真実在を見そこなった魂は、地上に墜ちて、例外なしに人間の肉体に宿る。この最初の生においてどのような人間に生まれるかは、それぞれの魂がそれまでの天外の世界への「回遊」の機会に、どれだけの真実在をどの程度観て来たかによって決まる(以上248C〜E)。

(2)　この第一回目の人間としての生涯を終えると、魂は裁きを受け、生きている間にした行為の印を背中に押されて(『国家』X. 614C)、正しい生を送った者は右側へ上って行く道(『国家』同上)を通って、「天上のある場所」へ連れて行かれ、不正な生を送った者は左側へ下って行く道(『国家』同上)から地の下の「仕置きの場」へ連れて行かれて、それぞれの生前の行為に相当した賞罰を受ける(以上249A)。——ここで「天上のある場所」と言われているのは、他の場合では「幸福者の離れ島」とか、いわゆる楽土(Elysion)とか言われるものに当ると思われ、魂が輪廻転生をのがれて最後に帰って行く故郷——ここでは一二神のもと——とは区別される。このいわゆる天国と窮極の故郷との区別は、オルペウス教では、アエール(空気)の領域とアイテール(aither)の領域としても区別される。

(3)　この一つの生涯とそれにつづく賞罰の期間は合せて千年である(249A)。——『国家』X. 615A〜Bでは、生きている間(この期間を大略百年とみなす)に行なった行為の一〇倍に相当する賞罰を与えるという含みで、賞罰の期間だけが千年と言われている。おそらくこれが本来の考え方かもしれないが、ここでは、魂が一度地上に墜ちて最後にまたもと来た天上の神々のもとへ帰るまでに要する期間が一万年と規定されていることや、愛知者の魂が三回同じ生をつづけると三千年でもと来たところへ帰ると言われていることから、千年という一つの周期の中には、生の期間も含まれていると考えないと計算が合わない。257Aで「九千年の間、地のまわりと地の下とを、さまよいつづけさせる」とあるのは、この千年の一周期の中から、地上の生を送る期間約百年を引いて、残りの賞罰の期間を一〇回くり返すという意味であろう。

(4)　千年の周期が過ぎ、賞罰の期間が終ると、それぞれの魂は、第二回目の生を選ぶ(249B)。——『国家』Xで詳しく語られているところによると、賞罰の期間中それぞれ天上あるいは地下で過ごしてふたたび集まって来た魂たちに対し

て、くじによって順番があたえられ、それぞれの魂はその順番に従って、限られた生の種類(さまざまの人間や動物などの)の中から好きな生を選ぶわけである。環境と習慣のおかげで前生を大過なく過ごし、その功によって天上の旅路を終えて来た者が、第一番目のくじに当り、無考えに専制君主の生を選んだり、前にオルペウスであった魂が白鳥の生を選んだり、最後の順番に当ったオデュッセウスの魂が、暇で面倒の少ない一私人の生がみなに見すてられて残っているのをみて、前生の苦労が身にしみていたため、第一番目に選んだとしてもこの同じ生をとったであろうとよろこんだり、いろいろ興味ぶかい情景が語られている。くじは運命によって決まり、選択は自由意志の問題であるから、この両者によって決められるわれわれの生は、半ば必然、半ば自由によって規定されていることになる。われわれとしては、つねづねから、どのような生が真の意味で幸福な生であるかを、見さだめておかねばならぬということが、そこで強調されている。

(5) こうして第二回目の生がきまると、前と同様にしてそれに賞罰の期間がつづき、この千年の周期を全部で一〇回くり返して一万年が経過すると、この『パイドロス』によれば魂にふたたび翼が生じて、かつていた天上の一二神のもとへ帰ることができる。――ただし、エロースに生き、愛知に生を送った者の魂は、つづく周期において次々と同じ生を選び、三度同じ生涯を送ったならば、都合三千年だけで翼が生じて天上の故郷へ帰ることができ、それ以上の輪廻転生の周期を免除される。けだし、エロースは魂の翼の再生を促すものだからである。

B 秘儀について(249D)

秘儀(ミュステーリア)というのは、穀神ないしは大地母神デメテルをまつる祭儀であって、数々の準備的儀式と精進を経た少数の者のみが参加をゆるされるという秘教的性格をもつ。その起源は非常に古く、前一〇世紀頃までさかのぼられるとされている。最も有名で、ギリシアにおけるデメテル崇拝の最大の中心は、アッティカ州エレウシス(前七世紀末アテナイに併合)で行なわれる秘儀であった。これに参加するといっても、予備的な修業と精進の程度によって、いくつかの段階があるが、最後に、神殿の内陣に入ることが許されると、そこでデメテルの像(一説には一種の黙劇)をまばゆい光

のもとに見せられる。これが最高の段階、いわゆる奥義の伝授であって、これにあずかった者は永遠の幸福を約束された。プラトンはしばしば、真実在(イデア)の観得を秘儀に関する術語を使って説明する。

C　「ロゴグラポス」に関連して(257C)

あたかもソフィストという言葉が、職業名として一種の悪名であったように、ロゴグラポスも、その売文業的性格や、弁論を書くだけで自分自身は演説をしないという点のために、政治家や実地の演説を得意とする型の弁論家たちは、この職業名に一種の軽蔑の感情をこめて使っていた。だから、ここでパイドロスが述べているように、リュシアスを非難しようとする政治家が、彼をロゴグラポスと言って罵るということも、じゅうぶん理解できるところである。これがもし実際の歴史的事実の反映であるとすれば、前四〇三年の秋に三〇人寡頭政府が崩壊して民主制が回復されたとき、リュシアスの味方であったトラシュブロスという政治家が、居留民(メトイコス)であったリュシアスにアテナイの市民権を与える提案を行なった際に、それに反対する政治家(おそらくアルキノス)が、反対演説の中でそのようなことを言ったのかもしれない。

ところで、パイドロスがそのような事実をあげて、「だからリュシアスはもうこれ以上話を書かないでしょう」と言うとき、彼は、このロゴグラポスという言葉を、わざと文字どおりの「話の作者」という意味にかけて使い、先に話されたエロースに関する説話のようなものを書くことまでも、ロゴグラポスという罵りの言葉の対象に入っているかのように言っているのである。そして、次にみられるように、ソクラテスは、そういう非難をする政治家自身も、実はものを書くことが好きな連中なのだということを、証明してみせるのであるが、この場合のソクラテスのやり方は、パイドロスの右のような言葉の一種のたわむれに応ずるがごとく、普通は法案の作成や起草の意味に使われる「シュングラペイン」(συγγράφειν)という言葉やその名詞形を、これまた文字通りの意味の「ものを書く」にかけて使い、これをパイドロスが用いたロゴグラポスの語源的な意味に連絡させている。パイドロスははじめそれに気がつかず、ソクラテスの言うことが納得できないが、具体的な説明によってようやく呑みこめる。訳文中、傍点をつけた言葉は、いずれもこのような独得の用語法に属するもの。

D　イソクラテスについて(278E)

イソクラテスはプロディコス、プロタゴラス、またとくにゴルギアスに学んだ。ペロポンネソス戦争の最後の数年間に財産を失い、イオニア沿岸のキオス島に渡って一年間ほど(前四〇四—三年)弁論術を教えた後、アテナイに帰って、他人のために法廷弁論を書くことを仕事にするようになった。前三九二年頃、彼は、プラトンのアカデメイアに五、六年ほど先立って、公開的な学校を開き、政治教育をはじめた。彼は自分の授ける教育を、目的の高さと視野の広さにおいてソフ

ィストや世に「弁論家」と呼ばれる人たちのそれから区別し、他方、政治生活と直接結びついた実際的な性格の点で、抽象的思索や細かい議論に熱を入れる人たちのそれからも区別しようとした。この後者の点と、また一般に文章の習練を第一の方法とした点は、プラトンがアカデメイアにおける教育において、数学や自然科学を基礎学問として重要視したのにくらべると、大きな相違点である。

プラトンとイソクラテスとの関係については、互に方法論を異にする同時代の学校経営者ということからも当然予想されるように、かなり微妙なものがあったと思われる。両者の著作の中には、簡単にはそうと断定できないけれども、互いに相手に対するあてこすりではないかと推測されるような言葉がかなり指摘されている。少なくとも、自尊心の特別強い人であったイソクラテスにとっては、弁論術や文章法の教授の実際をしばしば手きびしく批評したプラトンに対して、心おだやかならぬものがあったと想像されるのである。この箇所でソクラテスが語っているイソクラテスに対する最大限ともいえる讃辞にしても、これを書いたプラトンの動機にはいろいろ複雑なものがあったと思われるのであって、古くはキケロ(『ブルトゥス』(一三の四二))、新しくはバーネット(『ギリシア哲学』二一六ページ)などのように、簡単にこれをもって二人の間の完全な友好関係を断定するのも危険であろう。ただし他方、ここの言葉が何もかも皮肉な意味で言われていると考える(例えばロバン)のも少し思いすぎであって、イソクラテスの示した教育に対する熱心な態度や、ギリシアの和平統一を主張する政治的見解には、プラトンの共感を呼ぶものもあったと思われるから、彼を他の既成弁論家たちから区別して称揚したここの言葉には、ある程度真実がこめられているとみるべきであろう。ただ、哲学(ピロソピアー)の概念に対する両者の見解には、根本的な相違があったことを忘れてはならない。

プラトンは文体の上では、イソクラテスの影響をかなり強く受けた。いわゆる母音重複(ヒアトス)の回避といった工夫も、その一つである。カイロネイアの戦がマケドニア方の勝利に終った二、三日後に、イソクラテスは九八歳で死んだ。ちなみに、この『パイドロス』の中の対話が行なわれていると想定される時代は、前四一〇―四〇五年頃であるから、ここで「まだ若年の身」と言われるイソクラテスは、その頃三〇歳前後という勘定になる。そして他方、プラトンがこれを書いた年代は、それよりさらに二〇年以上は後であると考えられるが、イソクラテスはすでにそれまでに数々の論文を発表して名声たかく、このソクラテスの「予言」は半ば実現されていた。

イソクラテスの哲学観、教育観については、彼が八二歳のときに執筆した文書『アンティドシス』が参考になる。

『饗宴』解説

鈴木照雄

登場人物

アポロドロス(Apollodoros)　アテナイのパレロン区の人(172A、『パイドン』59B)、ソクラテスに心底より傾倒した直截的で情熱的な弟子(173Bsqq.、『パイドン』59A、クセノポン『ソクラテスの弁明』(二八)、クセノポン『ソクラテスの想い出』第三巻(一一)。物事に感じ易いその性質が「心優しい」と渾名されたのであり(173E)、ソクラテス刑死を目の前にしての激しい慟哭は(『パイドン』117D)その現われといえよう。ソクラテス裁判の際には、プラトン、クリトンらと共に、師のため三〇ムナの科料の保証人となることを申出ている(『ソクラテスの弁明』38B)。

グラウコン(Glaucon)　172C注7を見よ。

アリストデモス(Aristodemos)　アテナイのキュダテナイオン区の人。アポロドロスと異って、古くからのソクラテスの弟子であり、しかも最も親しい「最も熱烈なソクラテスの讃美者の一人」であった(173B)。一途にソクラテスを敬慕讃仰するその忠実な、かつ単純素朴な心根の彼を、師に関する事実をひたすら大事にするいわゆる理想的伝記作家のタイプの人間であると見なし、それがプラトンをして彼をこの場合の最初の報告者に選ばせた原因である、とする解釈もある。

アガトン(Agaton)　悲劇作家(前五世紀後半)。本篇での祝宴は前四一六年、彼の最初の作品で優勝した折のことである(173A)。このとき、彼はまだ三〇歳余りの若さであったらしい。その美貌と女らしい仕草は有名であり、アリストパネスもその作『女の祭(Thesmophoriazusae)』一九一—一九二行でその点を揶揄(やゆ)している。なおこの祝宴から約一〇年後、マケドニア王アルケラオスの宮廷に客人として赴いたが、そこでもその詩才と美貌とをもてはやされた。

パイドロス(Phaidros)　アテナイのミュリヌゥス区の人。父はピュトクレス(『パイドロス』244A)。『プロタゴラス』(315C)によれば、ヒッピアスをかこんで、自然や天文のことを論じていたことになっている(「エリュクシマコス」の項参照)。『パイドロス』の冒頭では、恋に関する言論に熱中し、リュシアスの作を暗記しようと一所懸命になっている姿が描かれている。その意味でも、彼が本篇で恋の讃美を話のテーマに提案した者とされていることは、似つかわしいことである。これを要するに彼の一般像としては、当時のアテナイの平均的知識人とみる見方が正鵠(せいこく)をえているであろう。

パウサニアス(Pausanias)　アテナイのケラメス区の人。その伝については、本篇の記事以外はほとんど未詳。ただ『プロタゴラス』(315D～E)、クセノポン『饗宴』(八の三二)も、本篇とならんで、彼がアガトンを恋していたことを、ことにクセノポンの作品の方は、彼が少年愛を強く擁護していたことを記している。彼はアガトンについてマケドニアのアルケラオスの宮廷まで行った、とも伝えられる。

エリュクシマコス(Eryximachos)　アスクレピオス医師団に属する医者(186E注2参照)。父のアクメノスとともに、パイドロスの特別に親しい友であった(177A、『パイドロス』227A, 269A)。『プロタゴラス』(315C)によれば、カリアス邸でのソフィスト群の中で、ヒッピアスの取巻き連中の中に彼とパイドロスが入っている。

アリストパネス(Aristophanes)　176B注4を見よ。

ソクラテス(Socrates)

マンティネイアの婦人ディオティマ(Diotima)　プラトンの虚構になる人物であろう。その名ディオティマは「ゼウス(から)の名誉をもつ女性」の意味。ゼウスはもともと万物を操る知者であるゆえ、上のような名の彼女は抜群の知者であることが寓意されているわけであり、エロース論の奥義を授けるに相応しい人物ということになろう。
マンティネイアは、ペロポンネソス半島中央部の山地アルカディアの東部高原にある良治の名ある市(まち)。なお、この市の名と「マンティケー」(予言的な〔女性〕)との発音上の類似に注目して、ディオティマの郷里としてマンティネイアを考えようとする見方もある。

アルキビアデス(Alcibiades)　前四五〇頃―四〇四年。したがってこの「饗宴」のときは、三〇代中葉ということになる。

アテナイ名門の出であり、かつ才能と美貌ともに、名高く、当時政治、軍事両面において最も傑出していた人物である。野望に富み、その一生は波乱の連続であったが、そこには彼の無節操が如実に現われている。ソクラテスの親しい弟子となりながらも結局脱落してしまい、晩年のソクラテスのいわゆる悪名に何かと原因をなしたわけである。前四一五年アテナイ艦隊のシケリア島遠征を企て、その総帥の一人に指名されたが、有名なヘルメス像破壊と秘儀冒瀆の件の裁判に、出征先のシケリアより召喚され、身の危険を覚えてスパルタに走り、国家に謀叛する行動をとるに至った。最後は、三〇人寡頭政府とスパルタ王リュサンドロスの差金で、亡命先の小アジアのプリュギアにおいて刺客の手にかかり殺された。

一

まず年代に関すること。本篇は形式上、ある出来事をある人がのちに報告するという体裁をとっているので、その出来事にかかわる対話設定年代ともいうべきものと、それの報告年代と、これら二つの年代に分れる。そしてそれらに加えて、本篇そのものの執筆年代が問題になる。

さて第一の対話設定年代であるが、それは本文にもある通り、アガトンがその悲劇をもって最初に優勝した折のことである。すなわち、アテナイオスによると、エウペモスがアルコンであった期間のことで、前四一六年、詳しく言えば、ガメリオン月(一―二月)に行われたレイナイア祭、つまり小ディオニュシア祭でのことである。とすると、この時ソクラテスは四五歳ということになる。

つぎに報告年代であるが、報告者が直接ソクラテスに当ってその内容の一部を確かめていることになっているから(173B)、彼の刑死の年(前三九九年)より以前でなければならない。また、この報告の時からすると久しい以前に、アガトンはアテナイを去っていることになっている(172C)。ところで、アリストパネスはその作品『女の祭』(前四一一年)の初めの方で、女っぽいアガトンを痛烈に揶揄しているが、そこではまだアガトンがアテナイにいる

ことになっている。しかし六年後の作品『蛙』(前四〇五年)では、すでにアガトンはいないことが語られている。以上のことをおもに勘案しつつ、報告時をだいたい前四〇〇年頃と想定するのが普通のようであるが、妥当であろう。

最後に、いちばん厄介な執筆年代のこと。これは、こんにちでも依然問題でありつづけるプラトン著作全体の執筆年代とその順序に直接関係することでもある。ともあれ、本篇のなかに、アカデメイア建設(前三八七年頃)からの影響をみるとか、第一回シケリア旅行(前三九九—三九八年頃)において知ったディオンへの深い愛情と彼の未来への嘱望の現れを読みとるとかいうことは、そのままではなおいろいろ問題もあろう。が、弁論家ポリュクラテスの著わしたソクラテス弾劾のパンフレットに対抗して、プラトンが独自の、そして彼からすれば真のソクラテス弁明を意図し、それが本篇の直接動機の少くとも一つであったろうと考えることは、多くの人々のげんになしているところであり、また首肯されることではなかろうか。ところでこのパンフレットは、前三九〇年代の末頃に書かれたもののようである。とすると、本篇の執筆はそれより以前、すなわち前三八〇年代より前とはなりえなくなる。また、本文でのアルカディア人の分住のこと(193 A)を、前三八五年の事件とみれば、本篇の執筆年は必然的にそれ以後となるが、その事件を前四一八年のアルカディア同盟破棄のことであるとしても、プラトンにその記憶を甦らせたものはアンタルキダスの和(前三八七年)以後の、スパルタのとったこのような処置であったろうことから、本篇の執筆年代はこの場合にあっても、少くとも前三八七年以後ということになろう。

以上のこと、そのほかなお本篇から推定される年代的なことどもからして、本篇の執筆時をだいたい前三八五年後数年の間ぐらいに想定するのが妥当な線ではなかろうか。そして、それはプラトンの生涯に当てはめてみると、彼の中年期に入る。そして、この期に所属する彼の作品としてその中心をなすものは、おおよその一致するところ、本篇、『パイドン』、それに『国家』である。そしてこれらは、思想的にも芸術的にも一群を劃するものを持っていることは、周知の通りである。

つぎに、作品としての形式について。本篇は第三者の報告を通して間接的に語られるという形をとっているが、しかもその報告者は報告の事実を直接見聞したのでなく、さらに彼とは別の、事件に直接参与した者がおり、その者からのまた聞きで語る、という最も複雑な形式をとっている。その点、事件に直接臨んでいたパイドンが報告するという様式の『パイドン』とは異り、局外者エウクレイデスの書いたものを通して、その書きものの内容をなすソクラテスとテアイテトス、テオドロスとの対話を語るという『テアイテトス』と同じ系統のものということになる。

ところで本篇の報告者はアポロドロスであるが、本篇のみならず『パイドン』(59A～B)からも知られるように、心底からソクラテスに傾倒している感受性の強い情熱的な人物である。しかしその彼も、報告時には弟子として、まだ三年以来のいわば新参者であり、その報告の源は、古くからの熱心忠実なソクラテスの弟子であり饗宴の直接参加者であるアリストデモスにあおぐ、という形になっている。

さて、それならばプラトンはどうしてこのような複雑な形式を採用したのか、また右の二人、ことにもアポロドロスを当面の報告者に選んだ理由は？　——ということがよく詮索の種になる。しかしこれらの問題意識は、結局のところプラトン対話篇の歴史性をめぐっての問題に由来しているように思われる。この、歴史性の問題とは、いまの場合、直接には本篇の劇設定とそのなかで行われた諸演説ならびに諸事件の歴史性、ひいては本篇中のソクラテスの歴史性といったものにかかわることである。この問題は、のちに一般的な形で、かつ少し違った関連から触れられるであろう。ともあれ、それはそれとして一つの考うべき問題であることはもちろんであるが、しかしプラトン哲学の(主要)著作として『饗宴』を考究するとき必ず前面に押し出されなければならない最重要の問題であるとは考えられない。もちろんかかる点は、詩と真実との兼合いの上に立つ芸術家プラトンの腕の見せ所であることはいうまでもないが。

ただ、上にあげた二つの問いのうち後の方の問いに対することとして、こういうことが本篇の特殊事情として言える。すなわち、本篇の主要テーマの一つにソクラテスの弁明、いな、ソクラテスの讃美があるということは、文学的に、当のソクラテスを語り手にすることを不可能とする。そしてもし語り手がソクラテス以外の者でなければならぬとすれば、才気煥発の弟子よりも、創造の才には欠けるが忠実一途の弟子がその役に選ばれる方が、その報告の信憑性も増すであろうということ、つまり報告者として適切であろうということである。

そもそもここに言われる「饗宴(symposion)」とはどういうものであるかは、本篇からだいたい伺えるところであるが、言うまでもなくそれは、とかく乱暴狼藉に流れるだけの単なる酒宴ではない。そこには、かかる饗宴たらしめる基本線のようなものが厳存している。すなわち、会席者のうちの一人が座長になって、その会の方針と実際の進行をとりしきるのであり、饗宴として大事なことは、そこでの飲み食いでなく、むしろそこで主としてなされる談話談論の方であった。かかる饗宴も、まず御馳走から始まるわけであるが、それが終ると灌奠(かんてん)等の儀式がとり行われ、それから酒ということになる。もちろん、その際の余興として歌謡、遊興のための女性、当て物遊び、さらには、相手の風貌を面白おかしく諷しあう遊びといったものも加わることが少くないが、より高級なものにおいては専ら真面目な談論が行われたのである。だからこそ、『法律』からも知られるように、プラトン自身この種の饗宴のもつ教育的意義と効果に注目したわけであろう。

なお、本篇の前にこのような文学形式の作品が存在していたかどうかははっきりしないが、かかるものが一つの文学ジャンルとしてその後ながく存続したことは周知のごとくである。まずクセノポンの『饗宴』。これは、プラトンのそれとの前後関係がよく問題にされるが、いまのところはっきりした結論は出せないようである。くだってはエピクロスも書いているが、なおプルタルコスの『七賢人の饗宴』等。またアテナイオス(二〇〇年頃)の『賢者の饗宴(ディプノソピステース)』、さらには司教メトディオス(三世紀と四世紀の境)のキリスト教化された作品があり、こうしたものを通って、

ヴォルテールの作品などにまで至るとさえみられている。しかし、作品としての価値の点では、クセノポンの『饗宴』を始めとしてすべては、本篇に較べればまったく色褪せたものといわざるをえない。

二

さて作品の内容的な分析であるが、その出発点として、ロバンの区分(*Platon, Le Banquet*, Budé éd., notice)をここに紹介することとする。ともあれ最も妥当なものの一つと思われるからである。

一　序(172A～178A)
　(1) 導入部(172A～174A)
　(2) 前口上(174A～178A)
二　第一部(178A～199B)
　(1) パイドロス(178A～180B)
　(2) パウサニアス(180C～185C)
　(3) 幕間(185C～E)
　(4) エリュクシマコス(185E～188E)
　(5) アリストパネス(189A～193D)
　(6) 幕間(193D～194E)
　(7) アガトン(194E～197E)
　(8) 第一部結び(198A～199B)
三　第二部(199B～212C)

(1) 問答法的吟味

(a) ソクラテスとアガトン(199B〜201C)

(b) ソクラテスとディオティマ(201D〜207A)

(2) ディオティマ説話

(a) 予備的説明(207A〜209E)

(b) エロースの訓練とその終点(209E〜212A)

四　第三部(212C〜223A)

(1) アルキビアデス登場(212C〜215A)

(2) アルキビアデスのソクラテス讃美(215A〜223B)

五　結びの口上(223B〜D)

以上である。

まず第一の序と第四の結びの口上は、本篇の劇構成全体の枠を形作っている部分で、直接の報告者アポロドロスからの説明となっている。すなわち、前者においては、当の饗宴そのもの、それについての伝達の事情、ならびにエロース讃美の演説が始まるまでのことどもなどが紹介的に説明されており、後者は、饗宴の結末がどんなであったかを語っている。かくて、このような枠組のなかでの、真の内容をなすものは、上述の区分における第一部から第三部までの三つの部分である。

第一部は、パイドロスに始まってアガトンに終る、ソクラテスを除く五人の演説が――しかし実際には、そのほかの人々の演説も行われたことになっているが――その実質的中味をなし、その分量はバーネット版テクストで約二六頁半である。第二部は、ディオティマ説話を核とするソクラテスの演説の部分で、分量は約一九頁である。最

後に第三部は、アルキビアデスのソクラテス讃美をめぐっての部分であって、ソクラテス讃美の点、少くとも表面上は、エロース讃美の第一、二部とは異る。なお、この部分の分量は約一四頁である。
さて、本饗宴における談論のテーマにエロースを提案し、その意味で「言論の父」となって本饗宴の座長に選ばれたのはパイドロスである。彼は座長として最上席についたがゆえに、取決めに従って、口火を切って第一の話者になる。彼はホメロスやヘシオドスなどの詩やそこに語られている神話をふんだんに引用し、いわば文献的資料に依拠して、エロースの古く高貴なことを讃え上げる。そしてこのエロースの本質は、彼にとって、最大の道徳原理であるということ。つまり、人をして最も名を惜しむ者となし、さらには相互を和合させ、すすんで自己犠牲にも赴く勇者となすものであるというのである。とはいえ、彼の説く道徳はひっきょう名誉を原理とする段階に止るものであり、それに見合って、彼の懐くエロース観もまた浅薄であることをまぬがれない。なるほど彼はリュシアス流の弁論術に熱狂し、そのほかにも当時の新知識に激しい好奇心を注いだけれども、終に単なる皮相な知識愛好者におわったようである。
このパイドロスの短い(約三頁)話を次ぐものは、反対に長い(約六頁半)パウサニアスの演説である。ところで彼の演説を報告し終ったときにアポロドロスが、ソフィスト・弁論家流の語呂合せをふざけて使っていたが(185C)、そのことにも暗示されているように、その思想的な内容面でもその表現上の形式面でも、ともに弁論家的なものが顕著である。このことは、事実についての行き届いた考察、立論の巧みさといったものには有利に働いているけれども、エロースそのものの認識とか、そのエロース観の深さないし高さという点ではまぎれもなくマイナスの作用をなしている、といわねばなるまい。しかし、パイドロスの話と較べて、その長さに遜色ない内容的な豊さをもっていることも確かである。
ところで彼は、エロースには天上的な善きエロースと低俗な悪しきエロースがあるということを、やはり二種類

のエロースを考える伝承と信仰上の事実を土台にして、まず提起する。そしてそれを説明するために、次の原理を持ち出す。すなわち、エロース(恋)を始めとしてすべての行為は、それ自身では善くも悪くもない中性的なものであるが、それが善く行われれば善いものとなり、悪く行われれば悪いものとなる、と。したがって、讃うべきエロースはこの善き方のエロースのみであるが、これはさしづめ男対男の「少年愛（パイデラスティアー）」のなかに見出されそうである、とする。しかし、それに関する実際の習わしをみると、スパルタなどドーリス系の土地ではそれが無条件に肯定されているが、他面、イオニア地方など異民族の支配下にあるところでは無条件的に否認されている。それに対して当アテナイでは、肯定と否定の両方が並存しているようで、複雑な状況を呈している。

このような習わしの実情はどういうことであろうか。これらのうち前二者には、それぞれ市民の精神的怠惰と支配者の私利私欲という外的なものが支配しており、善いも悪いも道徳的要素の入り込む余地はない。ただ最後の、複雑なアテナイの場合にのみ、善きエロースは成り立つ。すなわち善きエロースとは、恋する者と恋される者とが互に徳を目指して自己献身的に精進努力をしあうことにある、となすのである。

かくてパウサニアスの意図は、当時のギリシアに一般的であった同性愛的少年愛に、善きエロースを見、少年愛の精神化と高貴化を狙ったものであるといえよう。しかしながら、彼の強調する徳ははたしてパイドロスのそれとどれほどの違いがあるか。このように説くパウサニアスの少年愛に、もともとかかる愛の根底にある肉の要素がどれだけ精神的要素に昇化したか、疑わしい限りである。しかるに、美少年に対するソクラテス的エロースは、この肉体的要素の完全捨象にこそ成り立つのである。そのことは、『法律』におけるプラトンの反少年愛の態度を持ち出すまでもあるまい。

さて第三の話手は、医者のエリュクシマコスである。誇りとともに自分の専門たる医術に技術全体のいわば原型をみる彼は、その技術知の提供する諸法則と諸規範を金科玉条と祭り上げ、それらにとらわれて学者風な謹厳居士（こじ）

をきめこむ。その有様は、創造的精神の欠除の現れであり、衒学的態度そのものとも評されよう。そしてその演説も、骨組だけのそっけないものとなっている。とはいえ、修辞的要素をまとわぬ、よかれあしかれ科学的文章ということかもしれない。

その内容面において言えば、いままでの二人の話者の語るエロースが人性的なものであるのに対し、ここでのエロースはいうなれば宇宙的であるということ。それは、人間のみでなくこの世界の森羅万象を——自然と人工の区別なく——支配する原理として捉えられていることである。まず医学において考えると、健康には人体内に生理的な善きエロース(欲求)があり、病気には悪しきエロース(欲求)があるが、後者を消去し、前者を保全ないし成立させて、体内における相反するものの間の正しい釣合いを生み出すのが医術であるという。以下それ以外のあらゆる技術とその対象領域とを、上述の善悪のエロース(欲求)原理から、医術の場合と同じように説明するのである。ところで、この彼の思想の背後にあってそれを形作っている主たるものに、エンペドクレスの哲学とヒッポクラテス医学のあること、これは否定できないであろう。

つぎは、喜劇作家アリストパネスの演説である(約六頁半)。本篇中最も有名な箇所はこの演説ではなかろうかと思われるほどに人口に膾炙(かいしゃ)しているものである。彼のエロース観を一口に言えば、「完全なものへの欲求と追求」(193A)ということになる。つまり、生あるものにとって、失われた本来の完全性と全体性とを復活されてくれるいわば救い主がエロースだ、というのである。そこには、前三者のエロース観に比して、本質により深く突っ込んだエロース把握があるといえよう。

もともと本篇での彼の役割は、本質的には滑稽を生み出すことを仕事とする喜劇作者のそれであるとしても、それにもかかわらず、いま述べたエロース認識の価値が割引かれたり否定されたりするものではない。それに彼のこの演説は文学的価値からみても絶品であり、本篇における白眉の一つと言っても過言ではないであろう。アリスト

パネスはもともとその作『雲』のなかで、ソクラテスを徹底的に戯画化し揶揄している。そのような彼にもかかわらず、プラトンは低俗な意趣返しの挙に出ていない。彼の才を十全に評価し、それに見合った演説をここで彼に語らせている。しかし、その演説の本質はひっきょう滑稽にあり、ついにそれを越すことなく終らせていることを忘れてはならない。

最後の、そして五番手の話者は、本饗宴の招待主であり、アリストパネスとは反対に悲劇作家のアガトンである。その演説は結構、文体ともに弁論家にして修辞家たるゴルギアスの弟子としてのそれである。その演説の頭初において、取扱対象の本性をまず考察し、ついでその効用を説くことという叙説法への反省は良いとしても、その実際の結果としてのエロース讃美の内容はどうか。実質面での空疎と貧弱を糊塗するかのごとき形容過多の派手な言葉のいたずらな集積、ことにも末尾の部分における、ほとんど実質的意味をもちえぬ自己陶酔的な、言葉の遊戯的羅列は、ソクラテスならずとも皮肉の一つも言ってみたくなるしろものである。そして、このあと(「第一部結び」において)ソクラテスは、讃美とは本来どういうものであるべきかという最も大切な問題を提起しているが、その点でこのアガトンの演説がいかに的から遠く外れたものであるか、真の讃美としてそれは致命的な弱点をさらけ出しているのである。

とはいえ、このような彼の演説にもかかわらず、宝石のような真理をそれは一つだけ含んでいる。すなわち、エロースは美しいものを目指す、という認識である。そしてそれは、そのままソクラテス演説のエロース観の基底に繰り込まれているのである。なお分量のことを言うと、この演説はパイドロス、エリュクシマコスの話とならんで短く、約四頁のものである。

以上でもって第一部を構成する五人の演説は終る。さて、この第一部そのものの全体的な性格はどういうことになるか、ことに、これに続く第二部との対比においてどうか、ということが直ちに問題になろう。

それについてまず考えられることは、いまも触れた第一部結びの、ソクラテスからのアガトン演説の批判である。彼の言おうとするところはこうである。讃美とはその対象の本質をまず十全に認識すること、そしてその事実の上に立ってそれを美しく賞揚することである。つまり、あくまでも真実が問題であり、したがってそれを認識する知識が大切だということである。それに対してアガトンの讃美は、対象の事実認識の上に立たず、単なる思いなし(ドクサ)——伝統的な常識ないし主観的なイメージ——に基くものにすぎないということである。そしてこのソクラテスの批評は、ひとりアガトンの場合のみでなく、多かれ少なかれそれ以前のすべての話者にも妥当するのである。それは、いうなれば、第二部の哲学的観点に対立するところの非哲学的、常識的観点といったものであろう。これが第一部全体のもつ性格である。

そしてこの二つの異質な見方、ないし異った次元の精神の在り方の対立緊張は、本篇全体を貫く一つの縦糸といってよいかもしれない。その証拠に、すでに早く「序」において(175 C sqq.)ソクラテスとアガトンの間で、それぞれの知恵の優劣が問題とされ、ソクラテスはそこで、例の空っとぼけよろしくアガトンの知恵を褒め上げている。しかし事実は、第三部におけるリボンをめぐってのアルキビアデスの振舞いにも、また彼のソクラテス讃美演説そのものにもよく示されているように、ソクラテスの知恵にこそ真の優越性が与えられているのである。そしてここでのアガトンの知恵が、第一部の立場を総体的に代表していることはいうまでもない。

なお、つぎに問題になるであろうことは、これら五つの話の相互関係と相互間の順序のことであろう。これについては、いろいろの人がいろいろの推測を試みている。そして、それはそれとしてそれぞれに面白いが、しかし、そうしたことはひっきょう主観的解釈によることが多いようである。ことにこの問題が多く文学的構成のことにかかわるものであるからして、なおさらである。したがって、いまはその問題に立ち入らないことにする。

ただこれだけは言っておいてよいであろう。それはアガトンの演説の位置についてである。この演説が第一部の

部をそれぞれ代表しているのであるから、上のプラトンの呼称はたくまずして実体を予報しているわけである。

ルキビアデスの名をあげて、この三人の会というふうに言っている。これら三人が実質的に第一部、第二部、第三

切な処置ではなかろうか。プラトンはすでに本篇の冒頭において、本饗宴を表すのに、アガトン、ソクラテス、ア

たことを意味するが——これは、二つのエロース観の対立を浮き出させるものであり、その意味からいって最も適

非哲学的エロース論の典型として最後におかれたこと——ということは第二部の哲学的エロース論の直前におかれ

*

第二部は、既述のように、哲学的なエロース論であり、なおディオティマの口を借りてはいるが、まぎれもなくプラトンの考えであろう。彼にとって、イデアとそれに対応する知識がその哲学の構成的な静的要素であるとすれば、エロースは動力因的な動的要素である。しかも、その性格はディオニュソス的とも評されうる一種の神的狂気のものである。

さて第二部は、さきの区分表にあるように、まずアガトンとソクラテス、ソクラテスとディオティマの間になされる問答法的形式によって、エロースの本質が探求され、そして把握される。すなわち、いままでのエロース像の大勢であった神としてのエロースは、その神性を剝奪され、ここにおいては、一口に言って中間者として捉えられる。さて、エロースはがんらい欲求(恋)であるからして、具体的に言えば、善きものを永久に保持しようとする欲求ということになる。

ところでエロースが欲求であるとなると、当然その欲求の対象物(すなわち、善きもの)に欠けていることになる。このことは、知の領域において言えば、愛知(哲学)を成り立たしめる根拠となる。なぜならば、己の知の欠除を知ることによって知への欲求を懐くからである。総じてエロースは、善きものを欠くがゆえに、既述のごとく神であることはできない。が、超人的な力を発揮するものとして、人間以上の存在である。かくて、神と人間の中間に位す

るものとして、いうなればダイモーンであるということになる。ポロス(術策、豊富)を父としペニア(貧窮)を母として、アプロディテ生誕の日に生れたとなすあの有名な寓話の語られるゆえんである。ところで、善の永久保持への欲求であるエロースは、その欲求が実現されるためには必然的に、当の者が不死であることを前提にしなければならない。そしてこの不死獲得の方法は、人間を始めとする死すべきものどもにあっては、妊娠と出産によってのみ可能である。しかもこの妊娠と出産は、美しい者を相手とし、その者においてでなければ叶わぬことなのである。

以上の考察の成果に立って第二部の後半、すなわちその奥義に極まるディオティマの説話がなされるのである。さて、エロースは美しいものとのかかわりあいにおいて妊娠出産し、かくすることによって不死を獲得しようという欲求であった。するとここに、一つのことが問題となりうる。それは欲求の質ということである。詳しく言うと、その欲求の目標である不死と、それのかかわる美しいもの、ならびにそれの出産する子供、以上三つのものの中身ないし質がである。

さてこの場合、まず最も低次のものは、一個の肉体的な美しさにかかわって子孫を存続させていくという種族的連続としての、いわば身体次元での不死と肉体的な子の出産がある。これは人間以外の動物もともに所有するエロースであり、エロースの底辺ともいうべきものである。ここでの不死は、個としての不死ではなく、時の流れのうちにあって種族の肉体的連続性を保つものとしての不死にすぎない。

かかる低次のエロースをふまえてその上には、広い意味での精神界の妊娠出産と、精神的不死と美の世界が現れる。名誉と名声という精神的な子とそれに対応する精神的出産と不死が、その一番手としてまず考えられよう。が、美そのものにおいてみても、肉体的な美から精神の美へ、その肉体的な美も、一個のそれから普遍の相におけるそれへ、また精神界の美においても、個物のそれから普遍のそれへ、しかも名誉名声のそれから始まって、法律、制度、掟といった人間の営み、さらには学問知識のそれというぐあいに、階層的に上昇して行くものである。かかる

美の上昇につれて、エロースそのものの質もまた、その出発点たる性のエロースを捨象し去って上昇し、それにつれてその出産する子とその際獲得する不死の質もまた、上昇の一途をたどるのである。エロースは善きものへの欲求として、それ自身本性上このような上昇を内に含むものであり、それが『パイドロス』において象徴的に精神の翼として描かれているゆえんでもある。

さてエロースの上昇道も、その最後の段階において一つの質的な飛躍が行われる。それをプラトンは、それまでの道程の果てに「突如として」という言葉でもって表規する(210E)。この最終窮極の段階がいかに質的に飛躍したものであるか。まず、ここに現れる美はいままでの美とはまったく異り、それらがその存在と本質のすべてを依拠している窮極絶対的な唯一永遠の美であるということである。すなわち美のイデアである。しかも本篇では、エロースとの関係において語られるがゆえに美のイデアとして現れているが、より一般的な視点からすれば、それは、あらゆるものの存在と認識との窮極原理であり万物の根源であると『国家』に語られている善のイデアに外ならないと考えられよう。されば、この美のイデアを観得し、真正の徳という精神の子を生み育てるこのエロース上昇の終点に到達した者は、善のイデアを観想した哲人王の生の在り方と類を同じくするものであろう。そしてこの者の生き方こそは、『テアイテトス』に言う哲学の本義たる「神に似ること」(176B)にまさに当るであろう。

言うまでもないことであるが、この境地においては、不死の本質と意義もまた根本的に変化する。それまで不死は、善きものの永久保持のいわば手段であった。が、いまや不死は新しい内容を得、その手段性から超越する。すなわち、不死を支える永久は、これまでのような流れる時間における未来へ向っての不断の連続というものではなく、時間を越え、時間をかえって己の「動く似像」とするような永遠ないし永劫に一体となっている不死である。そしてこの不死の出所は、言うまでもなく、美のイデアのイデア性にある。死すべきものなる人間は、このエロースの翼にのって飛翔し、己の内にある神的な理性の働きを仲立ちにして、永遠不死なる神的な実在に帰一し、かく

することによって己が失われている神性を獲得し、深いところでかの完全性を恢復するというのである。

＊

第二部をもって、ある意味では本篇の頂点は極められたことになる。現に、少くとも形の上では、エロース讃美は第二部をもって終っている。それに対し、アルキビアデス演説はソクラテス讃美である。この若くして俊才の誉れ高い名門の人物は、早くからソクラテスに傾倒したが、ついに彼の精神をものにしえず、俗界の誘惑に負けて彼から離反し、やがて国家に反逆しその災いとなっていった。ソクラテス弾劾の際にはとかくその引合いに出されるこの「恐るべき子」自身が、いまや酒の力に助勢されて一層赤裸々に、自責の念をもってソクラテスに対する過去の自分の不明と誤謬を羞じるとともに、ソクラテスの真の姿を心から讃え上げているのである。この彼の演説は、文学的にもきわめて優れたものであり、プラトンの文才を示して余りあるものといえよう。それにしても、このようなソクラテス讃美を内容とする第三部が加わることは、エロース讃美から成る第一、第二部のそれまでの統一的な流れを乱し、作品的に分裂をきたしていないであろうか。——この問題は、本篇の主題を考えるときに取上げられるであろう。

さて以上でもって、作品の内容分析を終ることにする。

三

最後に、本篇の全体的性格について少し考察してみようと思う。

まず、本篇は『パイドン』と対にして考えられることが多い。一方は生の汪溢のさなかにあるソクラテスを取上げ、他方は死にゆくソクラテスを対象とする。また一方は、肉体に背を向けて、まっしぐらに「死を練習する」世界である。他方は、美を媒介としての生命力の充実と高揚の世界である。総じてソクラテスとプラトンの世界は、

まさにこれら二つを表裏一体に持っていたと言える。そしてプラトンにおいて、生の書である本篇がエロースを取上げ、死の書である『パイドン』が魂の不死を取上げていることは、きわめて含蓄あることと言わねばならない。そして、『パイドン』に象徴される悲劇も本篇による喜劇も、ともにソクラテス、プラトンの説く哲学精神に止揚されて真の叡知に変様していることは、本篇の末尾における悲劇喜劇についてのソクラテスの言葉の暗示している通りである。

第二には、よく問題になる本篇の主題に関すること。すなわち、本篇はその本質においてエロースの書か、それともソクラテス弁明の書か、ということである。さきに触れたポリュクラテスのパンフレットとプラトンの関係といった時局的な要素を重視する者は、多く後者の解釈をとる。世間を啓蒙してソクラテスの本姿を一般に認識させることは、プラトンの絶えざる念願であったろうことからしても、本篇にそれを、つまりソクラテス弁明の意図を見ることは自然である。もともと第三部の存在と内容そのものがまさにその証拠である。しかし、この解釈がそのままで第一部第二部に通用するかというと、それはなんとしても無理であろう。むしろ、中年に達し、自己の学園も創設して教育と研究に専心するプラトンが、自己の哲学そのものから出てきた問題であるエロースを取上げて考究し、なおその上、そのエロースの生ける具現者をソクラテスに見て、かかる者としてのソクラテス像を生き生きと描き、かくすることによってエロース論を血の通った完全なものとするとともに、合せてソクラテスの弁明をも企てる、と考える方がはるかに素直な、そして適当な解釈ではなかろうか。やはり副題にもあるように、本書はその本質において、「恋について」の書とみなすべきである。ただ一言付け加えれば、本篇は、プラトンの意図においてはエロースの書であるが、結果としての本書としては、優れた作品がいつもそうであるように、このような区別と詮索を越えて、エロースの書であるとともにソクラテス弁明の書でもあるということになるのである。

最後に、本篇の歴史性というか史実性について。上に引用のロバンがこの問題についてだいたい次のようなこと

を述べている(op. cit., pp. XXII-XXVI)。——プラトンは本篇において、そのなかのいろいろな事柄の時間的連鎖を示すような巧みな手立てを駆使して、その「史実性の印象」を読む者に与えているが、これはプラトン対話篇の史実性を全面的に主張するテイラー等の説に、恰好の論拠を提供しているように思われる。しかし実は、「そのような印象を与えること、それがまさにプラトンの狙いではないか。時間の連鎖を巧みに生み出す技術こそ、フィクションに歴史的真実性の幻想的外観を与えることのできる者の、偉大な秘密ではなかろうか」と斬り返して、その史実性に否定的な態度をとっている。そして、フィクションにそうした史実的外貌を与える典型的事例として、虚構の人物ディオティマの場合を挙げている。その言うところの大要は以下のごとくである。ディオティマ実在説を採る者は、おおむね次の三つを主張する。彼女は、例えば「エレアの友」というふうに呼ばれずに、直接名前でもって呼ばれていること。例の疫病を一〇年先に延ばしたという犠牲式のことが、具体的に述べられていること。『メノン』(81A～B)において、宗教思想をよく研究し、ソクラテスに魂の不死、転生、想起の説を教えた男女の神官のことが述べられているが、ディオティマもそうした(実際の)人物の一人であるということ、以上である。

さて、このようなディオティマ実在説に対し、次のような批判が成り立つ、となす。まず、『メノン』のいわゆる神官たちと彼女が同類であるということこそ、かえってその虚構性を現しているのであって、ある創見を神秘的な啓示に帰することは、本篇以外においてもプラトンの採用しているところである、という。つぎに、本篇で述べられているようなエロース秘義が、ディオティマという人物の形成の土台であろうということ。すなわち、「美に向う魂の流れというこの神秘的解釈をソクラテスに啓示したのは史実のディオティマであると考えるのでなく、この説明を一人の女神官に帰するようプラトンに暗示したのは、むしろこの解釈の方である——と、こう私は考えるのである。それは彼にとって、形式的にも内容的にも啓示を哲学に一致させる最上の方法ではないだろうか」というわけである。第三はエロースの中間性にかかわることで、神と人間とを結ぶダイモーンたるエロースの秘義を語る者

として、神と人間の仲介を職とする彼女は最も適切であろうということ。第四に、彼女の話の内容は、ディアレクティケーの対象たる学的世界のことというよりも、身心、生死、もろもろの人間の営為、神々の存在といったものであり、まさにディオティマのような人物に相応しいテーマであるということ。第五に、彼女を名指しで呼んでいる点については、『国家』Xのエルの神話、『メネクセノス』のアスパシア追悼演説の場合と同様である。すなわち、これらの内容は、それを名指しで呼ばれているからプラトンのものではない、というふうに考えることはできないというのである。そのほかなお数箇の補助的根拠が与えられている。

このようにして、ディオティマはプラトンの手になる虚構の人物である、と結論づけられているのである。そして本篇全体について、こう考えるのである。「われわれの関心の的は、プラトンが最上と考えた枠組——それが歴史的であろうとなかろうと——のなかにおいて、また彼がそのなかに登場させようとした諸人物を使って、彼の取扱対象をどのように展開させたかというその点にある」と。そしてその枠組は、『パイドン』が史実であるのに反し、本篇の方は、おそらく他の『饗宴』に触発された結果の、虚構のものであろう、と言うのである。

かくて、本篇の史実性に関する問題への結語として、『パイドン』への彼自身の序文のなかの言葉をそこに引用する。「『饗宴』においてわれわれが探求し研究すべきもの——それは、エロースに関するディオティマその人の思想でも、ソクラテスのそれでもない。それはプラトンの、つまりソクラテスの後継者であることには間違いないが、彼からの遺産を富ますことに熱心であったプラトンの、思想であり、しかも同一主題についての諸他の考え——それが事実のものであると否とにかかわらず——との対立におけるプラトンの思想である」と。この結論は正鵠を得たものであると思うのである。これを要するに、本篇は文学的虚構の書であり、その主題はエロース論、それもプラトンのエロース論である、ということになる。

主な使用文献

J. Burnet, *Platonis opera*, vol. II, 1901.
G. Stallbaum, *Platonis opera omnia*, vol. I, sect. 3, Gothae, 1827.
F. Ast, *Platonis opera*, vol. III, Lipsae, 1821.
L. Robin, *Le Banquet* (Platon, Oeuvres Complètes, Tom. IV, 2 partie), 1929.
O. Apelt, *Platon, Das Gastmahl* (Griechisch-Deutsch) (Philos. Bibl.), Hamburg, 1960.
W. R. M. Lamb, Plato, vol. V : *Lysis, Symposium, Gorgias*. (Loeb Class. Libr.), Cambridge (Mass.), 1925.
L. I. Lückert, *Platonis Convivium*, Lipsae, 1829.
G. F. Rettig, *Platonis Symposium*, Halle, 1875.
A. Hug, *Platons Symposion*, Lpzg., 1909.
R. G. Bury, *The Symposium of Plato*, Cambridge, 1932.

主な邦訳

久保勉訳『饗宴』(岩波文庫)
山本光雄訳『饗宴』(角川文庫)
森進一訳『饗宴』(新潮文庫)
金松賢諒訳『酒宴』(玉川大学出版部)
岡田正三訳『饗宴』(プラトン全集II)(全国書房)
向坂寛訳『饗宴』(プラトン著作集1)(勁草書房)

鈴木照雄訳『饗宴』（世界文学大系3　プラトン）（筑摩書房）

『パイドロス』解説

藤沢令夫

登場人物
ソクラテス(Socrates)
パイドロス(Phaidros)　次の「総説」(二九六ページ)を見よ。

一　総　説(梗概、人物説明、対話篇としての特色、執筆年代)

——夏の一日、弁論作家として名声の高いリュシアスの習作を手に道を歩いていたパイドロスは、アテナイをかこむ城壁の近くでソクラテスに出会う。快活な言葉のやりとりののち、二人はイリソス川のほとり、木立におおわれた涼しい草の上に腰を下す。パイドロスは、問題のリュシアスの作品を読んで聞かせる。作品は恋(エロース)論であった。しかしそれは恋の讃美ではなく、ひとりの男が美少年に言い寄るのに、「ひとは自分を恋している者よりも恋していない者にこそ身をまかせなければならない」と主張するというパラドクシカルな想定のもとに、恋する者の愚かさを難じ、恋していない人間の思慮ぶかさをたたえた文章であった。聞き終えてソクラテスは、与えられたテーマのわく内におけるその内容的な貧弱さを指摘し、この点について反対の意見をもつパイドロスの求めに

よって、同じ想定のもとに別の話を即席に語らせられることになる。

けれども、もともとこのような、恋を非難するという主題がソクラテスの心にかなうはずはない。話を半ばで打切った彼は、恋の神エロースへの不敬のつぐないとして、こんどはみずからすすんで、神話ふうの熱烈な恋の讃歌を物語る。この物語の部分は全篇中のひとつのクライマクスをなしている。語り終え、聞き終えた二人の頭上では、夏の空気をするどくひびかせる蟬の声がなお盛んであるが、ソクラテスが「ムゥサ(ミューズ)の神々の使者」に見たてたこの蟬たちに見まもられるかのように、話題は弁論術一般の問題に移って活潑な議論が展開される。そして結論に達した二人は、土地にすむ神々に祈りをささげ、この一日の「いこいの地」を立ち去って行く。——

以上が、『パイドロス』のなかにえがかれる情景のあらましである。ここでソクラテスの相手をつとめるパイドロスという人物は、『饗宴』の登場人物の一人でもあり、『プロタゴラス』(315C)にも姿をみせている。本篇からうかがわれるところをこれらと総合すると、われわれは、時代の風潮に敏感な、全般に快活で好奇心に富んだ一人のアテナイの知識人を思い浮べることができるであろう(この人物については、これらのプラトンの著作とリュシアスの現存第一九弁論一五節など以外には、ほとんど資料がない)。こうした人物像にふさわしく、この対話篇において彼は、そのころ絶大な人気のあった弁論術というものにつよい関心を寄せ、その高名の専門家リュシアスに心服している者として登場する。そしてそのことと関連して、本篇では、弁論術一般とそれを支える一連の考え方が、ソクラテスの吟味と批判を受ける対象となっている。

そして『パイドロス』においては、対話による思想の作業をあたかもできるだけ純粋な条件のもとで行なおうとするかのごとく、対話のシーンは、いつものようにどこかの体育場(ギュムナシオン)とか誰それの家とかいった、人々の集まるところではなく、人里をはなれた郊外の静かな自然の中に置かれている。通念の批判を介してソクラテスが包蔵する思想の可能性を追求するという課題は、このいつもとやや異なった状況設定にたすけられて、『パイドロス』独得の

大胆な仕方で感銘的に達成された。

すなわち、蟬の声だけが聞えるイリソス川のほとりの静寂な自然、あたりの何か神聖な気配は、この対話篇の中で折にふれて(疑いもなく意図的に)言及されるところであるが、つねひごろ自然よりも人間を愛してアテナイの町なかを出たことのないソクラテスは、このような雰囲気のただなかで、土地の神々の霊感にみたされたと言いながら、いつもの彼のわくを大きくふみこえて、まさに想いをはるか蒼空のかなたにはせるといったような雄大な物語(ミュートス)(244A～257B)を語って聞かせ、そしてその中で、イデアと魂に関するプラトン哲学の中心思想の数々が、多彩な想像心像によって表現され定着された。ここにみられる、〈恋〉(エロース)という主題をめぐる想念の展開の見事さは、プラトンの数あるミュートスのなかでも、出色のものといえるであろう。他方また、この物語をふくめた三つの恋の説話をはさんで進行する全篇の会話は、いかにも人の世のあらゆる出来事をはなれて、平和な明るい夏の一日を享受しながらとりかわされる談論というにふさわしく、のびのびとした解放感がすみずみまで行きわたっていて、これもまた『パイドロス』の魅力ある特色の一つとなっている。

このような性格は、この対話篇の執筆年代とも無関係ではないであろう。『パイドロス』はプラトンの中期著作の一つであり、『ソクラテスの弁明』『プロタゴラス』『ゴルギアス』『メノン』『饗宴』『パイドン』等々についで『国家』が完成されたのち、そのあとをうけて書かれた対話篇である(そしておそらくは『パルメニデス』『テアイテトス』がこれにつづく)。ここから絶対年代の見当をつけると、だいたい前三七〇年代、すなわち、プラトン(前四二七—三四七年)が五〇歳代——たぶんその後半——の作品ということになる。これは、プラトンが前三八七年に学園アカデメイアを創設してから、前三六七年にシケリア(シシリー)島のシュラクサイに招かれて晩年の生活の波乱がはじまるまでの、彼の生涯のうちでは最も平和にめぐまれた時代に属する。

とすれば、おそらくわれわれは、本篇における上述のような対話と想念の明るくのびのびとした展開の中に、ア

カデメイアの仕事も軌道に乗り、ライフワークの一つともいえる大作『国家』を書き上げた後のころの、プラトンの幸福な解放感を見ることができるであろう。晴れわたった明るい夏の一日、静寂な自然の中という状況設定は、そのまま、このような時期における作者自身の気持の表現であったかもしれない。

プラトンの著作のなかで『パイドロス』にいたってはじめてあらわれる、魂(プシューケー)を「自己自身を動かすもの」と規定してこれを宇宙全体の〈動〉との連関のもとにとらえる考え方(245C〜246A)は、『ティマイオス』の自然像においても前提され、『法律』Xの自然神学的思想の中にほとんどそのまま再現する。また、これも本篇においてはじめて正式にディアレクティケー概念の中に加えられた「分割」の方法(265E)は、『ソピステス』や『ポリティコス(政治家)』の中で実際にかなり大がかりに用いられ、『ピレボス』(16C〜17A)でも要約的に言及される。こうした点は、『パイドロス』を、いま挙げられた後期著作群のほうに連絡させ、そこではたらく若干のアイディアの出発点となる対話篇とみなすことを可能にするであろう。

しかしながら、他方において、われわれが『饗宴』『パイドン』『国家』といった前・中期の対話篇の中に見出す、かの典型的なイデア論思想が、この『パイドロス』の先述のミュートスにおけるような積極的なかたちで展開されることは——『ティマイオス』を一応別とすれば——これ以後にはもはやなかった。ここまでゆるぎのない確信のもとに形成され発展せしめられてきたプラトンのイデア論は、本篇の後に位置づけられる『パルメニデス』や『テアイテトス』以降、全般的には一種の反省と基礎固めの時期にはいるといってよく、取りあつかわれる問題の性格ないし側面も、たしかに変わっているのである。その意味では、われわれの『パイドロス』は、このイデア論思想の積極的な表明を特色とする前期から中期にかけての一連の著作の終りを劃し、それが彼の形而上学的表象力ともいうべきものの充分な行使によって、絢爛と開花した最後の作品であるといえよう。

二 弁論術(レートリケー)

最初にふれたように、この対話篇における直接の話題、あるいはその主題構成の外側のわく組みは、弁論術一般のあり方を論ずるということにある。そもそも弁論術とは何であり、なぜこのように、とくに論議の対象として取り上げられなければならなかったのか。

弁論術は前五世紀の中葉近く、シケリア(シシリー)において、本篇にも名前が出てくるテイシアスその他により、法廷弁論のテクニックの研究と教授というかたちではじめられたとされている。これが同じころ活動をはじめていたソピステス(ソフィスト)たちの一種の教育運動と結びつくことによって、弁論術は、本来の法廷弁論の分野から政治的な議会演説の領域にも応用されつつ拡められ、一躍時代の花形的な存在となった。言論の自由と法のもとにおける平等をたてまえとする民主制下のアテナイでは、人は国民全体の集会である国民議会や陪審法廷の世論を動かすことによって国政を支配し、あるいは身の保全と立身をはかることができたからである。

こうした弁論術隆盛の気運はまた、手本となる弁論をあたえて暗記させるというその教授法とも関連して、議会や法廷における実際上の目的をはなれた弁論のための弁論、文章のための文章の創作に人々の興味と関心を向けさせることにもなり、ここに「エピデイクティコス・ロゴス」(「演示」用の言論)と呼ばれるあらたなジャンルが生まれた。現在のこっているものでは、ラムノスのアンティポンの三つの四部作のような仮想の法廷弁論、ゴルギアスの『ヘレネ論』や『パラメデスの弁明』、プラトンの『メネクセノス』にみられる戦死者追悼演説など、いずれもこの種の文章に属するといえる。そしてわれわれがこの対話篇の冒頭に見出すのも、リュシアスの作ったそのような範例的文章を暗記しようと懸命になっているパイドロスの姿である。

本篇における第三の物言わぬ登場人物ともいうべきこのリュシアス(前四五九―三七八年)は、こうした創成期の

弁論術形成に寄与しつつ、前五世紀から四世紀にかけて活躍した弁論家として代表的な人物であり、前述ラムノスのアンティポンや本篇の最後に言及されるイソクラテスなどと同じく、いわゆるソフィストたちとは一線を劃される純粋の弁論家に属する。彼の父ケパロスは、アテナイの外港ペイライエウスに住んでいたシュラクサイ生まれの富裕な居留民（メトイコス）であり、兄ポレマルコスとともに、『国家』Iの情景によってわれわれになじみぶかい人物であろう（リュシアス自身の名もそこに出てくる）。父以来の居留民としてアテナイの正規の市民権をもたなかったリュシアスは、ただ一度兄ポレマルコスの死[1]に関連する告発のときをのぞいて、自身は法廷に出ることなく、後半生は主として他人のための法廷弁論の執筆をうけ負う「ロゴグラポス」(257Cおよび補注Cを参照)として活動した。むかしから平静達意の文章の作り手として定評があり、三四ほどの彼の弁論がこんにちまで伝えられている。この対話篇の中に取り上げられている恋に関する文章については、これが実際にリュシアス自身の作かどうかが古くから論議されているが、おそらくは、プラトンが彼の文体をまねて創作したものとみてよいであろう。

(1) リュシアスは少年の頃からこの兄とともに南イタリアの新興都市トゥリオイに移住していたが、ペロポンネソス戦争中の前四一二年にアテナイへ引きあげる。その後、前四〇四年の敗戦後成立した三〇人寡頭政権の手によって、兄ポレマルコスはとらえられて死に、リュシアスも一時国外に逃れてメガラにいた。かりにこうしたリュシアスの年譜上の条件によって、この『パイドロス』のいわゆる対話設定年代(dramatic date)を決めるとすれば、その範囲は、右の前四一二年と前四〇四年の間におのずから限定されるであろう。本篇では、リュシアスはすでにアテナイにあって弁論作家としての名声たかく(228A)、他方、兄ポレマルコスはまだ在世中の人として語られている(257B)からである。

『パイドロス』が執筆公表されたのは、おそらくリュシアスの死後のことであろうと思われるが、本篇におけるプラトンの意図は、リュシアス個人に対する批評ではなく、パイドロスに代表される当時の一般の知識人が、リュシアスに代表される当時の弁論作家に熱中し高い評価を下す、その観点そのものの是正にあった。——弁論術は現状において、はたしてみずから主張するように、ロゴスの技術としての資格をもっているかどうか。それは、言葉

の使用によってある事柄を明らかにするという、人間にとって必然の操作をめぐって、時代を風靡する通念に向かってなされた哲学からの挑戦であるともいえるであろう。

もともとプラトンの目からみれば、世に横行する弁論術とは、自分の説くことがらが為になること(善)かどうかを何ひとつ顧慮せずに、ひたすら聴衆におもねることによって多数の賛同を得ようとのみ汲々とするところの、「おべっか術」にほかならなかった。この点は、『ゴルギアス』において徹底的に追求されている。そして、このような「善よりも快をねらう」という、『ゴルギアス』において暴露された弁論家たちの実態は、語りかける相手の思わくを第一義とするという一点を通じて、「真実そのものよりも真実(まこと)らしきことを語るべし」という、弁論家たちのこれは意識的な格律であるところの主張と、確実なつながりをもつであろう。『パイドロス』が主として取り上げて批判を向けるのは、このあとのかたちでの弁論家たちのモットーである。そして考察の結果示されたのは、真実そのものの把握なしには、真実らしく思われるように巧みに語るということさえ、本来不可能であること、したがって、一般に弁論術がひとつの技術の名に値するものであろうとするならば、真実そのものの追求をめざす哲学とその方法としてのディアレクティケー(哲学的問答法)に依存しなければならないということであった。

三　恋(エロース)

『パイドロス』の中には、〈恋〉(エロース)をテーマとした三つの物語があいついで語られていて、全篇のかなりの部分を占めている。これらはいずれも、対話篇全体のわく組みの中では、弁論術における技術性の有無ということを説明するための実例の役割をはたしている(262 C sqq.)わけであるが、しかしただそれだけのためなら、それらのテーマはべつに〈恋〉でなくても、他の何であってもさしつかえなかったであろう。のみならず、とくにソクラテスが最後に語る物語は、たんなる実例にしてはそれ自身があまりにも豊富な内容をもち、むしろ全篇中の圧巻と

して印象づけられる。

このようにして、『パイドロス』は〈弁論術〉と〈恋〉という二つの独立した主題を含んでいるように思われ、すでに古代の学者ヘルメイアスがその旨を注記しているように、どちらを本来の主要な主題とみるかについて、むかしから人々の意見が分れてきた。しかしこの二つの主題と言われるものは、はたして内容的に互いに何の本質的なつながりもないものなのであろうか。――この点について考えるために、〈恋〉というテーマが三つの話を通じてどのように展開されているかをしらべてみよう。

最初のリュシアスの文章は、最初にふれたように、はなはだパラドクシカルな、「工夫をこらした月並ならぬ」(227C)想定のもとに、恋する者とくらべて恋せぬ者の優越を説いたものである。では、いかなる点で優越しているのか。恋していない者は損をしないように気をつけながら能力相応の親切をつくすといった言葉(231A)以下、この説話の語るところを聞いてみると、それは結局、恋していない者は打算と利己心を見失っていないということに尽きるであろう。

この話における作者の興味と関心は、むしろ、もっぱら口説き方としてのパラドクス性に向けられているともみられるが、パイドロスとの約束によりリュシアスの想定をそのままうけついだソクラテスの第一の物語は、リュシアスの説話にみられる〈恋〉のとらえ方を――ひいてはさらにその基礎にある人間解釈の立場を――体系的に明確化することに力をそそぐ。すなわち、そこではまず、人間を動かす二つの力として、「生まれながらにそなわる快楽への欲望」と「最善のものをのぞむ分別の心」とがあることが示され、そして〈恋〉とは、前者が後者にうちかった状態――すなわち〈放縦〉――の一種であると定義される(237D～238C)。このような考え方に従うかぎり、〈恋〉がひとつの悪として非難の対象となるのは当然であろう。なぜならそれは、はじめから仮設によって、善と対立する方向にむかう動力と規定されているからである。あとはただ、このことの必然的な帰結を追えばよい。これからあ

と(238E sqq.)のソクラテスの話は、そうした必然的帰結の数々を、さまざまの具体的な観点にそって展開したものにほかならない。そして、先のリュシアスの話は、結局はこれと同じ立場から来ている主張を、しかしことがらの明確な定義がないために無自覚のまま、漫然と並べたてたものとみなしうるであろう。

さて、たしかにソクラテスによって「後天的な分別の心(原語はドクサ)」が「先天的な快楽への欲望」を押えている状態と規定された〈節制〉は、その逆の状態としての〈放縦〉にしかすぎぬような〈恋〉とくらべるならば、正当に高く評価されてしかるべきことは事実である。しかしながら、この種の〈節制〉や〈正気〉は、結局、ソクラテスがこれらの説話の内容を根本的に訂正して最後に語った物語の中で、「この世だけの正気」と呼ばれ、「知性なき」と形容され、「世の多くの人々が徳としてたたえるけちくさい奴隷根性」(256E)と言われなければならなかった。先行する二つの物語が見のがしていたのは、何であったか。

正気と節制を一概にたたえ、狂気と恋を一概に非難するということは、人間的な次元においてのみ正当であるにすぎない。狂気や恋には、神的と呼ばれるにふさわしい種類のものもあることを、われわれは知らねばならぬ。では神的な恋とは、どのようなものか。それを語るためには、そもそも人間の魂の本性または素性ともいうべきものが、根本的に説明されなければならないであろう。

このような前おきのもとに、ソクラテスの最後の物語は、まず魂(プシューケー)はすべて不死なるものであることを、「自己自身を動かすもの」という魂の本質規定にもとづいて、論理的証明のかたちで示したのち、一転していまや本格的なミュートス(物語・神話)の世界にはいって行き、人間の魂は、「翼をもった善悪二頭の馬と、その手綱をとる翼をもった馭者」というイメージによって思い浮べられる。これは、〈恋〉を主題として宇宙的規模において展開される、人間の魂の遍歴の物語なのである。——翼をもつわれわれの魂の馭者は、二頭の馬の手綱をとりながら、かつて神々に従って天空をかけめぐり、時きたるやそのきわみまでのぼりつめて、「天のかなたの領域」に位置

するもろもろのイデア的真実在を観得していた。〈恋〉(エロース)とは、この天外の世界への道行きにあたって、何度目かの機会に悪いほうの馬にわずらわされて真実在を見そこなった魂が、そのために翼を傷つけられ、地上に落ちて人間の肉体に宿るようになったのち、この世の生を送る道すがら、美しい人に出あって、かつて観た真実在としての〈美〉のイデアを想起し、それとともに、ひさしく涸渇していた翼の芽ばえをうながされることである。……

こうしてソクラテスの口から語らせたミュートスの中に、プラトンは、彼の哲学の中核をかたちづくる数々の思想を織りこんだ。そのなかでも、物語の展開のうえでとくに目立った役割をはたしている特定の教説としては、想起説と魂の三部分説をあげることができるであろう。前者は『メノン』(80D～86C)と『パイドン』(72E～77A)において、「学知(マテーシス)とは想起(アナムネーシス)にほかならない」というテーゼによって提示され、魂の不死とイデア論の重要な契機となっていた。この想起説がこのミュートス全体の思想を支えつつ(とくに249B～D参照)、とくに〈美〉のイデアの想起というかたちで、〈恋〉の説明に不可欠の役割をはたしている。

他方、魂の三部分説とは、『国家』(IV. 434D～441C, IX. 580D～581C)で語られたものであって、人間の魂の機能を、ものを学び知る働きとしての「理知的部分」と、これの制御に反抗して肉体的欲望の対象へ向かおうとする「欲望的部分」と、両者の間にあって全般的に理知的部分をたすけるところの、怒りに代表される「気概の部分」とに区分する考えである。われわれの物語の中の魂の似すがたにおいて、馭者がこの「理知的部分」をあらわし、善い馬と悪い馬とがそれぞれ、「気概の部分」と「欲望的部分」に相当すること、言うまでもないであろう。——『パイドロス』におけるこの〈恋〉のミュートスは、壮大な構想のもとにこれらの教説を具象的な仕方で充分に援用しながら、かの『饗宴』(201D～212C)の巫女ディオティマが語る「恋愛修業」の行程では最後にあらわれるイデアの世界に、最初から一挙にわれわれを連れて行って、『饗宴』の下から上への行程を、逆に上からの説明によっておぎない、同時にまた物語の後半においては、心の三部分間に行なわれる葛藤の描写を通じて、『饗宴』の「恋愛

修業」の内面的な動態が実際にどのようなものであるかを、詳細に描き出してみせているのである。

先の二つの物語の基礎にあったのは、人間の心の動きを「先天的な欲望」と「後天的な分別の心」との対立という図式でとらえる見方であった。この図式を、いまこの最後のミュートスは、「先天的欲望」対「より先天的な欲望」という形に訂正したということができる。魂の三部分がそれぞれもっている欲望のなかでは、「理知的部分」のもつ真実在希求の欲望こそが、人間の最も自然本来の(先天的な(ピュシス))欲望とみなされるからである。魂の馭者が美のイデアを想起して高きにあこがれることが真の〈恋〉のあり方とすれば、「先天的欲望」が「後天的分別心」にうちかった状態を〈恋〉と呼んだ先行の説話に対して、これは同じ〈恋〉というものを、「より先天的な欲望」としての知的部分の欲求が、他の欲望を制して発現した状態と規定したことになるであろう。人間が天上的なイデアに対していだく、やみがたい郷愁、それはほんの少数の人にしか全面的に発現することはないけれども、しかし魂が肉体と結びつく以前に淵源するがゆえに、ふつう「本能」の名で呼ばれているところの、肉体に由来するあらゆる欲望よりも深い。先に語られた二つの物語は、人間の本性にふかく根ざすこの種の欲求を見のがしているのであって、したがってその人間把握の仕方は、根本的に不完全であるといわねばならぬ。

ところで、〈恋〉(エロース)がこのような人間本来の欲求の発現であるとするならば、なぜそれが希求するすべてのイデア的な真実在のなかで、とくに〈美〉だけがそこで想起の対象として語られるのであろうか。この点は、たとえば正しさとか善さとかいった他の価値とくらべて、ただ〈美〉だけが、われわれのもつ最も鮮明な知覚である視覚にうったえるという特権をもつことから説明されている(250B〜D)。しかしながら、エロースがまず〈美〉のイデアの想起として発現するとしても、われわれの認識がみがかれて行くにつれて、美はさまざまの思いがけない相貌をあらわし、その窮極において、はじめは容易にわれわれに働きかけなかった〈善〉や〈正義〉などと互いに結びつき連関し合いながら、壮大な「真実在の世界」をなしていることが知られるであろう。美の流れを受けいれて翼の芽ば

するこころと美しい人を恋する想いとを一つにした熱情の中に、生を送った者の魂」(249A)なのである。この物語の主役は、「知を愛が、この物語の中で「哲人」とか「愛知者」とか呼ばれている人々にほかならない。らぬ鮮明な姿のままにとらえ、それによってまさしく「おそろしいほどの恋ごころ」をかり立てられる少数の人々なるもの、それが哲学のエロースである。そして、知性という魂の眼によって、それら〈美〉以外の価値を美におとえをうながされた魂を、この窮極に向かって駆り立て、真実在のすべてを全体として想起しようとする努力の源と

四 『パイドロス』における主題の統一

こうしていまや、『パイドロス』の主題は何かという、古くから論議されてきた先述の問題に対しても、われわれ自身の態度を表明することができるであろう。

問題は、この対話篇の中に、〈弁論術〉と〈恋〉という二つの主題が並存しているようにみえるところから起こっていた。しかし、すでにわれわれは、本篇において弁論術をめぐって行なわれる議論の要旨が、弁論術は最後的には、真実の追求を仕事とする哲学に依存しなければならぬということにあるのを見た。そしていままた、〈恋〉という主題が最後の物語まで来て打ち出すのが、イデア的な真実在を完全に想起しようとする欲求として語られる、哲学(愛知)ということであるのを見たのである。これらの観察は、疑いもなく、一見二つに分かれている〈弁論術〉と〈恋〉という主題が、より奥ふかいところで〈哲学〉(ピロソピアー)という単一の主題によって貫ぬかれていることを指し示している。

すなわち、ソクラテスが最後に語ったかの〈恋〉についての物語は、弁論術の技術性の基本的条件として要請される、真実の追求という意味での哲学を、いわば内側から説明し描写したものであって、ここで主体的欲求の側から確立された〈哲学〉というものの像が、弁論術を論じるにあたってその立場を決定し、現行の弁論術への批判を生み、

そして、あるべき姿での弁論術の基礎となっているのである。ここにわれわれは、『パイドロス』の中の一日の会話を〈弁論術〉へ向けるきっかけとなったリュシアスの弁論作品が、たまたま〈恋〉に関するものであったという事実、そして、そのリュシアスの作品を形式的な面で修正したソクラテスの説話のつぎに、さらに内容的に根底からこれらをくつがえした最後の物語が全篇の中心に置かれている事実のもつ、ゆるぎのない「作文上の必然性」(264B)を見ることができるであろう。

あたかもこうした結論を裏づけるかのように、『パイドロス』の中には、「哲学者(愛知者)」とか「哲学する(知を愛し求める)」とかいった言葉が強勢を置かれて用いられている三つの代表的な箇所が見出される。その一つは、ソクラテスが最後に語る物語の全体であるが、とくに「まさしくこのゆえに、正当にも、ひとり知を愛し求める哲人の精神のみが翼をもつ」(249C)という文章に、それがみられるであろう。つぎは、弁論術の技術性に関する論議の要旨をあらかじめ提示したとみられる、「知を充分に愛し求める(哲学を充分に修める)のでなければほんとうの言論の能力は得られない」という意味の言葉(261A)である。そして最後に、われわれは、書かれた言葉のもつ限界が論じられる箇所(274B〜277A)において、文人と哲人との区別(278D〜E)というかたちで、もう一度それを見るのである。つまり、これら三つの部分で直接取りあげられる論題はそれぞれ異なっていても、しかしそれらの論題をめぐる考察と議論はいずれも、それぞれの異なった角度から、結局〈哲学〉(ピロソピアー)というものに照明を当てて浮び上がらせているわけである。

そして、このようにそれぞれの箇所で〈哲学〉について語られた内容を互いに連絡させ、それぞれ異なった角度から照明をあてられた〈哲学〉の像に統一をあたえているのは、哲学的問答法と訳された〈ディアレクティケー〉であるといえる(正体不明のまま乱用されてきた「弁証法」という Dialektik の訳語は、意図的に避けられた)。ディアレクティケー——すなわち、「ディアロゴス(対話・問答)の技術」——とは、ものの「何であるか」を厳格な意味にお

いて知るための探求の行程（メトドス＝方法）としてソクラテスからうけつがれたものであり、最初から世上のいわゆる弁論術とのするどい対立の意識のもとに置かれていたのであるが、『国家』のVI、VIIにいたって、さらに数学の方法などとの対比のもとに、あらゆる知識の窮極絶対の原理を把握するための方法として、ほとんど哲学そのものの概念と一致せんばかりの、豊富な内容と重要な意義をあたえられていた。

われわれは本篇において、このような『国家』篇にいたるまでの哲学的問答法（ディアレクティケー）の内容と基本的には同一の事柄を要約的に表現した言葉が、まず〈恋〉の物語（ミュートス）のただ中で、「ひとり哲人の精神のみが翼をもつ」ことを強調した文章の直前に、その根拠を示すかたちで置かれているのを見出す。――

「人間がものを知る働きは、人呼んで〈実相〉（エイドス）というものに則して行なわれなければならない。すなわち、雑多な感覚から出発して、思考の働きによって総括された単一なものへと進み行くことによって、行なわれなければならない」（249B～C）

けだし、認識といい思惟といい、それは言葉をはなれてはありえず、考えるとは自己自身との対話（『テアイテトス』190Aその他）であるとすれば、ここで「想起」として語られている、単一なイデアへ向かって進む純粋思惟の行程は、そのまま、ソクラテス的・プラトン的な対話の行程であり、ディアレクティケーの実行にほかならないであろう。

つぎに、同じ「多から一」への探求の行程は、弁論術についての議論という文脈の中で、とくに言論を正しく有効に進めるための方法としてのその意義が強調されるとき、「多様にちらばっているものを総観して、これをただ一つの本質的な相へとまとめること」（265D）という、あらゆる言論が従うべき基礎的な手続きの一つを規定した言葉となってあらわれ、本篇では、これにもう一つの「分割」の手続きが加わって、哲学的問答法（ディアレクティケー）という語を正式に説明した記述となっている。弁論術が哲学に依存しなければならぬということは、具体的には、このような哲学的（ディアレク

問答法(ティケー)に従わなければならぬということであった。

そして最後に、ものを書くことの意義と限界が論じられる部分(274B～277A)まで来たとき、われわれは、この部分の議論の眼目であるところの、言葉の使用における「慰み」と「真剣な熱意」とを区別し、ひいてはたんなる文人と哲人とを区別するものが、もう一度この哲学的問答法(ディアレクティケー)という語によって言いあらわされているのを見る。真剣な熱意による言葉の使用とは、「ふさわしい魂を相手に得て、哲学的問答法の技術を用いながら、その魂の中に言葉を知識とともにまいて植えつけるときのこと」(276E)であった。ある意味において、これは〈哲学〉の名のもとにそれまで語られて来た観点の総合であるといえる。なぜならば、ここの「哲学的問答法(ディアレクティケー)」という言葉は、直接には、先に弁論術の基礎となるべき方法として提示されたものを指すけれども、他方同時に、二つの相似た魂が、善や正義の真実を哲学的問答法(ディアレクティケー)により探求することを介して結ばれるということは、とりもなおさず、かの〈恋〉を語ったミュートスの中で、哲学的エロースのあり方として述べられていたことがらにほかならないからである。

こうして『パイドロス』全篇の意図するところは、ヘルメイアスの古注の言葉を借りて一言でいえば、「哲学のすすめ」ということにある。まことにこれは、プラトンがソクラテスの刑死以後、著作活動とアカデメイアの教育という彼の仕事の両輪を通じて、たゆみなく自分に課した生涯の課題であった。それをしなければ、国家にとっても人類にとっても、不幸と災厄のやむときは、永久にこないと考えられたからである。

副題について

『パイドロス』に付せられている伝統的な副題は、「恋について」(Diog. L. III. 58)、「魂について」(アレクサンドリアのクレメンス『ストローマタ』第五巻(六七八))、「美について」(B写本)などである。本訳書では、最も一般に行なわれている最後のB写本のものを採った。

使用文献

全般にわたって私の（田中美知太郎と共著）『プラトン著作集　パイドロス』（昭和三二年、岩波書店）——序説、訳文、注解、研究用注——が土台になっている。とくにその「研究用注」には、翻訳にあたって採用した原文の読み方、その読み方を採用した理由、訳文の根拠となる文法上の説明、内容解釈上の諸問題、参考資料や文献が詳細に記されていて、これらは、今回提出された改訳についても、依然その基礎をなしている。

その他の主要な使用書

L. F. Heindorf, *Platonis dialogi selecti*, vol. I, Berolin., 1802.

I. Bekker, *Platonis dialogi graece et latine*, vol. I, Berolin., 1816.

F. Ast, *Platonis opera*, vol. X, Lipsae, 1829.

C. F. Hermann, *Platonis dialogi*, vol. II, Lipsae (Teubner), 1851.

G. Stallbaum, *Platonis opera omnia*, vol. IV, sect. I (2 edit.), Goth. et Erford., 1857.

W. H. Thompson, *The Phaedrus of Plato*, London, 1868.

M. Schanz, *Platonis opera*, vol. II, Lipsae, 1882.

C. Ritter, *Phaidros* (O. Apelt, *Platon, Sämtliche Dialoge*, Bd. II, Leipzig, 1914).

L. Robin, *Phèdre* (Platon, Oeuvres Complètes, Tom. IV, 3 partie), 1947.

R. Hackforth, *Plato's Phaedrus*, Cambridge, 1952.

G. J. A. De Vries, *A Commentary on the Phaedrus of Plato*, Amsterdam, 1969.

タ 行

ナ 行

ハ 行

マ 行

ヤ 行

ラ 行

『パイドロス』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．
本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，これに対応している．
固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

カ 行

サ 行

『饗 宴』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．
本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，これに対応している．
固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

カ 行

サ 行

プラトン全集 5　　第1回配本(全15巻　別巻1)

1974年10月4日　発行

¥2800

訳　者　鈴木照雄（すずき てるお）
　　　　藤沢令夫（ふじさわ のりお）

発行者　岩波雄二郎

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　精興社印刷・牧製本